岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第571集

平成21年度発掘調査報告書

武道V遺跡
落合2区I遺跡
立花館遺跡
平根原I遺跡
矢盛遺跡第25次調査
矢盛遺跡第26次調査
大宮北遺跡第15次調査
高屋敷II遺跡
八幡遺跡
ほか調査概報(34遺跡37調査)

2010

(財)岩手県文化振興事業団

平成21年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成21年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で41遺跡46件、約15万㎡が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年３月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　武　田　牧　雄

目　　次

平成21年度の調査結果について…… 1

Ⅰ 発掘調査報告

（1）武道Ⅴ遺跡（盛岡市）…… 5
（2）落合２区Ⅰ遺跡（花巻市）…… 21
（3）立花館遺跡（北上市）…… 37
（4）平根原Ⅰ遺跡（奥州市）…… 47
（5）矢盛遺跡第25次調査（盛岡市）…… 51
（6）矢盛遺跡第26次調査（盛岡市）…… 55
（7）大宮北遺跡第15次調査（盛岡市）…… 59
（8）高屋敷Ⅱ遺跡（住田町）…… 73
（9）八幡遺跡（奥州市）…… 95

Ⅱ 発掘調査概報

(10) 滝ノ沢遺跡……115
(11) 芋田沢田Ⅳ遺跡……116
(12) 川目A遺跡第５次補足調査……117
(13) 向Ⅲ遺跡……118
(14) 新田Ⅱ遺跡……119
(15) 下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡……120
(16) 大平野Ⅱ遺跡……121
(17) 金浜Ⅰ遺跡……122
(18) 八木沢野来遺跡第３次調査……123
(19) 八木沢駒込Ⅰ遺跡……124
(20) 八木沢駒込Ⅱ遺跡……125
(21) 細谷地遺跡第24次調査……126
(22) 細谷地遺跡第25次調査……127
(23) 向中野館遺跡第12次調査……128
(24) 向中野館遺跡第13次調査……129
(25) 矢盛遺跡第23次調査……130
(26) 矢盛遺跡第24次調査……131
(27) 台太郎遺跡第66次調査……132
(28) 飯岡才川遺跡第16次調査……133
(29) 佐原Ⅱ遺跡……134
(30) 小屋野遺跡……135
(31) 鵜ノ木南台地遺跡……136
(32) 境遺跡……137
(33) 五輪堂遺跡……138
(34) 子飼沢Ⅰ遺跡……139
(35) 子飼沢Ⅱ遺跡……140
(36) 南日詰小路口Ⅰ遺跡……141
(37) 南日詰小路口Ⅱ遺跡……142
(38) 水尻遺跡……143
(39) 古城方八丁遺跡……144
(40) 四反田Ⅰ遺跡……145
(41) 四反田Ⅱ遺跡……146
(42) 西部遺跡……147
(43) 舟渡Ⅰ・Ⅱ遺跡……148
(44) 野沢Ⅱ遺跡……149

平成21年度の発掘調査成果について

平成21年度の発掘調査事業は39遺跡44件150,979㎡で開始したが、年度途中での追加を含めて最終的には41遺跡46件151,128㎡の調査に着手した。本調査以外では、農業基盤整備事業等に関する試掘確認調査を実施している。

後期旧石器時代では前年度から継続になる奥州市下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡（15）と水尻遺跡（38）を調査した。下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡では石器集中区が10箇所確認され、7,859 点の旧石器が出土している。水尻遺跡からは石器集中区４箇所が確認され、彫刻刀形石器やスクレーパーなど305点の遺物が出土している。

縄文時代では盛岡市芋田沢田Ⅳ遺跡（11）・川目A遺跡（12）・小屋野遺跡（30）、北上市滝ノ沢遺跡（10）、遠野市新田Ⅱ遺跡（14）、奥州市鵜ノ木南台地遺跡（31）、宮古市八木沢野来遺跡（18）などを調査した。芋田沢田Ⅳ遺跡では中期末～後期初頭と早期の住居跡32棟などからなる集落跡や円環が二重に回りダルマの形状をした配石遺構などが検出された。川目A遺跡は４年目の調査となり、これまでに55基の配石遺構や16基の埋設土器などが検出され、縄文時代後期を主体とした祭祀遺跡と考えられる。多量の遺物が包含されていて、これまで出土した遺物は土器732箱（10トン強）、石器444箱、土偶約700点、各種土製品・石製品3,000点などである。滝ノ沢遺跡は縄文時代前期末から中期初頭の遺物包含層を調査し、土器228箱・石器298箱など多量の遺物が出土した。鵜ノ木南台地遺跡も後晩期の遺物包含層が検出され、そのほか竪穴住居跡１棟等もある。新田Ⅱ遺跡は前期の大型竪穴住居群が検出された国指定史跡綾織新田遺跡の北東の一段低い段丘面に広がり、中期の竪穴住居跡26棟・掘立柱建物跡４棟などが検出され、中期の集落の中心域だったと考えられる。

弥生時代では、北上市境遺跡（32）・舟渡Ⅰ・Ⅱ遺跡（43）・野沢Ⅱ遺跡（44）、宮古市佐原Ⅱ遺跡（29）がある。４年目の調査になる境遺跡からは住居跡や土坑が検出されている。舟渡Ⅰ・Ⅱ遺跡からは土坑３基、野沢Ⅱ遺跡からは竪穴住居跡１棟、佐原Ⅱ遺跡からも竪穴住居跡１棟が検出されている。

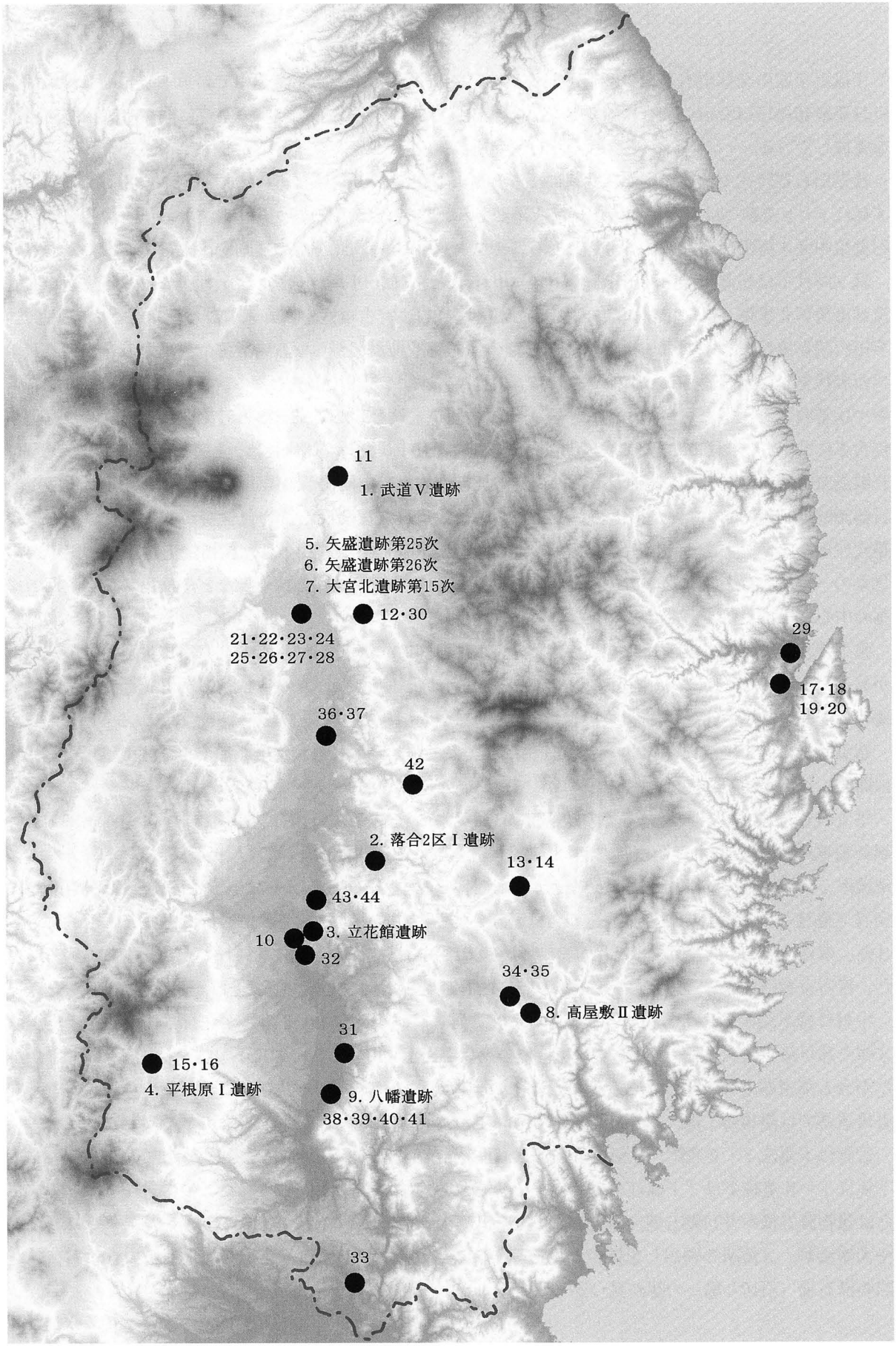
奈良時代は向中野館遺跡（23）・台太郎遺跡（27）がある。いずれも盛岡南新都市土地区画整理事業（盛南開発）に伴う継続調査で、集落を構成していた竪穴住居等が検出されている。

平安時代は縄文時代同様に多くの遺跡で調査されている。紫波町南日詰小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡（36・37）、細谷地遺跡（22）・向中野館遺跡（24）・飯岡才川遺跡（28）、奥州市古城方八丁遺跡（39）・鵜ノ木南台地遺跡、舟渡Ⅰ・Ⅱ遺跡・野沢Ⅱ遺跡などがある。南日詰小路口Ⅱ遺跡からは竪穴住居跡３棟が検出され、細谷地遺跡など盛南開発の継続遺跡からは竪穴住居跡や建物跡が検出されている。古城方八丁遺跡でも３棟、南日詰小路口Ⅱ遺跡では３棟、舟渡Ⅰ・Ⅱ遺跡からは５棟の竪穴住居跡などが検出されている。また、宮古市金浜Ⅰ遺跡（17）からは１棟の竪穴住居跡から多数の支脚や製塩土器が出土している。

中世は樋爪氏の関連する居館と推定される紫波町南日詰小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡が注目され、掘立柱建物跡３棟や井戸跡が検出され、井戸跡から12世紀の遺物が出土している。そのほか遺物がはっきり伴わなかったが台太郎遺跡からは中世から近世にかけての建物跡72棟、竪穴建物跡３棟などが検出されている。細谷地遺跡では建物跡１棟、向中野館遺跡では昨年の調査から継続する堀の一部が確認された。

近世は下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡、住田町子飼沢Ⅰ・Ⅱ遺跡（34・35）、花巻市落合２区Ⅰ遺跡（２）等がある。下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡では「下嵐江の番所跡」とみられる建物跡数棟が確認された。矢盛遺跡（25・26）からは建物跡21棟や井戸跡５基・墓24基などが検出された。子飼沢Ⅰ・Ⅱ遺跡では地下構造を持つ製鉄炉や大鍛冶炉、３箇所の煙出しを持つ木炭窯等が調査された。落合２区Ⅰ遺跡では花巻城の石垣を築いた際の採石場（石切り場）の跡が見つかった。

（調査第一課長　佐々木清文）



国土地理院発行の数値データを用いて作図

報告遺跡位置図

Ⅰ　発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

（1）武道（ぶどう）Ｖ遺跡

所在地	盛岡市玉山区芋田字武道58－15ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	KE57-1125・TBDE-09
委託者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	**調査対象面積**	3,741㎡
事業名	一般国道４号渋民バイパス建設事業	**調査終了面積**	3,741㎡
発掘調査期間	平成21年４月９日～５月15日	**調査担当者**	羽柴直人・本多準一郎・田中美穂

1　調査に至る経過

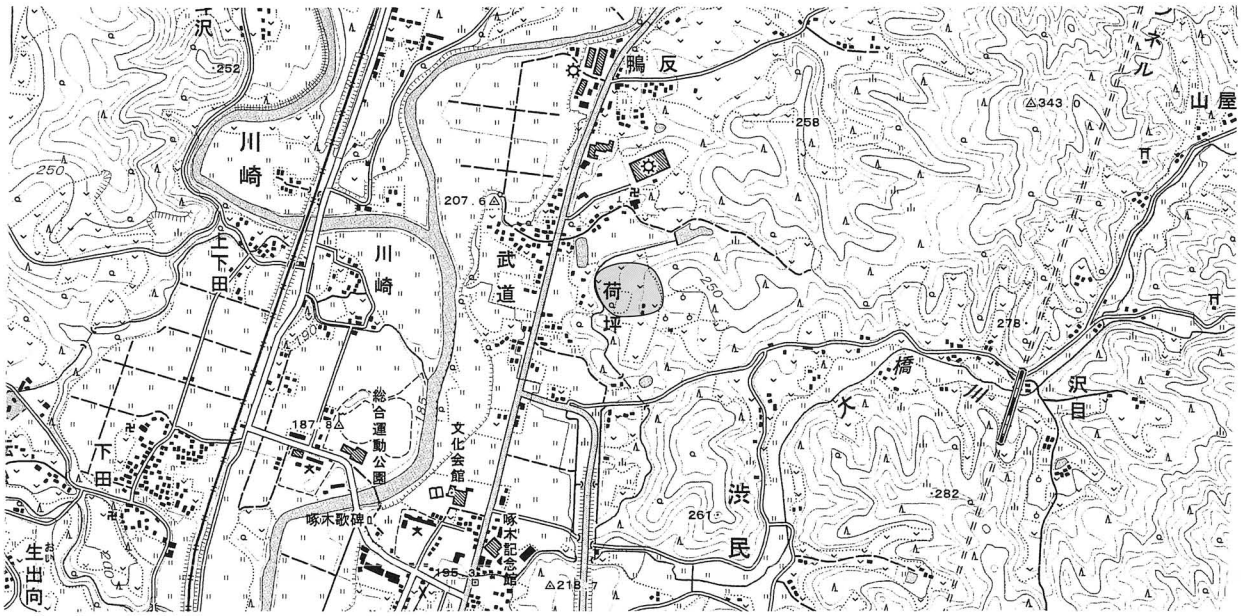
「武道Ｖ遺跡」は渋民バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道４号は、東京都中央区日本橋を起点として、青森県青森市に到る国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。国道４号渋民バイパスは盛岡市玉山区渋民と同区馬場の間、約5.6㎞の区間で計画されている。現国道は、ほぼ区の中心を南北に縦断し、全幅員８～12mと狭く、両側に歩道がない状態であり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、増加する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和61年度に事業着手、平成８年から工事着手、平成16年度に一部供用し事業を進めている。

「武道Ｖ遺跡」については、過年度において岩手県教育委員会および盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認され、平成20年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業とすることとした。

これにより、平成21年４月１日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受諾事業を締結し、「武道Ｖ遺跡」の発掘調査に着手した。

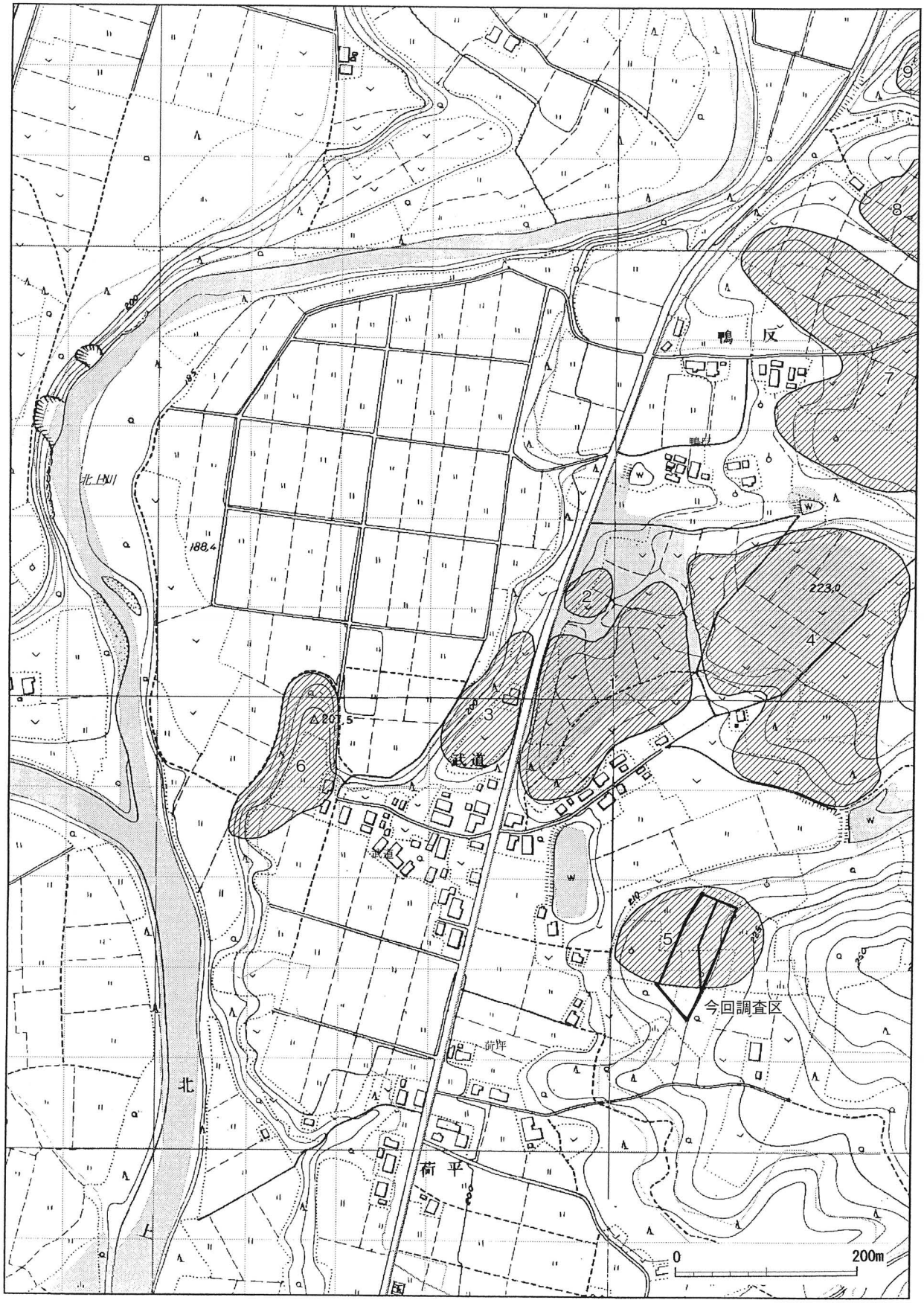
（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）



1：25,000　渋民

第１図　遺跡位置図

（1）武道Ⅴ遺跡



岩手県遺跡情報検索システムから引用・改変

第２図　遺跡の立地、周辺の遺跡

2　遺跡の位置と立地、及び周辺の遺跡（第1・2図）

武道Ⅴ遺跡はいわて銀河鉄道好摩駅の南東約2.1㎞、盛岡市玉山区芋田字武道に所在している。遺跡の西側には北上川が南流し、北上川の東岸には武道集落が位置する砂礫段丘が形成され、さらにその東には姫神山を主峰とする小起伏山地が広がる。遺跡はこの小起伏山地の西端縁辺部に立地する。遺跡の北西側には砂礫段丘面が谷状に奥深く入り込み、また、南東側にも砂礫段丘面が小規模ながら入り込み谷が形成されており、遺跡の乗る小起伏山地は西側に張り出す岬状の丘陵地形を呈している。そして遺跡の東側には標高250mの急峻な高地を背負っている。調査範囲からは西側への展望が開け、北上川や岩手山を望むことができる。

調査範囲の標高は213.5～219.5mで、調査区域の中央部の標高が高く、北側、南側ではそれぞれ標高を減ずる。調査区域中央部が丘陵の尾根に、南側、北側は丘陵端部の斜面部に相当する。

調査範囲は中央から北側が牧草地、南側が山林として利用され、牧草地と山林の境界部には農作業用の通路が調査区を横断していた。農作業用通路については、地権者の通行確保の必要があり、関係機関との協議の上、周辺の遺構分布から、遺構の存在の可能性は低いと判断し、表土除去をおこなわなかった。

周辺の遺跡は第2図に位置を示し、第1表に概要を示した。表中に記した7の昼久保Ⅴ遺跡の「後北土器」は高橋・武田1982の文献中の「武道遺跡」出土の土器に相当すると推測されるが、詳細は不明である。また昼久保Ⅴ遺跡は2005・2006年に渋民バイパス建設工事に係る発掘調査が盛岡市教育委員会によりおこなわれており（盛岡教育委2008）、縄文早期の貝殻文土器や縄文中期の住居跡が検出されている。4の八幡館は沖積低地に突出する段丘で構成されており、現在は八幡宮が祀られている。源義家、義経に関わる伝承や玉山氏の一族渋民助市秀明の居館との説があるが、詳細は不明である。採集された陶器、磁器の内容も明らかではない。また、第2図の範囲からはわずかに外れるが、8の昼久保Ⅳ遺跡の東側に「昼久保Ⅲ遺跡」が所在する。平成20年に渋民バイパス建設工事に係る発掘調査（㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2009「平成20年度発掘調査報告書　昼久保Ⅲ遺跡」第546集）がおこなわれ、縄文時代早期の貝殻文土器などが出土している。

第1表　周辺の遺跡

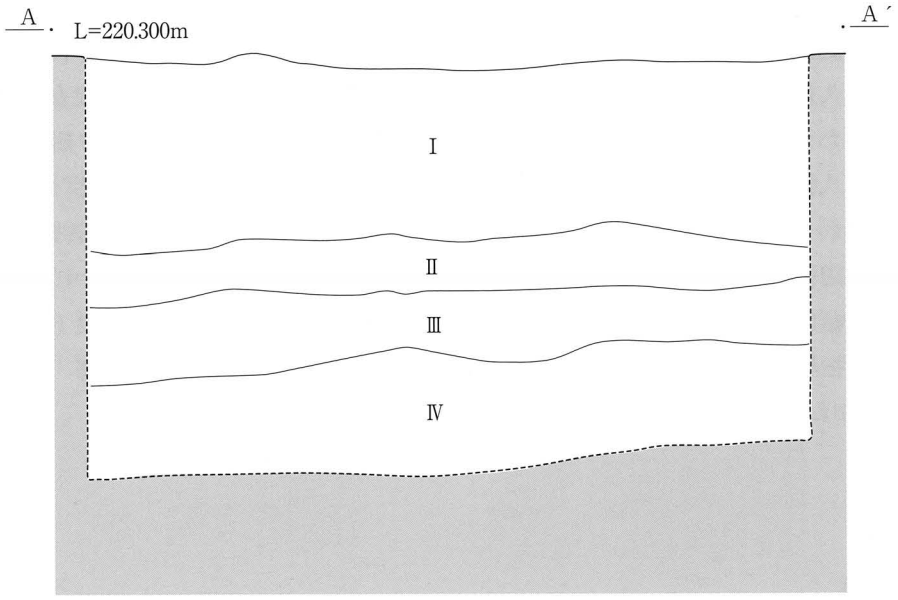
No.	遺跡名	よみがな	種別	時代	遺構・遺物	所在地	文献等
1	武道Ⅰ	ぶどうⅠ	散布地	縄文 平安	縄文土器 土師器	盛岡市玉山区 芋田字武道	
2	武道Ⅱ	ぶどうⅡ	散布地	縄文	縄文土器	盛岡市玉山区 芋田字武道	
3	武道Ⅲ	ぶどうⅢ	散布地	縄文	縄文土器	盛岡市玉山区 芋田字上武道	
4	武道Ⅳ	ぶどうⅣ	狩り場 集落	縄文 平安	縄文土器(晩期) 陥し穴　土師器 須恵器　竪穴住居	盛岡市玉山区 芋田字武道	㈶岩埋文2007「平成18年度発掘調査報告書 武道Ⅳ遺跡２次調査」第505集
5	武道Ⅴ	ぶどうⅤ	散布地 狩り場	縄文	縄文土器(晩期) 陥し穴	盛岡市玉山区 田字武道	本書報告
6	八幡館	はちまんたて	城館跡	中世	郭 磁器　陶器	盛岡市玉山区 芋田字下武道	本堂寿一他編1980「日本城郭大系２青森・岩手・秋田」新人物往来社　239頁
7	昼久保Ⅴ	ひるくぼⅤ	散布地	縄文 弥生	縄文土器 後北式土器	盛岡市玉山区 芋田 字昼久保・武道	高橋昭治・武田良夫1982「岩手県における後北式文化」『北奥古代文化』第13号 盛岡市教育委員会2008「昼久保Ⅴ遺跡」
8	昼久保Ⅳ	ひるくぼⅣ	散布地	縄文	縄文土器	玉山区芋田 字昼久保・武道	
9	昼久保Ⅱ	ひるくぼⅡ	散布地	縄文	縄文土器	盛岡市玉山区 芋田字昼久保	

3　基本層序（第３図、写真図版２）

基本層序を調査区中央の東端で観察した。土層の厚さは調査範囲各地点で異なる場合もあるが、層序は調査範囲全域で共通である。

Ⅰ層　　10ＹＲ２/１黒色土　草根多量混入　牧草地造成時に動いた土　層厚20～60cm
Ⅱ層　　10ＹＲ３/２黒褐色土　10ＹＲ４/４褐色土少量混入　層厚50～120cm
Ⅲ層　　10ＹＲ４/４褐色土　浮石少量混入　10ＹＲ３/２黒褐色土少量混入　層厚10～20cm
Ⅳ層　　10ＹＲ６/８明黄褐色土　下部に行くほど浮石多量混入　層厚不明

Ⅰ層は牧草地を造成する際に動かされた土であり、ビニール屑などが混入していた。遺構検出はⅢ層上面で、陥し穴状遺構の検出が可能であった。また、その下位の第Ⅲ層及びⅣ層中からは、試掘調査の際に縄文早期等の遺物は全く検出されておらず、当該期の遺構遺物は存在しないと判断され、第Ⅳ層上面までの土層除去は基本的にはおこなっていない。

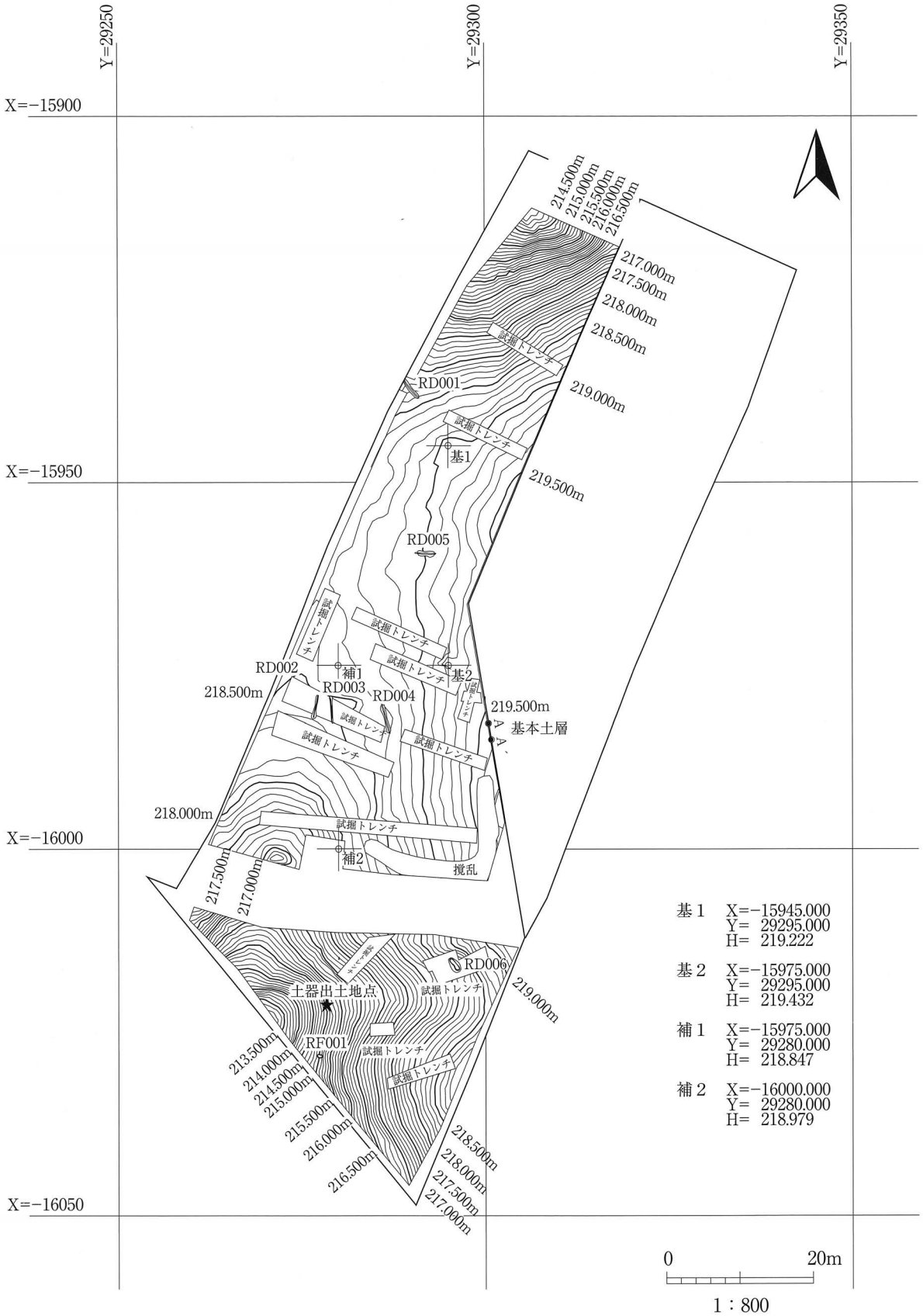


第３図　基本土層

4　調査の概要

野外調査は平成21年４月９日から５月15日までおこなった。実質の稼働日数は23日間である。調査対象面積は3,741㎡である。調査区域内の出土遺物、検出遺構は寡少な状況であったが、表土及び、牧草地の造成土の堆積が厚く、重機による表土除去は調査終了直前までの時間を有した。よって表土除去、遺構検出、遺構精査、遺構実測の作業を並行して行う調査状況になってしまった。

検出された遺構は、陥し穴状遺構６基、焼土遺構１基である。盛岡市教育委員会の指定により、陥し穴状遺構は「ＲＤ」、焼土遺構は「ＲＦ」の記号を用いて表示する。出土遺物は縄文土器深鉢の口縁～体部片が１片出土している。出土遺物はこの縄文土器以外には全く出土していない。


Y=29250
Y=29300
Y=29350
X=−15900
X=−15950
X=−16000
X=−16050
214.500m
215.000m
215.500m
216.000m
216.500m
217.000m
217.500m
218.000m
218.500m
219.000m
219.500m
試掘トレンチ
RD001
基1
RD005
RD002
補1
RD003
RD004
基2
219.500m
基本土層
A
A'
218.500m
218.000m
補2
撹乱
217.500m
217.000m
土器出土地点
RD006
219.000m
RF001
213.500m
214.000m
214.500m
215.000m
215.500m
216.000m
216.500m
218.500m
218.000m
217.500m
217.000m
基１　X=−15945.000
Y= 29295.000
H= 219.222
基２　X=−15975.000
Y= 29295.000
H= 219.432
補１　X=−15975.000
Y= 29280.000
H= 218.847
補２　X=−16000.000
Y= 29280.000
H= 218.979
0
20m
1：800

第４図　遺構配置図

（1）遺構

＜陥し穴状遺構＞

ＲＤ001陥し穴状遺構（第５図、写真図版３）

［位置］調査区北側Ｘ＝-15,938m、Ｙ＝29,292m付近に位置する。検出面はⅢ層上面で、黒色のプランとして検出した。重複関係はない。

［形態］平面形は、北西―南東方向に長い溝状を呈するが、北西側は調査区外にのびているため未調査である。平面規模は、検出できた範囲で296×54cm、深さは104cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。南東壁側はややオーバーハングしている。底面は、ほぼ平坦である。

［堆積土］周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

［出土遺物］　出土遺物はない。

［性格と時期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

ＲＤ002陥し穴状遺構（第５図、写真図版３）

［位置］　調査区中央部Ｘ＝-15,982m、Ｙ＝29,278m付近に位置する。検出面はⅢ層上面であるが、試掘トレンチにかかる部分の検出はⅣ層上面である。黒褐色のプランとして検出した。重複関係はない。

［形態］　平面形は、南北方向に長い溝状を呈する。平面規模は、332×34cm、深さは131cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。底面は、若干起伏はあるがほぼ平坦である。

［堆積土］　周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

［出土遺物］　出土遺物はない。

［性格と時期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

ＲＤ003陥し穴状遺構（第５図、写真図版３・４）

［位置］　調査区中央部Ｘ＝-15,980m、Ｙ＝29,280m付近に位置する。検出面はⅢ層上面であるが、試掘トレンチにかかる部分の検出はⅣ層上面である。暗褐色のプランとして検出した。重複関係はない。

［形態］　平面形は、南北方向に長い溝状を呈する。平面規模は、366×28cm、深さは126cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

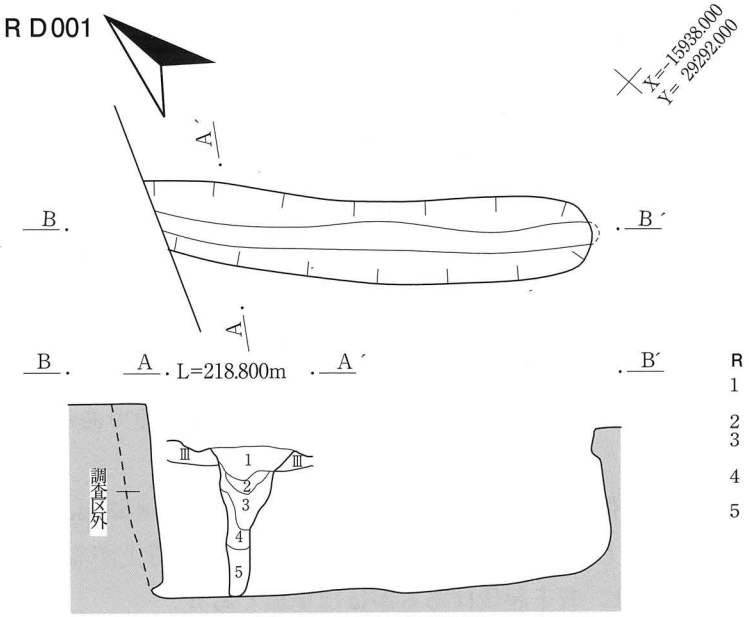
［堆積土］　周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

［出土遺物］　出土遺物はない。

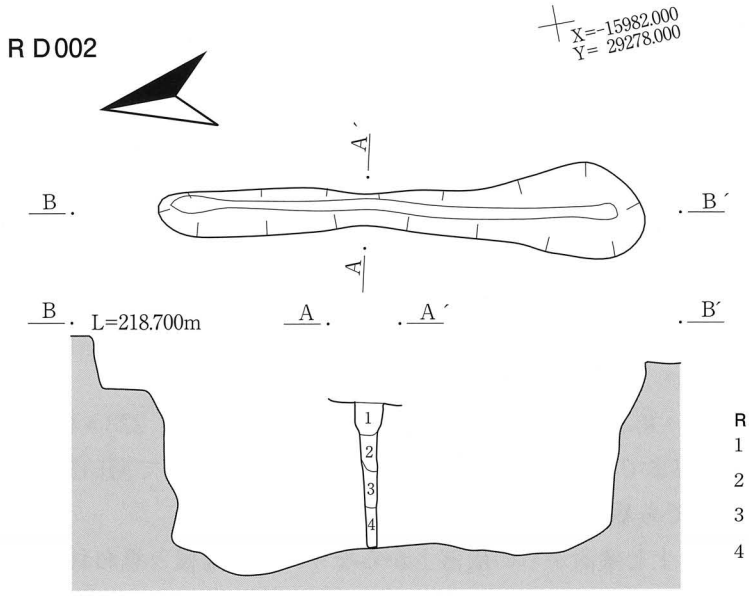
［性格と時期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

ＲＤ004陥し穴状遺構（第６図、写真図版４）

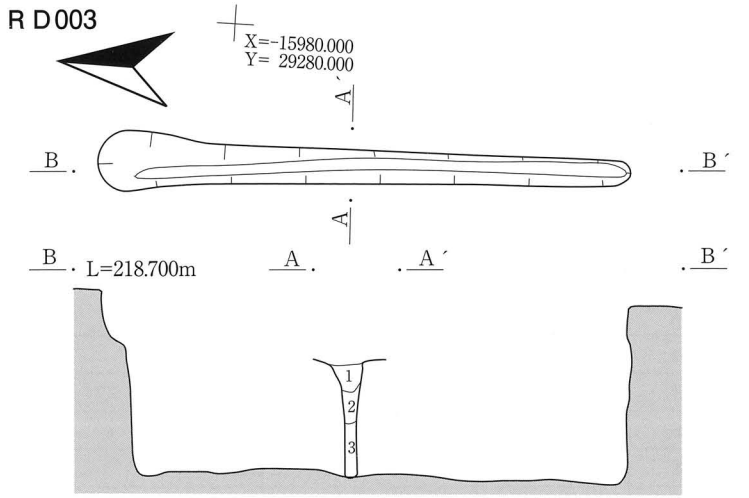
［位置］　調査区中央部Ｘ＝-15,984m、Ｙ＝29,288m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。黒褐色のプランとして検出した。重複関係はない。



RD001
1　10YR2/2 黒色シルト 粘性やや弱 締まり密
　黄褐色土ブロック3%混入
2　10YR3/2 黒褐色砂質土 粘性弱 締まり中
3　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 締まり密
　黄褐色土ブロック5% オレンジパミス1%混入
4　10YR5/8 黄褐色粘土質土 粘性やや強
　締まりやや疎
5　10YR3/4 暗褐色粘土質土 粘性やや強 締まり疎
　黄褐色土ブロック5%混入



RD002
1　10YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
　黄褐色土3%混入
2　10YR5/8 黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
　オレンジスコリア1%混入
3　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　黄褐色土10% オレンジスコリア1%混入
4　10YR4/6 褐色シルト 粘性やや弱 締まり疎



RD003
1　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
　黄褐色土ブロック30% オレンジスコリア3%混入
2　10YR5/8 黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密
　オレンジスコリア1%混入
3　10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 粘性やや弱
　締まりやや疎 黄褐色土ブロック10%
　オレンジスコリア1%混入

0　1：50　2m

第５図　RD001～003

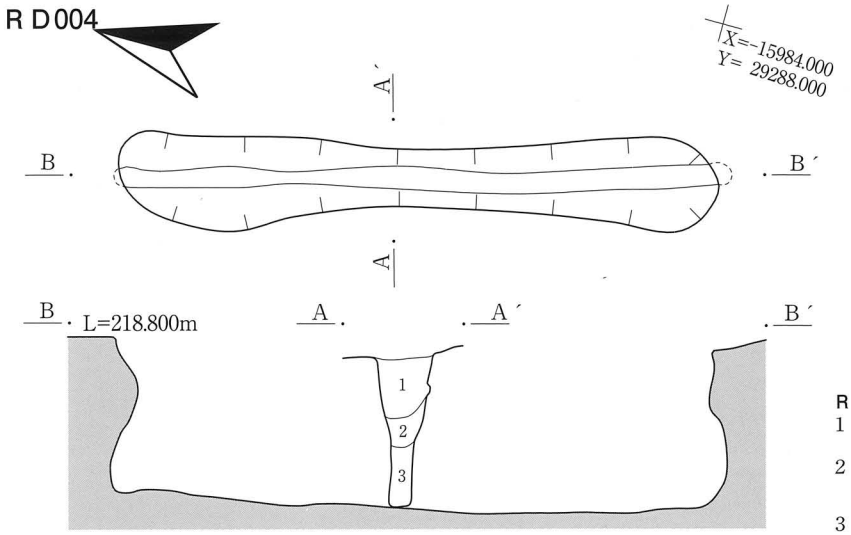
［形態］　平面形は、南北方向に長い溝状を呈する。平面規模は、392×48cm、深さは102cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。南北壁はややオーバーハングしている。底面は、ほぼ平坦である。堆積土は、周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。
［出土遺物］　出土遺物はない。
［性格と時期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

ＲＤ005陥し穴状遺構（第６図、写真図版４）
［位置］　調査区中央部Ｘ＝-15,960m、Ｙ＝29,294m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。黒色のプランとして検出した。重複関係はない。
［形態］　平面形は、東西方向に長いやや丸みを帯びた溝状を呈する。平面規模は、236×58cm、深さは147cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。東西壁は大きくオーバーハングしている。底面は、若干起伏はあるがほぼ平坦である。
［堆積土］　堆積状況は、周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。
［出土遺物］　出土遺物はない。
［性格と時期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

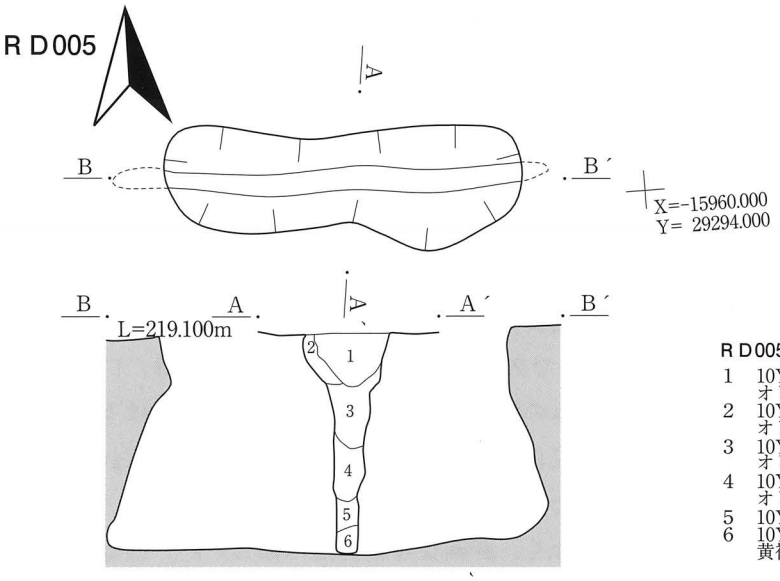
ＲＤ006陥し穴状遺構（第６図、写真図版４）
［位置］　調査区中央部Ｘ＝-16,015m、Ｙ＝29,295m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。黒色のプランとして検出した。重複関係はない。
［形態］　平面形は、北西―南東方向に長い丸みを帯びた形状を呈する。平面規模は、223×122cm、深さは139cmである。壁面は底面から中央部までほぼ垂直に立ち上がったあと、外傾して開口部にいたる。底面は、若干起伏はあるがほぼ平坦である。
［堆積土］　周辺から流れ込んだと思われる土と壁面からの崩落土からなり、自然堆積と思われる。
［出土遺物］　出土遺物はない。
［性格と時期］　出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第２表　陥し穴状遺構観察表

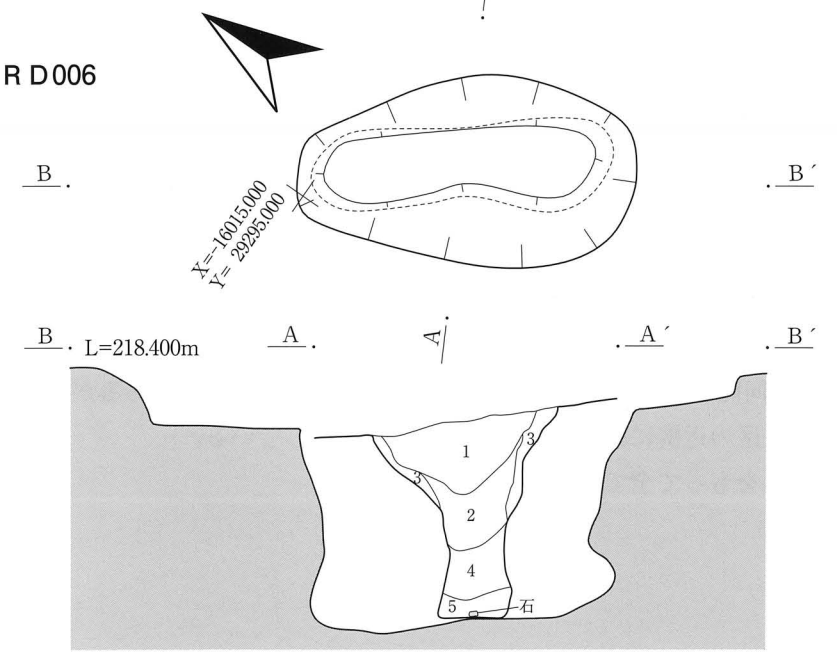
遺構名	調査区内の位置	規模(cm)			主軸方向	埋土	時期ほか
		長軸	短軸	深さ			
ＲＤ001	北側	(296)	54	104	N - 42° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
ＲＤ002	中央部	332	34	131	N - 10° - E	自然堆積	縄文時代と推測される
ＲＤ003	中央部	366	28	126	N - 6° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
ＲＤ004	中央部	392	48	102	N - 17° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
ＲＤ005	中央部	236	58	147	N - 87° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
ＲＤ006	南側	223	122	139	N - 36° - W	自然堆積	縄文時代と推測される



RD004
1　10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱　締まり中
　黄褐色土5%混入
2　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱　締まりやや疎
　黄褐色土粒3%
　オレンジスコリア1%混入
3　10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱　締まりやや疎
　黄褐色土ブロック5%混入



RD005
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱 締まり密
　オレンジスコリア1%混入
2　10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締まり中
　オレンジスコリア1% 黄褐色土ブロック3%混入
3　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まりやや密
　オレンジスコリア2% 黄褐色土ブロック3%混入
4　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性中 締まり中
　オレンジスコリア3% 黄褐色土ブロック5%混入
5　10YR5/8 黄褐色土 粘性やや強 締まり中
6　10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強 締まり中
　黄褐色土ブロック3%混入



RD006
1　10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱
　締まり密 オレンジスコリア3%混入
2　10YR5/6 にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱
　締まり中 オレンジスコリア3%
　暗褐色シルト10%混入
3　10YR5/8 黄褐色シルト 粘性やや弱
　締まりやや密 オレンジスコリア1%混入
4　10YR6/8 明黄褐色シルト質粘土 粘性中
　締まり中 オレンジスコリア2%混入
5　10YR3/4 暗褐色シルト質粘土 粘性中
　締まりやや密 オレンジスコリア1%
　黄褐色粘土粒3%混入

0　1：50　2m

第6図　RD004～006

＜焼土遺構＞

ＲＦ001焼土遺構（第７図、写真図版５）

［位置］　調査区中央部Ｘ＝-16,028m、Ｙ＝29,278m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係はない。

［形態］　焼土は赤褐色で、74×48cmの不整形で検出された。焼土の厚さは、12cmほどである。現地性のものと思われる。

［出土遺物］　出土遺物はない。

［性格と時期］　出土遺物がなく詳細は不明である。検出面から推測して、縄文時代よりも新しい時期に属する可能性が高い。

（2）出土遺物（第７図、写真図版５）

縄文土器片が１片出土している。出土位置は調査区南側中央付近（第4図参照）で、基本土層のⅡ層中からの出土である。重機での表土除去中に出土したため、一部欠損させてしまったが、本来は単一の破片と判断される。15×26cm程の大形破片で、口縁部から体部上半までの部位である。単独での出土で土器埋設遺構の可能性を検討したが、その状況は見出せなかった。また、周辺に直接関連する遺構や、共伴する遺物の出土は皆無であった。

器種は深鉢である。口径は反転実測で32.0cmと求められた。器高は17.9cm分が残存している。器壁は６～７mmとかなり薄い。外面には単節ＬＲ縄文が全面に施されている。内面には篦状の工具による器面調整が横位に施されている。外面の色調は10ＹＲ6／6明黄褐色をベースに10ＹＲ３／３暗褐色のむらが部分的にみられる。内面の色調は7.5ＹＲ5／8明褐色である。口唇～口縁部の断面形は、口唇部が平らな角張った形態である。外面には成形の際の輪積みの継目がみられるが、継ぎの調整は下部から上へ向けての調整である。また、外面の体部上半には炭化物が付着し、口縁部には吹きこぼれ痕と推測される液の付着痕跡がみられ、実際に煮沸に使用した土器と判断できる。

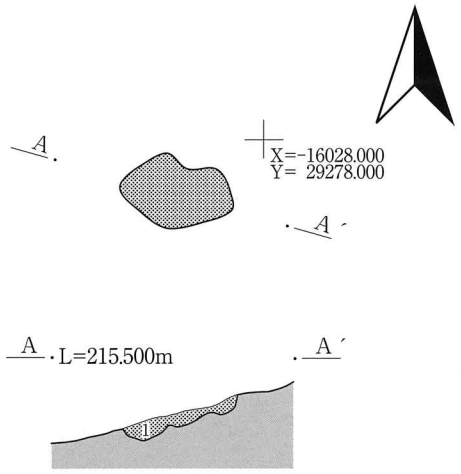
縄文施文のみの深鉢で、共伴する時期特定可能の土器もなく、詳細な時期特定は難しいが、口縁部断面形の形状、継目の調整方向、また器壁の薄さなどを考慮すると、縄文晩期初頭～前葉の可能性が高いとの所見を複数の当埋文センター調査員から得た。あえて形式に当てはめると、大洞Ｂ式ないし大洞ＢＣ式に相当する可能性が高い。

５　まとめ

武道Ｖ遺跡の今回の調査範囲では、縄文時代に属する陥し穴状遺構が６基検出され、縄文時代のある時期には狩り場であったことが明らかになった。陥し穴状遺構の形態、軸方向は多様であり、単独の時期ではなく、複数以上の時期にわたる構築が推測される。この中でＲＤ003陥し穴状遺構とＲＤ004陥し穴状遺構は形状と軸方向が類似し同時存在の可能性を指摘できる。また、１片のみであるが晩期の縄文土器片が出土したことは、調査区の近隣に縄文晩期集落の存在を示唆している。

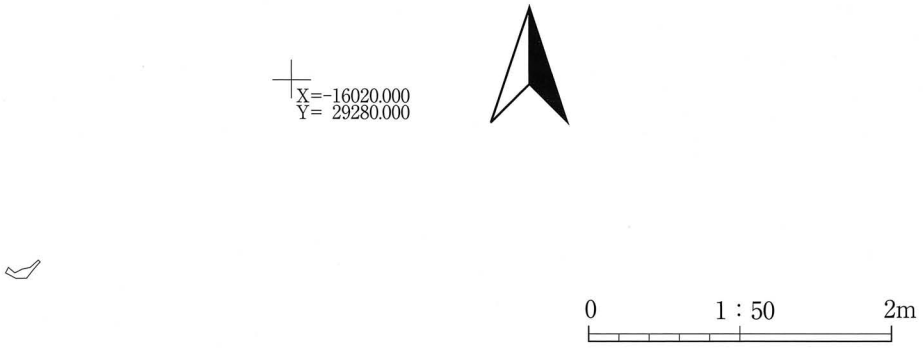
なお、武道Ｖ遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

ＲＦ001

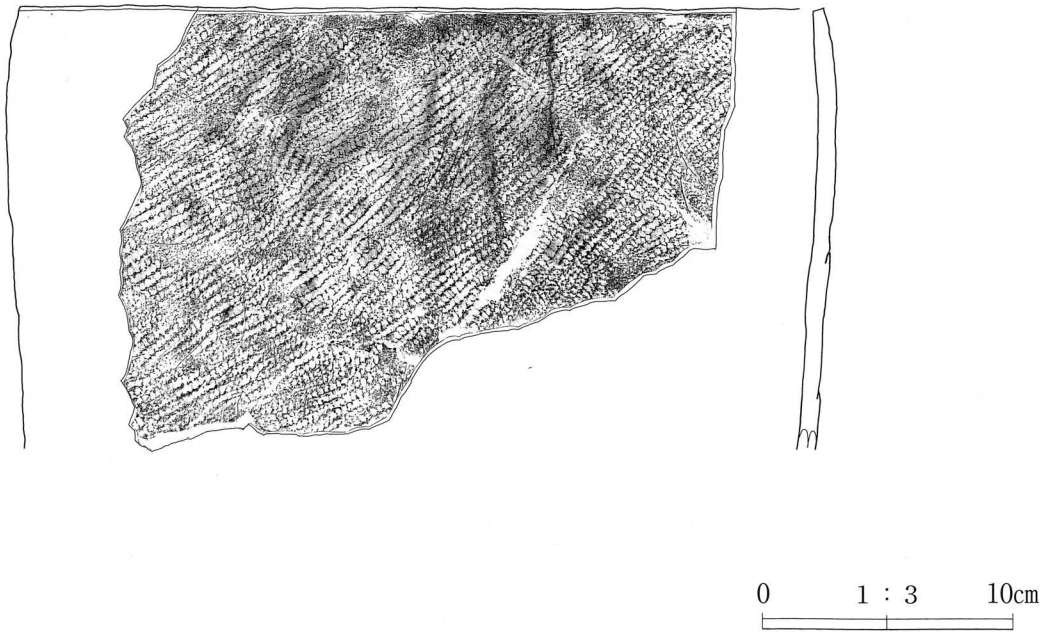


ＲＦ001
1　5YR4/6 赤褐色焼土 粘性弱 締まり密 黒色土ブロック5%
炭1%混入

土器出土状況



縄文土器実測図



第７図　ＲＦ001、土器出土状況・縄文土器実測図

調査区遠景（東から）

RD002・003・004陥し穴（西から）

写真図版1

調査区北側調査前風景（南から）

調査区南側調査前風景（北から）

調査区近景（東から）

調査区北側北端部（南から）

調査区中央部（北から）

調査区南側全景（南から）

遺跡遠景（北から）

基本土層

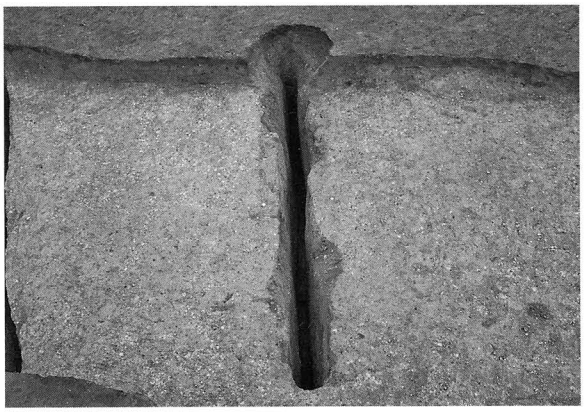
写真図版２

ＲＤ１　検出状況（西から）

ＲＤ１　平面（東から）

ＲＤ１　断面（東から）

ＲＤ２　検出状況（北から）



ＲＤ２　平面（北から）

ＲＤ２　断面（南から）

ＲＤ３　検出状況（北から）

ＲＤ３　平面（北から）

写真図版３

ＲＤ３　断面（南から）

ＲＤ４　検出状況（北から）

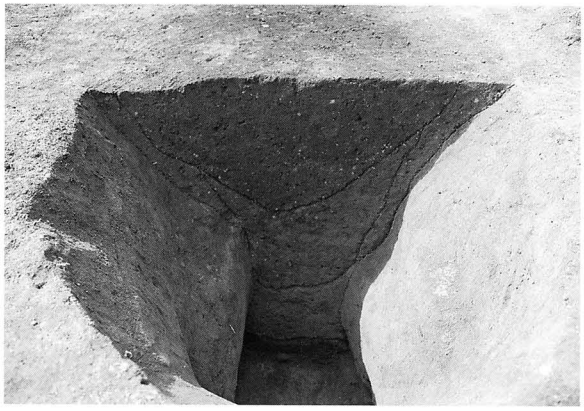
ＲＤ４　平面（北から）

ＲＤ４ 断面（北から）

ＲＤ５　平面（西から）

ＲＤ５　断面（東から）

ＲＤ６　平面（南から）



ＲＤ６　断面（南から）

写真図版４

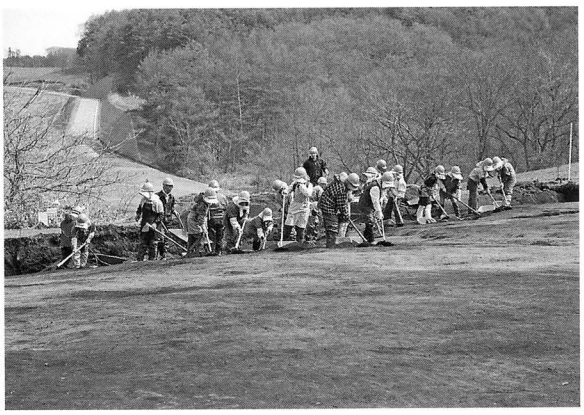
ＲＦ１　平面（西から）

ＲＦ１　断面（南から）

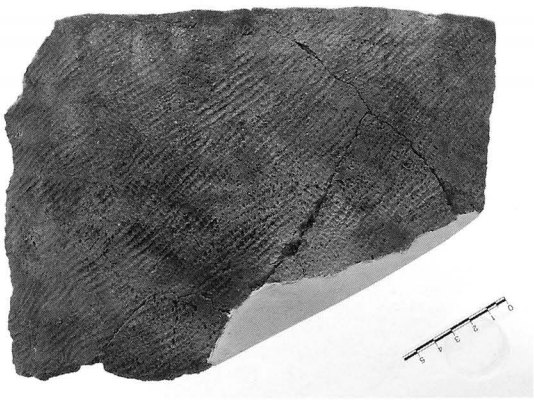
土器出土状況

陥し穴状遺構調査風景

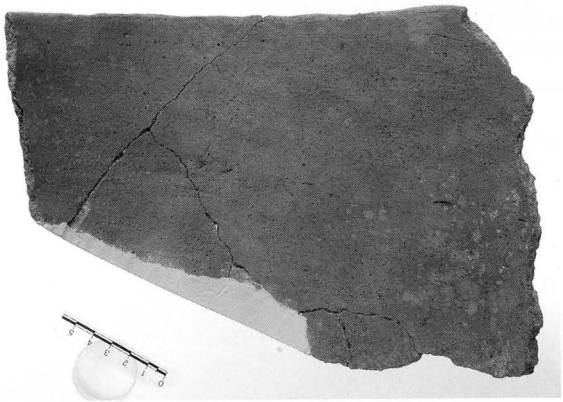
実測作業風景



検出作業風景



縄文土器（表）



縄文土器（裏）

写真図版５

（2）落合（おちあい）２区Ⅰ遺跡

所在地	花巻市東和町落合２区57地内ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	ME38-0293・OA2Ⅰ-09
委託者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	**調査対象面積**	1,515㎡
事業名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業	**調査終了面積**	1,515㎡
発掘調査期間	平成21年９月１日～９月17日	**調査担当者**	晴山雅光・福島正和

１　調査に至る経過

落合２区Ⅰ遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区域内に遺跡が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

東北横断自動車道は、東北縦貫自動車道（東北道）に合流、さらに北上市にて分岐し、西和賀町・横手市・大仙市を経由して秋田市に至る総延長212㎞（内岩手県内113㎞で供用区間は45㎞）の高規格道路である。

本路線は、釜石港・大船渡港といった重要港湾や観光資源豊富な陸中海岸国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北上中部地方拠点都市地域や花巻空港等の岩手県内と秋田県とを結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全域の産業・経済発展を担うことを目的に策定された。遠野～東和間については、平成10年度に遠野～宮守間で整備計画が、宮守～東和間では施行命令がそれぞれ出されている。また、平成16年度には新直轄方式による整備が決定している。

落合２区Ⅰ遺跡については、過年度において岩手県教育委員会および東和町教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。落合２区Ⅰ遺跡については、平成21年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて、平成21年７月８日付けで岩手県教育委員会教育長あてに協議し、平成21年７月31日付けで国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所あてに通知されたことに基づき、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団の委託事業とすることとした。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

２　遺跡の位置と立地（第１・２図）

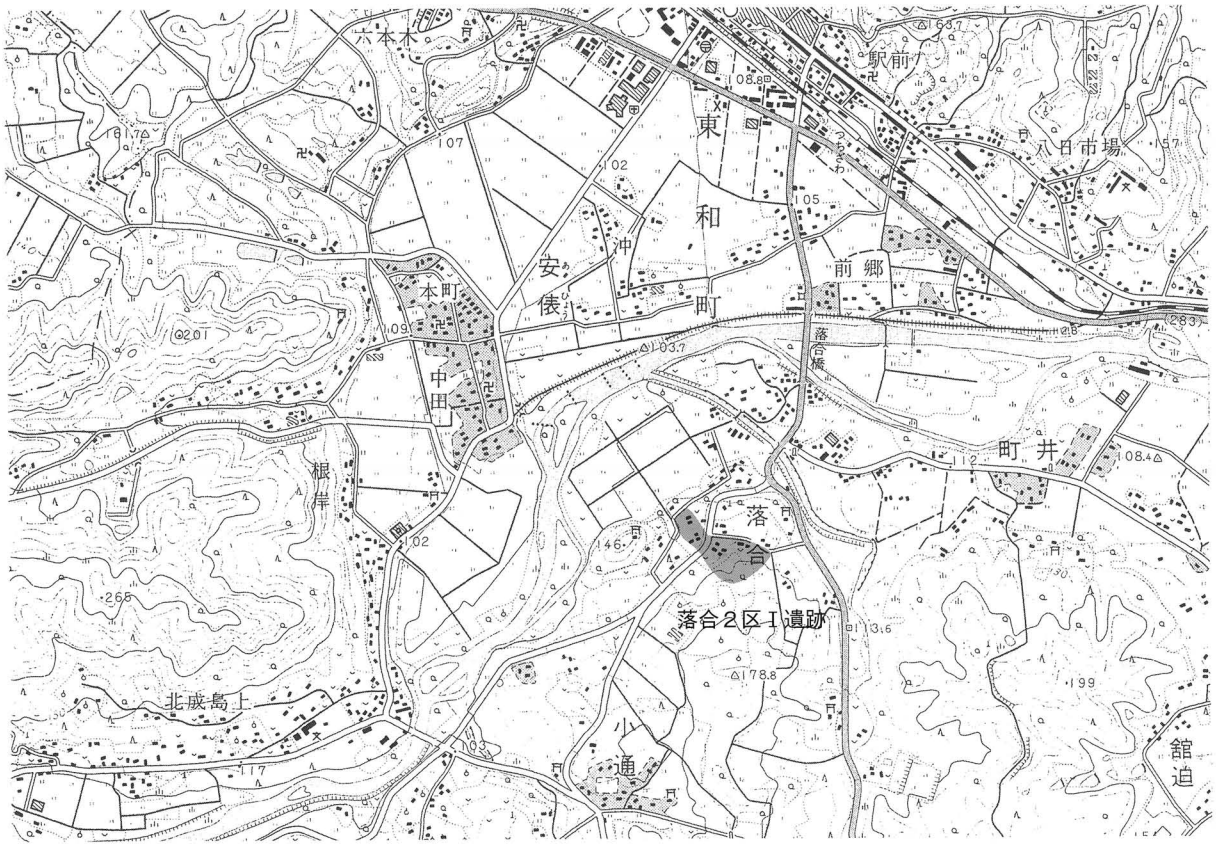
落合２区Ⅰ遺跡は花巻市東和町落合２区に所在する。遺跡はJR釜石線土沢駅より約1.5㎞南に位置する。旧東和町内を蛇行しながら東西に流れる猿ヶ石川とこれに南から注ぎ込む毒沢川との間に挟まれた低位段丘上に立地し、調査区は南から北へ延びる小丘陵に挟まれた谷部である。周辺は現地表面でも巨大な花崗岩の転石が点々とみられる地帯である。これら花崗岩の転石は、背後の丘陵起源のものであると推測される。調査地点の標高は約127mであり、調査前は山林や畑地として利用されていた。

３　基本層序（第３図、写真図版２）

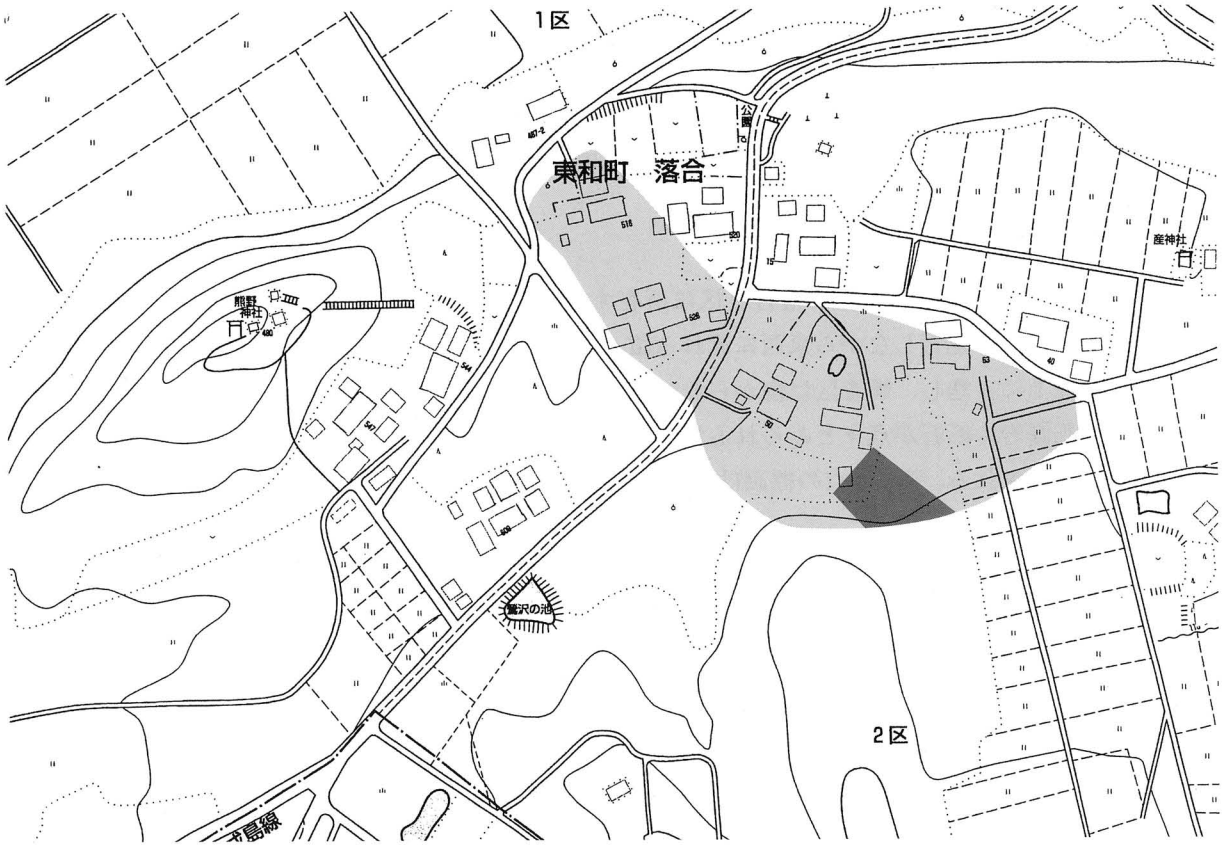
調査区内の地形は西に向かって緩やかに下る。したがって、土層の堆積状況は高低差により東に向かって堆積の厚みが増す傾向である。

調査区内の基本層序は、上からⅠ層（表土）、Ⅱ層（黒褐色シルト）、Ⅲ層（黒色シルト～暗褐色砂質シルト）、Ⅳ層（灰黄褐色～褐色シルト）、Ⅳ層以下は花崗岩の風化層が再堆積した状況などが認められる。なお、調査区内に多く点在する花崗岩の転石はⅣ層やそれ以下の堆積層に入り込んでいるものもみられる。そのため、これら転石はすべて同一時期に流れ込んだものではなく、かなり古い時代から幾度も流転して調査区内に落ち着いたものであると考えられる。

（2）落合２区Ⅰ遺跡



第１図　遺跡の位置　　１：25,000　土沢



第２図　調査位置　　１：4,000

４　調査の概要

（1）遺構

今回の調査で検出した遺構は土坑５基（SK01～05）、溝１条（SD01）である。いずれの遺構もⅣ層上面で検出した。

SK01土坑（第５図、写真図版３）

調査区中央に位置する。平面やや不整な円形で底面はレンズ状に窪む。規模は南北長1.95m、東西長1.86m、深さ65cmである。埋土はおおむね上下２層からなり、上層は黒褐色の粘質シルト、下層は暗褐色の中粒砂である。いずれも軟質の土壌である。埋土上層には縄文土器片が多く含まれ、特に検出面に近い上位のレベルでは集中して認められた。下層には遺物が含まれておらず、最底面を検出すると湧水する。また、底面北半は地山に含まれている花崗岩が露出している。この遺構の性格は不明であるが、埋土より出土した縄文土器より縄文時代晩期の遺構であると考えられる。

SK02土坑（第５図、写真図版３）

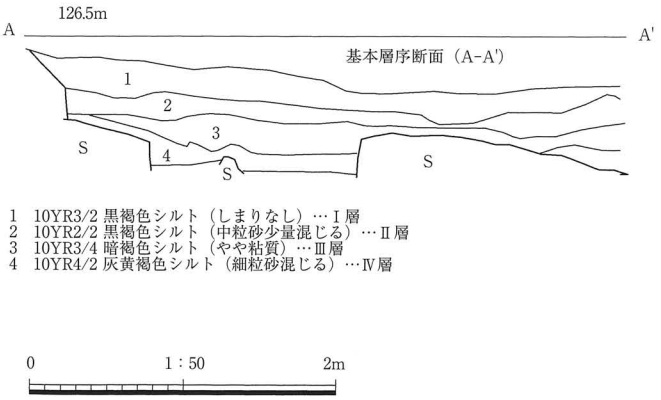
調査区中央より南西に位置する。平面形態は円形であると推測されるが、水路などの攪乱等によって判然としない。規模は１m程度の直径を有するものと考えられ、残存する深さは22cmである。埋土はおおむね３層からなり、いずれも砂質の土壌で構成される。また、地形的に沢筋にあたっているためか湧水著しく、なおかつ、埋土はグライ化が顕著である。埋土中より縄文土器の細片が一定量出土した。遺構の南側側面は地山に含まれている巨大な花崗岩が露出しており、この巨石までが遺構の範囲であるとみられる。この遺構の性格は不明であるが、埋土より出土した縄文土器より縄文時代晩期の遺構であると考えられる。

SK03土坑（第５図、写真図版３）

調査区南側に位置する。一部、木の根によって攪乱されているが、平面長楕円形の土坑であると考えられる。規模は長軸方向である南北長1.92m、短軸方向である東西長0.65m、深さは中央最深部で16cmである。埋土は褐色を帯びたシルト質砂の単層である。埋土や遺構周辺から遺物は出土しなかった。遺構の時期、性格とも不明である。

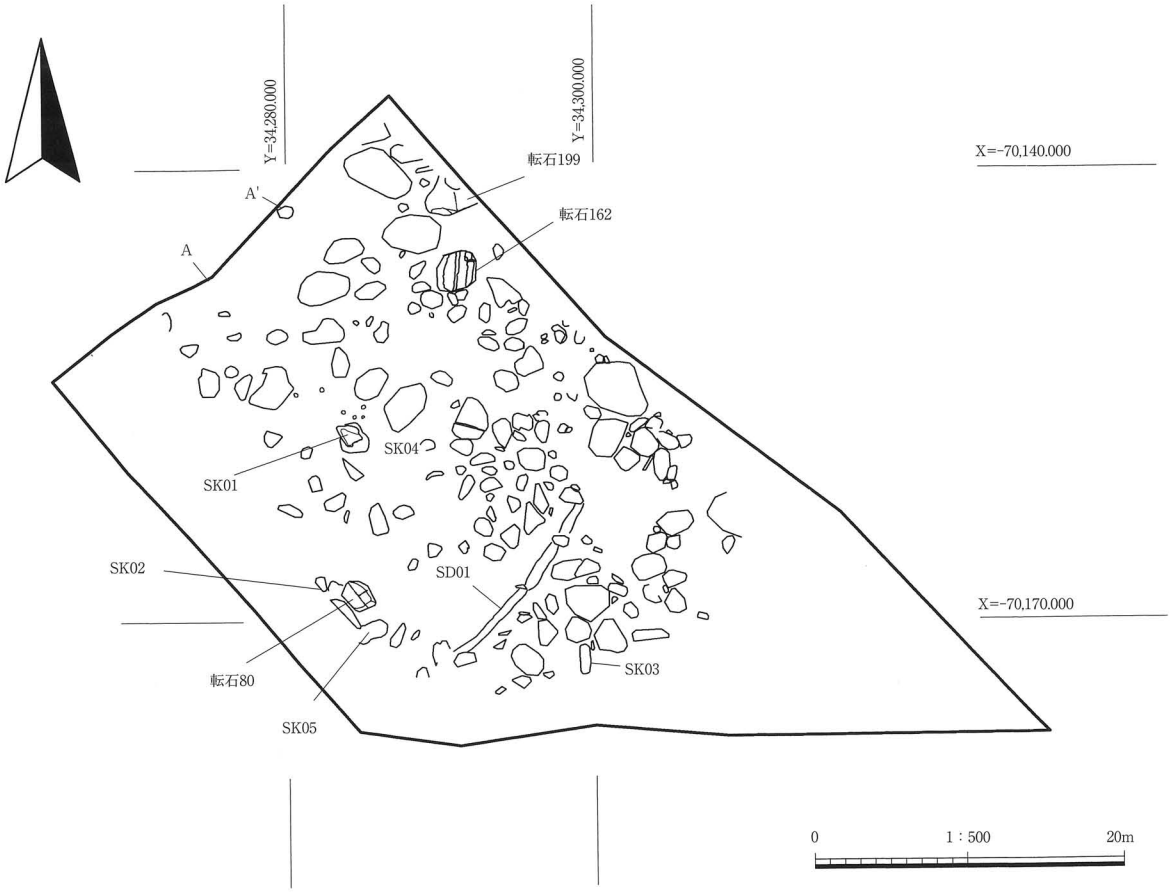
SK04土坑（第５図、写真図版３）

調査区中央に位置する。西側の一部を攪乱によって失われているが、平面形態はおおむね円形であると考えられる。規模は南北長0.68m、東西長0.93m、深さは26cmである。埋土は３層からなり、上層は褐色と黒色のブロック混合土であり、中層は褐色の砂質シルトである。下層は断面図や断面写真に掛からなかったが、遺構の中心部にわずかな範囲で黒色粘質シルトが存在する。この埋土下層より縄文土器の細片が数点出土している。この遺構の性格は不明であるが、埋土下層より出土した縄文土器より縄文時代の遺構であると考えられる。

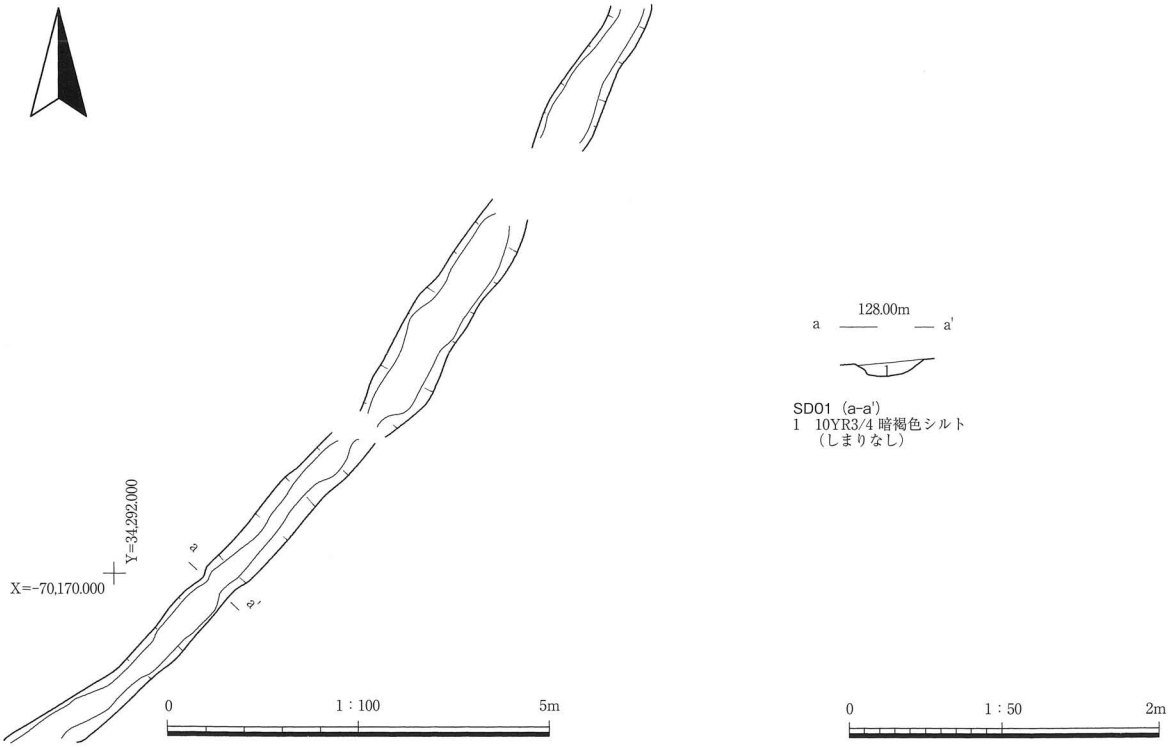


第３図　基本層序断面

（2）落合２区Ｉ遺跡



第４図　遺構配置



第５図　SD01

SK05土坑（第５図、写真図版３）

調査区中央より南西に位置する。平面形態は楕円形であると推測されるが、水路などの攪乱等によって判然としない。規模は１m程度の直径を有するものと考えられ、残存する深さは22cmである。埋土はおおむね２層からなり、いずれも砂質の土壌で構成される。また、地形的に沢筋にあたっているためか湧水著しく、なおかつ、埋土はグライ化が顕著である。埋土中より縄文土器の細片が一定量出土した。遺構の周辺には地山に含まれている巨大な花崗岩が露出しており、この巨石によって遺構の範囲が区切られているように思われる。この遺構の性格は不明であるが、埋土より出土した縄文土器より縄文時代晩期の遺構であると考えられる。ただし、出土した土器類は微細な破片が多く、なおかつ摩滅が著しく文様等が不鮮明である。

SD01溝（第５図、写真図版３）

調査区南側に位置し東西方向に延びる。長さ12.8m、幅60cm、深さ約10cmの直線的な溝である。埋土は土坑などとは異なり、しまりのない暗褐色シルトの単層である。出土遺物はなく、時期および性格は不明である。

切石（写真図版４）

調査区内には花崗岩の転石が多く存在する。これら転石には、石材として割り採った痕跡が認められるものがいくつか存在する。この切石の痕跡は矢穴が連続して打ち込まれている点で共通する。また、これら痕跡のみで時期は特定できないものの、その痕跡は形状や寸法が等しく、おおむね一時期におこなわれているものと考えられる。

（2）遺物（第６・７図　写真図版５～７）

出土した遺物のうち、図化可能なものを中心に選択し本書に掲載した。また、これら掲載遺物は表１に一覧としてまとめた。出土遺物量は、土器が大コンテナ約２箱、石器が小コンテナ１箱である。なお、遺構出土の土器類はそのうち約１割の量である。

１～56はいずれも縄文土器である。１～22はSK01の埋土より出土した。21・23～25はSK02の埋土から出土した。26～56は遺構外出土である。これらは縄文時代晩期の所産と考えられる。

57は須恵器の壷底部片である。９～10世紀の所産と考えられる。58・59は磁器碗である。いずれも近世のもので、58は大堀・相馬産である。59は在地で焼かれた臺（台）焼である。

60～62は遺構外出土の石器である。いずれも縄文時代のものと考えられる。60は乳白色の頁岩製石匙である。基部に対して縦方向に長い刃部を有する。

63・64は遺構外出土の砥石である。いずれも凝灰岩製とみられるが、所属時期は不明である。

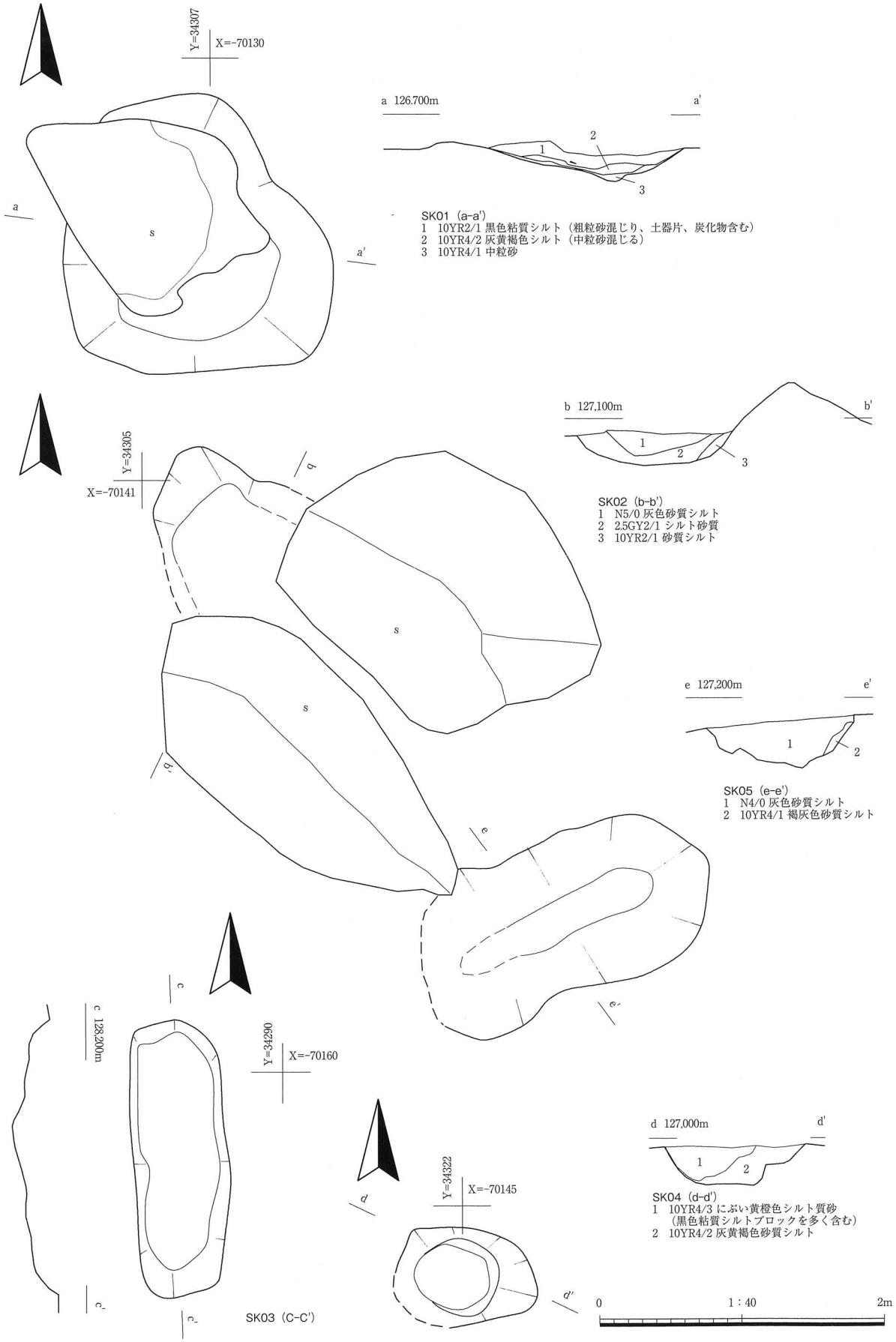
65は石切作業で生じた花崗岩残滓の一部である。調査区北側で出土した。矢穴痕跡が認められ、人為的に割り採られたものの残滓であると考えられる。矢穴痕跡は逆台形であり、最小幅である先端部が３cm、最大幅が3.5cmである。石質は粗粒花崗閃緑岩とみられ、この周辺で検出されるその他の転石と同じである。

５　まとめ

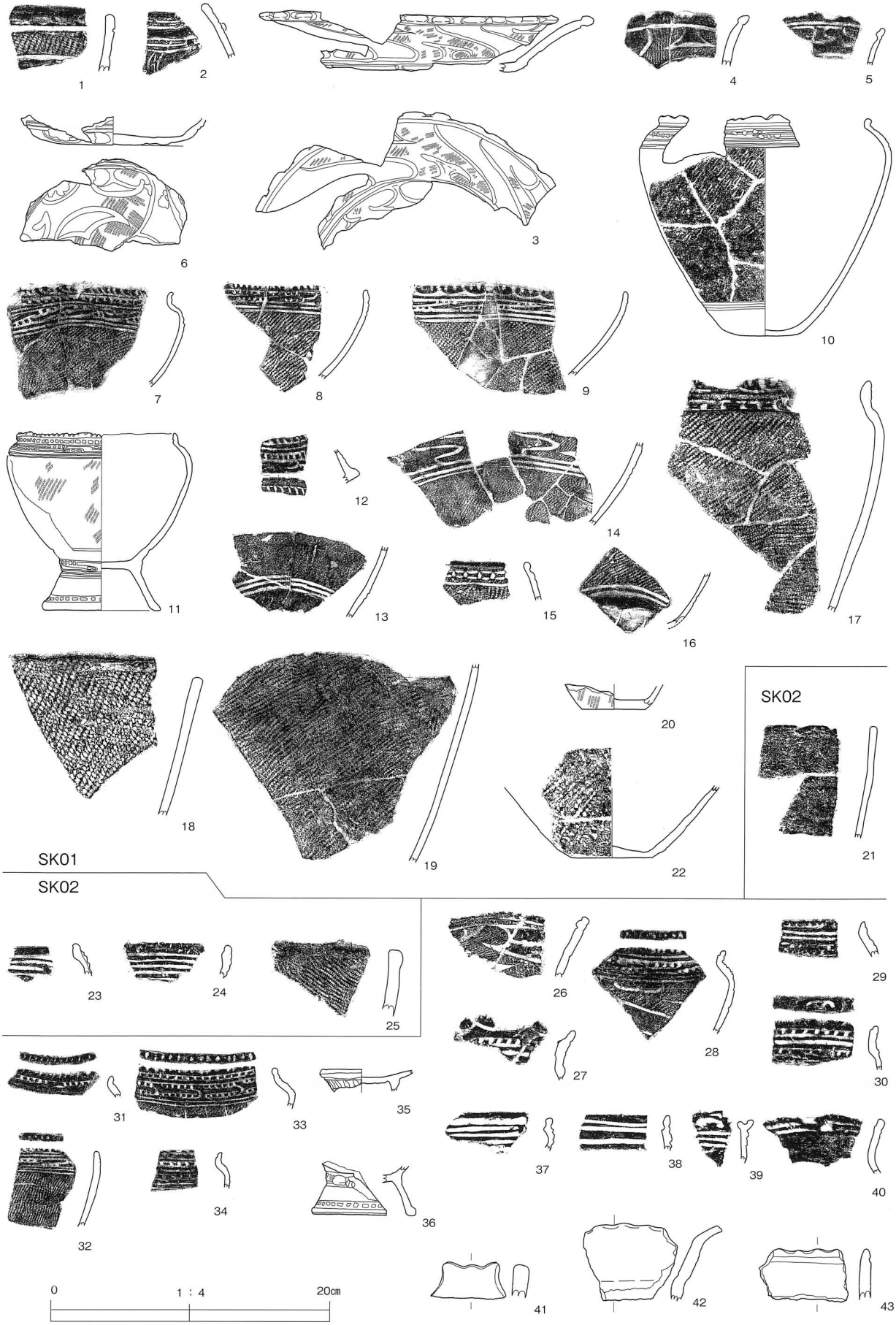
今回の調査では縄文時代晩期と考えられる土坑４基、時期不明の土坑１基、溝１条を検出した。調査区内において竪穴住居などの遺構はみられなかったが、縄文時代晩期の土器を包含する土坑の検出は、周辺にこの時期の集落が存在することを示唆している。

また、調査区内に点在する巨大な花崗岩転石群の中には石切作業がおこなわれた形跡を残すものが

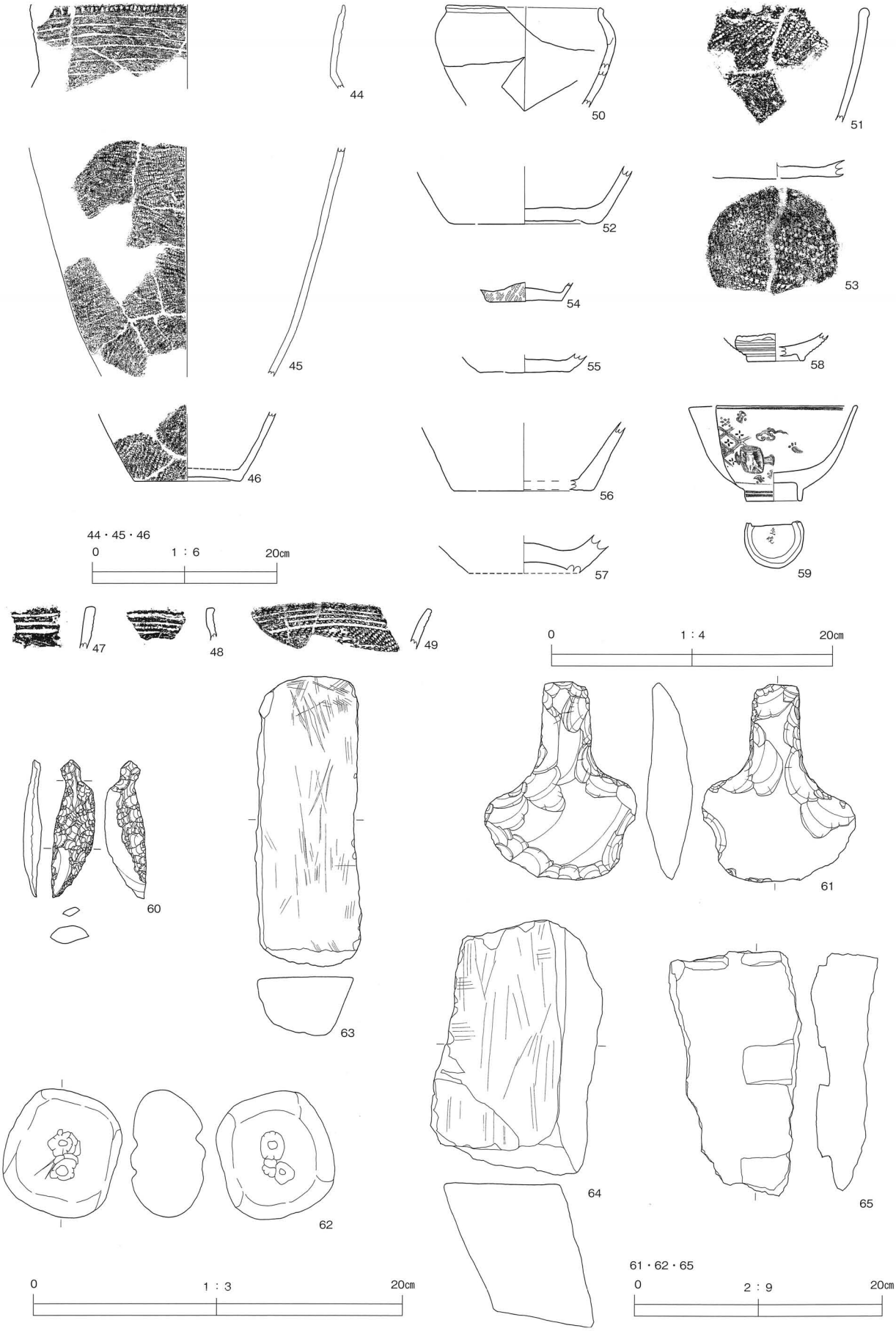
（2）落合２区Ⅰ遺跡



第６図　SK01～05



第７図　出土遺物（１）


44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
44・45・46
0
1：6
20cm
0
1：4
20cm
0
1：3
20cm
61・62・65
0
2：9
20cm

第８図　出土遺物（２）

第１表　遺物観察表

N.O.	種別	器種	部位	出土遺構・位置	時期	調整・特徴・備考
1	縄文土器	深鉢	口縁	SK01 ・上 層	後期 中	沈線区画の磨消縄文　雲母
2	縄文土器	鉢	胴部	SK01 ・上 層	後期 末	沈線　瘤付(剥離)　雲母
3	縄文土器	浅鉢	口縁～底部	SK01 ・上 層	晩期 中	磨消縄文　雲形文
4	縄文土器	浅鉢	口縁	SK01 ・上 層	晩期 中	磨消縄文　雲形文
5	縄文土器	浅鉢	口縁	SK01 ・上 層	晩期 中	磨消縄文　雲形文
6	縄文土器	浅鉢	底部	SK01 ・上 層	晩期 中	磨消縄文　雲形文　平行沈線
7	縄文土器	鉢	口縁	SK01 ・上 層	晩期 中	口縁突起　羊歯状文
8	縄文土器	鉢	口縁	SK01 ・上 層	晩期 中	口唇刻目　羊歯状文
9	縄文土器	鉢	口縁	SK01 ・上～下層	晩期 中	口縁突起　羊歯状文
10	縄文土器	深鉢	口縁～底部	SK01 ・上～下層	晩期 中	口縁突起　羊歯状文　下位沈線１
11	縄文土器	台付鉢	口縁～底部	SK01 ・上 層	晩期 中	口縁突起　羊歯状文　台部刺突列(遺構外接合)
12	縄文土器	注口？	体部	SK01 ・上 層	晩期 中	羊歯状文
13	縄文土器	鉢	体部	SK01 ・上 層	晩期 末	平行沈線
14	縄文土器	鉢	体部	SK01 ・上 層	晩期 末	平行沈線　変形工字文
15	縄文土器	鉢	口縁	SK01 ・上 層	晩期	平行沈線　刺突列
16	縄文土器	鉢	底部	SK01 ・上 層	晩期 末	平行沈線
17	縄文土器	深鉢	口縁～体部	SK01 ・上 層	晩期	粗製　口縁突起　刺突列
18	縄文土器	深鉢	口縁	SK01 ・上 層	晩期	粗製　LR　縄文
19	縄文土器	深鉢	体部	SK01 ・上 層	晩期	粗製　LR　縄文
20	縄文土器	深鉢	底部	SK01 ・上 層	晩期	粗製
21	縄文土器	深鉢	口縁～体部	SK02 ・下 層	晩期	粗製　RL　縄文(細)
22	縄文土器	深鉢	底部	SK01 ・上～下層	晩期	粗製　LR　縄文
23	縄文土器	鉢	口縁	SK02 ・埋 土	晩期 末	平行沈線　工字文
24	縄文土器	鉢	口縁	SK02 ・埋 土	晩期 末	平行沈線
25	縄文土器	深鉢	口縁	SK02 ・埋 土	晩期	粗製　RL　縄文
26	縄文土器	深鉢	口縁	北西 ・黒色土層	晩期 中	磨消縄文　雲形文
27	縄文土器	深鉢	口縁	南東 ・検出面	晩期 中	口縁突起　羊歯状文？
28	縄文土器	深	口縁	中央 ・試掘埋土	晩期 中	口唇刻目　羊歯状文　煤痕
29	縄文土器	鉢	口縁	中央 ・試掘埋土	晩期 中	口唇刻目　羊歯状文
30	縄文土器	鉢	口縁	南東 ・検出面	晩期 中	刺突列　羊歯状文
31	縄文土器	鉢	口縁	中央 ・試掘埋土	晩期 中	羊歯状文　(摩滅)
32	縄文土器	鉢	口縁	中央 ・試掘埋土	晩期 中	口唇刻目　羊歯状文
33	縄文土器	鉢	口縁	中央 ・試掘埋土	晩期 中	口唇刻目　羊歯状文
34	縄文土器	鉢	口縁	中南 ・試掘埋土	晩期 中	口唇刻目　羊歯状文
35	縄文土器	台付鉢	底部	北東 ・検出面	晩期 中	台部刺突列
36	縄文土器	台付鉢	台	中東 ・試掘埋土	晩期 中	台部刺突列
37	縄文土器	鉢	口縁	中北 ・検出面	晩期 末	平行沈線　工字文
38	縄文土器	鉢	口縁	中北 ・検出面	晩期 末	平行沈線
39	縄文土器	鉢	口縁	中北 ・検出面	晩期 末	口縁突起　平行沈線
40	縄文土器	壺	口縁	南東 ・表土層	晩期 末	平行沈線　工字文
41	縄文土器	深鉢	口縁	南東 ・表土層	後期 ？	口縁突起
42	縄文土器	深鉢	口縁	北西 ・表土層	晩期 末	波状口縁　無文
43	縄文土器	深鉢	口縁	南東 ・表土層	晩期 末	波状口縁　無文
44	縄文土器	深鉢	口縁	北西 ・表土層	晩期 末	口唇刻目　平行沈線(多条)
45	縄文土器	深鉢	体部	中央 ・試掘埋土	晩期 末	LR　縄文　44・46と同一個体
46	縄文土器	深鉢	底部	中央 ・試掘埋土	晩期 末	LR　縄文
47	縄文土器	鉢	口縁	南東 ・表土層	晩期 ？	平行沈線
48	縄文土器	鉢	口縁	中南 ・表土層	晩期 ？	平行沈線　沈線内細かな刺突列
49	縄文土器	鉢	口縁	中北 ・検出面	晩期 ？	縄文　平行沈線　刺突
50	縄文土器	鉢	口縁～体部	北東 ・表土層	晩期 ？	無文　口縁に緩やかな括れ
51	縄文土器	深鉢	口縁	北西 ・検出面	晩期	粗製　LR　縄文　口縁突起
52	縄文土器	深鉢	底部	北西 ・黒色土層	晩期	粗製　縄文(摩滅)
53	縄文土器	深鉢	底部	南東 ・表土層	晩期	粗製　網代痕
54	縄文土器	深鉢	底部	中北 ・検出面	晩期	粗製　LR　縄文
55	縄文土器	深鉢	底部	北西 ・検出面	晩期	粗製
56	縄文土器	深鉢	底部	北西 ・検出面	晩期	粗製
57	須恵器	壺	底部	中北 ・検出面	９C	剥離
58	磁器	碗	底部	中北 ・検出面	18C	大堀相馬
59	磁器	碗	口縁～底部	北西 ・表土層	19C～	台焼　(花巻)
60	石器	石匙	長形	中央 ・検出面	縄文	長 7.5cm、幅 2.3cm、厚 1.0cm　頁岩
61	石器	石鏃		調査区　北西	縄文	長 16.1cm、幅 12.8cm、厚 3.6cm　凝灰岩
62	石器	凹石		調査区　北西	縄文	長 10.4cm、幅 9.5cm、厚 6.1cm　凝灰岩
63	砥石	長形		中央　南		長 15.8cm、幅 5.7cm、厚 3.2cm
64	砥石	方形		中央　北		長 13.8cm、幅 9.2cm、厚 7.8cm
65	石切跡	鑿痕	一部	石99	17C～	石切場　サンプル　花崗岩

いくつか存在する。文献史料によると、「御城築直し御縄張は彦九郎政直公御代より北松齋勤中のよし。但切石等は五大堂小山田辺より取候よし、・・・（以下省略）」とされている。この史料は『郷村古実見聞記』であるが、同様の記述は安政七年（1860）に書かれた『花巻古事記』や18世紀末頃に書かれた『石鳥谷町邦内郷村志』でもみられる。このことから、北上川東岸に位置する花巻市東和町小山田地区や花巻市五大堂地区より花巻城の石垣に用いられた石材がもたらされたことがわかる。この事実を考えると、川船によって花巻城まで石材が運ばれたことが想像できる。この近世初頭におこなわれた花巻城修築以降の改修等は不明であるが、その後も石垣を改修している可能性も考えられよう。今回調査した落合地区も同様の花崗岩が点在する土地であるため、南部氏指揮下この遺跡で花巻城の石垣に用いるための石切作業がおこなわれた可能性も考えられる。また、遺跡は猿ヶ石川に近く、船で石材を運ぶことも容易であると推測される。花巻城の石垣普請に関する考古学的な資料が少ないため、今回の調査でこのような石切場の一つが想定されることは大変有意義な成果であると考えられる。

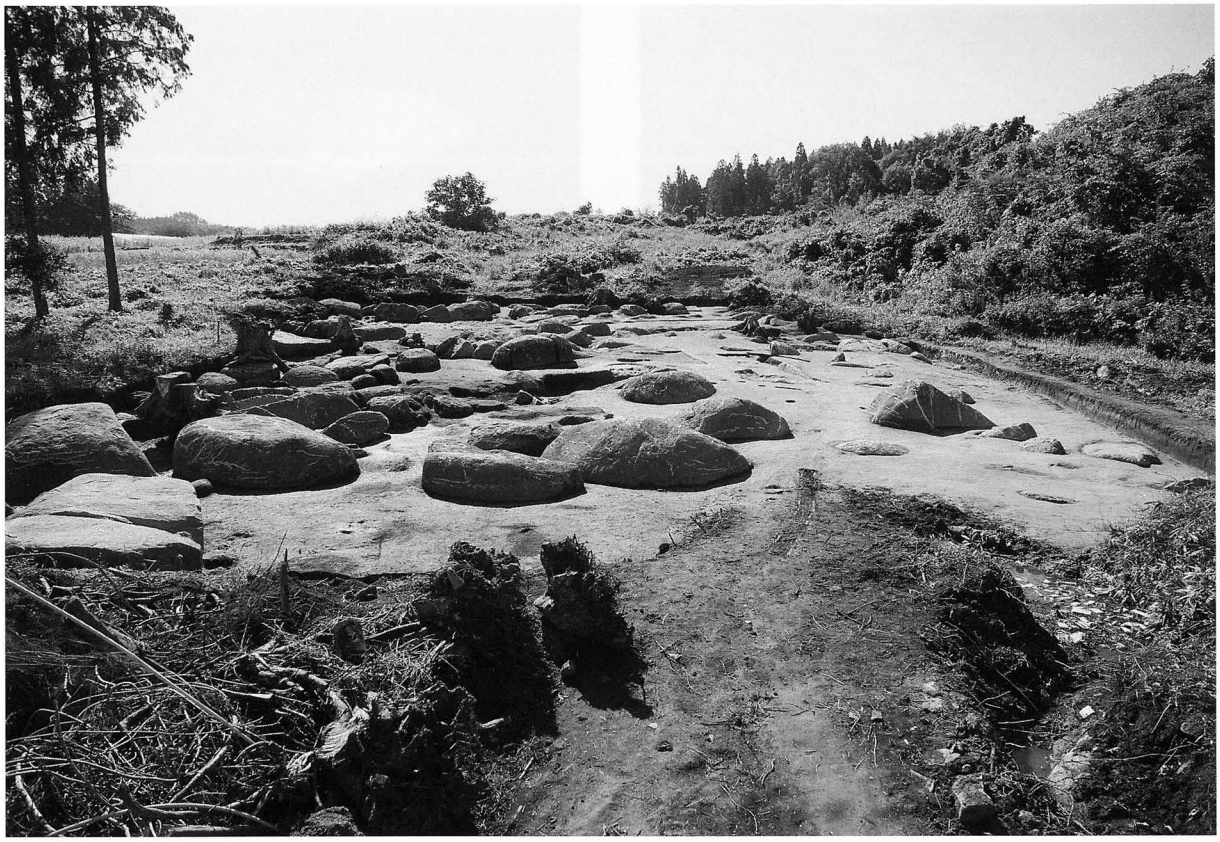
なお、落合２区Ⅰ遺跡の平成21年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

<引用・参考文献>

花巻市　『花巻市史』第二巻
花巻市教育委員会　1997　『花巻城跡－平成４年度・５年度発掘調査報告書』

調査前現況

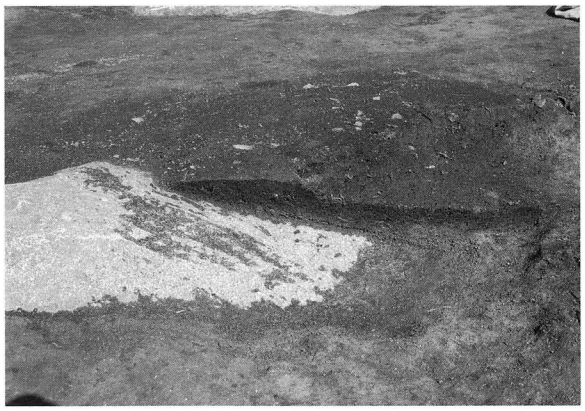
写真図版１　調査前現況



調査区全景

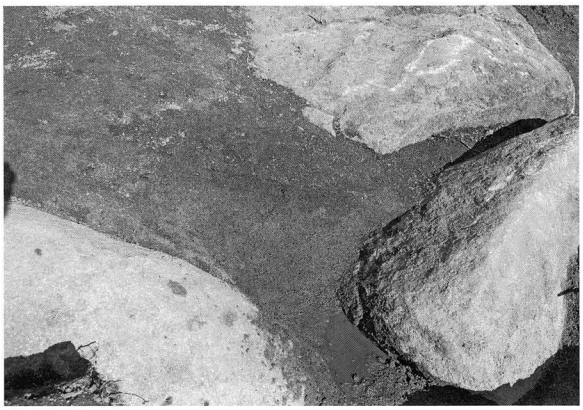
基本層序断面

写真図版２　調査区全景、基本層序断面



SK01断面

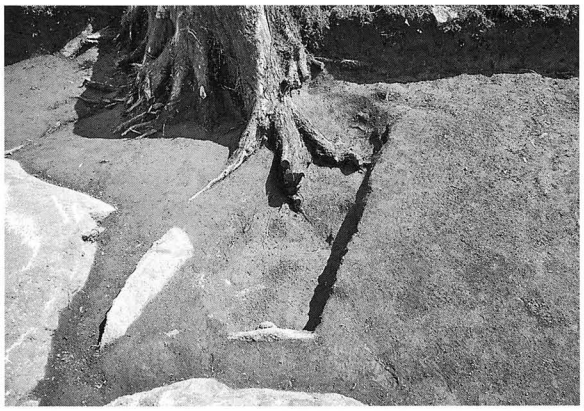
SK01完掘



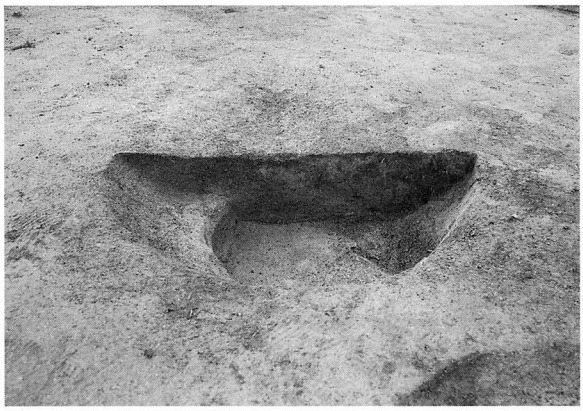
SK02断面

SK02完掘

SK03断面



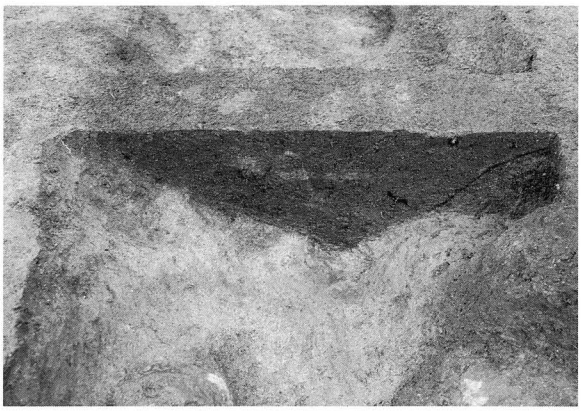
SK03完掘



SK04断面

SK04完掘

写真図版３　SK01～04



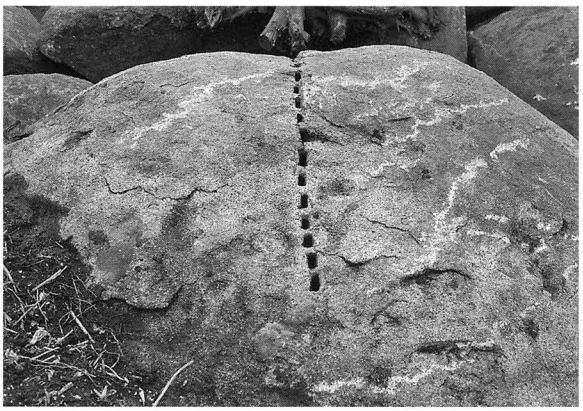
SK05断面

SK05完掘

SD01断面

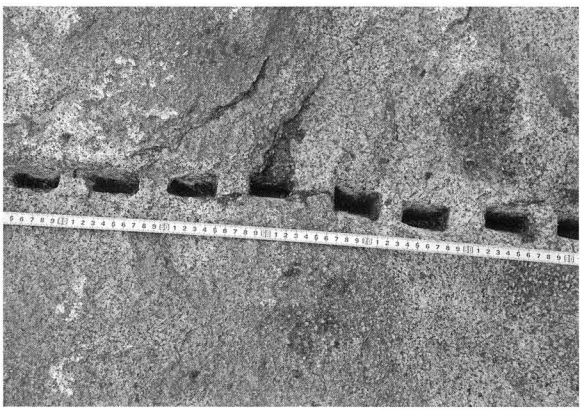
SD01完掘

転石80



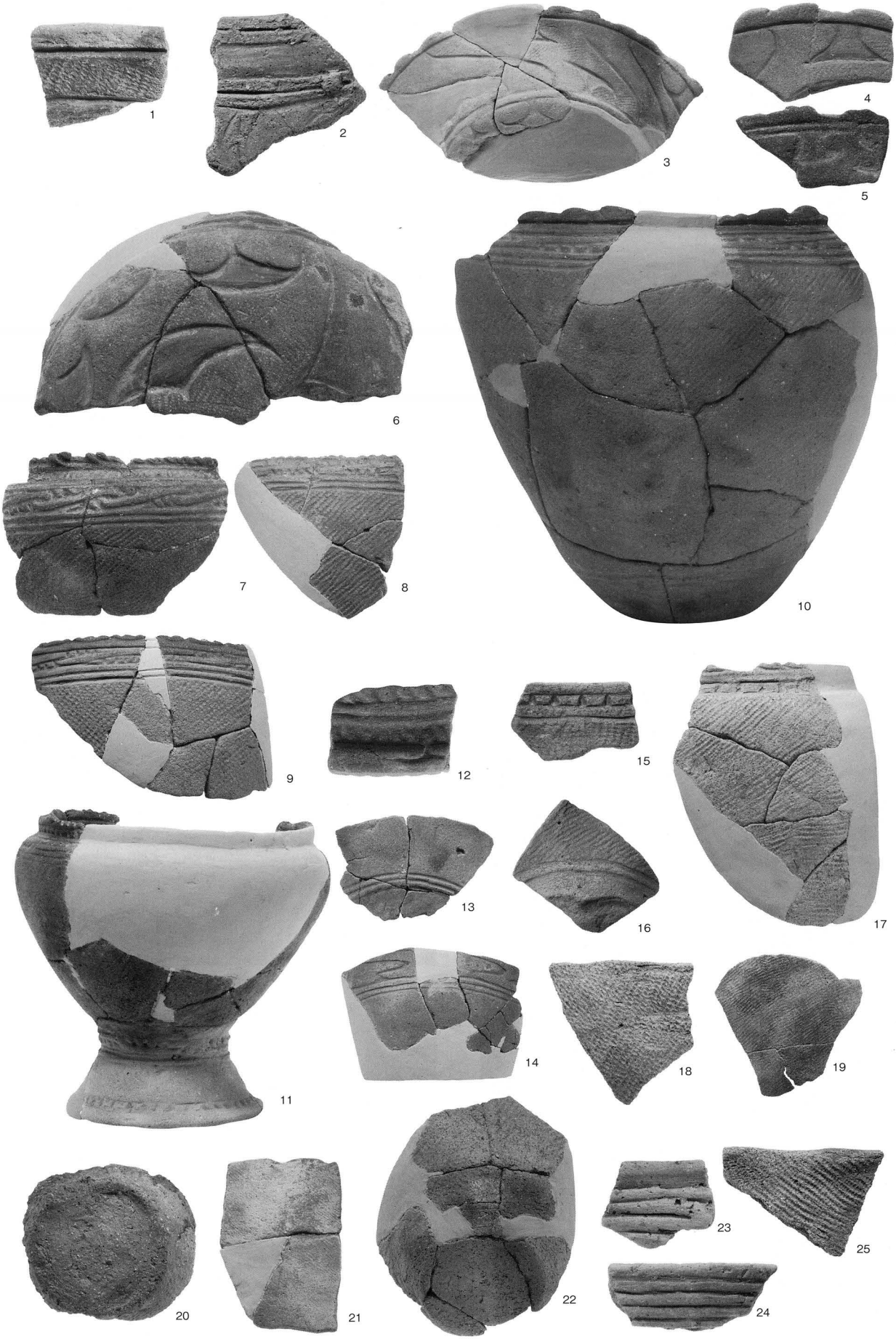
転石199

転石162

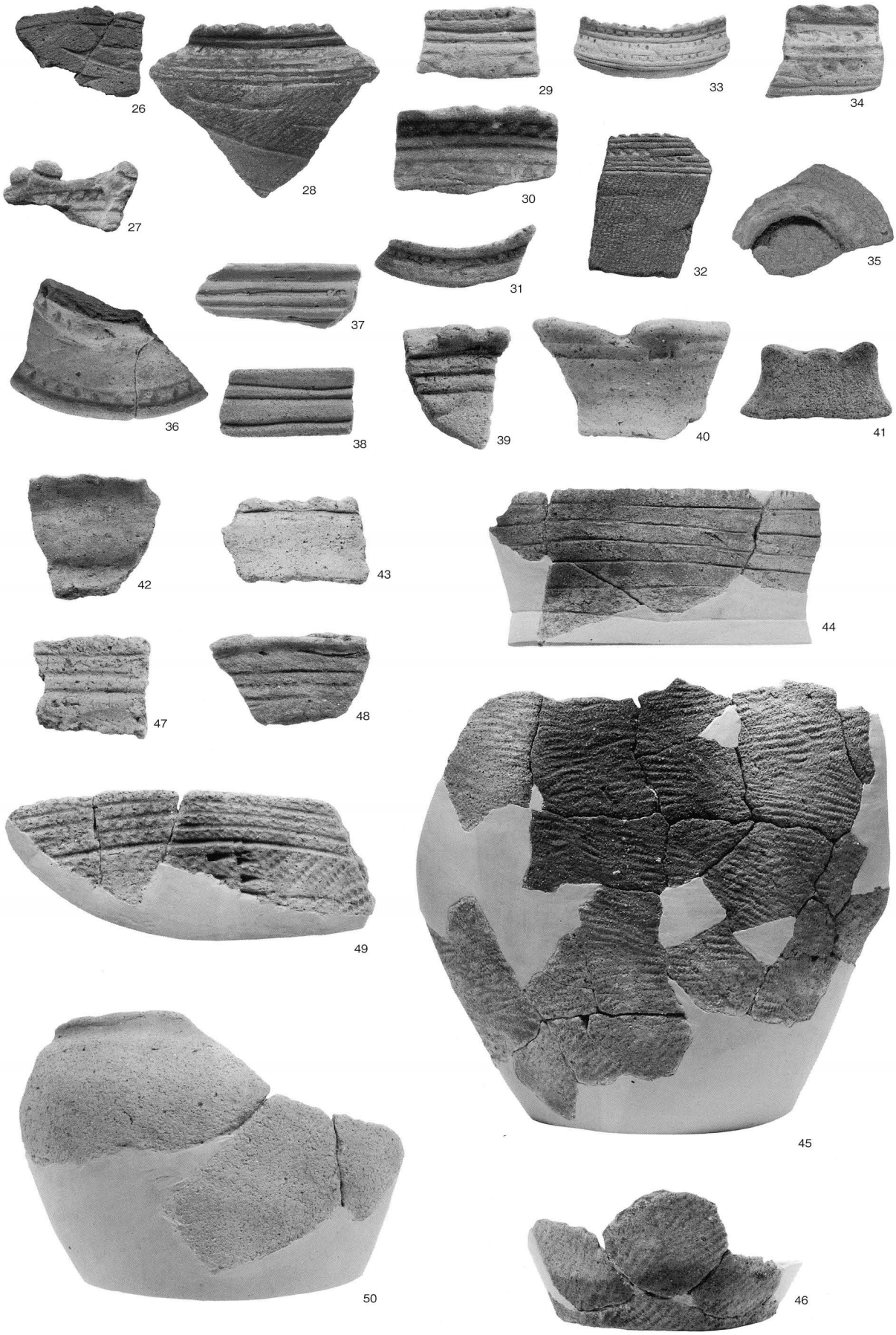


転石199（拡大）

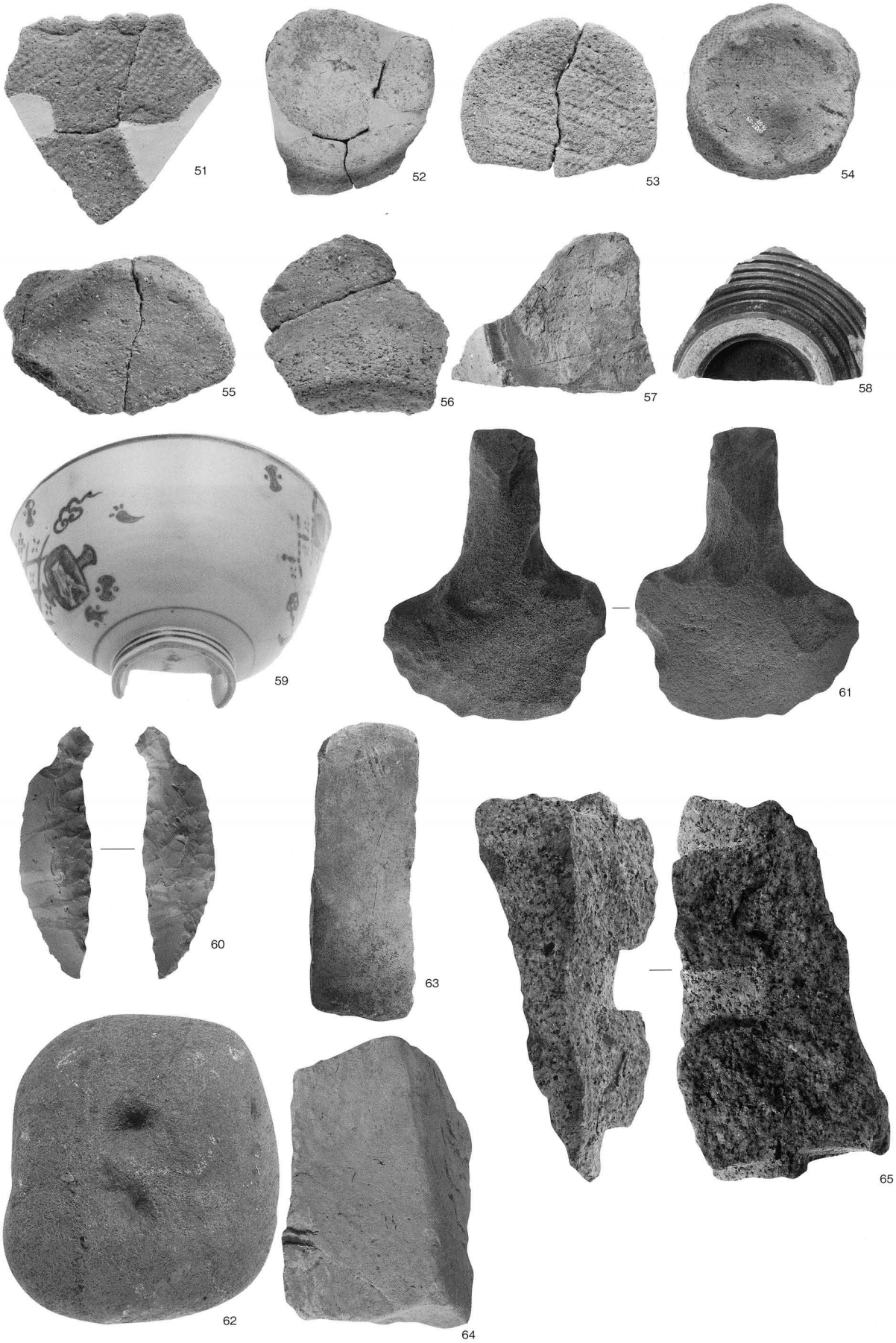
写真図版４　SK05、SD01、転石80・162・199



写真図版５　出土遺物（１）


26
28
29
33
34
27
30
32
35
31
37
36
38
39
40
41
42
43
44
47
48
49
45
50
46

写真図版６　出土遺物（２）



写真図版７　出土遺物（３）

（3）立花館遺跡（たちばなだて）

所在地	北上市立花第５地割108-４ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	ME66-1263・TBD-09
委託者	国土交通省東北整備局岩手河川国道事務所	**調査対象面積**	1,250㎡
事業名	北上川中流部治水対策事業（立花地区）	**調査終了面積**	1,250㎡
発掘調査期間	平成21年９月１日～９月30日	**調査担当者**	北村忠昭・米田　寛

１　発掘調査に至る経過

立花館遺跡は、「北上川中流部治水対策事業（立花地区）」の築堤盛土工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

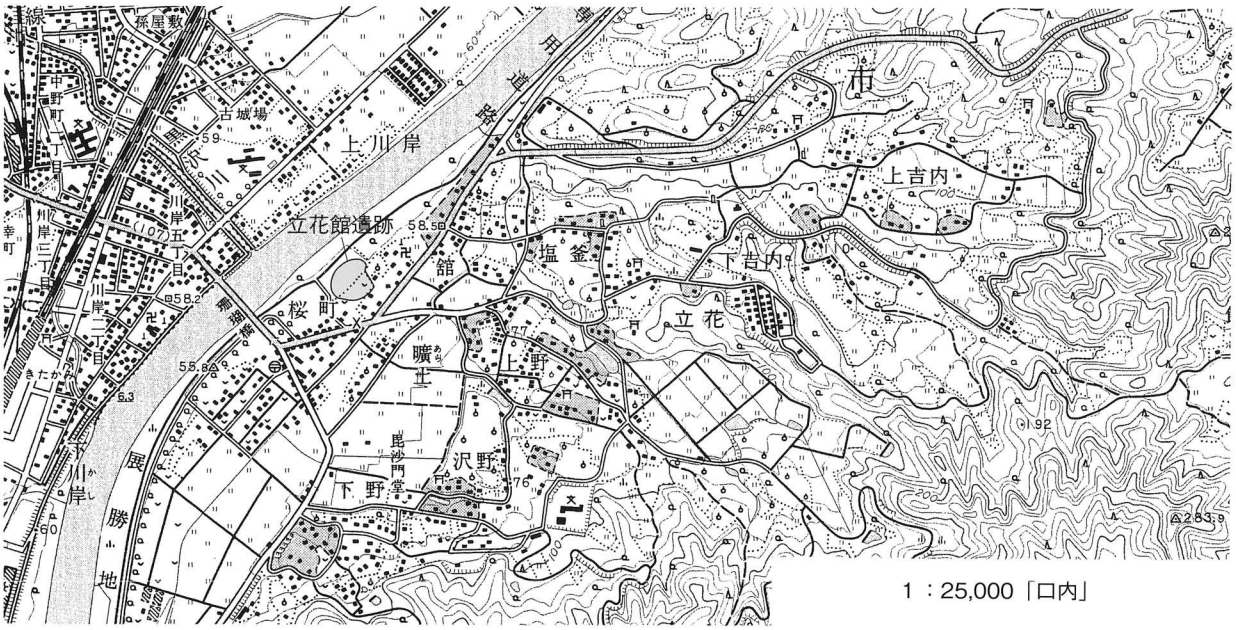
北上川は、岩手県岩手郡岩手町御堂にその源を発し、幾多の大小支川を合わせて岩手県を南に縦断し、岩手・宮城県境の狭窄部を経て、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ、幹線流路延長249kmの一級河川である。事業対象地域である「立花地区」は、北上川上流左岸76km付近に位置し、平成14年７月洪水及び平成19年９月洪水により、僅か５年間で２度も甚大な浸水被害が発生している。背後地には住家等の資産が集中していることから早期の治水対策が必要となっているため、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手河川国道事務所から平成21年４月13日付国東整岩工一13号「北上川中流部治水対策事業（立花地区）に係る埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年５月７日に試掘調査を実施し、工事に着手するには立花館遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成21年５月11日付教生第258号「北上川中流部治水対策事業予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当事務所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事務所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成21年８月31日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）



第１図　遺跡位置図

第２図　調査区位置図

２　遺跡の位置と立地

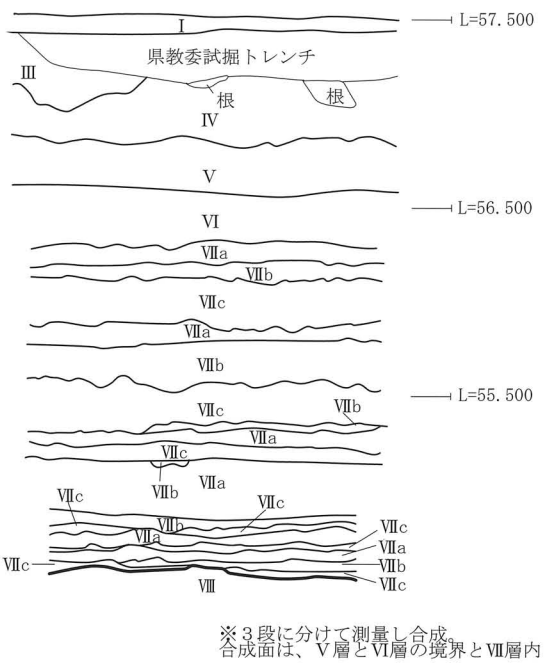
北上川東岸の氾濫平野上に位置する（第１図）。本遺跡周辺では、北に館Ⅳ遺跡、南に立花南遺跡などで、古代集落跡が確認されている。現況は市営ラグビー場、桜並木となっていたが、ラグビー場整備以前は、雑木林と畑地が広がっていた。その状況は1948年撮影の米軍空中写真でも確認できる（国土交通省 国土地理院ホームページhttp://archive.gsi.go.jp/airphoto/「国土変遷アーカイブス 空中写真閲覧」を参照）。なお、本地域は、北上川との比高差が少なく、北上川の洪水被害をたびたび受ける。

３　基本層序

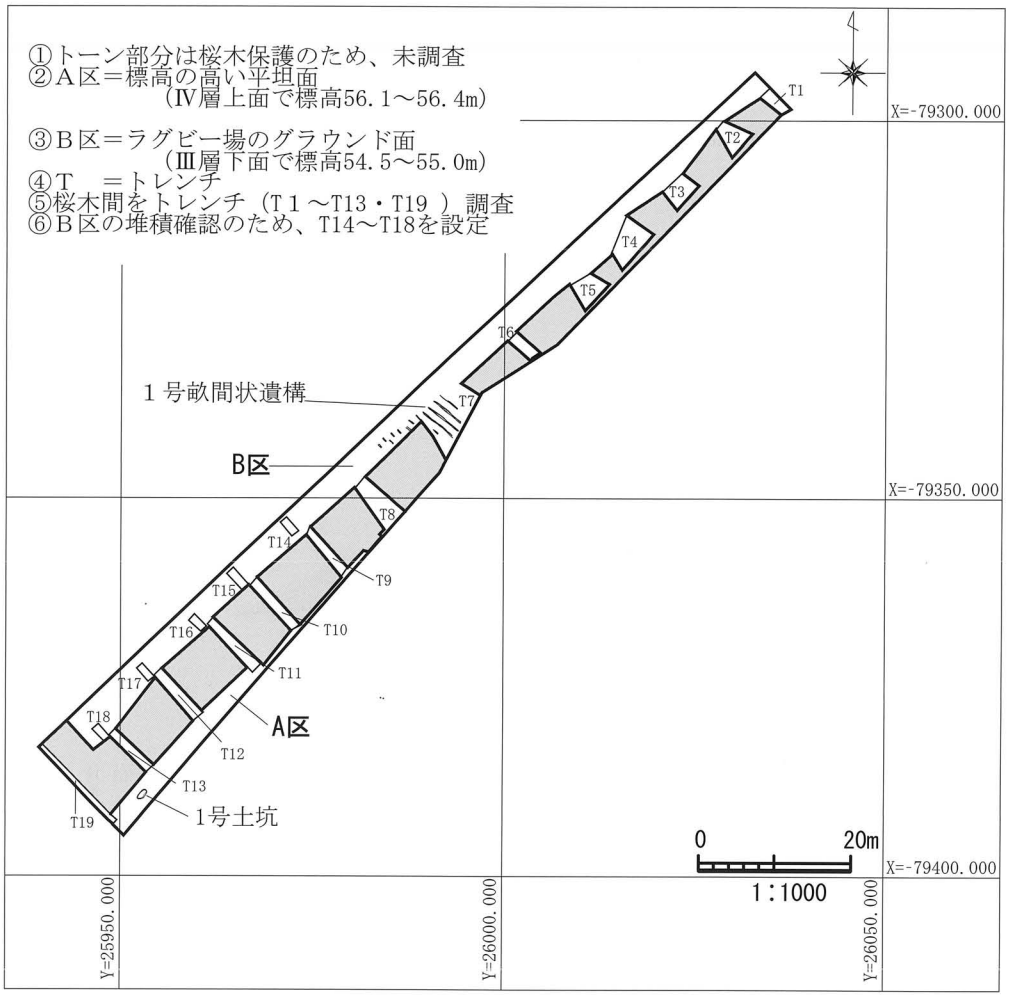
堆積層を８層（Ⅰ～Ⅷ層）に大別し、さらに一部の堆積層については細分した。調査区全体にⅠ～Ⅲ層の堆積が認められる。斜面地ではⅢ層の下にⅦ層が見られ、Ⅳ～Ⅵ層が確認できなかった。Ⅰ層は盛土、Ⅱ層は耕作土で、調査区北側では薄く、もしくは見られない。Ⅲ層は耕作の痕跡が見られる。Ⅲａ～Ⅲｄ層まで細分できたが、堆積の時期については判明していない。Ⅲ層はラグビー場造成前の表土層で、遺物を包含する。主に調査区の南側で細分可能な堆積状況であった。Ⅳ層は洪水砂層、Ⅴ層は暗褐色粘土層で、遺物を包含しない。Ⅵ層は５～10cm大の礫を主体とする礫層である。

Ⅶ層は黄褐色砂層と暗褐色粘土層の互層を一括した。Ⅷ層は礫層である。Ⅳ層～Ⅷ層は北上川に向かって、緩やかに傾斜して堆積している。

Ⅰ　層　　暗褐色土（盛土）
Ⅱａ層　　にぶい黄褐色砂層（耕作土）
Ⅱｂ層　　褐色砂層（耕作土）
Ⅲ　層　　暗褐色土層（遺物包含層）
　　ａ～ｄ層に細分可能である。
Ⅳ　層　　にぶい黄褐色砂層
Ⅴ　層　　暗褐色粘土層
Ⅵ　層　　暗褐色砂礫層
Ⅶ　層　　にぶい黄褐色砂と暗褐色～褐色粘土の互層を一括
Ⅷ　層　　暗褐色砂礫層



第３図　基本層序



第４図　遺構配置図

4　調査の概要

岩手県中世城館跡分布調査報告書（岩手県教育委員会1986）によれば、立花館は「範囲、遺構不明」とある。今回の調査では、中世に関わる遺構・遺物を確認できなかった。

（1）遺構

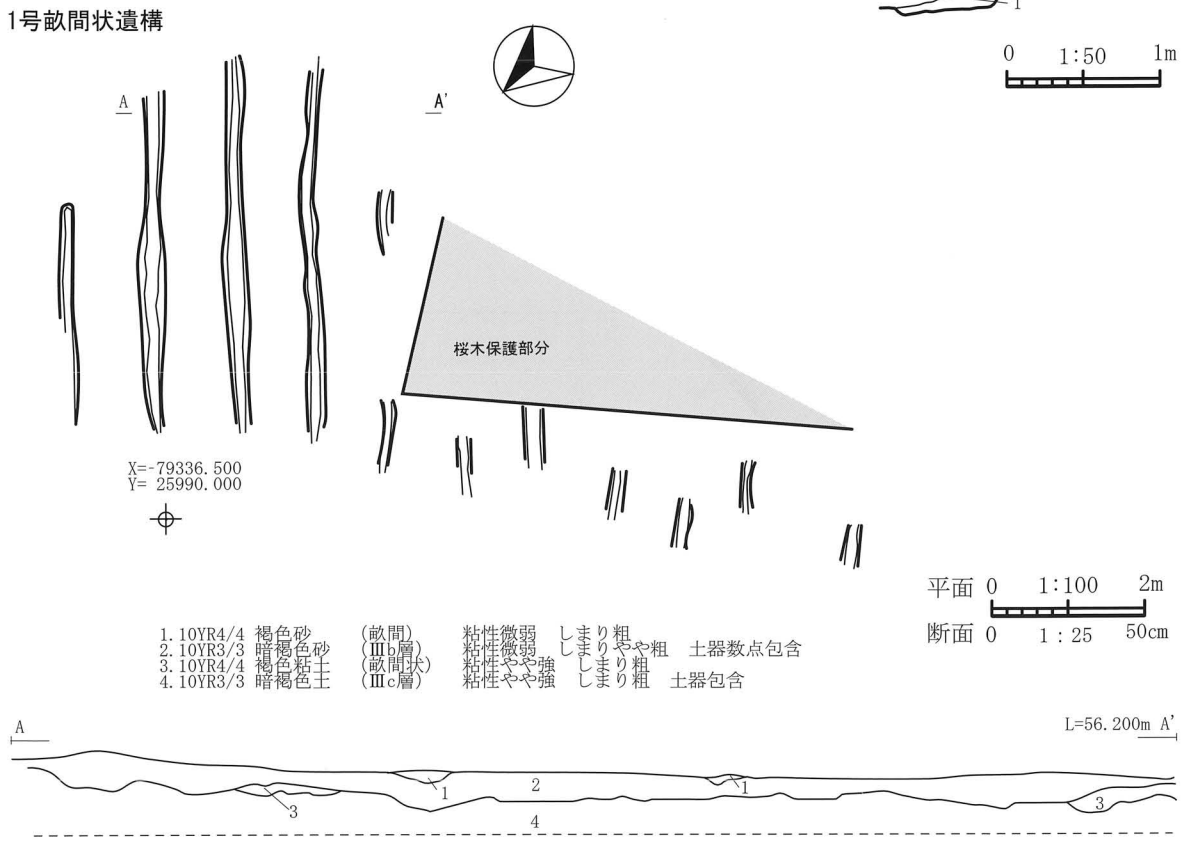
1号土坑

調査区平坦面のⅣ層上面で検出した。楕円形プランである。平面規模1.60×0.76m、深さ15cmを測る。底面標高56.150m、底面面積0.645㎡である。長軸はN-46度-E。堆積土は単層で、Ⅲ層に由来する。堆積土下部から、弥生時代前期の特徴を有する土偶と、蛤刃状磨製石斧が出土している。本遺構は弥生時代前期の所産と考えられる。本遺構を墓壙と捉えるならば、これらは副葬品と捉えることが可能である。一方、たまたま窪地に土偶と磨製石斧が流入したと解釈することも可能であり、積極的に墓壙と解釈するには根拠不足かもしれない。

なお、土偶は両腕、左乳房、両足先が欠損しており、磨製石斧は刃部に摩耗やエッジダメージが見られ、使用されたものであると考えられる。

1号畝間状遺構

時期不明の遺構である。Ⅲ層の堆積年代によって時期決定の判断が左右されるが、今回の調査では、決定できなかった。調査区東側に広がる畑地の延長線上にあることから、近現代の所産の可能性も当然考えられる。この場合、Ⅲ層内の遺物は客土や流れ込みによるものと判断される。Ⅲ層をⅢａ～Ⅲｄ層に細分したが、畝間状遺構はⅢｂ層～



第５図　検出遺構

Ⅲｃ層内で検出している。調査区内での面積約32㎡、芯芯間距離90～112㎝、深さ４～８㎝である。やや広めの芯芯間距離であり、根菜類の栽培が考えられる。現代では大根･ニンジン畑が候補である。

（２）遺物

縄文土器･弥生土器（中コンテナ1.5箱）、弥生時代の土偶２点、土師器･須恵器（中コンテナ0.5箱）、石鏃５点、尖頭器１点、石錐１点、剥片・砕片（小コンテナ0.5箱）、打製石斧１点、磨製石斧１点、スタンプ形石器１点などの礫石器、鉄滓１点、銅銭１点が出土した。主にⅢ層内から出土している。ほとんどの土器が磨耗しており、細片であった。廃棄場の様相を示す遺物出土状況であるが、廃棄時の位置を保持しているとは考えがたく、少なくともⅢ層上部の遺物は、耕作やラグビー場造成により流入出が繰り返されたと考えられる。

縄文土器は晩期末の粗製土器、弥生土器は前期の多重沈線で区画された鉢類が主体である。１号土坑出土の弥生時代の土偶（10）は、一見すると四足動物と見紛うが、動物形土製品のような丸みはなく、頭頂部が扁平で、体部も板状であることから土偶と考えられる。類似形態の土偶は、二戸市火行塚遺跡や北上市金附遺跡など、弥生時代前期の遺跡にみられる。背部に「６」の字状の文様が沈線で描かれていることが特徴のひとつである。頭部、両腕、左乳房、両足先は欠損している。平坦面Ⅲ層出土の土偶（11）は、右腕部と考えられる。当該期の土偶には、腹面側に沈線文様、背面側に円形刺突文の見られるものが多数ある。土師器・須恵器（17～25）は平安時代の所産である。24の坏は底面に穿孔がある。石鏃（26～30）は有茎鏃である。在地系頁岩を使用している。尖頭器（14）は頁岩製で、押圧剥離によって両面を調整加工している。両端部のうち、丁寧な加工が施されるほうを先端部とし、簡易な側縁調整によって器体整形されているほうを基部と認定した。１号土坑出土の磨製石斧（13）は安山岩製で、縄文時代に隆盛する擦切技術による形態、すなわち基部断面が長方形あるいは隅丸方形の形態ではなく、基部が円形もしくは楕円形の形態を呈する。刃部の研磨は正裏両面に施されている。刃部の破損は使用痕跡と考えられる。スタンプ形石器（16）は、安山岩製で、長方形に近い素材を分割し、分割面を打面として調整を施す。

５　まとめ

今回の調査は、立花館遺跡の西側縁辺部分が対象となった。Ⅲ層から土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器などが出土しているが、Ⅲ層の明確な堆積年代を把握するまでには至らなかった。調査区南部の平坦面（Ａ区）で遺物が比較的多く回収できた。ここではビニール製品を伴う現代の建物跡と、弥生時代の土坑を検出した。斜面地ではⅢ層内に畠の痕跡と考えられる畝間状遺構を確認した。畝間状遺構の時期を決定する明確な根拠はない。今回の調査では、縄文～古代の集落の西端にある廃棄領域の存在を明らかにした。したがって集落の主体は、その東側に広がっていると考えられる。

なお、立花館遺跡2009年度調査に関わる報告はこれをもってすべてとする。

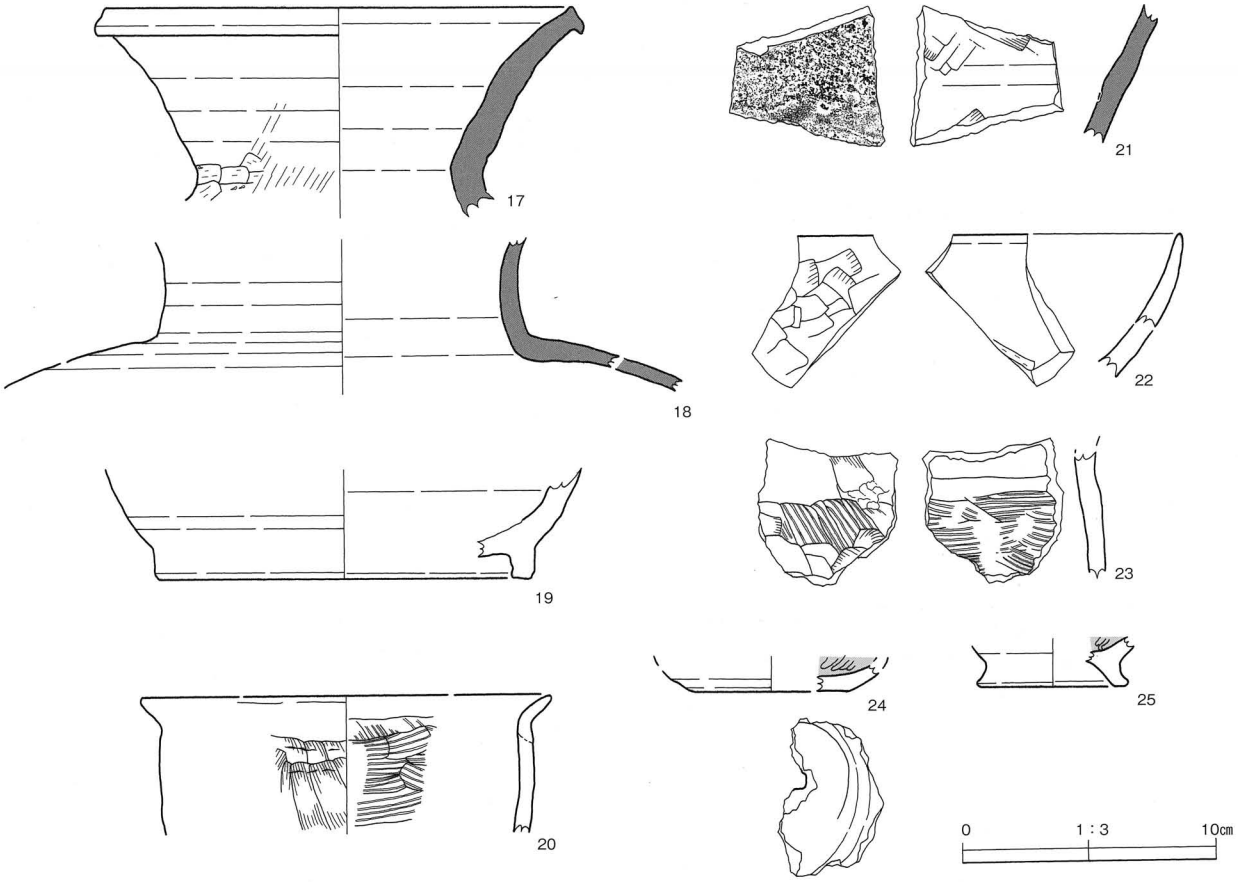
＜引用・参考文献＞

岩手県教育委員会　1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1981『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書　-上田面遺跡　大渕遺跡火行塚遺跡-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第23集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集

第6図　出土遺物（1）



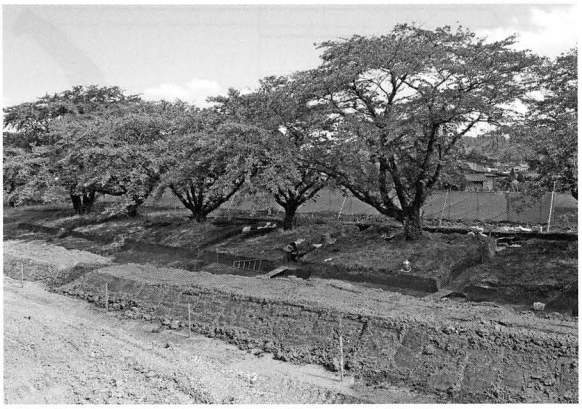
第７図　出土遺物（２）

第１表　遺物観察表

No	種別	器種・部位	位置・層位	調整・特徴・備考
1	土器	浅鉢・口縁	A区T13付近・Ⅲ層	沈線、突起、穿孔、 内外面ミガキ、口径15.5cm
2	土器	浅鉢？・口縁	A区T12－13間・Ⅲ層	多重沈線、口唇部突起、
3	土器	鉢類・口縁	A区T11－12間・Ⅲ層	多重沈線、波状口縁、内外面ミガキ
4	土器	鉢類・口縁	A区T11－12間・Ⅲ層	多重沈線
5	土器	浅鉢？・口縁	A区T13付近・Ⅲ層	多重沈線
6	土器	浅鉢？・胴部	A区T11－12間・Ⅲ層	多重沈線、ボタン状突起、縄文LR斜、磨消
7	土器	深鉢？・口縁	A区T13付近・Ⅲ層	口縁ヨコナデ、縄文LR斜、磨消
8	土器	浅鉢・底部	A区T11－12間・Ⅲ層	多重沈線、縄文LRヨコ、磨消、底径6cm
9	土器	浅鉢・底部	A区T11－12間・Ⅲ層	多重沈線、底径8cm
10	土製品	土偶・体部	1号土坑・堆積土	頭部・両腕・左乳房・両足先欠損、沈線、刺突、背部に６の字状沈線、長5.2cm、幅2.9cm、厚2.2cm、重量25.9g
11	土製品	土偶・右腕	A区T12－13間・Ⅲ層	沈線、刺突、長3.8cm、幅4.9cm、厚1.7cm、重量24.1g
12	石器	石錐	T13・Ⅱ層	長4.60cm、幅1.59cm、厚1.16cm、重量7.3g、メノウ製
13	石器	磨製石斧	1号土坑・堆積土	長8.91cm、幅4.93cm、厚3.37cm、重量234.1g、安山岩製
14	石器	尖頭器	T18・Ⅱ層	長5.89cm、幅2.61cm、厚0.71cm、重量13.5g、頁岩製
15	石器	打製石斧	T13・Ⅲ層	長11.08cm、幅4.66cm、厚2.26cm、重量190.2g、頁岩製
16	石器	スタンプ形石器	T12・Ⅲ層	長7.63cm、幅7.03cm、厚3.99cm、重量367.1g、安山岩製
17	須恵器	壺甕類・口縁	A区T14－15間・Ⅰ層	ロクロナデ、頸部ケズリ、口径18.35cm
18	須恵器	壺甕類・頸部	A区T11－12間・Ⅲ層	ロクロナデ
19	土師器	鉢類・底部	A区T13－15間・Ⅲ層	ロクロナデ、底径14.6cm
20	土師器	甕・口縁～胴部	A区T13付近・Ⅲ層	口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面ハケメ、口径16.0cm
21	須恵器	壺甕類・胴部	T11・Ⅲ層	外面タタキメ、自然釉、内面ロクロナデ、ナデ
22	土師器	埦坏類・口縁	A区T11－12間・Ⅲ層	外面ナデ
23	土師器	甕・胴部	A区T12－13間・Ⅲ層	口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面ハケメ
24	土師器	坏・底部	T12・Ⅲ層	ロクロナデ、内面黒色処理、内面ミガキ、底面穿孔、底径6cm
25	土師器	埦坏類・台部	T10・Ⅲ層	ロクロナデ、内面黒色処理、内面ミガキ、底径6cm
26	石器	石鏃	A区・Ⅲ層	有茎鏃、長3.95cm、幅1.79cm、厚1.20cm、重量5.5g、頁岩製
27	石器	石鏃	A区・Ⅲ層	有茎鏃、長2.33cm、幅1.20cm、厚0.51cm、重量1.1g、頁岩製
28	石器	石鏃	T13・Ⅲ層	有茎鏃、長2.07cm、幅1.05cm、厚0.39cm、重量0.7g、頁岩製
29	石器	石鏃	A区T13付近・Ⅲ層	有茎鏃、長2.89cm、幅1.02cm、厚0.41cm、重量1.0g、頁岩製
30	石器	石鏃	T19・Ⅲ層	有茎鏃、長1.65cm、幅0.73cm、厚0.39cm、重量0.9g、頁岩製

（3）立花館遺跡

調査前現況



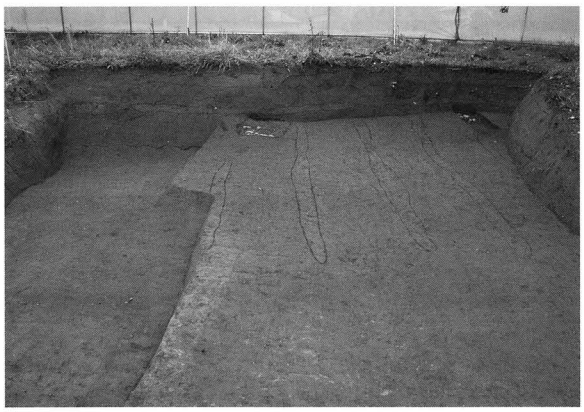
調査風景

基本層序（4号トレンチ東壁）

8号トレンチ南壁断面

7号トレンチ東壁断面

1号畝間状遺構断面



1号畝間状遺構検出状況（7号トレンチ内）

1号畝間状遺構近景（7号トレンチ内）

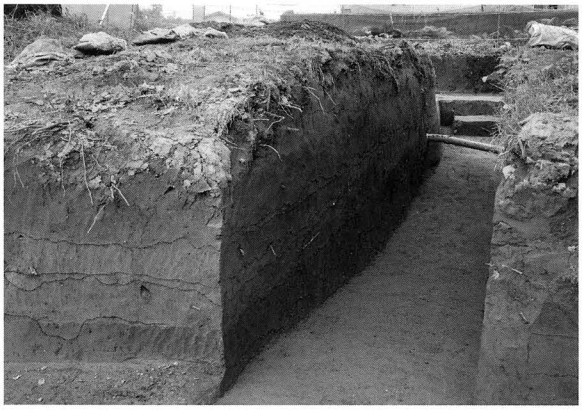
写真図版1　調査区、検出遺構（1）

平坦面完掘状況（南から）

1号土坑断面（南から）

1号土坑遺物出土状況（北から）

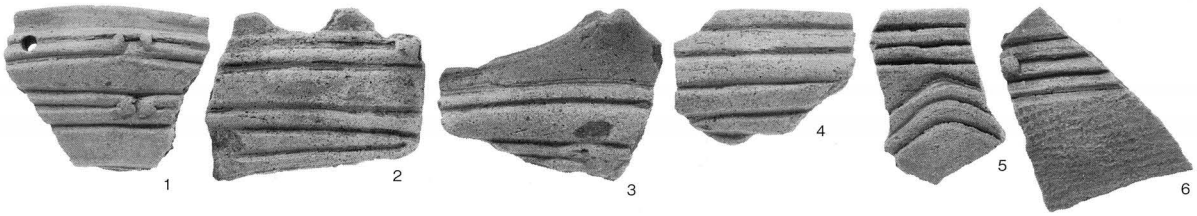
1号土坑全景（北から）



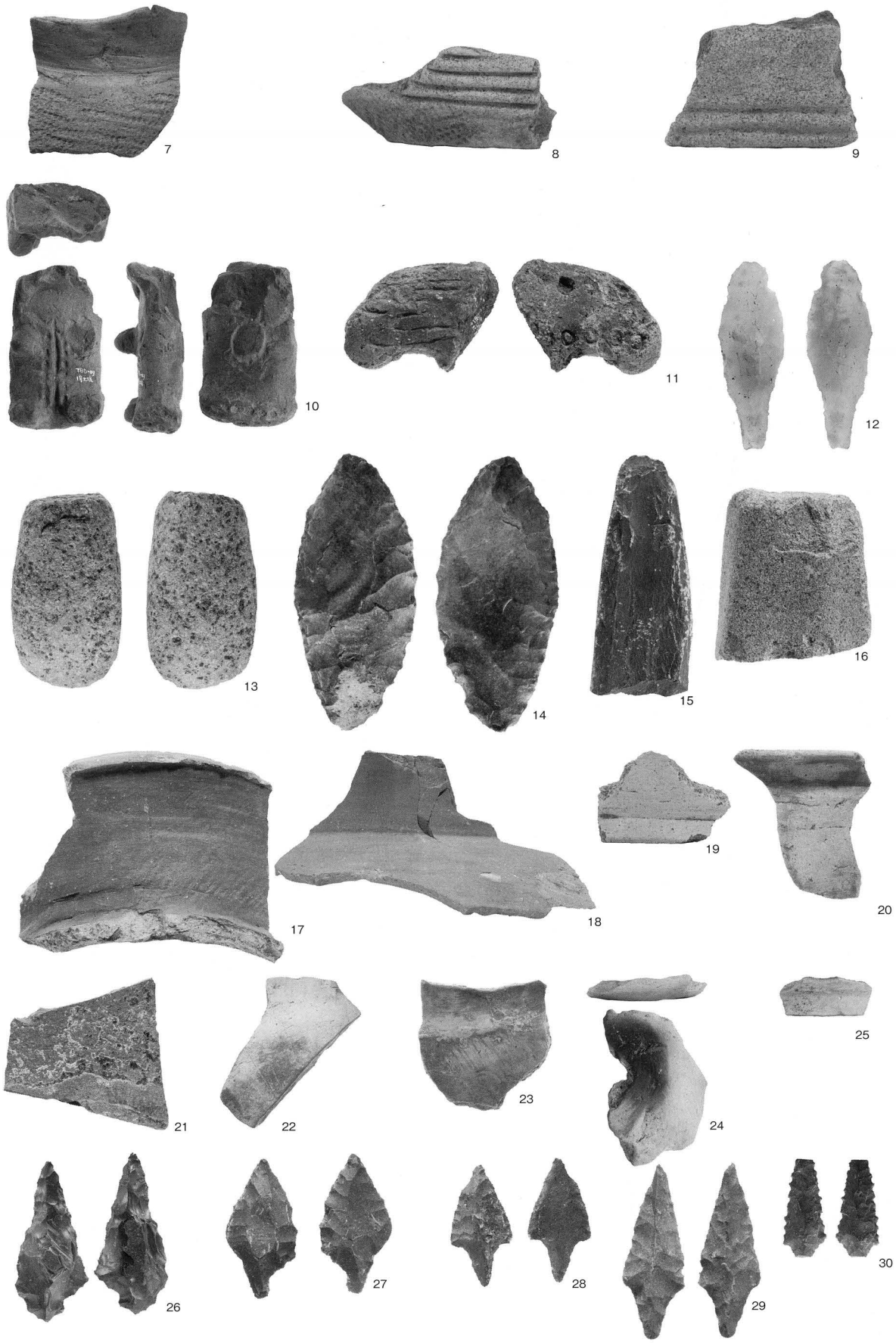
13号トレンチ北壁断面（西から）

13号トレンチ北壁断面東端部（南から）

写真図版２　検出遺構（２）



写真図版３　出土遺物（１）



写真図版４　出土遺物（２）

（4）平根原（ひらねはら）Ⅰ遺跡

所在地	奥州市胆沢区若柳字平根原５－１ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	NE31-1090・HNHⅠ-09
委託者	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所	**調査対象面積**	12,000㎡
事業名	胆沢ダム建設事業	**調査終了面積**	12,000㎡
発掘調査期間	平成21年９月１日～９月30日	**調査担当者**	濱田　宏・佐々木智久

１　調査に至る経過

平根原Ⅰ遺跡は、「胆沢ダム建設事業」に伴い、その事業区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

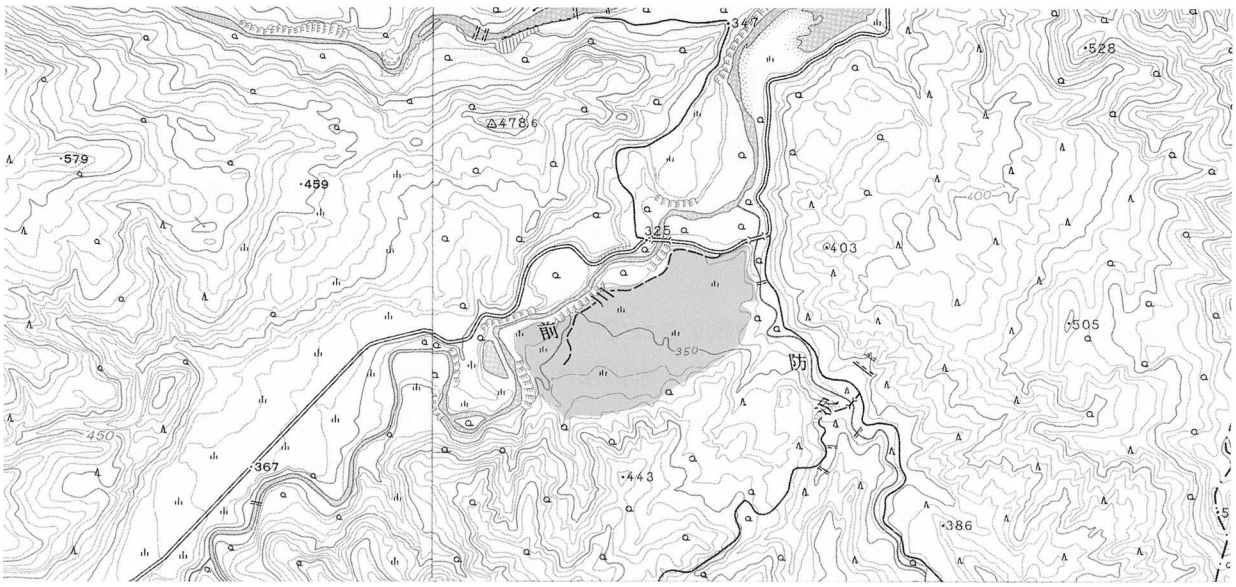
胆沢ダムは、北上川右支川胆沢川に建設中の堤体高132m、堤頂高723m、総貯水容量１億4,300万㎥の中央コア型ロックフィルダムであり、その目的に洪水調節・河川環境保全等のための流水確保・かんがい用水・水道用水・水力発電を有する多目的ダムである。

胆沢ダム建設事業は、平成２年５月11日に「胆沢ダムの建設に関する基本計画」が官報告示されて建設着手し、その後平成12年６月14日に基本計画変更が官報告示され、事業費及び工期改定を行い現在に至っている（当初工期：平成11年度→変更工期：平成25年度）。

埋蔵文化財の取り扱いについては、事業に先立ち昭和58年10月に建設省（現国土交通省）新石淵ダム調査事務所（昭和63年４月に胆沢ダム工事事務所に組織改正）から、ダム事業区域内における埋蔵文化財の有無を岩手県教育委員会に照会し、周知地区864,000㎡、可能性有地区490,000㎡を確認した。その後は、水没面積4,400,000㎡を含む事業区域内における埋蔵文化財の包蔵地について、毎年度、各工事の実施に先立って岩手県教育委員会との協議を行いながら、計画的に調査を実施してきているところである。

胆沢ダム建設事業に関する平根原Ⅰ遺跡の埋蔵文化財調査は、ダムの湛水により影響を受ける常時満水位以下の区域（約64,000㎡）を実施することとし、平成20年５月21日付け国東整胆調設第14-2号により、胆沢ダム工事事務所長から岩手県教育委員会に試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会が平成20年９月２日～５日の４日間にわたり試掘調査を実施した結果、調査区域東側に位置するＡ地区（常時満水位以下）では、埋蔵文化財は確認されなかったが、同じく常時満水位以下のＣ地区（調査区域西側）では、引き続き調査が必要な状況であった。



1：25,000石淵ダムほか

第１図　遺跡の位置

そのため、埋蔵文化財調査計画について、平成21年１月９日に岩手県教育委員会と協議し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託して発掘調査を実施することになったものである。

（国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所）

２　遺跡の位置と立地

遺跡は、奥州市胆沢総合支所の南南西およそ18㎞、石淵ダムの南西３㎞付近に位置し、北東方向に流れる前川によって形成された北西向きの段丘上に立地する。標高は337.0m～349.0mである。

本遺跡の周辺は、かつて開田されたが数年で放置され、現在ではほぼ全域が原野となっている。

３　基本土層

調査区は、高位面と低位面の大きく２つからなるが、その中間地点に設定したＴ６付近では、次のような土層が観察された。

Ⅰ層　黒褐色の現表土（層厚５～15㎝）　腐植土の発達が良くない。

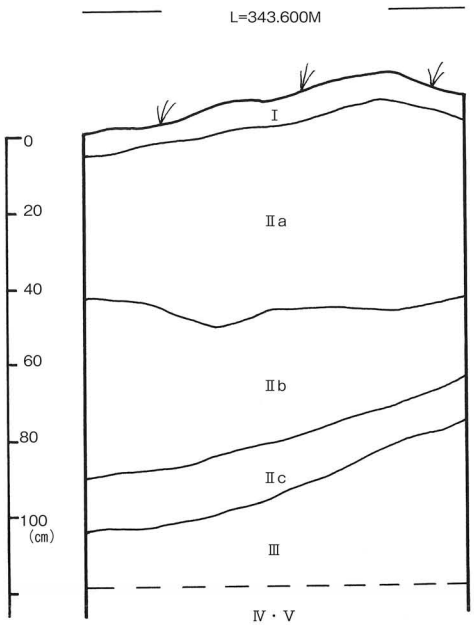
Ⅱ層　黒褐色と黄褐色土の混合土（層厚20～60㎝）開田時に凹部に入れられた盛土か。本層下の凹部には、泥炭層や灰色の粘土層がみられる箇所がある。

Ⅲ層　黄褐色土（層厚10㎝以上）　地山。層厚不明。

Ⅳ層　にぶい黄褐色砂層（層厚20～40㎝）

Ⅴ層　明黄褐色砂礫層（層厚20㎝以上）

なお、高位面では表土下に暗褐色土の漸移層を挟んで地山となる。



第２図　Ｔ６北壁　基本土層

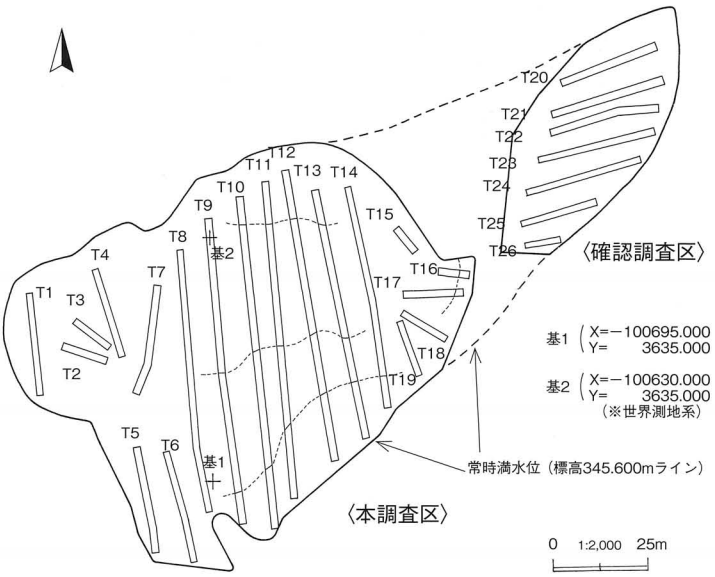
４　調査の概要

調査では、まず全体の状況を把握するため２ｍ幅のトレンチを26本（Ｔ１～26）設定し、重機によって掘削後人力で遺構の検出作業を行った。あわせて遺物の有無や土層の観察も行った。Ｔ１からＴ19については、新設されるダムの常時満水位（標高345.6ｍ）以下の本調査範囲に、Ｔ20からＴ26は、常時満水位以上の確認調査範囲に設定したものである。

トレンチの総長は950ｍを数え、調査面積の約15％を掘削したが、遺構・遺物は全く確認されなかった。各トレンチの土層の観察によって、今回の調査区は比較的新しい前川の氾濫箇所が主体となることが明らかとなり、このことから全域の表土掘削は不要との判断がなされ、調査は当初予定を一ヶ月ほど繰り上げて終了した。

調査区高位面には、今現在でも湿地が形成されている箇所があり、この周辺は居住するには適さない土地であったと考えられる。既述のとおり、水田耕作も長くは営まれなかったようであり、さらにさかのぼって昭和20年頃には人家が２軒ほどあったらしいが、これもまた２、３年で引き上げたとのことである。次ページの写真に見えるコンクリートの構造物は、前川の対岸に渡した吊り橋の橋脚とのことであるが、その人家があった際に使われていたものであろう。

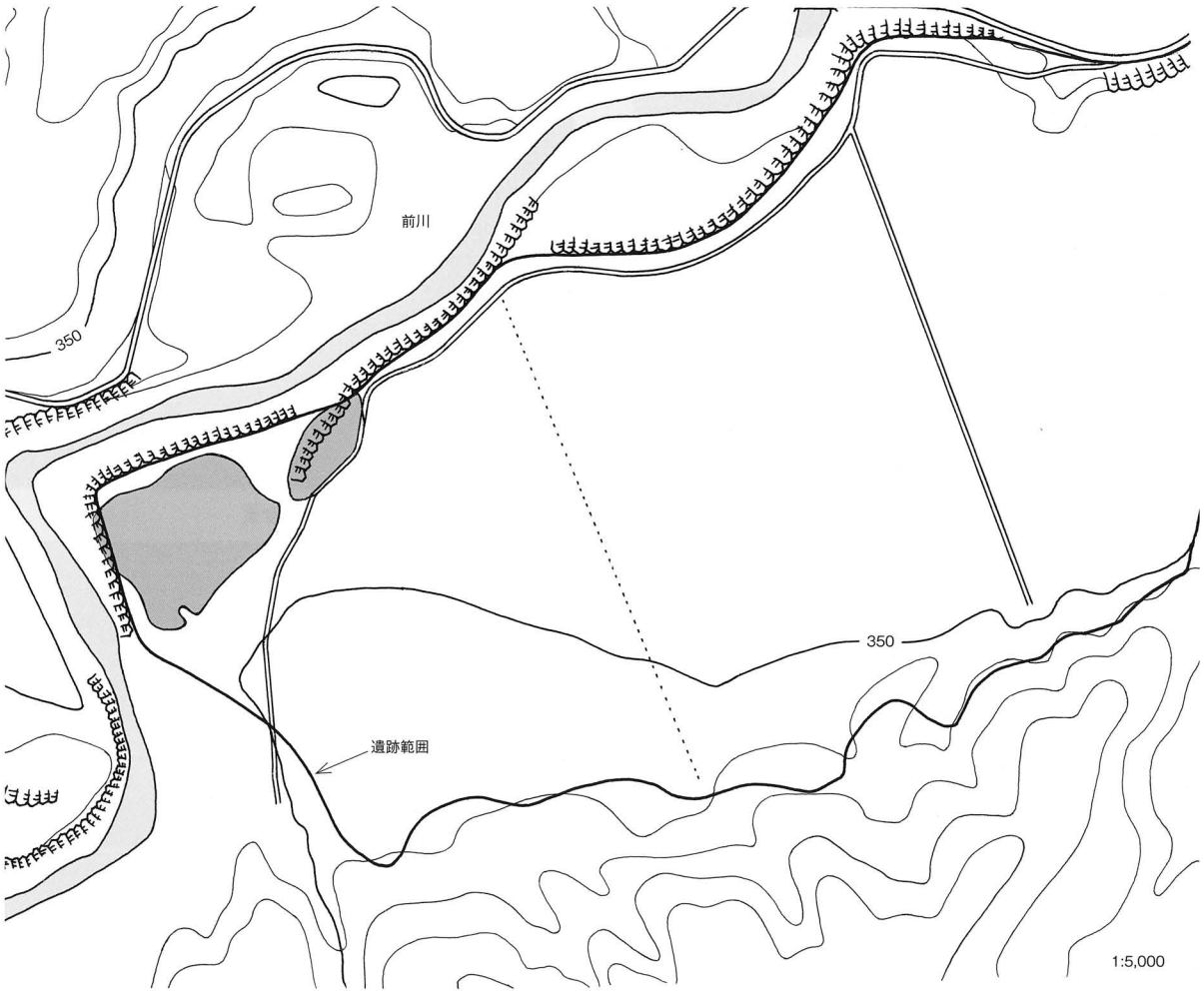
なお、平根原Ⅰ遺跡平成21年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。



第３図　トレンチ配置図

第１表　トレンチ観察表

トレンチ No	深さ(cm)	状　況
T1	20～40	氾濫１回
T2	50～200	盛土1.5m
T3	30～180	盛土1.2m
T4	70～210	氾濫１回
T5	20～40	表土下黒褐色土腐食層あり
T6	40～120	氾濫１回、上位砂層
T7	20～100	氾濫１回
T8	20～180	氾濫２回、下位砂層
T9	20～120	氾濫２回
T10	20～150	氾濫４回
T11	20～170	氾濫３回
T12	50～180	氾濫３回
T13	50～200以上	氾濫３回、盛土厚い、下位湧水
T14	100～200	氾濫３回、盛土厚い、下位湧水
T15	70～200以上	すべて盛土
T16	10～200以上	すべて盛土、壁湧水により崩落
T17	20～200以上	盛土、上位岩盤
T18	10～200以上	下位湧水、上位岩盤
T19	10～180	氾濫１回、上位岩盤
T20	30～40	Ⅰ表土　Ⅱ黒褐色土　Ⅲ漸移層　Ⅳ褐色土(地山)
T21	30～40	〃
T22	30～40	〃
T23	30～40	〃
T24	30～40	〃
T25	20～50	〃
T26	30～40	〃



第４図　遺跡範囲と調査区

調査前の状況

Ｔ６北壁基本層序

Ｔ７全景

Ｔ９全景

Ｔ14全景

Ｔ19全景

Ｔ20全景

Ｔ25全景

（5）矢盛（やもり）遺跡　第25次調査

所　在　地	盛岡市飯岡新田４地割47－１ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	ＬＥ26－0139・ＩＹＭ－09－25
委　託　者	盛岡市都市整備部盛岡南整備課	**調査対象面積**	1,234㎡
事　業　名	盛岡南新都市土地区画整理事業	**調査終了面積**	1,234㎡
発掘調査期間	平成21年９月15日～９月17日	**調 査 担 当 者**	金子昭彦・藤原大輔

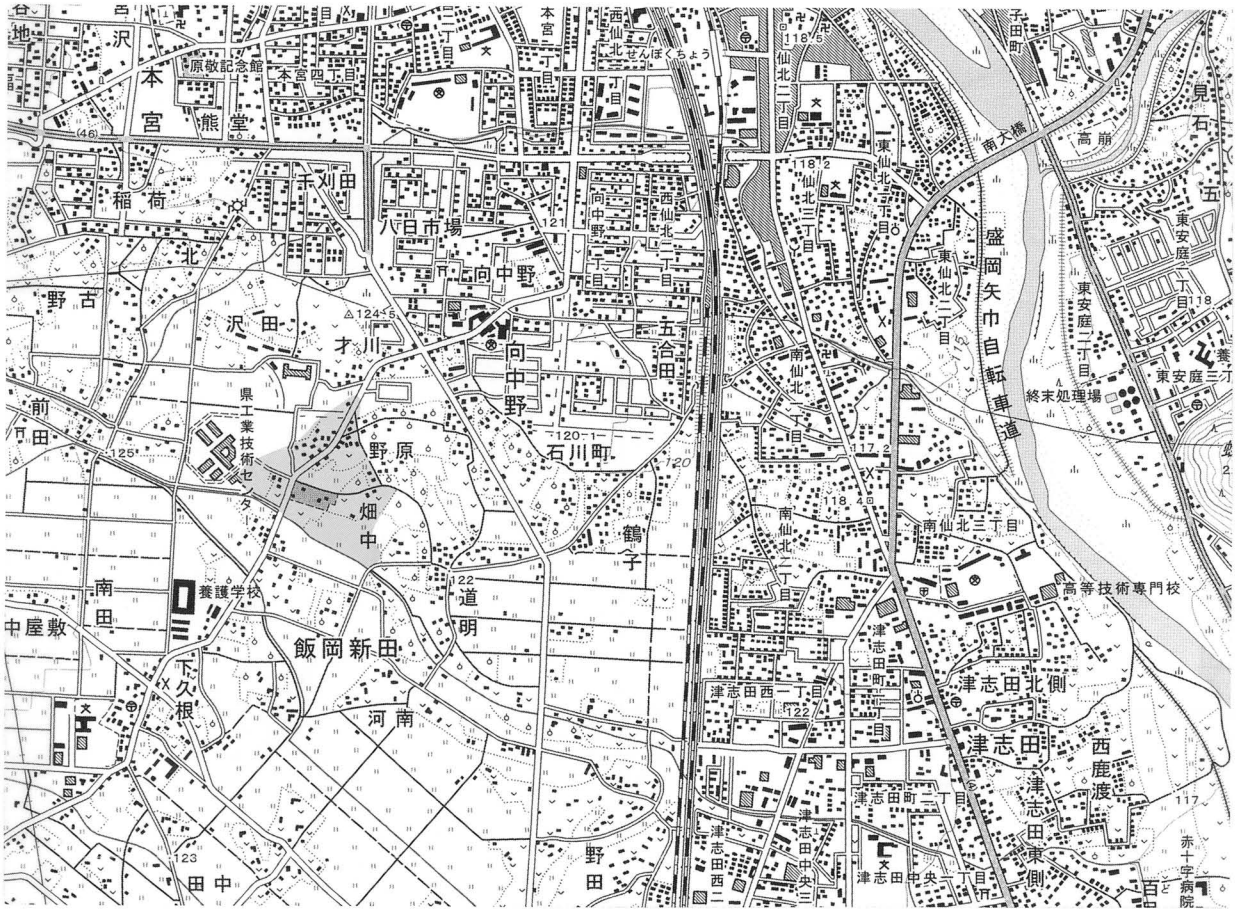
1　調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成２年９月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成３年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成３年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

矢盛遺跡第25次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成21年度の事業として確定した。これを受け、平成21年５月１日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結した。

（盛岡市都市整備部盛岡南整備課）



第１図　遺跡の位置

2　遺跡の位置と立地（第１図）

遺跡は、盛岡市の南西部、ＪＲ東北本線盛岡駅から南に約３㎞、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、雫石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

3　基本層序

０層　盛土。層厚０～120㎝。Ⅰ層　表土。腐食土か耕作土（水田）。層厚０～50㎝。Ⅴ層　10YR4/4褐色砂層。地山。層厚不明。

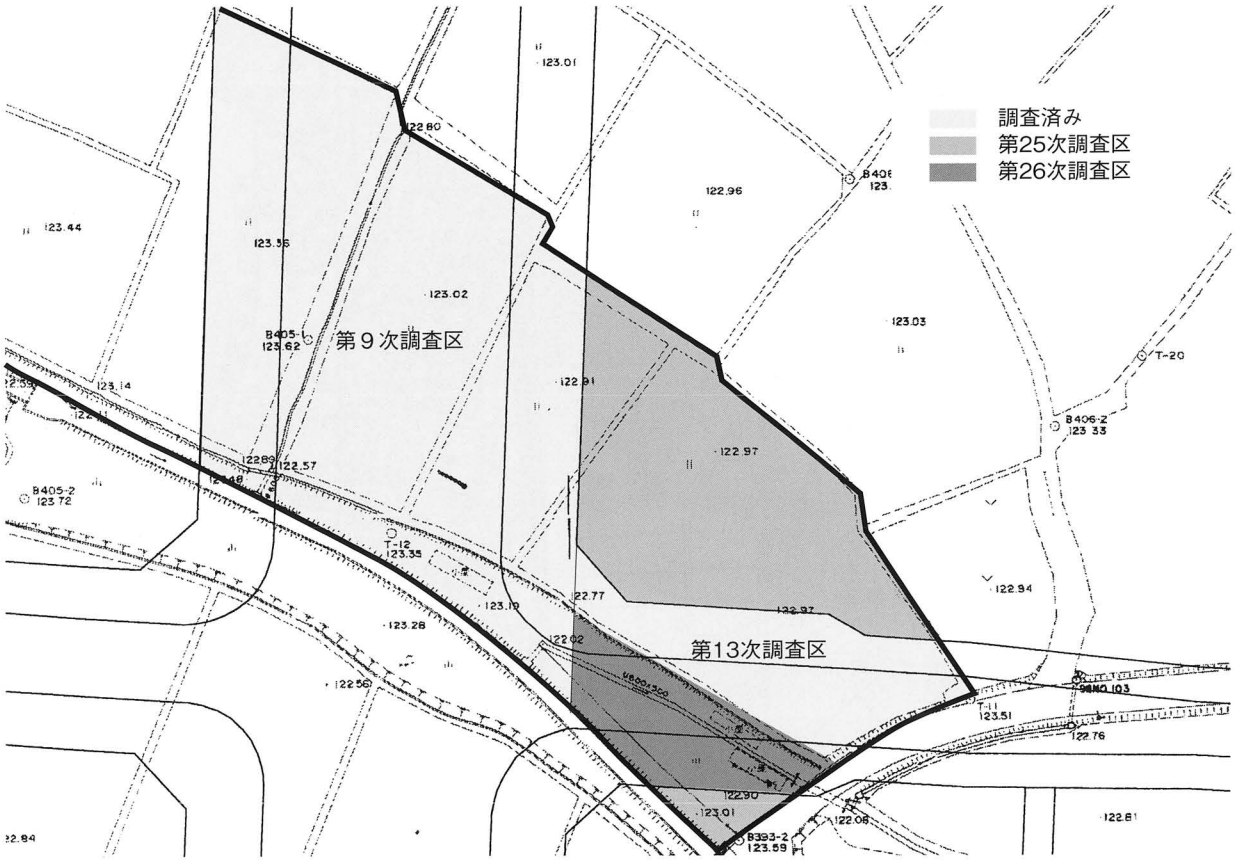
＊この地域では、通常、Ⅱ層：クロボク土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土が認められるのだが、本調査区では全く認められなかった（Ⅱ層上部が平安時代遺構の掘り込み面）。

4　調査の概要

今回の調査区は、遺跡推定範囲の南東端に相当する。第26次調査区が南側の飛び地北側に隣接し（第２図）、トレンチは通して設定したが（第３図）、トレンチ１（Ｔ１）は第25次で報告する。

トレンチ３～６（第３図Ｔ３～６）の地点は、既に工事が一部進められていたため（写真図版上段）、１ｍ前後の盛土が見られた。トレンチ３・４では、80㎝の盛土の下に50㎝ほどの水田耕作土が認められ、すえた臭いが鼻につく。トレンチ５は、110～120㎝の盛土の下は地山で、既に表土は残っていなかった。トレンチ６は、90㎝ほどの盛土下に表土である水田耕作土が10～20㎝残っており、ここでもすえた臭いが鼻についた。ただし、北側は大きく攪乱され、表土は残っていなかった。

遺構、遺物は全く出土せず、今回の調査区の大部分は、既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。南側に隣接する第13次調査区（当センター報告書第534集）でも、同様の結果が得られている。西側

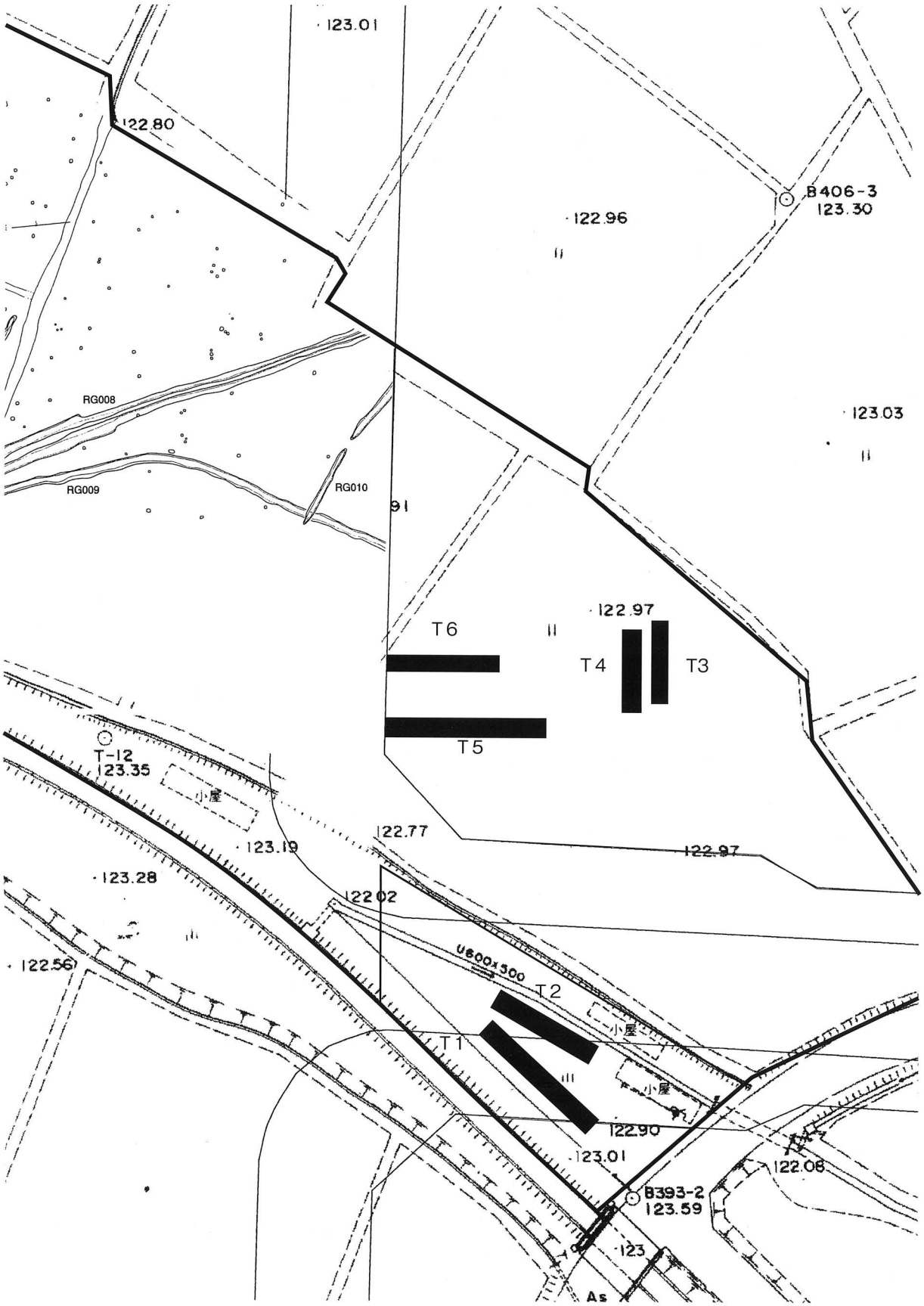


上が北　縮尺　１：1,000

第２図　これまでと今回の調査範囲

に隣接する第９次調査区（同第508集）では、古代の溝跡などが検出されている（第２・３図）。

なお、矢盛遺跡第25次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



上が北　縮尺　1：500

第３図　今回の調査区とその周辺

第25次・26次調査範囲全景（北から）

トレンチ3

トレンチ4

トレンチ5

トレンチ6

写真図版1　第25次調査区

（6）矢盛（やもり）遺跡　第26次調査

所在地	盛岡市飯岡新田４地割49－１ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	ＬＥ26－0139・ＩＹＭ－09－26
委託者	独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所	**調査対象面積**	334㎡
事業名	盛岡南新都市土地区画整理事業	**調査終了面積**	334㎡
発掘調査期間	平成21年９月15日～９月17日	**調査担当者**	金子昭彦・藤原大輔

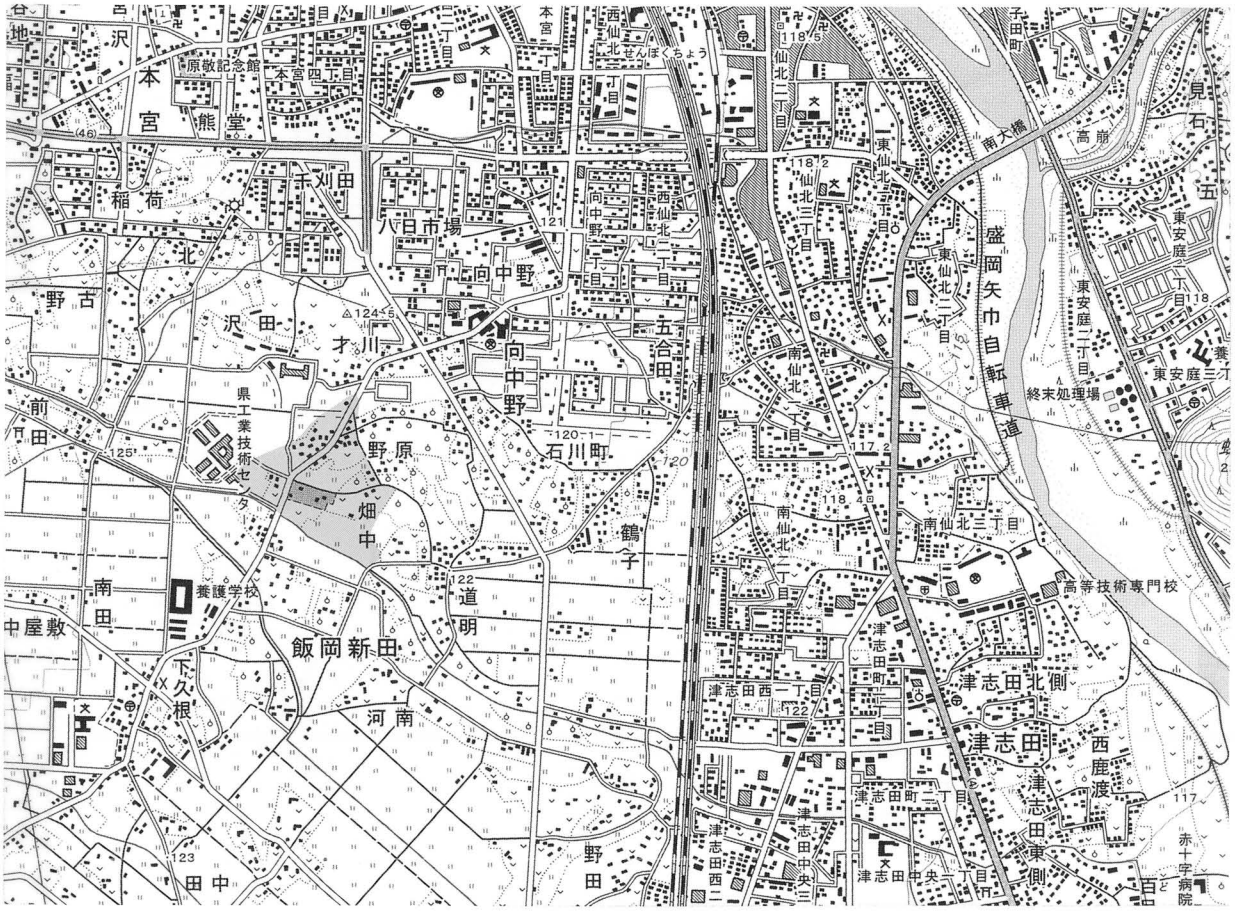
1　調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成２年９月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成３年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成３年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

矢盛遺跡第26次調査は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成21年度の事業として確定した。これを受け、平成21年６月11日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と都市再生機構岩手都市開発事務所長の間で委託契約を締結した。

（独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所）



第１図　遺跡の位置

2　遺跡の位置と立地（第１図）

遺跡は、盛岡市の南西部、ＪＲ東北本線盛岡駅から南に約３㎞、仙北町駅から南西約1.8㎞に位置し、雫石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

3　基本層序

０層　盛土。層厚０～120㎝。Ⅰ層　表土。腐食土か耕作土（水田）。層厚０～50㎝。Ⅴ層　10YR4/4褐色砂層。地山。層厚不明。

＊この地域では、通常、Ⅱ層：クロボク土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土が認められるのだが、本調査区では全く認められなかった（Ⅱ層上部が平安時代遺構の掘り込み面）。

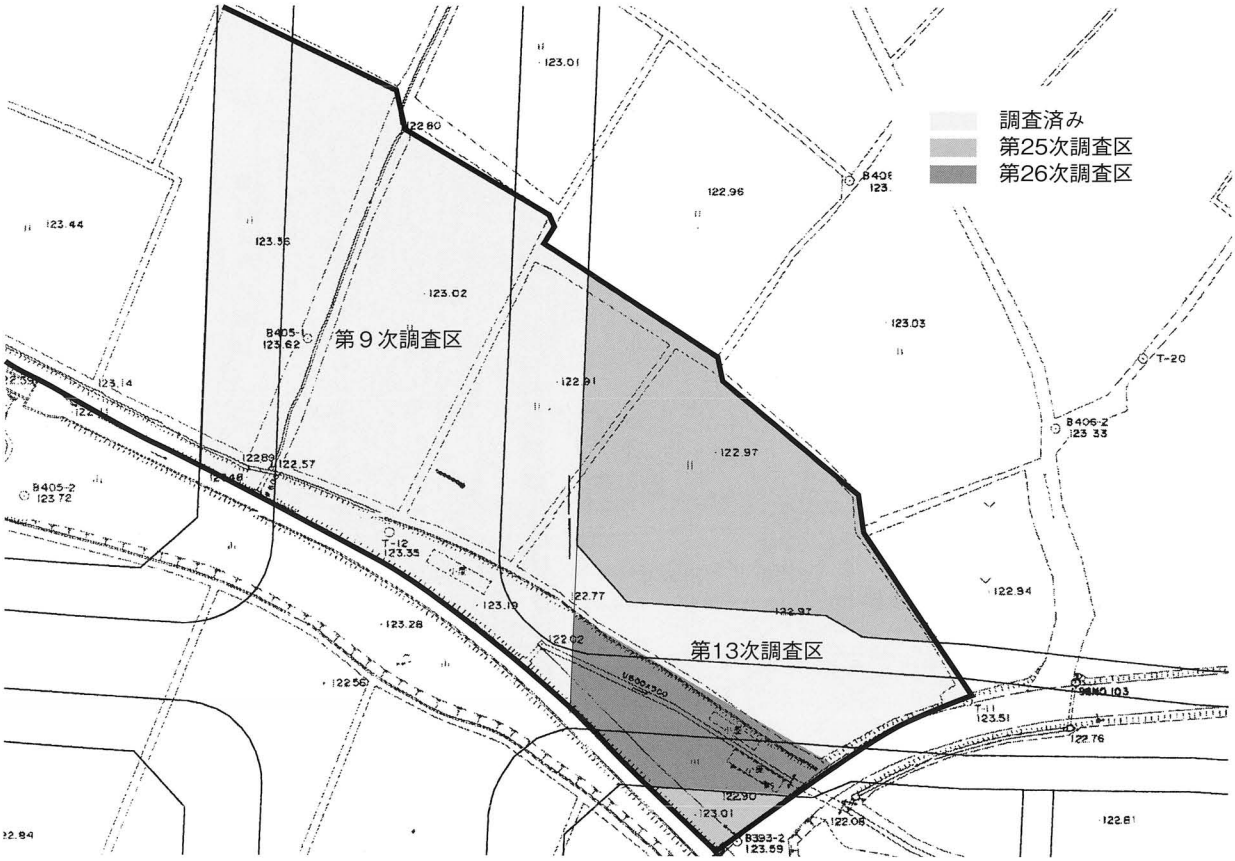
4　調査の概要

今回の調査区は、遺跡推定範囲の南東端に相当する（第４図）。第25次調査区飛び地が南側に隣接するが（第２図）、トレンチは通して設定した（第３図）。

トレンチ１・２（第３図Ｔ１・２）では、表土40～50㎝下に地山が認められた。表土は水田耕作土あるいはそれを動かしたものが主だが、腐食土の部分もある（桜、柳の大木があったところ）。

遺構、遺物は全くなかった。水田造成前には残っていた可能性もなくはないが、地形と地山からその可能性は低く、今回の調査範囲は既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。北側に隣接する第13次調査区（当センター報告書第534集）でも、同様の結果が得られている（第２・３図）。

遺跡の南限は堰になっており（第４図）、この方向に沖積段丘が伸びる。段丘上西端（第４図１次調査区付近）では平安時代の集落が（当センター報告書第205・555集）、段丘下（同10～13次調査区

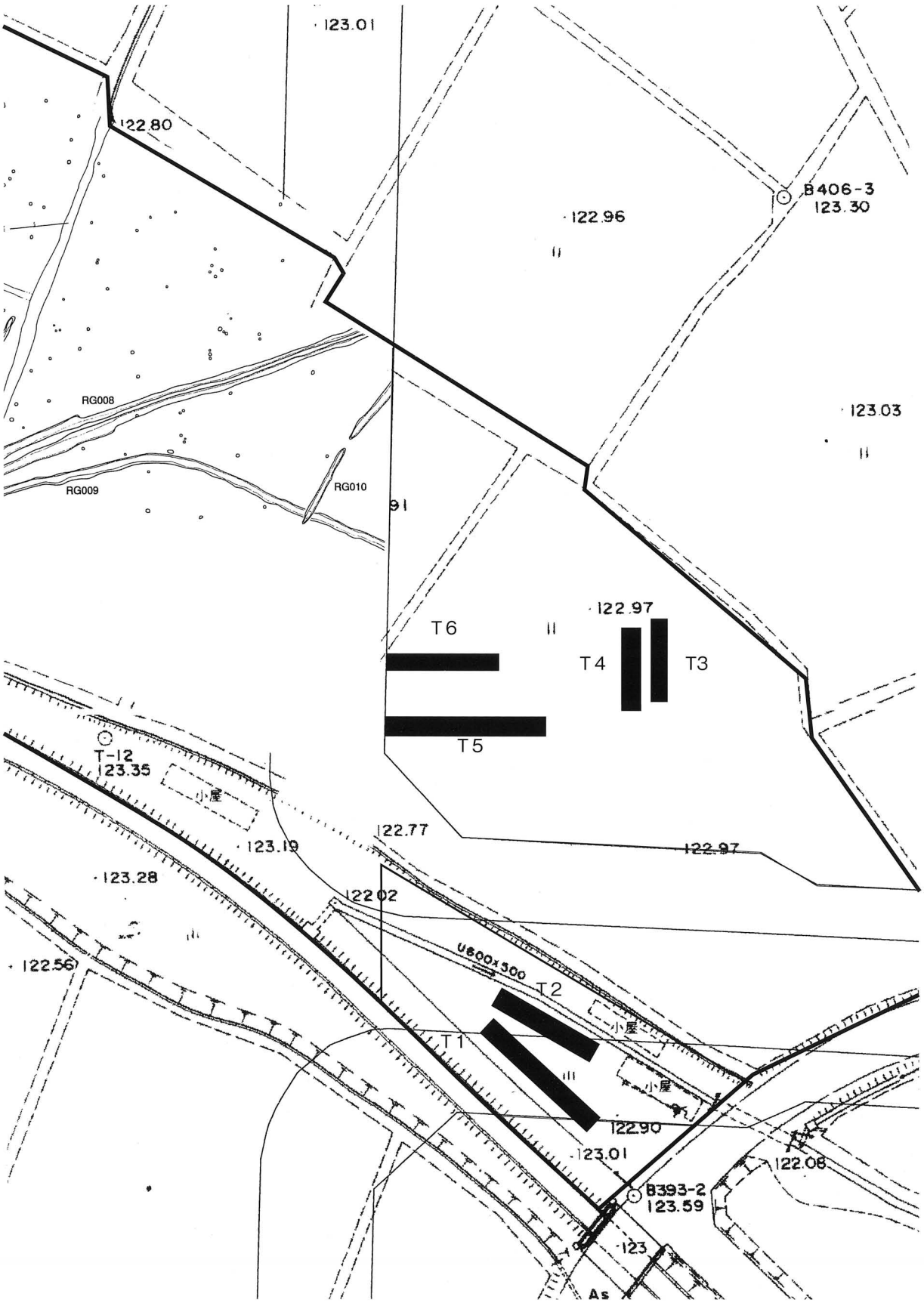


上が北　縮尺　１：1,000

第２図　これまでと今回の調査範囲

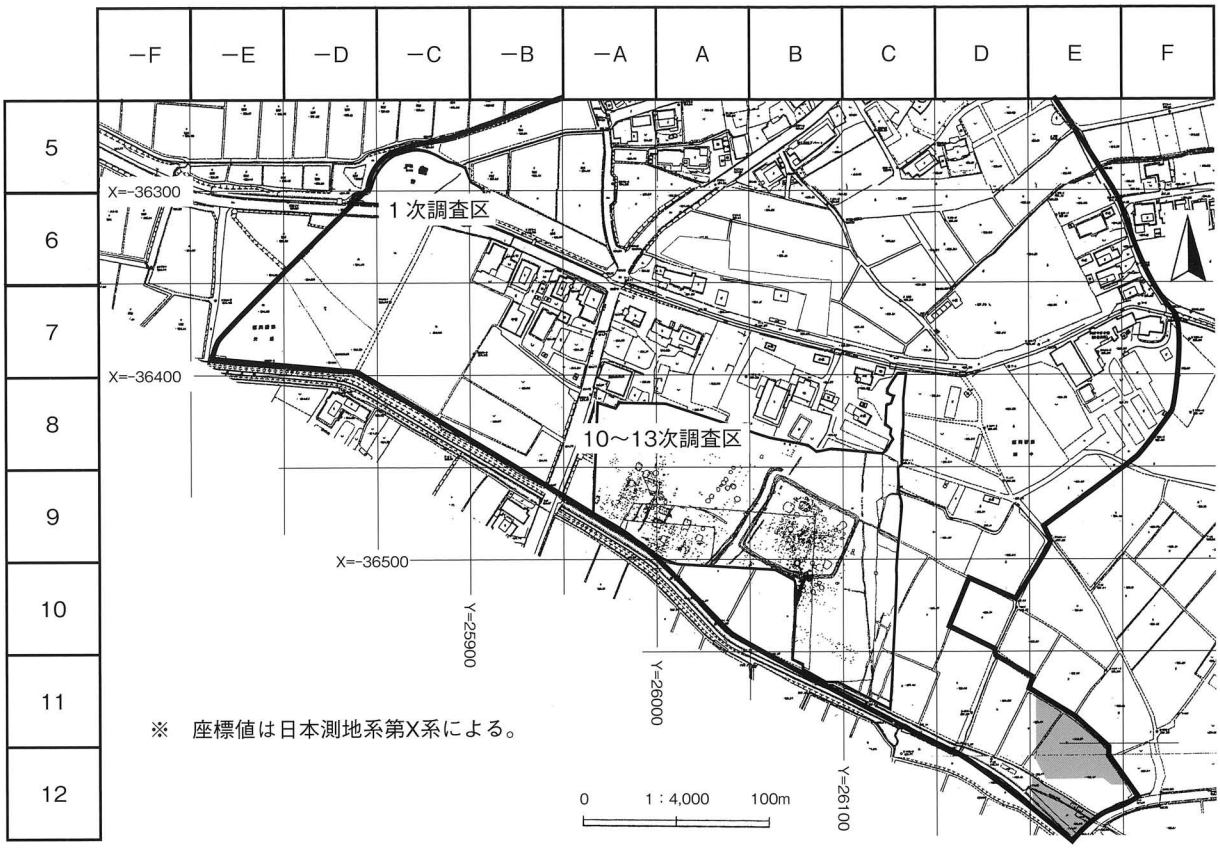
以西）では中近世の居館跡・集落跡が検出されている（同第534集ほか）。

なお、矢盛遺跡第26次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



上が北　縮尺　1：500

第３図　今回の調査区とその周辺



第４図　遺跡推定範囲における調査区の位置（右下網部分）

調査範囲全景

右端がトレンチ１・２

トレンチ１

トレンチ２

写真図版１　第26次調査区

（7）大宮北遺跡（おおみやきた）第15次調査

所　在　地	盛岡市本宮字小幅３－３ほか	**遺跡コード・略号**	ＬＥ16－2036・ＯＯＫ－09－15
委　託　者	岩手県盛岡地方振興局土木部	**調査対象面積**	2,000㎡
事　業　名	主要地方道盛岡和賀線飯岡地区道路整備事業	**発掘調査面積**	2,000㎡
発掘調査期間	平成21年６月１日～６月30日	**調査担当者**	小林弘卓・北田　勲

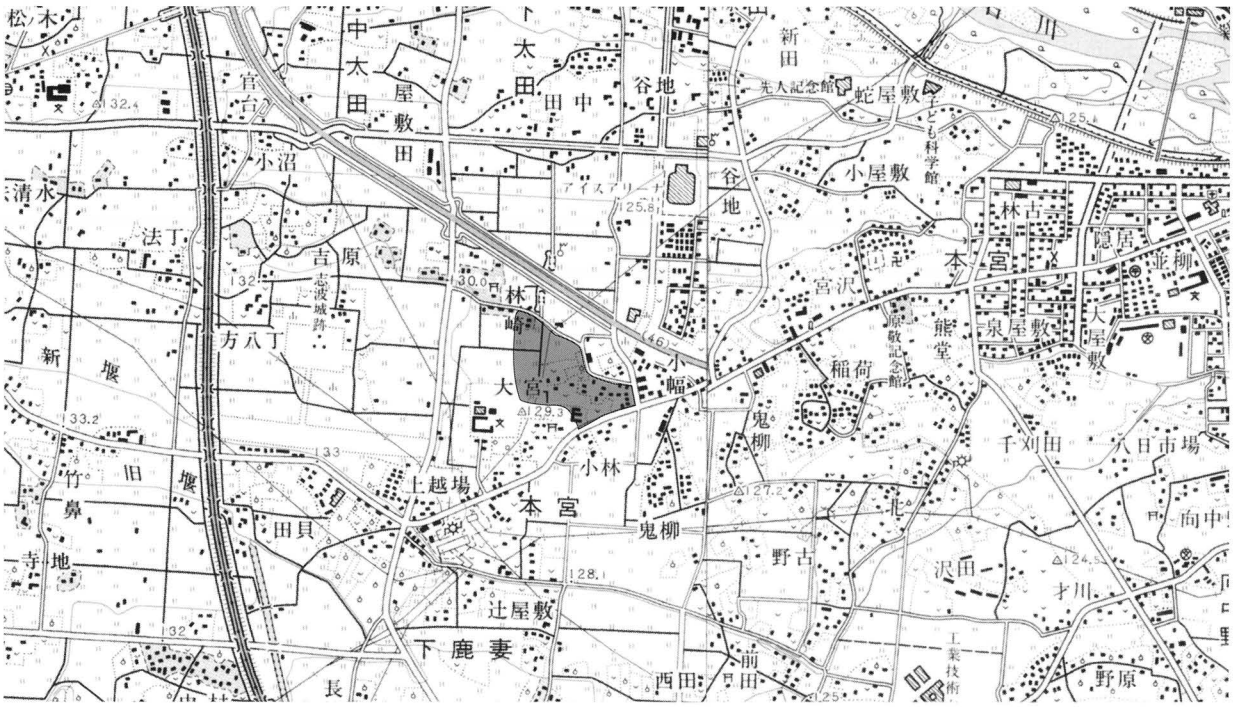
1　調査に至る経過

大宮北遺跡は、「主要地方道盛岡和賀線飯岡地区道路整備事業」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

主要地方道盛岡和賀線は盛岡市を起点とし、矢巾町、紫波町及び花巻市を経由し、北上市に至る延長51.49kmの幹線道路である。本事業は、現道における交通混雑の緩和と歩行者等の安全性の向上を図るとともに、幹線道路である本路線の年間を通じた機能向上を図ることを目的として整備するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成20年８月27日付盛地土第7103号「主要地方道盛岡和賀線飯岡地区道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により岩手県教育委員会に試掘調査を依頼し、平成20年10月２日、平成20年10月３日及び平成20年11月17日に調査を実施したものである。

調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、平成20年11月25日付教生第1111号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により、工事に着手するには大宮北遺跡の発掘調査が必要とのことから、岩手県教育委員会と協議・調整を行い、平成21年５月25日財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査の実施に至ったものである。　（岩手県盛岡地方振興局土木部）



1：25,000　小岩井農場・盛岡

第１図　遺跡位置図

2　遺跡の位置と立地

大宮北遺跡は、ＪＲ盛岡駅から南西に約２㎞の本宮字小幅地内に所在する。遺跡は雫石川右岸の低位沖積段丘面に立地しており、標高は126m前後、現況は宅地及び果樹園である。

3　基本層序

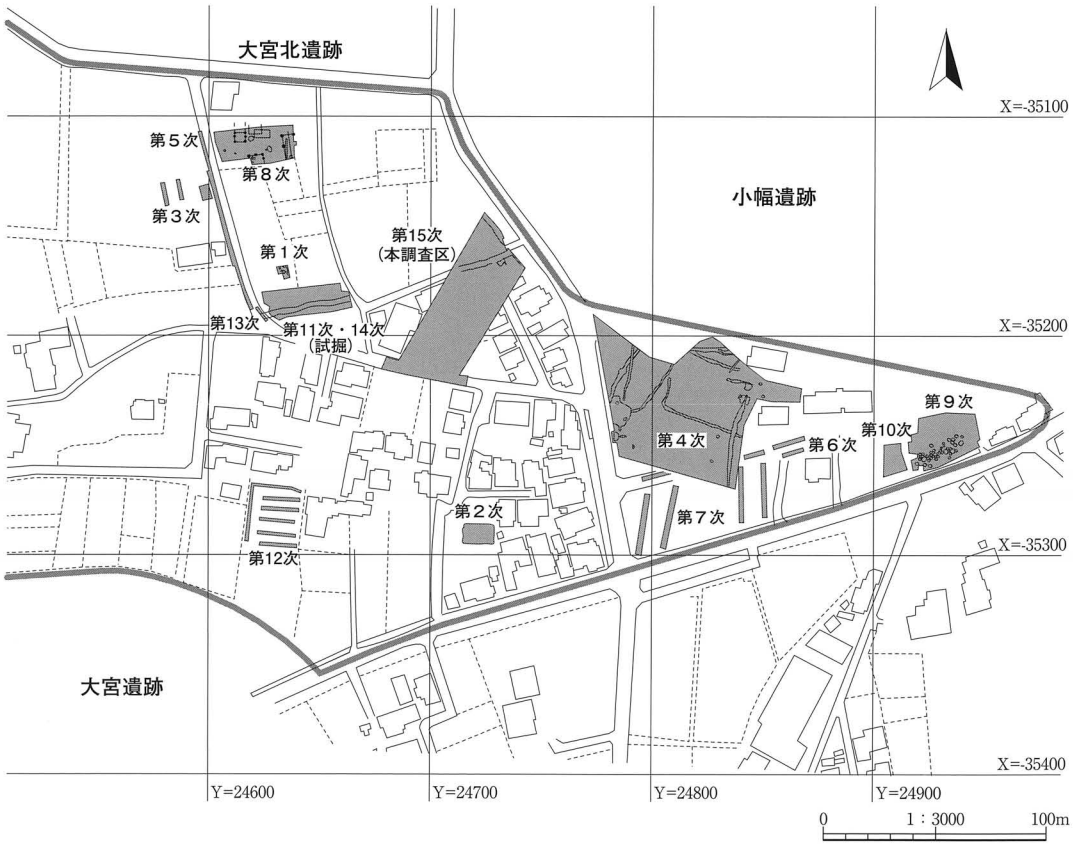
基本層序はⅠ～Ⅵ層に分層される。Ⅰ層黒褐色土と褐色土の混合である表土30～50㎝、Ⅱ層黒色土の旧表土10～20㎝、Ⅲ層にぶい黄褐色土（上面が第一遺構検出面）10㎝、Ⅳ層褐色土（最終遺構検出面）20～50㎝、Ⅴ層にぶい黄褐色砂礫50㎝、Ⅵ層にぶい黄褐色砂・層厚不明である。

4　調査の概要

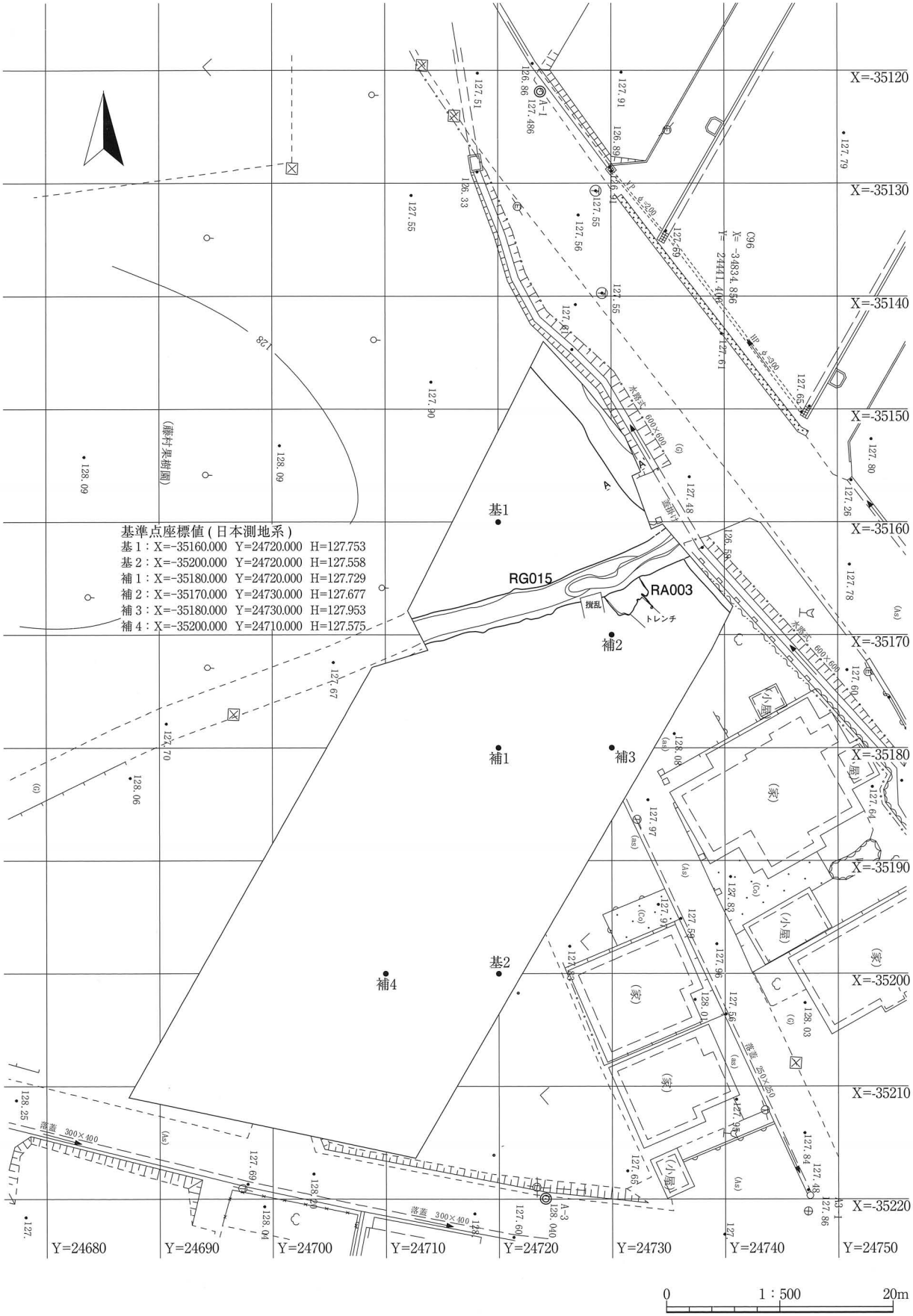
大宮北遺跡は昭和59年度から平成19年度までに14次の調査が行われており、今回は第15次調査にあたる。これまでの調査における主な成果としては、第４次調査では平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、第８次調査では建て替えの認められる掘立柱建物跡や土坑が検出され、10世紀に位置付けられる土器が多数出土している。第９次調査では近世から近代にかけての土坑墓が60基確認されている。また、第11次調査では今次調査とも関連する溝跡１条などが検出されている。

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡１棟、溝跡１条である。また、この他に調査区北端において段丘状の落ち込みが確認された。

なお、グリッドの設定についてであるが、本遺跡の調査が複数次に亘り、且つ調査機関も様々であったため、過去において各々異なった設定を行っていることから、今次はグリッドを設定せず座標値（日本測地系）のみを付記することとした。



第２図　遺跡位置図


基準点座標値（日本測地系）
基1：X=-35160.000 Y=24720.000 H=127.753
基2：X=-35200.000 Y=24720.000 H=127.558
補1：X=-35180.000 Y=24720.000 H=127.729
補2：X=-35170.000 Y=24730.000 H=127.677
補3：X=-35180.000 Y=24730.000 H=127.953
補4：X=-35200.000 Y=24710.000 H=127.575
基1
基2
補1
補2
補3
補4
RG015
RA003
撹乱
トレンチ
（藤村果樹園）
X=-35120
X=-35130
X=-35140
X=-35150
X=-35160
X=-35170
X=-35180
X=-35190
X=-35200
X=-35210
X=-35220
Y=24680
Y=24690
Y=24700
Y=24710
Y=24720
Y=24730
Y=24740
Y=24750
0
1：500
20m

第３図　遺構配置図

（1）遺構

RA003竪穴住居跡（第４図、写真図版１・２）

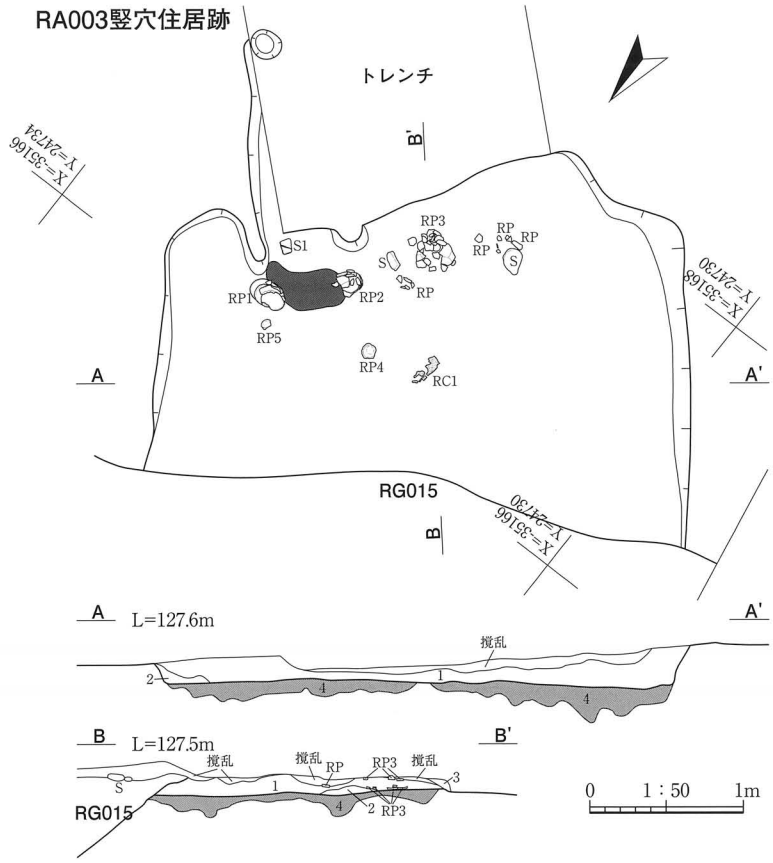
調査区北側に位置し、検出面はⅣ層である。現存していた宅地等によって大きく削平を受けており、埋土が10cmに満たない部分もある。前年度に行われた試掘によっても南東側が若干の影響を受けている。また、RG015溝跡と重複しこれに切られるため北側は消失している。確認された平面形は南隅が不整な隅丸方形である。残存状態が悪く、断面等では確認ができなかったため可能性の示唆に止めるが、本遺構は竪穴住居跡が２棟重複していた可能性がある。カマドが遺存する南東壁から繋がる部分が新期、これより規模がやや大きく、西側に遺存する壁が見られる部分が旧期の住居跡と思われる。出土した遺物もこの新期住居跡に伴うものであろう。西壁から推測すると、両者とも軸方向は概ね南東－北西方向にあるが、新期の方が同方向により傾いており、新期で一辺約2.9m、旧期で一辺約3.5mの規模が推察される。壁は残存する部分では直角に近い角度で立ち上がり、壁高は最大25cmを測る。埋土は３層に細分したが、主体となるのは１層黒褐色土である。床面は暗褐色土と褐色土を混合した貼床土がほぼ全面に施されているがやや軟質である。床面施設は明確なものは確認できなかったが、カマド左側にあたる南東隅が全体よりも若干窪んでおり、貯蔵穴としての機能も考えられるが判然としない。カマドは南東壁の北寄りに付設されている。上述により煙道や右袖等が消失している。袖の基部は壁からの造り出しで、これに粘土を貼り付けて構築していたものと思われる。焚口の両側には芯材として土師器の甕が用いられており、倒立状態で設置されている（RP1・2）。燃焼部焼土は赤褐色を帯び、不整な楕円形状に広がる。この南東方向からは亜円礫（S1）が出土しており、支脚として使用された可能性がある。煙道は長さ約1.2m、幅20～30cmで、概ね水平に先端へと向かう。構築方法は刳り貫きか掘り込みかは残存部からは判断できない。煙出孔は大半が消失しており、下部の痕跡が３～５cm残存するのみである。遺物は土師器が中コンテナで１箱出土した。このうち掲載したのは１～８の８点である。いずれもカマド及び床面からの出土である。これらの出土遺物から、７世紀後半の遺構と考えられる。

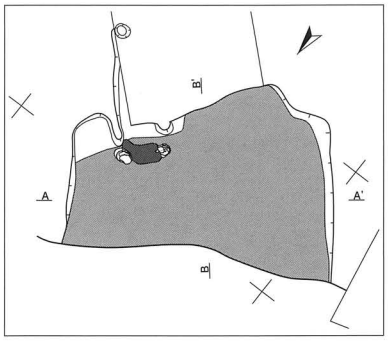
RG015溝跡（第５図、写真図版２）

調査区北側に位置し、検出面はⅢ層及びⅣ層である。本溝跡は規模・形状・走向方位等から、盛岡市教委による平成19年度第11・13次調査で確認されたものと同一遺構と判断した。RA003竪穴住居と重複するが上述のとおりである。今回検出した規模は、長さ24.6m、幅2.5～３mである。直線状に延び、走向方位はおよそ北東東－南西西にある。底面標高は北東東に向かって低位となる。断面形は西側では箱形、東側では流水などの影響によりＶ字状となり、深さは最深部で90cmを測る。埋土は最大５層に細分され、黒～黒褐色土を主体とする自然堆積土と考えられる。本遺跡北側から隣接する小幅遺跡との間には北西－南東方向に走向する旧河道が存在すると考えられており、これに連結していたものと思われる。実際、本調査区内でも北端に段丘縁と思われる落ち込みが確認されている（北側段丘縁）。遺物は土師器が小コンテナで約0.5箱、須恵器が２点出土した。このうち掲載したのは９～15の７点である。過年度でも類似する土器が伴出しており、今回も同様に10世紀代に位置付けられると思われる。本遺構は前回分を含めると全長120mと長大な溝跡となり、北側は今回確認された自然地形と連結することから、区画機能をもっていた可能性が窺える。

北側段丘縁（第５図、写真図版３）

調査区北端に北側に向かって下がる落ち込みを確認した。調査区内では深さ1.2mを測り、東側でRG015溝跡と連結している。新旧関係は判断できなかったが、同時存在である可能性も考えられる。遺物は小コンテナで約0.5箱出土している。掲載したのは17～21の土師器５点である。

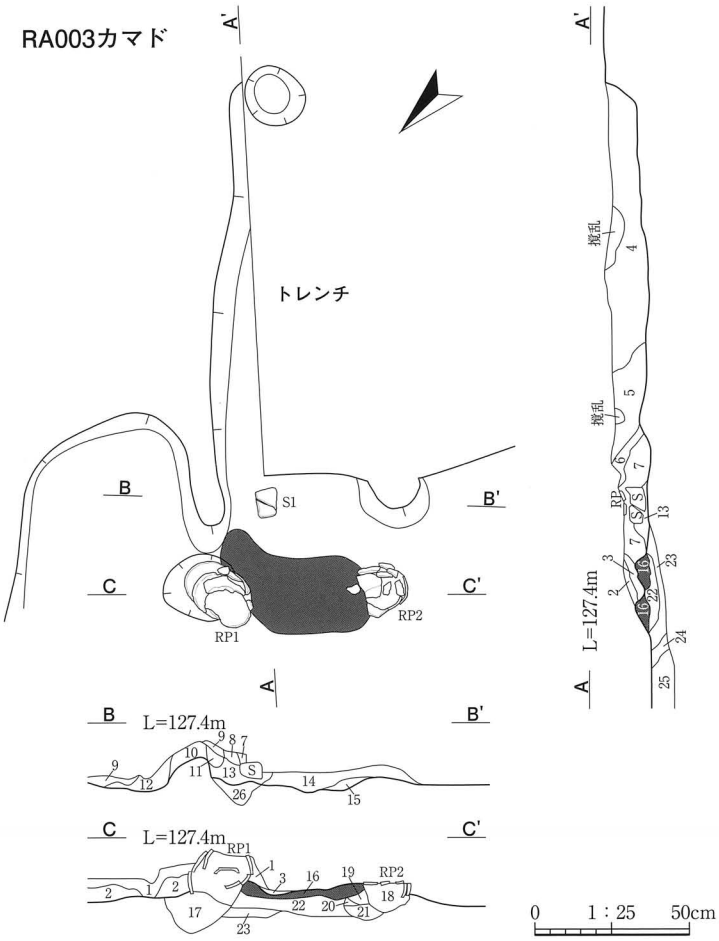




焼土範囲

貼床範囲

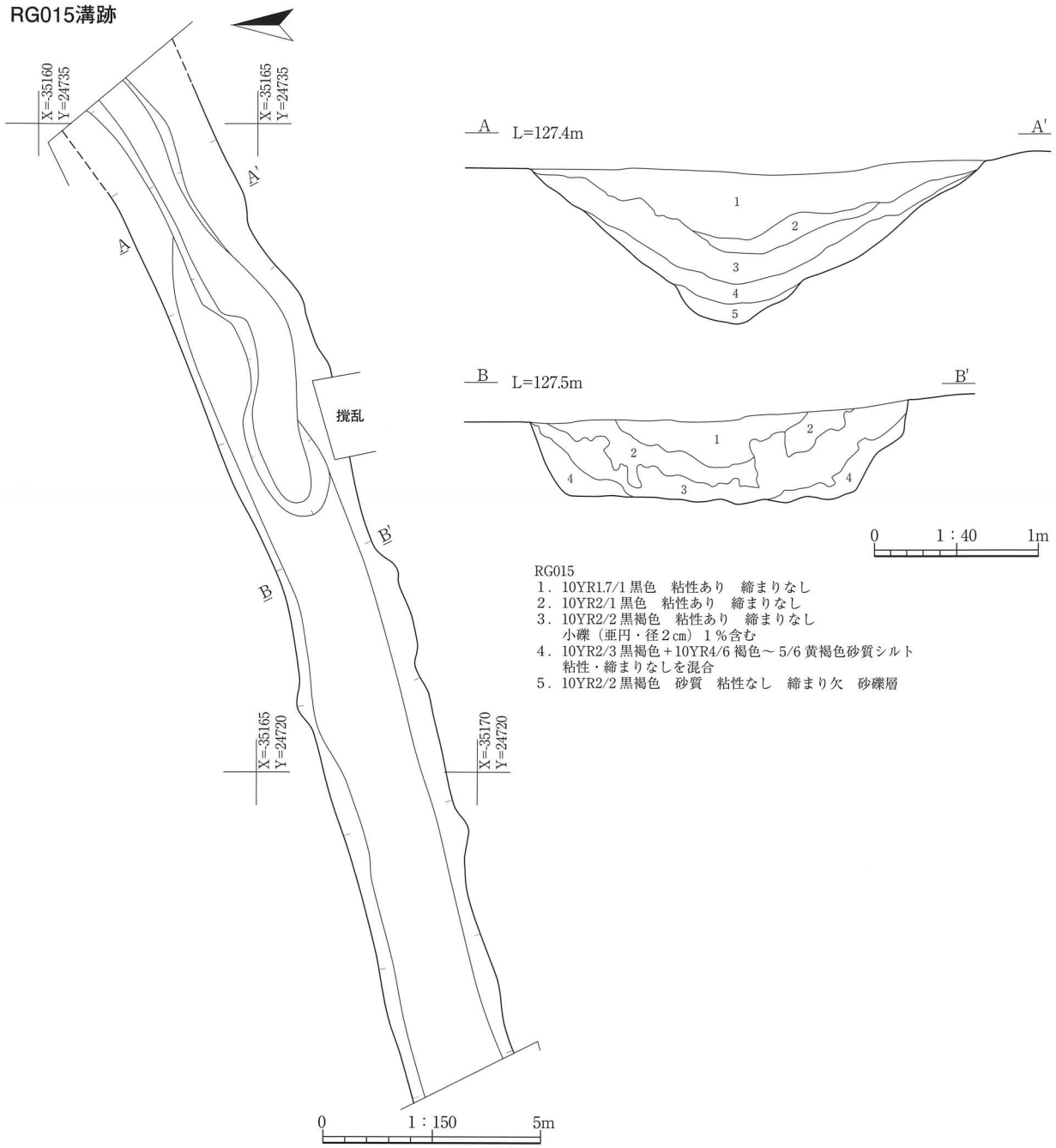
RA003
1．10YR2/2 黒褐色　粘性あり　締まりややあり
　炭化物微量、黄褐色土粒少量含む
2．10YR3/4 暗褐色　砂質　粘性なし　締まりあり
3．10YR1.7/1 黒色　粘性あり　締まりなし
4．10YR3/3 暗褐色　粘性あり　締まりややあり
　褐色土ブロック混合土　貼床土



RA003 カマド
1．10YR1.7/1 黒色　粘性あり　締まりややあり
　焼土ブロック少量含む
2．10YR2/3 黒褐色　粘性あり　締まりややあり
　焼土ブロック・炭化物少量含む
3．10YR3/4 暗褐色　粘性・締まりあり
4．10YR2/2 黒褐色　粘性・締まりあり
　一部黄褐色砂質土混入
5．7.5YR3/2 黒褐色　粘性・締まりあり
　焼土ブロック多量含む
6．10YR2/2 黒褐色　粘性あり　締まりややあり
7．10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり
　焼土ブロック多量含む
8．10YR5/6 黄褐色～ 4/4 褐色
　粘性なし　締まりややあり　地山再堆積土か
9．10YR2/2 黒褐色　粘性・締まりなし
10．10YR3/4 暗褐色　粘性・締まりあり
11．10YR2/1 黒色　粘性あり　締まりなし
12．10YR3/3 暗褐色　粘性なし　締まりややあり
　焼土ブロック微量含む
13．10YR4/3 にぶい黄褐色　粘性・締まりややあり
　焼土ブロック・褐色土ブロック多量含む
14．10YR3/4 暗褐色　粘性・締まりあり
15．10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり
16．5YR4/6 赤褐色　粘性・締まりあり　燃焼部焼土
17．10YR3/2 黒褐色＋10YR4/4 褐色の混合土
　粘性・締まりあり　芯材痕埋土
18．10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり　芯材痕埋土か
19．5YR3/4 暗赤褐色　粘性・締まりあり　焼土塊
20．10YR3/4 暗褐色　粘性あり　締まりややあり
　炭化物中量含む
21．10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり
　黒褐色土ブロック多量含む
22．10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり　貼床土か
23．10YR2/3 黒褐色　粘性・締まりあり　貼床土か
24．10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり　貼床土か
25．10YR3/4 暗褐色　粘性・締まりあり　貼床土か
26．10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり　貼床土か

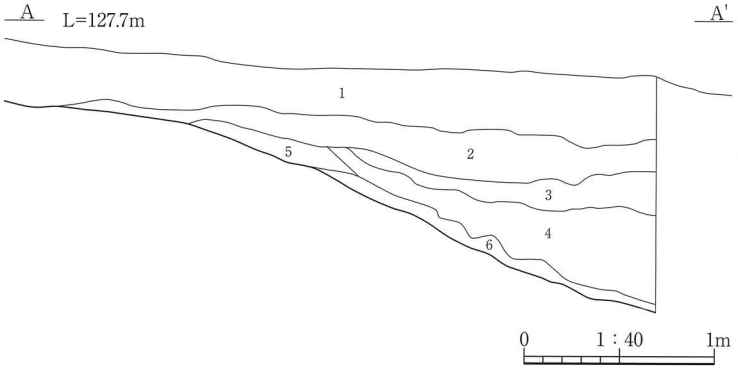
第４図　RA003 竪穴住居跡

RG015溝跡



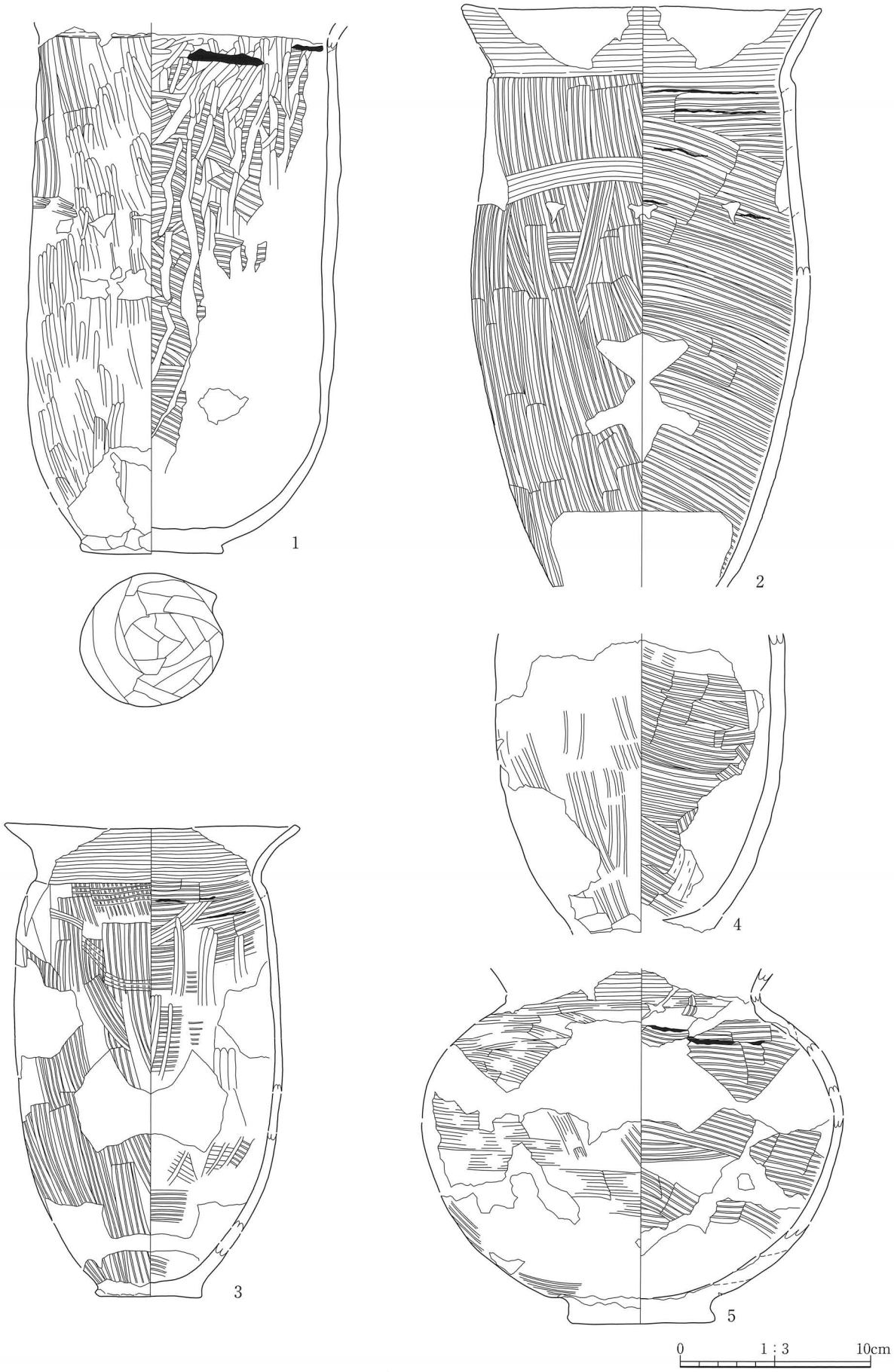
RG015
1．10YR1.7/1 黒色　粘性あり　締まりなし
2．10YR2/1 黒色　粘性あり　締まりなし
3．10YR2/2 黒褐色　粘性あり　締まりなし
　小礫（亜円・径２㎝）１％含む
4．10YR2/3 黒褐色＋10YR4/6 褐色～ 5/6 黄褐色砂質シルト
　粘性・締まりなしを混合
5．10YR2/2 黒褐色　砂質　粘性なし　締まり欠　砂礫層

北側段丘縁

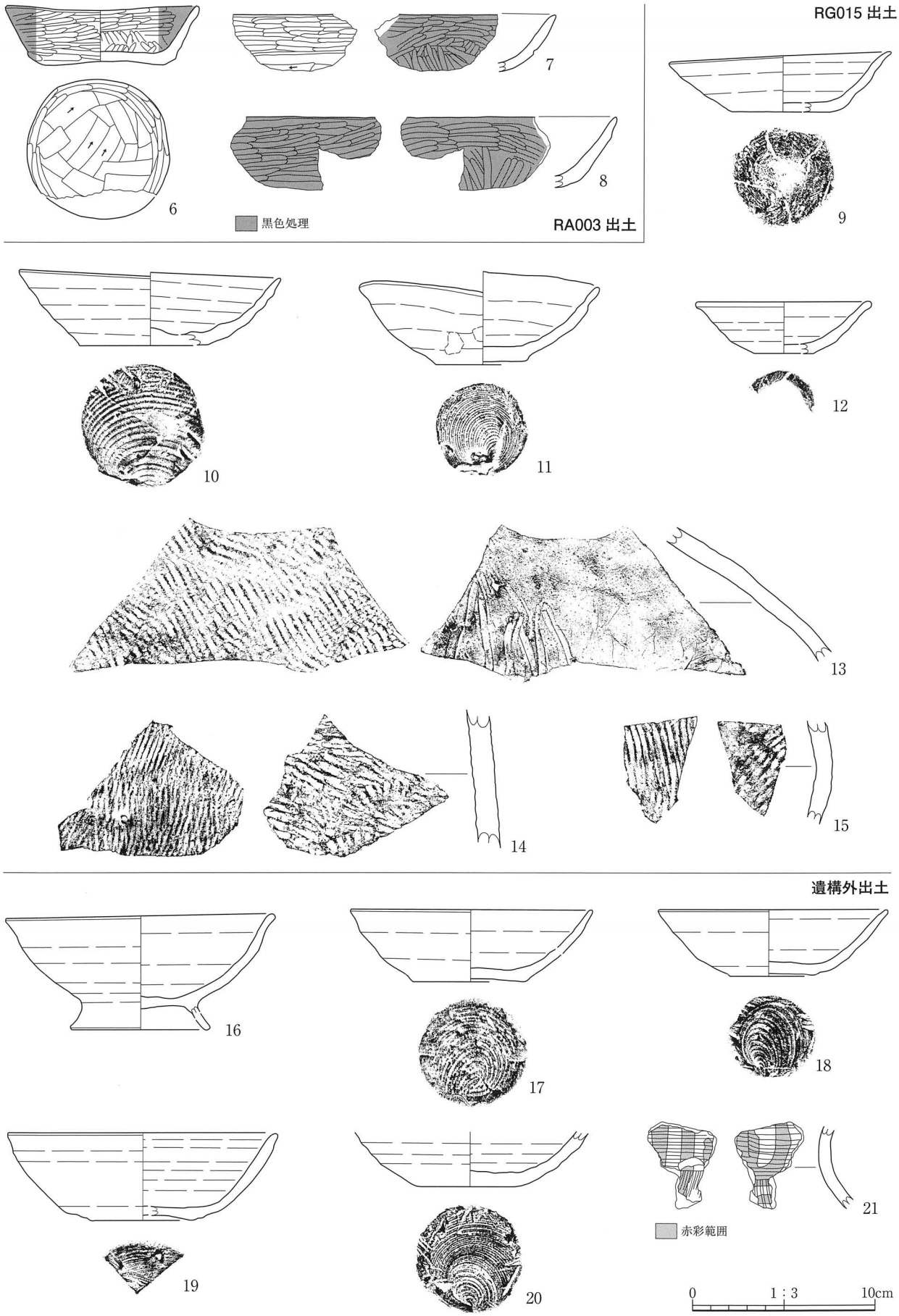


北側段丘縁
1．10YR2/2 黒褐色　粘性・締まりあり　植痕多量　表土
2．10YR2/1 黒色　粘性あり　締まりなし
3．10YR1.7/1 黒色　粘性あり　締まりなし
4．10YR2/1 黒色　粘性あり　締まりなし
5．10YR2/2 ～ 3 黒褐色＋3/3 暗褐色　粘性なし　締まりややあり
　地山との混合土　使用時からの崩落か
6．10YR2/3 黒褐色　粘性あり　締まりなし　崩落土

第５図　RG015 溝跡、北側段丘縁



第６図　RA003（１）出土土器



第７図　RA003（２）、RG015、遺構外出土土器

（2）遺物

今回出土した遺物の総量は大コンテナ１箱である。大半が土師器で、その他は須恵器が十数点である。このうち掲載したのは21点と前年度試掘調査時に出土した２点を合わせた計23点である。

１～８はRA003竪穴住居跡出土である。すべて土師器で非ロクロ成形である。１～４は長胴甕、５は球胴甕で、１を除き内外面ハケメ調整されている。１は内外面ともハケメ調整後、縦位のミガキが行われている。１～４はいずれも体部は寸胴で、底部に向かって急激に窄む形状をする。６～８は坏で、体部下半に段を持つ。６・８は内外面黒色処理、７は内面黒色処理でミガキ調整が施される。いずれも７世紀後半代の製作と考えられる。９～15はRG015出土である。９～12土師器坏、13～15須恵器大甕である。いずれもロクロ成形で、土師器坏は非黒色、10世紀代の製作と思われる。16～23は遺構外出土である。16は高台付坏、17～20は坏で、いずれもロクロ成形で10世紀代の製作と考えられる。21は壺と思われ、縦位に赤色塗彩されている。22・23はロクロ成形の坏である。墨書が見られるが、文字については判別できなかった。９世紀後半の製作と思われる。

5　まとめ

今回の調査において、７世紀後半の竪穴住居跡１棟と10世紀代の溝跡１条が確認された。古墳時代終末期の住居跡が検出されたことから、該期集落の周辺への広がりが今後期待される。また、10世紀代の遺物を出土したRG015溝跡及び北側段丘縁は、状況的にも同時に存在・機能していた可能性が高いと思われるが、第８次調査においても同時代の土器を多数伴出した建て替えの認められる掘立柱建物跡や土坑が検出されていることから、これら建物群等と関連し、これらを構成する空間を区画する用途があったものと推察される。

なお、大宮北遺跡第15次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

第１表　土器観察表

（　）：残存値、〔　〕：推定値

No.	出土地点		層位	種類	器種	残存率(%)		計測値(cm)				外面調整	内面調整	備考
	遺構名	位置				口縁部	底部	口径	底径	器高	最大径			
1	RA003	RP1	床面	土師器	甕	0	100	－	7.3	(27.9)	－	体：ミガキ、 底：ケズリ	体：ハケメ・ミガキ	非ロクロ
2	RA003	RP2・カマド	床面	土師器	甕	10	0	〔18.6〕	－	(31.6)	－	口：ヨコナデ、 体：ハケメ	口：ヨコナデ、 体：ハケメ	非ロクロ
3	RA003	RP4・Eベルト	床面	土師器	甕	5	100	〔19.1〕	6.6	31.1	－	口：ヨコナデ、 体：ハケメ	口：ヨコナデ、 体：ハケメ・ミガキ	非ロクロ
4	RA003	カマド	崩落土中など	土師器	甕	0	0	－	－	(15.8)	－	体：ハケメ	体：ハケメ	非ロクロ
5	RA003	RP3	床面	土師器	甕	0	100	－	7.5	(18.9)	〔21.9〕	体：ヘラナデ	体：ケズリ	非ロクロ
6	RA003	RP5床面一括	床面	土師器	坏	40	70	10.5	6.0	3.3	－	口～体：ミガキ、 底：ケズリ、黒色処理	口～底：ミガキ、 黒色処理	非ロクロ
7	RA003	カマド	崩落土中	土師器	坏	15	0	－	－	(3.1)	－	口：ミガキ、 体：ケズリ、黒色処理	口～体：ミガキ、 黒色処理	非ロクロ
8	RA003		床面	土師器	坏	20	0	－	－	(4.0)	－	口～体：ミガキ、 黒色処理	口～体：ミガキ、 黒色処理	非ロクロ
9	RG015		埋土	土師器	坏	80	100	12.1	5.4	3.3	－	底：回転糸切り		
10	RG015	RA003重複部	埋土	土師器	坏	100	100	14.0	6.9	4.2	－	底：回転糸切り		
11	RG015	RA003重複付近	埋土	土師器	坏	90	100	13.0	4.9	6.1	－	体：指痕、 底：回転糸切り		歪み
12	RG015		埋土上位	土師器	坏	40	30	〔9.6〕	3.2	2.9	－	底：回転糸切り		小型
13	RG015		埋土	須恵器	甕	0	0	－	－	(7.8)	－	体：敲き目	体：当て具痕	
14	RG015		埋土	須恵器	甕	0	0	－	－	(7.6)	－	体：敲き目	体：当て具痕	
15	RG015		埋土上位	須恵器	甕	0	0	－	－	(5.6)	－	体：敲き目	体：当て具痕	
16	遺構外	北側段丘縁	1層	土師器	高台付坏	85	60	14.5	(7.6)	6.4	－			
17	遺構外	北側段丘縁	埋土	土師器	坏	25	100	〔13.2〕	6.0	3.9	－			
18	遺構外	北側段丘縁と RG015接地箇所	埋土	土師器	坏	35	100	〔12.5〕	4.5	3.7	－			
19	遺構外	北側段丘縁 （トレンチ）	埋土	土師器	坏	30	15	〔14.6〕	〔5.5〕	4.8	－			
20	遺構外	北側段丘縁 （トレンチ）	埋土	土師器	坏	0	100	－	5.5	(3.0)	－			
21	遺構外	北側段丘縁	埋土	土師器	壺?	0	0	－	－	(4.8)	－	ヘラナデ	ヘラナデ	赤色塗彩
22	遺構外	生文課試掘T7		土師器	坏	30	0	〔15.9〕	－	(3.6)	－			墨書　写真のみ
23	遺構外	生文課試掘T7		土師器	坏	0	0		－	(2.1)	－			墨書　写真のみ

完掘（北西から）

断面（南西から）

カマド　完掘（北西から）

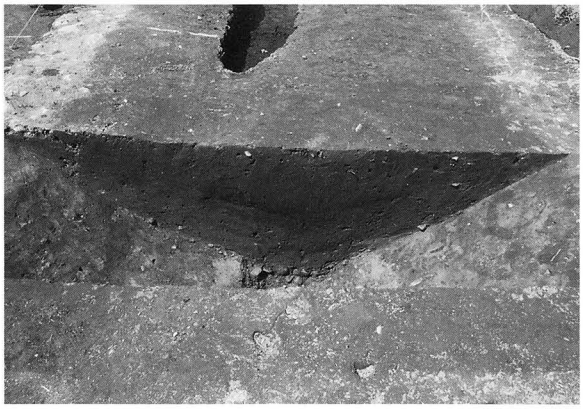
カマド　断面（北西から）

写真図版１　RA003 竪穴住居跡（１）

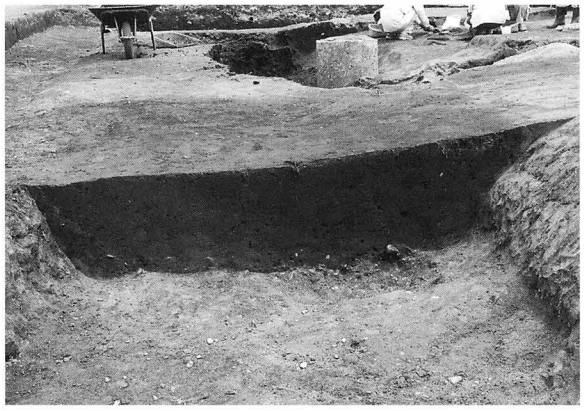
RA003　遺物出土状況１（北西から）

RA003　遺物出土状況２（北西から）

RG015　完掘（南西から）



RG015　断面 A-A’（北東から）



RG015　断面 B-B’（南西から）

写真図版２　RA003 竪穴住居跡（２）、RG015溝跡

北側段丘縁　完掘（南東から）

北側段丘縁　断面（北西から）

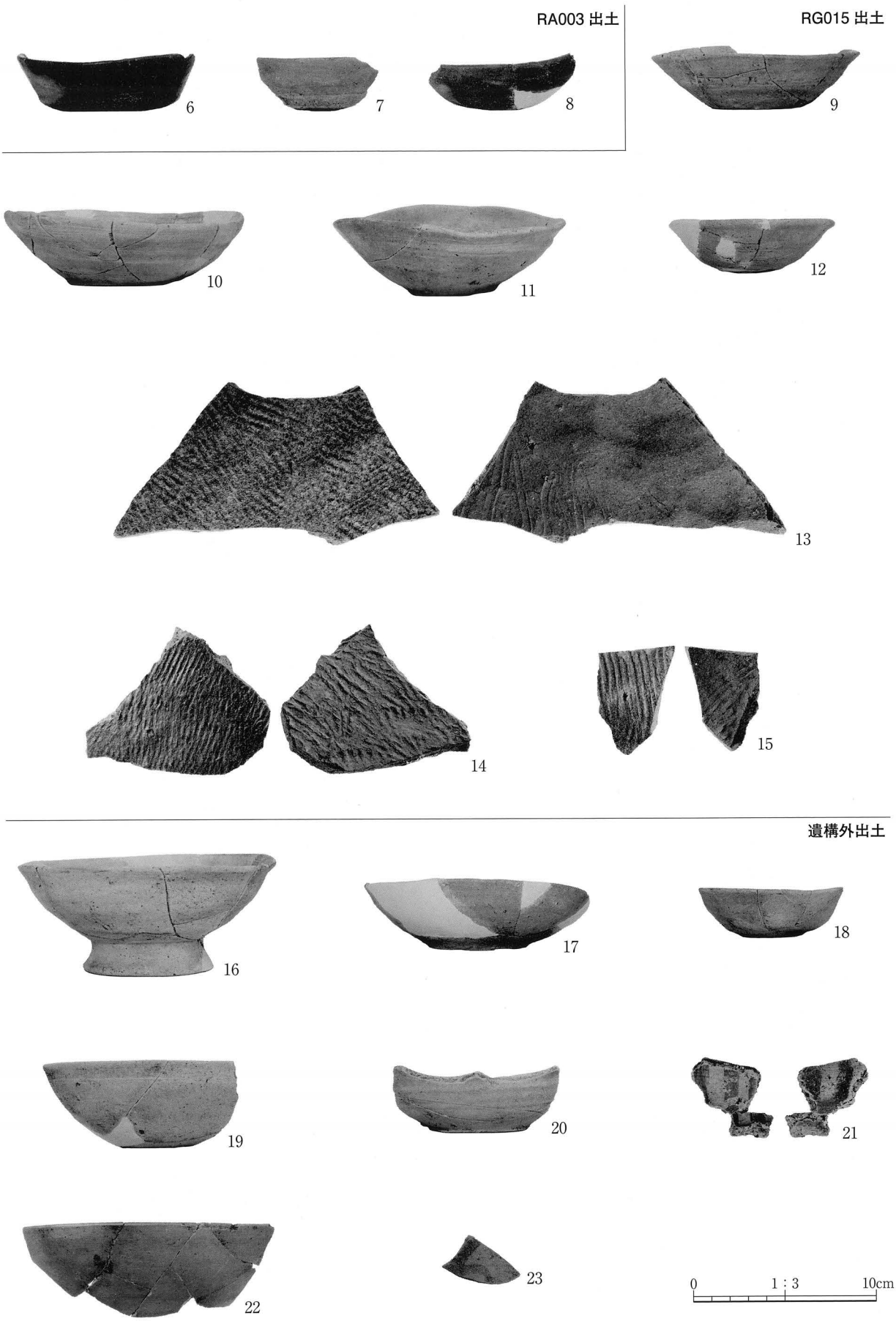
調査区北側　全景（南西から）

調査区南側　全景（北東から）

基本土層（北西から）

写真図版３　北側段丘縁、調査区全景、基本土層

写真図版４　RA003 出土遺物（１）



写真図版５　RA003（２）、RG015、遺構外出土遺物

（8）高屋敷（たかやしき）Ⅱ遺跡

所在地	気仙郡住田町世田米字高屋敷36－1ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	NF13－1389・TYSⅡ－09
委託者	大船渡地方振興局土木部	**調査対象面積**	1,190㎡
事業名	一般国道397号線高屋敷地区道路改良事業（地域自立支援活性化交付金事業）	**調査終了面積**	1,190㎡
		調査担当者	米田　寛・高橋静歩
発掘調査期間	平成21年７月１日～８月24日		

１　調査に至る経過

高屋敷Ⅱ遺跡は、「道路改築事業高屋敷工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

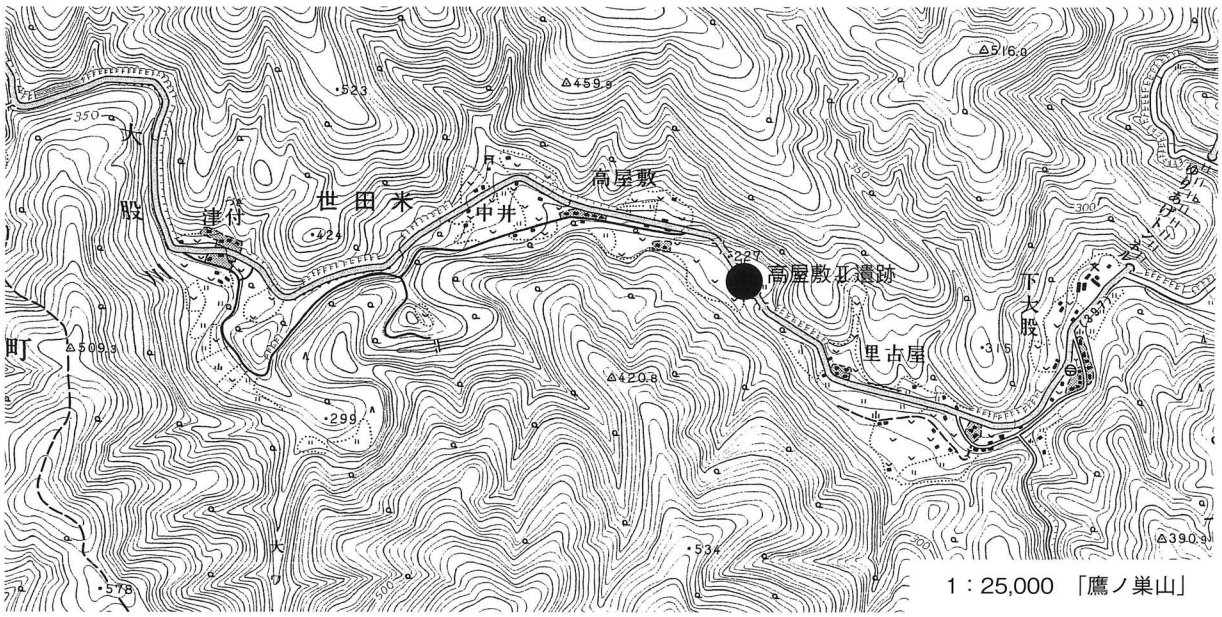
一般国道397号は気仙郡住田町西部に位置し、内陸部と大船渡地域とを連絡する道路である。この路線は急峻な北上山地を東西に横断するため、平面線形および縦断線形の劣悪な箇所が点在していることから、大船渡地域と岩手県内陸部の主要都市の物流を阻害している。これらの道路状況を改善すべく、この路線を大船渡港湾関連道路として位置付け、重点的に整備を進めている。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、大船渡地方振興局土木部から平成20年10月23日付大地土第454号「一般国道397号高屋敷地区道路改良事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

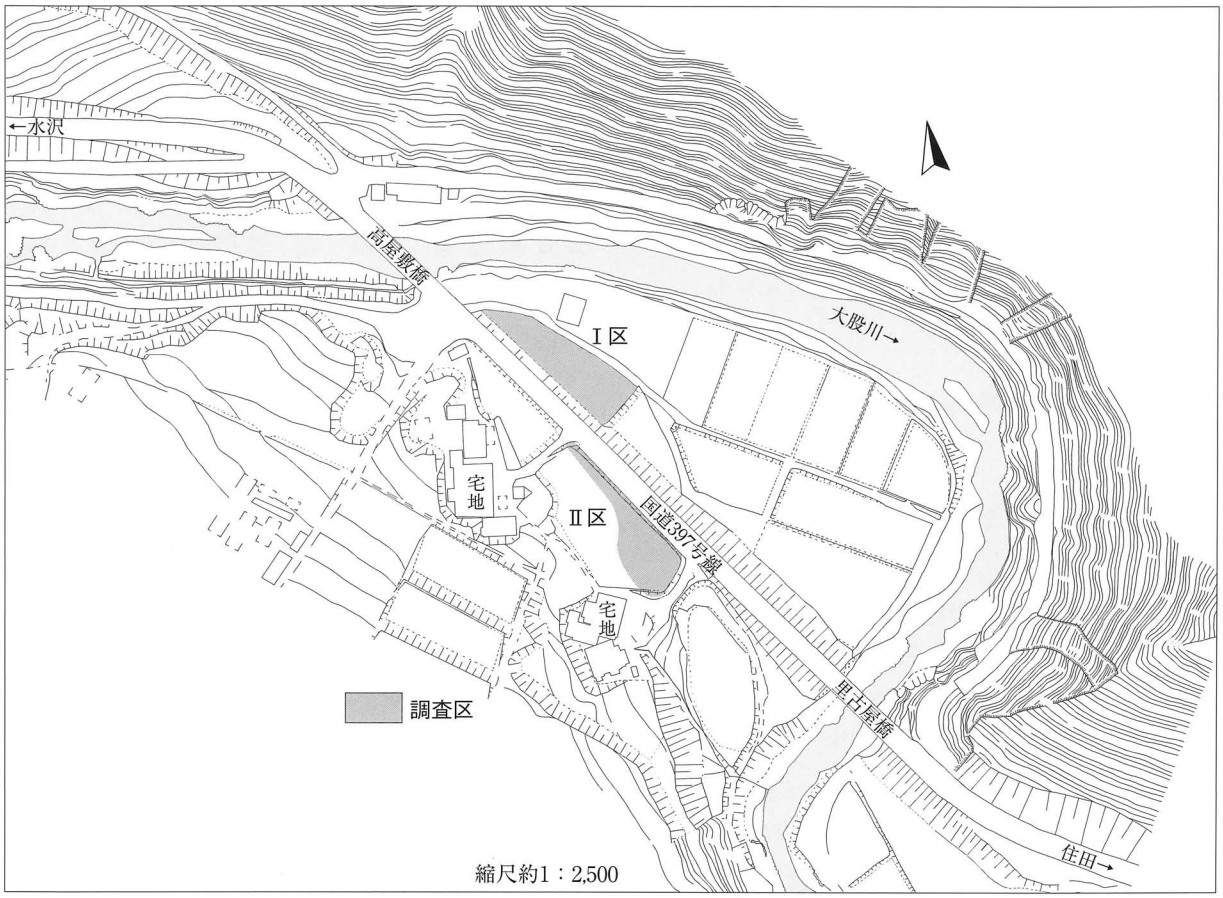
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成20年11月19日および、20日に試掘調査を実施し、工事に着手するには高屋敷Ⅱ遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成20年12月11日付教生第1182号「一般国道397号高屋敷地区道路改良工事における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成21年６月23日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県大船渡地方振興局土木部）



第１図　遺跡の位置



第２図　調査区位置図（１）

２　遺跡の位置と立地（第１・２図）

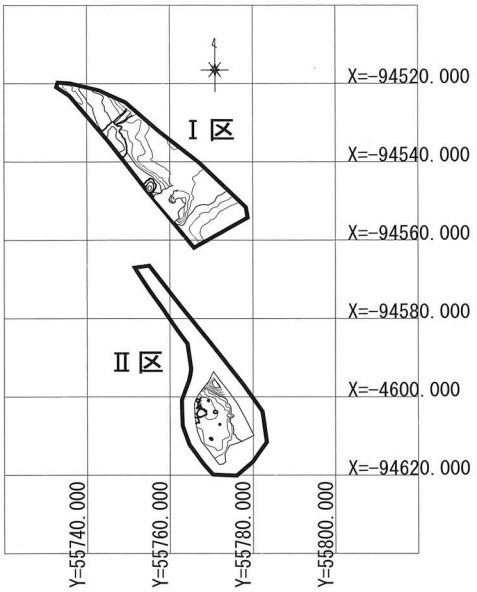
住田町役場から西に約8.5kmの場所にあり、大股川右岸の河岸段丘面上に立地している。標高は225～230mで現況は宅地、水田、畑地である。地権者によれば、国道397号線の整備に伴い、かつて比高差１～２m程度の段丘崖となっていた場所を、多量の土砂で埋め立てたと言う。今回の調査区は国道を挟んで２ヵ所（北側をⅠ区、南側をⅡ区と呼称）あり、そのうちⅡ区が埋め立てられた範囲の一部に相当する。Ⅱ区では道路面から約2.5mの深さで旧表土が確認された。測量用の基準点は、世界測地系第Ｘ系で、Ⅰ区に基準点A（X=－94523.000、Y=55744.000）、Ⅱ区に基準点B（X=－94607.000、Y=55772.000）を設置した。

Ⅱ区で確認された崖線ラインは標高226.000mで、Ⅰ区のⅢ層が堆積しているラインも226.000mである。遺構・遺物が密集するのは、226.000mよりも標高の高い範囲である。

なお、各調査区には地形面に沿うように大グリッド20×20m、小グリッド4×4mを設置して、遺物の取り上げを行っている（第４図）。

３　基本層序

堆積層は、Ⅰ区とⅡ区で大きく異なることはない。４層（Ⅰ～Ⅳ層）に大別し、さらに一部の堆積層については細分した。Ⅰ区では、Ⅰ層が厚く、Ⅱ・Ⅲ層が薄い。大股川沿いはⅠ層直下にⅣ層が堆積している。Ⅰ区内ではⅡa層内に崖錐性堆積物が多くみられることから、崖の崩落が起ったと考えられる。Ⅱ区では、厚いⅠ層を除去すると、Ⅱ層の堆積が30cm近く確認された。Ⅱ層は縄文土器・



第３図　調査区位置図（２）

石器を包含している。

Ⅰａ層　黒褐色土　20cm～50cm
（現代の耕作土）

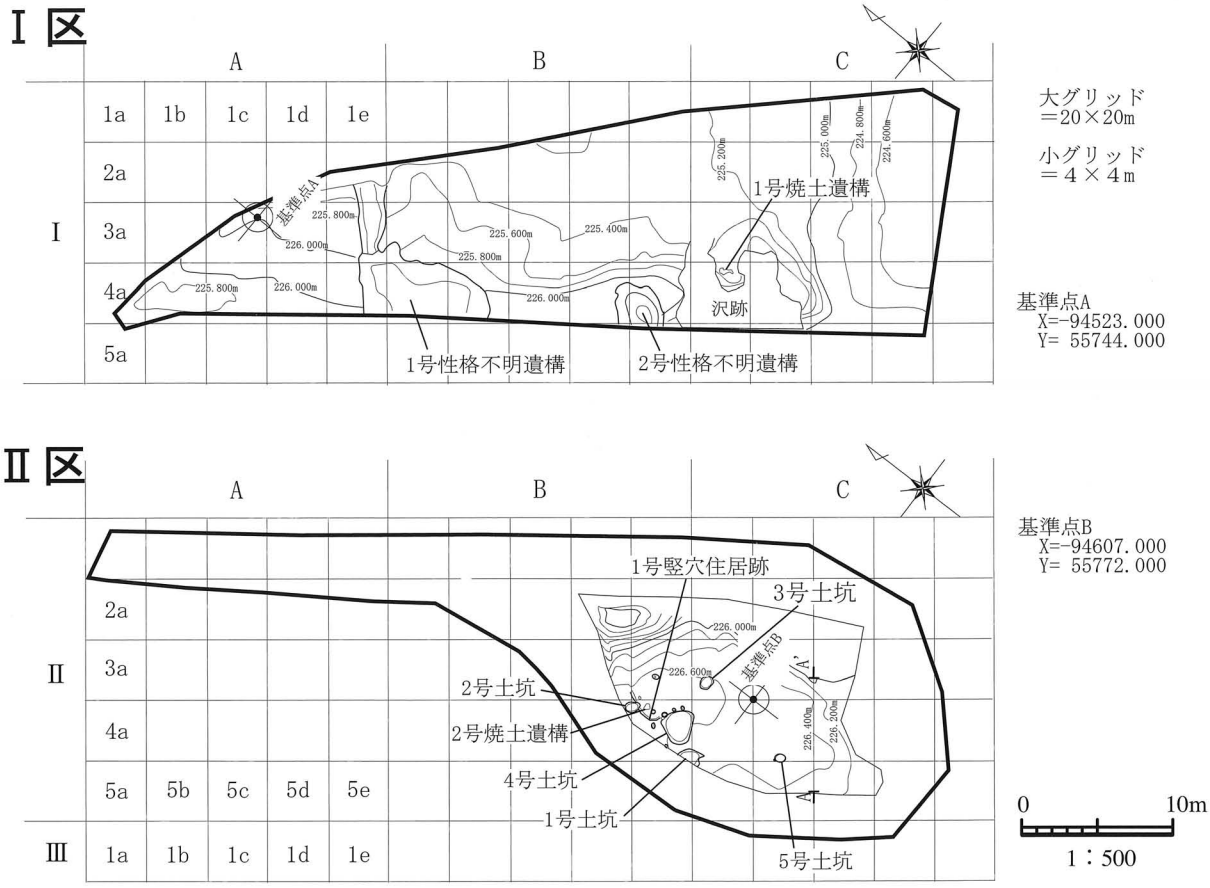
Ⅰｂ層　暗褐色土　250～300cm
（国道整備事業に伴う盛土）

Ⅱａ層　黒褐色土　10～30cm
（旧表土）遺物包含、下部にTo-Cuを微量包含する。

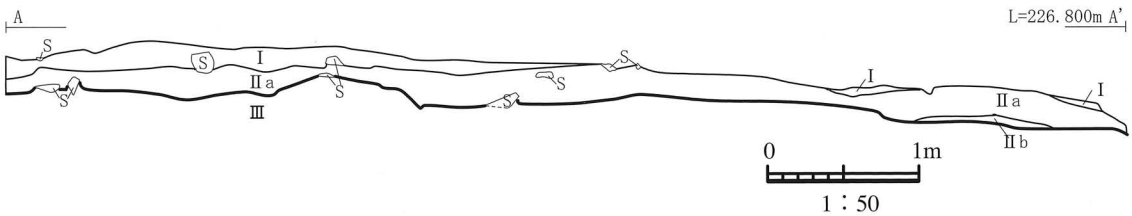
Ⅱｂ層　暗褐色土　10～15cm
（漸移層）遺物を少量包含する。

Ⅲ　層　黄褐色土　30～80cm　上面を最終遺構検出面とした。

Ⅳ　層　砂礫　　層厚不明



第４図　遺構配置図



第５図　Ⅱ区上層断面図

4　調査の概要

（1）遺構

縄文時代晩期の竪穴住居跡１棟、土坑４基、焼土遺構２基と、時期不明の性格不明遺構２基、土坑１基、柱穴状土坑８個を確認している。

１号竪穴住居跡

Ⅱ区のⅡB4eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。堆積層は薄く、また、試掘トレンチや国道整備時の盛土（Ⅱ層）の土圧と撹乱により、東半部は消失していた。弧状のプランの残存が確認された。残存部は平面規模2.90×0.90m、深さ24cmを測る。底面標高226.65m、底面面積1.35㎡である。住居範囲の堆積層は３層に細分される。１層は、Ⅰb層（盛土）の残存で、２層は、遺物を包含しⅡa層を起源とする。３層は、にぶい黄褐色土で硬く締まっており、床の硬化面の可能性がある。床面では、地床炉を1基検出した。炉の範囲は0.46×0.34mで厚さ５cmを測る。遺物は、破損した石鏃（87）と石錐（92）と三叉文を特徴とする晩期前葉の土器片（２）が床面上で出土し、堆積土下部からは、三叉文が施文される晩期前葉の注口土器の胴部片（１）、土製円盤（80）、石鏃（88）が出土している。堆積層と出土遺物から、１号竪穴住居跡は、縄文時代晩期前葉の所産である。

１号土坑

Ⅱ区のⅡB4eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。遺構範囲は調査区外へ延び、調査区内のプランは半円形である。平面規模1.56×0.82m、深さ33cmを測る。底面標高226.31m、底面面積0.65㎡である。堆積土は２層に分層される。２層ともに黒色シルトであるが、第１層には炭化物が微量含まれ、黄褐色土の混入量が少ない。遺物は第２層から縄文晩期の粗製土器（６）、三叉文の施文される土器（４）が出土している。底面出土遺物はないが、本遺構の堆積層が1号竪穴住居跡の第２層と類似することから、時期は縄文時代晩期前葉と考えられる。

２号土坑

Ⅱ区のⅡB4dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。楕円形プランである。平面規模0.94×0.70m、深さ20cmを測る。底面標高226.64m、底面面積0.32㎡。堆積土は単層で褐色土である。遺物は出土していない。1号竪穴住居跡の東壁を切る。時期は縄文時代の可能性もあるが、特に判断材料もなく不明である。

３号土坑

Ⅱ区のⅡC3aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。楕円形プランである。平面規模0.96×0.74m、深さ42cmを測る。底面標高226.20m、底面面積0.40㎡である。堆積土は黒色～黒褐色シルトで２層に分離した。第１層には炭化物が微量含まれ、黄褐色土混入量が少ない。堆積状況は１号土坑に類似する。遺物は、堆積土から微細剥離痕のある剥片と縄文土器片が出土している。堆積層が1号竪穴住居跡の第２層や１号土坑と類似することから、時期は縄文時代晩期前葉と考えられる。

４号土坑

Ⅱ区のⅡB4eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。不整形プランである。平面規模2.16×2.18m、深さ40cmを測る。底面標高226.34m、底面面積2.65㎡である。堆積土は３層に分離した。第１・２層は黒褐色土で、遺物を包含する。３層は、にぶい黄褐色土でⅢ層の崩落層と考えられる。遺物は堆積土から土製円盤（77～79）、肩部の張る形状の粗製土器（７）、晩期中葉の土器（10・12・13）、後期中葉の土器（８・11）、石鏃（90・91）、楔形石器（95）などが出土している。堆積層が1号竪穴住居跡の第２層や１号土坑と類似することから、時期は縄文時代晩期前葉と考えられる。本

遺構は、県教育委員会による試掘調査によって、プランが確認された。試掘トレンチ掘削によって、中央部の堆積土は若干薄くなったものの、遺構形状は残存していた。北壁が若干オーバーハングし、本遺構の周辺に柱穴状土坑が巡ることから、調査当初は木根痕跡の可能性も考慮した。しかし、底面はフラットで、根によるカクランの痕跡はなかった。焼土、遺構内の柱穴など、住居跡と認識可能な内部構成要素が確認できなかったため、土坑と捉えた。

５号土坑

Ⅱ区のⅡＣ4bグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。楕円形プランである。平面規模0.69×0.53m、深さ16cmを測る。底面標高226.14m、底面面積0.23㎡である。堆積土は黒色～黒褐色シルトで２層に分離した。第２層に黄褐色土の混入の量が多い。堆積状況は１号土坑に類似する。遺物は出土していない。時期は堆積層が1号竪穴住居跡の第２層や１号土坑と類似することから、縄文時代晩期前葉の可能性がある。

１号焼土遺構

Ⅰ区のⅠＣ4aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。燃土範囲は0.91×0.48m、焼土厚７cmを測る。焼土面標高225.98m、焼土範囲面積0.23㎡である。焼土は明赤褐色で、現地性である。焼土上から遺物は出土していないが、焼土から半径50cm以内のⅢ層上面では、晩期の粗製土器が出土している。周辺を沢跡によって削平されており、柱穴は確認できなかった。時期は遺物の分布状況から、縄文時代晩期の可能性がある。

２号焼土遺構

Ⅱ区のⅡＢ4eグリッドに位置する。Ⅱa層で検出した。燃土範囲は0.27×0.29mの中にモザイク状に分布する。焼土厚3cmを測る。焼土面標高226.730m、焼土範囲面積0.03㎡である。焼土は赤褐色である。１号竪穴住居跡内の炉跡と近接していることから、1号竪穴住居跡から外へ出された廃棄物の可能性も考えられる。形成時期は不明であるが、周辺の遺構と何らかの関係があるとすれば、縄文時代の所産である。

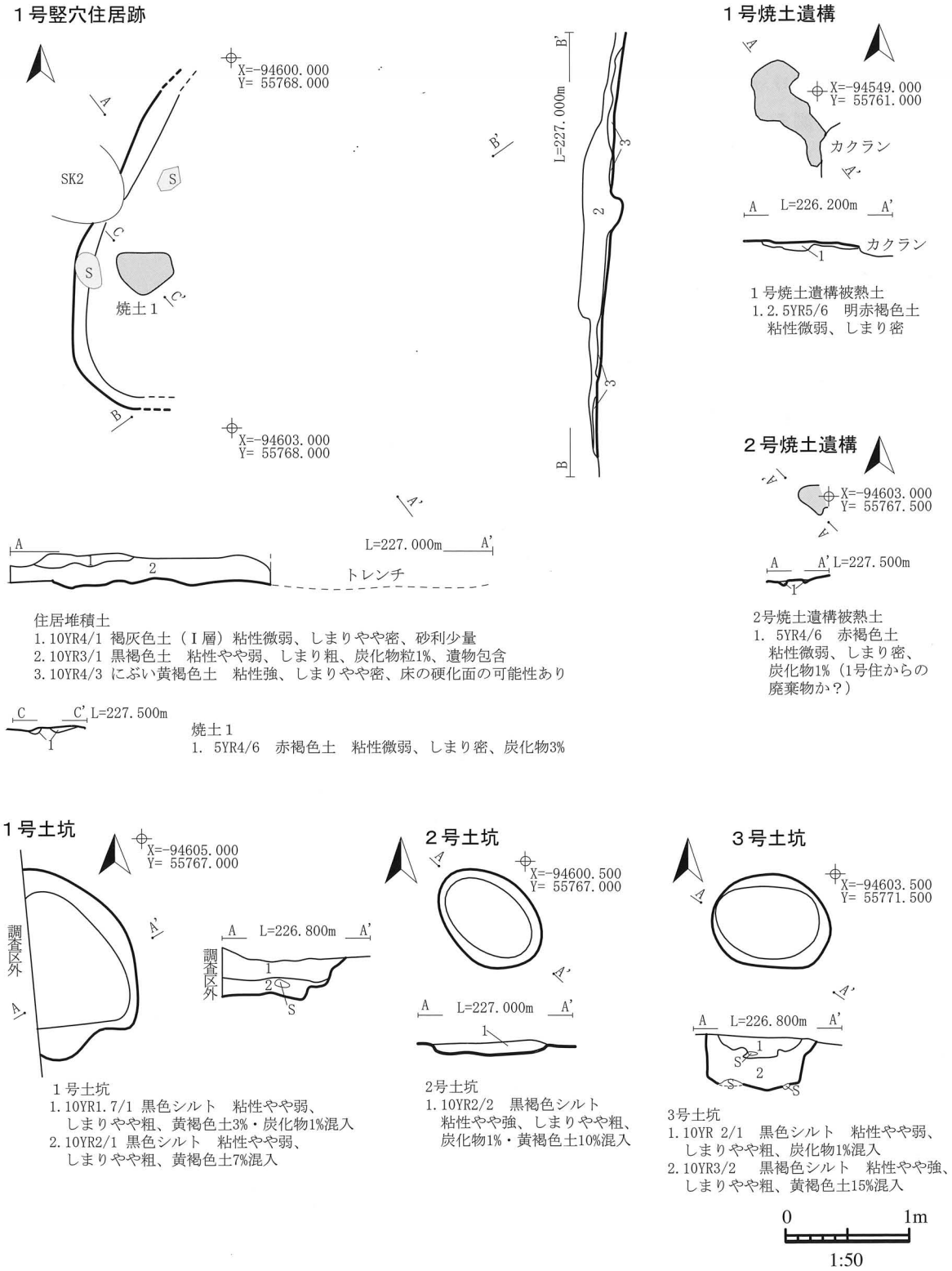
１号性格不明遺構

Ⅰ区のⅠＡ2eグリッドに位置する。南側をⅢ層上面、北側をⅣ層上面で検出した。北側の溝部と南側の半円形部で構成される。溝部は長4.52m、幅1.80m、深さ110cmで、半円形部は長軸8.36m、短軸4.84m、深さ121cmを測る。堆積土は上部が黒褐色シルトで、下部は洪水砂と考えられる細粒砂が混入する。本遺構は礫層を掘り込んで形成されている。形態的特徴は金採掘坑と類似する。遺物は堆積土内から、鉄滓、縄文土器、石器が出土している。周辺住民によると、かつてこの遺構で、砂金採取作業を行っていたとのお話をいただいた。また、本遺構に隣接する水車小屋では第２次大戦後頃には、大理石のような硬い石を先端に付けた杵があり、水車の動力で硬い物質を砕いていたという。これらの情報が正しいとすれば、本遺構の存続年代は昭和時代で、その用途は鉱物を含む土砂の洗浄・選別作業場であろう。住田町を含む気仙郡は、金採掘の盛んな土地であったため、本遺構が金採掘関連遺構である可能性は十分考えられる。今回の調査では、時期決定の根拠となる底面遺物が出土していないため、時期・用途とも不明とした。

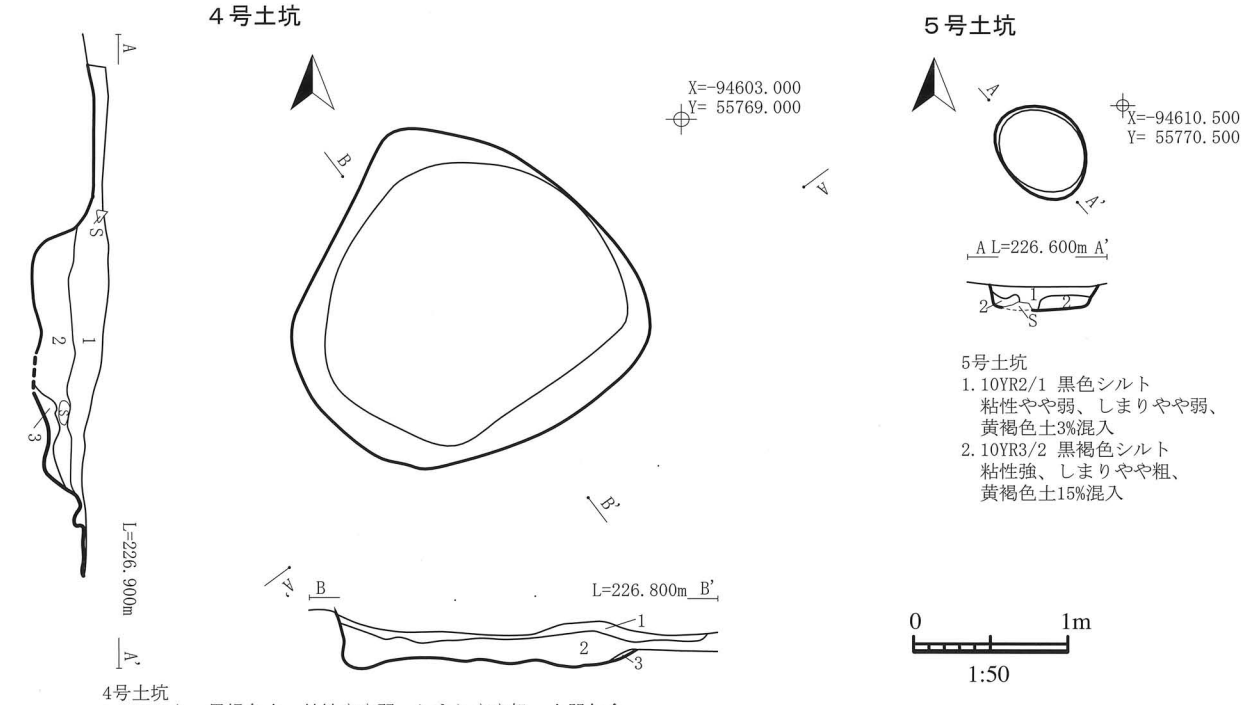
２号性格不明遺構

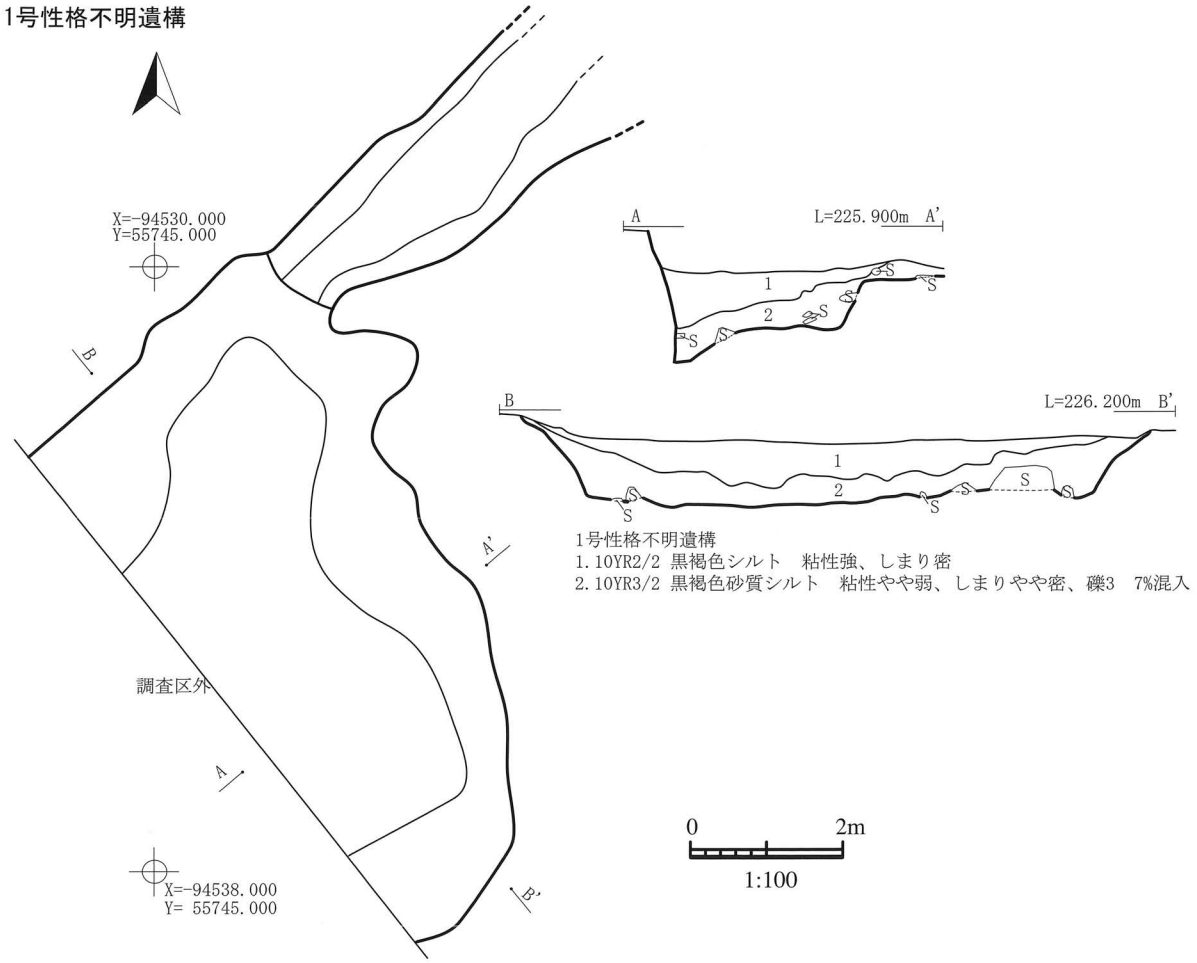
Ⅰ区のⅠＢ4dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。作業上の安全を考慮し、調査区上場から深さ1.8mのところで、掘削を終了したため、底面形状と遺構深度は把握していない。東西2.88m、南北3.02mを測る。堆積土は黒色土で、人頭大礫を多量に包含する。堆積層は、大形礫を使って埋め戻したことで形成されたと考えられる。本遺構は礫層を掘り込んでいることから、採掘坑であった

可能性が考えられるが、全体像が把握できないため、ここでは性格不明遺構として報告する。また、時期決定の根拠となる底面遺物は出土していないため、時期不明とする。



第6図　検出遺構（1）

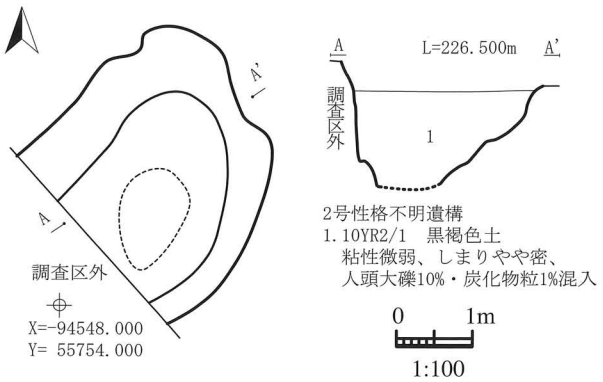

4号土坑
X=-94603.000
Y= 55769.000
L=226.900m
L=226.800m
5号土坑
X=-94610.500
Y= 55770.500
L=226.600m
5号土坑
1. 10YR2/1 黒色シルト
粘性やや弱、しまりやや弱、
黄褐色土3%混入
2. 10YR3/2 黒褐色シルト
粘性強、しまりやや粗、
黄褐色土15%混入
0
1m
1:50
4号土坑
1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや弱、しまりやや粗、土器包含
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱、しまりやや粗、土器包含、炭化物粒1%、黄褐色土粒2%混入
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性強、しまりやや密、炭化物粒1%混入


1号性格不明遺構
X=-94530.000
Y=55745.000
L=225.900m
L=226.200m
1号性格不明遺構
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性強、しまり密
2. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 粘性やや弱、しまりやや密、礫3 7%混入
調査区外
0
2m
1:100
X=-94538.000
Y= 55745.000

第7図 検出遺構（2）

（2）遺物

縄文土器・弥生土器（大コンテナ2.5箱:総重量38.93kg）、石鏃５点、石匙１点、石錐１点、楔形石器１点、微細剥離痕のある剥片１点、剥片･砕片（小コンテナ0.5箱）、磨製石斧１点、敲石２点、磨石１点、敲磨器１点、石製円盤２点、石棒３点、鉄滓７点が出土している。主にⅡa～Ⅱb層内から出土している。ほとんどの土器が、細片で、完形近くまで復元できる個体はなかった。



第８図　検出遺構（３）

土器は、早期の貝殻沈線文系土器（17・18）、後期前葉（19～26）、後期中葉～後葉の土器（27～33）、晩期前葉（34～38）、晩期中葉（39～70）、晩期後葉（71～74）、晩期末葉～弥生前期（75・76）が出土している。

石器は石鏃（87～91）、石錐（92）、石匙（93）、微細剥片痕のある剥片（94）、楔形石器（95）、石棒（98～100）、石製円盤（101・102）、磨製石斧（103）、磨石（104）、敲磨器（105）、敲石（106・107）などが出土している。

５　まとめ

今回の調査は、高屋敷Ⅱ遺跡範囲のうち、北側の縁辺部分が対象となった。住居跡、土坑、焼土遺構などが確認され、縄文時代後期～晩期にかけての集落跡と判明した。主にⅡ層から縄文土器・弥生土器、石器が出土している。また、時期不明の性格不明遺構は、金採掘に関連する遺構の可能性がある。気仙郡では陸前高田市古舘跡で採掘坑の調査事例がある。類似遺構の調査が蓄積されれば、気仙郡における採掘活動の様相を明らかにできるものと期待する。

なお、高屋敷Ⅱ遺跡平成21年度調査に関わる報告はこれをもってすべてとする。

＜引用・参考文献＞

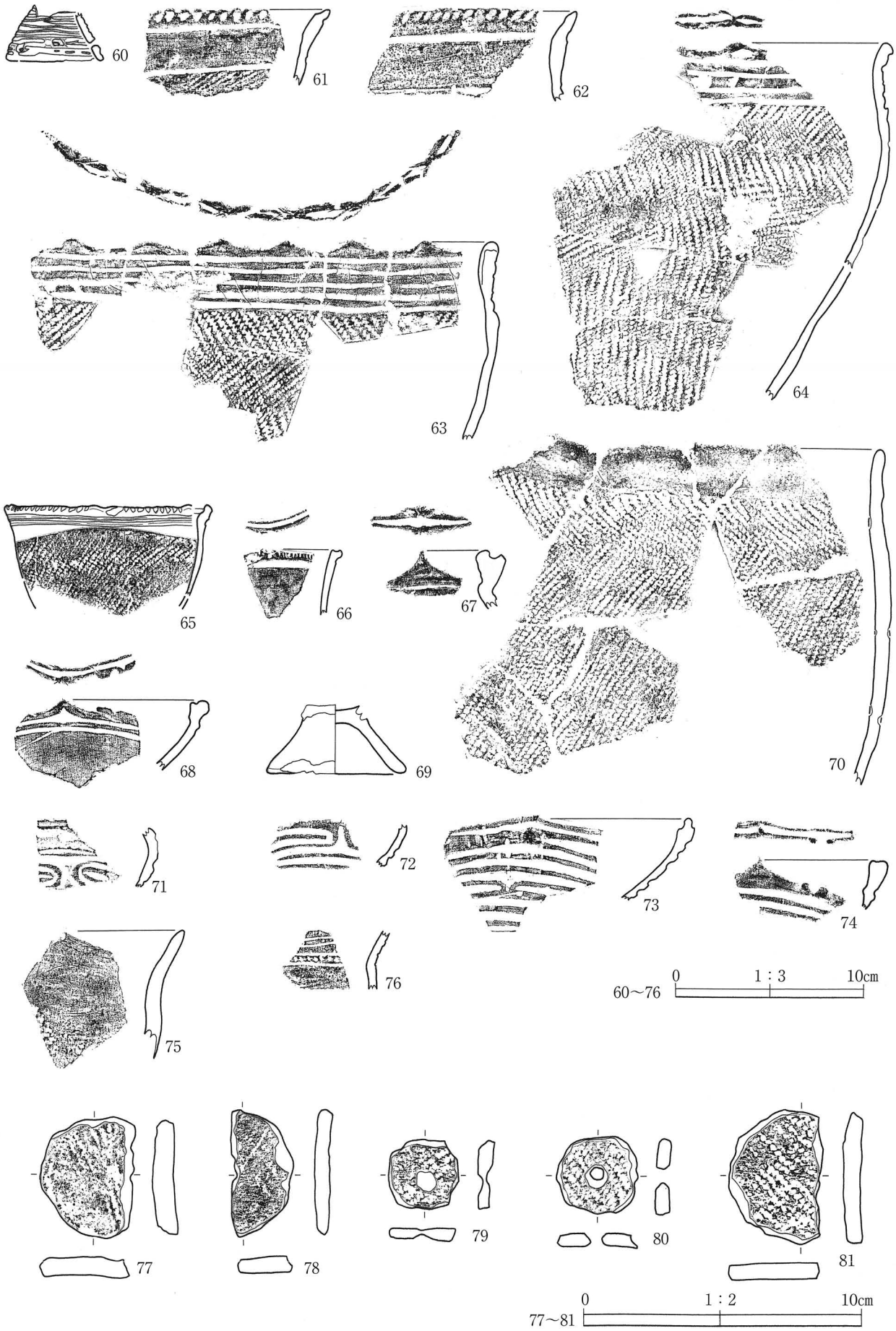
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2007『里古屋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第499集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2009「子飼沢Ⅱ遺跡」『平成20年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集

第９図　出土遺物（１）

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
1：3
10cm

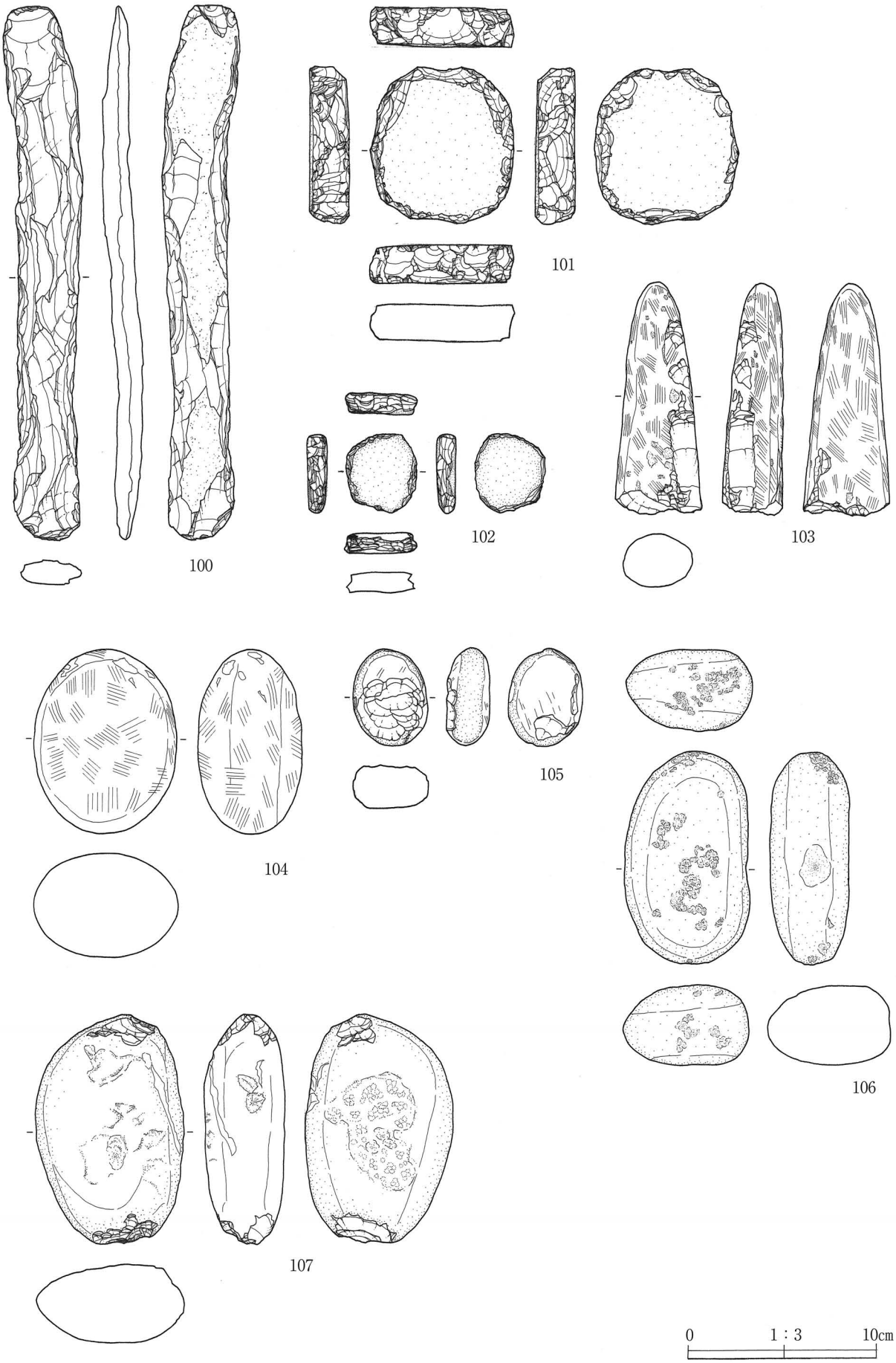
第10図　出土遺物（2）


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
60～76
0
1：3
10cm
77
78
79
80
81
77～81
0
1：2
10cm

第11図　出土遺物（3）

82
83
84
85
86
82～86
0
1：2
10cm
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
87～97
0
2：3
5cm
98・99
0
1：3
10cm

第12図　出土遺物（4）



第13図　出土遺物（5）

第1表　遺物観察表

No	種別	器種・部位	時期	位置・層位	調整・特徴・備考
1	縄文土器	注口土器・胴部	晩期前葉	1号竪穴住居・ 堆積土下部	三叉文、沈線、内外面ミガキ、 胴部最大径17.1cm
2	縄文土器	鉢類・口縁	晩期前葉	1号竪穴住居・ 床面	三叉文、沈線、口唇部刻目、 LRヨコ、外面ミガキ
3	縄文土器	深鉢・ 口縁～胴部	晩期前葉	1号竪穴住居・床面 3号土坑・堆積土	口縁4単位、RLRヨコ、外面上部スス付着
4	縄文土器	鉢類・口縁	晩期前葉	1号土坑・2層	口縁小突起、入組三叉文、沈線
5	縄文土器	鉢類・胴部	後期中葉	1号土坑・1層	LRタテ・ヨコ、沈線、外面ミガキ
6	縄文土器	鉢類・胴部	晩期	1号土坑・2層	RLタテ
7	縄文土器	壺・ 口縁～胴部	晩期	4号土坑・2層	LRヨコ
8	縄文土器	鉢類・胴部	後期中葉	4号土坑・1層	帯縄文、沈線、外面ミガキ
9	縄文土器	・胴部？	後晩期	4号土坑・堆積土	有孔
10	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	4号土坑・ 堆積土下部	多重沈線、ミガキ
11	縄文土器	鉢類・口縁	後期中葉	4号土坑・ 堆積土下部	波状口縁、RLタテ・ヨコ、沈線、磨消、 補修孔？
12	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	4号土坑・2層	口唇部刻目、沈線
13	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	4号土坑・2層	LRヨコ、沈線、内外面ミガキ
14	縄文土器	深鉢・底部	後期	1号不明遺構・ 1層	底径7.70cm
15	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	1号不明遺構・ 1層	多重沈線、口唇刻目
16	縄文土器	鉢類・口縁	後期前葉	2号不明遺構・ 1層	波状口縁、刺突列、平行沈線、 弥生土器？
17	縄文土器	深鉢・胴部	早期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	貝殻腹縁文、沈線
18	縄文土器	深鉢・口縁	早期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	貝殻腹縁文、沈線
19	縄文土器	深鉢・口縁	後期前葉	ⅡC3a・Ⅱa層	隆帯、刺突、沈線
20	縄文土器	壺？・胴部	後期前葉	ⅡC3b・Ⅱa層	沈線
21	縄文土器	壺？・胴部	後期前葉	ⅡC3a・Ⅱa層	沈線
22	縄文土器	深鉢・胴部	後期前葉	Ⅱ区・カクラン	沈線、RLヨコ、磨消
23	縄文土器	深鉢・口縁	後期前葉	ⅡC4b・Ⅱa層	沈線、刺突、Rヨコ、磨消
24	縄文土器	深鉢・胴部	後期前葉	ⅡC5b・Ⅱa層	沈線、R、磨消
25	縄文土器	深鉢・胴部	後期前葉	Ⅱ区・Ⅱb層	LRヨコ、沈線、磨消
26	縄文土器	深鉢・胴部	後期	ⅡC4c・Ⅱa層	木目状撚糸文R
27	縄文土器	深鉢・胴部	後期中葉	ⅠA4b・Ⅱb層	LR帯縄文、沈線
28	縄文土器	深鉢・胴部	後期中葉	ⅠA4b・Ⅱb層	LRヨコ、沈線、内外面ナデ
29	縄文土器	深鉢・胴部	後期中葉	ⅠB3e・Ⅱb層	沈線、RLタテ・ヨコ
30	縄文土器	鉢類・胴部	後期中葉	ⅠC4a・Ⅱc層	LR、RLヨコ、沈線
31	縄文土器	・底部	後期中葉	Ⅱ区・Ⅰ層	RL
32	縄文土器	深鉢・口縁	後期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	LR、RL、羽状縄文、器面摩耗
33	縄文土器	深鉢・胴部	後期後葉	ⅡC4b・Ⅱa層	沈線、刺突
34	縄文土器	鉢類・口縁	晩期前葉	ⅡC4C・Ⅱa層	三叉文、LRヨコ、沈線、磨消
35	縄文土器	鉢類・口縁	晩期前葉	ⅡB4e・Ⅱa層	三叉文、沈線、帯縄文、磨消
36	縄文土器	鉢類・口縁	晩期前葉	ⅡC4b・Ⅱa層	LRヨコ、沈線、羊歯状文、内面ミガキ、磨消
37	縄文土器	鉢類・口縁	晩期前葉	ⅡC5c・Ⅲ層	LRヨコ？、沈線、羊歯状文、磨消
38	縄文土器	ミニチュア？ ・胴部	晩期前葉	ⅡC4b・Ⅱa層	沈線、三叉文?
39	縄文土器	浅鉢・口縁	晩期中葉	Ⅱ区・Ⅱb層	LRヨコ？、沈線、内外面ミガキ、 スス・コゲ付着
40	縄文土器	壺・胴部	晩期中葉	ⅠA4b・Ⅱb層	沈線、器面摩耗
41	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅡC5b・Ⅱa層	口唇部刻目、LRヨコ、沈線、内外面ミガキ
42	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅡC4a・Ⅱa層	LRヨコ、沈線、内外面ミガキ
43	縄文土器	浅鉢？注口？ ・胴部	晩期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	LR？、沈線、磨消
44	縄文土器	壺・胴部	晩期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	LR、沈線、磨消
45	縄文土器	台付鉢・ 口縁～底部	晩期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	LRヨコ、沈線、匹字状文、口唇刻目、磨消、 口径12.1cm、底径7.65cm、器高11.05cm
46	縄文土器	壺・頸部	晩期中葉	ⅠC2a・Ⅲ層	隆帯、沈線、外面ミガキ
47	縄文土器	注口：注口部	晩期中葉	ⅠC1c・Ⅱb層	隆帯上に刻目
48	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅠA4b・Ⅱb層	多重沈線間に刻目、LR、RL、磨消
49	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅠC1c・Ⅱa層	沈線間に刻目、内外面ミガキ
50	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅡC4a・Ⅱa層	LRヨコ、沈線間に刻目、磨消
51	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅠA4c・Ⅱb層	RLタテ、沈線、口唇部刺突
52	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅡC3b・Ⅱa層	LRヨコ、多重沈線、器面摩耗
53	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅡC4c・Ⅱa層	LRヨコ、沈線、口唇刻目、磨消
54	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅡC4c・Ⅱa層	LRタテ、多重沈線、口唇刻目
55	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅠC1a・Ⅱa層	器面摩耗、多重沈線、口唇突起

No	種別	器種・部位	時期	位置・層位	調整・特徴・備考
56	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅡB3e・Ⅱa層	器面摩耗、LRヨコ、多重沈線、口唇刻目
57	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅠA4b・Ⅱb層	多重沈線、口唇刻目
58	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅠA4c・Ⅱb層	多重沈線、口唇突起
59	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅠA4c・Ⅱb層	LRヨコ、多重沈線、口唇刻目
60	縄文土器	台付鉢・底部	晩期中葉	ⅠB3e・Ⅱb層	多重沈線、有孔
61	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	Ⅱ区・Ⅱa層	LRヨコ、沈線、磨消、口唇刻目
62	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅠA4b・Ⅱb層	沈線、口唇刻目
63	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	RL、LR、多重沈線、波状口縁
64	縄文土器	深鉢・口縁	晩期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	RL、LR、多重沈線、波状口縁
65	縄文土器	鉢・口縁	晩期中葉	ⅡC4b・Ⅱa層	LRヨコ、沈線、口唇刻目
66	縄文土器	壺・口縁	晩期中葉	ⅡC4c・Ⅱa層	口唇刻目、内外面ミガキ
67	縄文土器	鉢類・口縁	晩期中葉	ⅡB3e・Ⅱa層	口唇沈線、口唇突起
68	縄文土器	浅鉢・口縁	晩期中葉	ⅡC3a・Ⅱa層	沈線、内外面ミガキ
69	縄文土器	台付鉢・口縁	晩期中葉	ⅠC4b・Ⅰc層	ミガキ
70	縄文土器	鉢類・ 口縁～胴部	晩期中葉	ⅡC3c・Ⅱa層 ⅡC4b・Ⅱa層	LRタテ、RLタテ
71	縄文土器	鉢類・胴部	晩期後葉	ⅠA4b・Ⅱa層	沈線、匹字文
72	縄文土器	鉢類・胴部	晩期後葉	ⅠC4c・Ⅱb層	沈線、工字文
73	縄文土器	鉢類・口縁	晩期後葉	ⅡC4b・Ⅱa層	沈線、工字文、突起、内外面ミガキ
74	縄文土器	鉢類・口縁	晩期後葉	ⅠC3a・Ⅱb層	沈線、突起
75	縄文土器	鉢類・口縁	晩期末葉	ⅡC3c・Ⅱa層	RLタテ？、磨消
76	弥生土器	鉢類・口縁	弥生前期	ⅡC4a・Ⅱa層	沈線、刺突
77	土製品	円盤	縄文後晩	4号土坑・1層	撚糸R、長4.3cm、幅3.4cm、厚0.8cm、重量13.2g
78	土製品	円盤	縄文後晩	4号土坑・1層	長4.6cm、幅2.3cm、厚0.6cm、重量4.3g
79	土製品	円盤	縄文後晩	4号土坑・1層	RL、穿孔途中、長2.6cm、幅2.5cm、厚0.6cm、 重量4.3g
80	土製品	円盤	縄文晩期	1号竪穴住居・ 堆積土下部	RL、有孔、長2.8cm、幅2.9cm、厚0.6cm、 重量5.1g
81	土製品	円盤	縄文後晩	ⅡC4a・Ⅱa層	LR、長4.9cm、幅3.3cm、厚0.7cm、重量13.4g
82	土製品	円盤	縄文後晩	ⅡC4a・Ⅱa層	RL、長4.4cm、幅3.7cm、厚0.9cm、重量16.1g
83	土製品	円盤	縄文後晩	ⅡB4d・Ⅱa層	R、沈線、長3.6cm、幅3.9cm、厚0.8cm、 重量13.1g
84	土製品	円盤	縄文後晩	ⅡB4d・Ⅱa層	RL、長2.1cm、幅3.8cm、厚0.6cm、重量4.5g
85	土製品	円盤	縄文後晩	Ⅱ区・Ⅰ層	LR、有孔、長4.6cm、幅3.0cm、厚0.6cm、 重量5.9g
86	土製品	円盤	縄文後晩	Ⅱ区・Ⅱa層	LR、有孔、長2.9cm、幅2.7cm、厚0.6cm、 重量4.8g
87	石器	石鏃	縄文晩期	1号住居・床面	長1.8cm、幅1.4cm、厚0.5cm、重量0.6g、頁岩製
88	石器	石鏃	縄文晩期	1号竪穴住居・床面	長1.8cm、幅1.5cm、厚0.6cm、重量1.0g、 メノウ製
89	石器	石鏃	縄～弥	ⅡC4b・Ⅱa層	長3.1cm、幅1.5cm、厚0.5cm、重量1.4g、 頁岩製
90	石器	石鏃	縄～弥	4号土坑・2層	長2.5cm、幅1.2cm、厚0.4cm、重量0.7g、 頁岩製、アスファルト付着
91	石器	石鏃	縄～弥	4号土坑・2層	長3.1cm、幅1.8cm、厚0.5cm、重量1.3g、 頁岩製、アスファルト付着
92	石器	石錐	縄文晩期	1号竪穴住居・床面	長5.3cm、幅1.55cm、厚0.6cm、重量2.1g、頁岩製
93	石器	石匙	縄～弥	Ⅱ区・Ⅱb層	長2.3cm、幅3.1cm、厚0.6cm、重量2.3g、頁岩製
94	石器	微細剥離痕 ある剥片	縄～弥	3号土坑・ 堆積土	長4.9cm、幅4.4cm、厚1.4cm、重量28.0g、頁岩製
95	石器	楔形石器	縄～弥	4号土坑・1層	長4.9cm、幅4.1cm、厚1.4cm、重量23.3g、頁岩製
96	石器	剥片	縄～弥	ⅡC3c・Ⅱa層	長3.1cm、幅2.0cm、厚1.4cm、重量6.1g、黒曜石製
97	石器	剥片	縄～弥	ⅡC3a・Ⅱa層	長1.9cm、幅1.6cm、厚0.8cm、重量6.1g、 黒曜石製
98	石製品	石棒	縄～弥	ⅠB4c・Ⅱb層	長8.8cm、幅3.2cm、厚2.7cm、重量102.3g、頁岩製
99	石製品	石棒	縄～弥	1号不明遺構・ 1層	長16.2cm、幅3.2cm、厚1.3cm、重量96.8g、 頁岩製
100	石製品	石棒	縄～弥	Ⅱ区・Ⅰ層	石刀未製品、長28.2cm、幅3.6cm、厚1.5cm、 重量215.6g、頁岩製
101	石器	円盤	縄～弥	ⅡC4b・Ⅱa層	長8.3cm、幅7.6cm、厚2.1cm、重量249.9g、頁岩製
102	石器	円盤	縄～弥	4号土坑・1層	長4.2cm、幅3.8cm、厚1.1cm、重量27.5g、頁岩製
103	石器	磨製石斧	縄～弥	ⅠC4a・Ⅰ層	長12.3cm、幅4.6cm、厚3.2cm、重量231.7g、砂岩製
104	石器	磨石	縄～弥	ⅠB4e・Ⅱb層	長9.8cm、幅7.65cm、厚5.5cm、重量603.2g、安山岩製
105	石器	敲磨器	縄～弥	ⅡC4b・Ⅱa層	長5.1cm、幅3.9cm、厚2.3cm、重量69.7g、安山岩製
106	石器	敲石	縄～弥	ⅠC4a・Ⅱa層	長11.3cm、幅6.8cm、厚4.2cm、重量476.3g、安山岩製
107	石器	敲石	縄～弥	ⅡC4c・Ⅱa層	長12.1cm、幅7.9cm、厚4.3cm、重量559.2g、砂岩製

調査区現況

調査区完掘（Ⅱ区埋め戻し終了後）

Ⅱ区Ⅱa層遺物出土状況

Ⅱ区土層断面（A－A'）

1号竪穴住居跡全景

1号竪穴住居跡断面（B－B'）

1号竪穴住居跡断面（A－A'）

1号竪穴住居跡焼土1全景

写真図版1　検出遺構（1）

1号土坑断面

1号土坑全景

2号土坑断面

2号土坑全景

3号土坑断面

3号土坑全景

4号土坑断面（B－B'）

4号土坑全景

写真図版２　検出遺構（２）

5号土坑断面

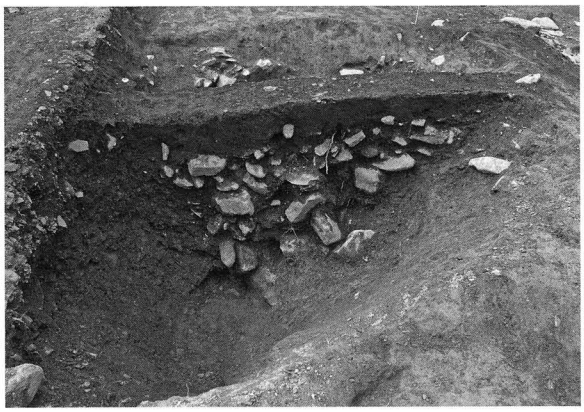
5号土坑全景

1号焼土遺構断面

1号焼土遺構全景

1号性格不明遺構断面（A－A'）

1号性格不明遺構全景



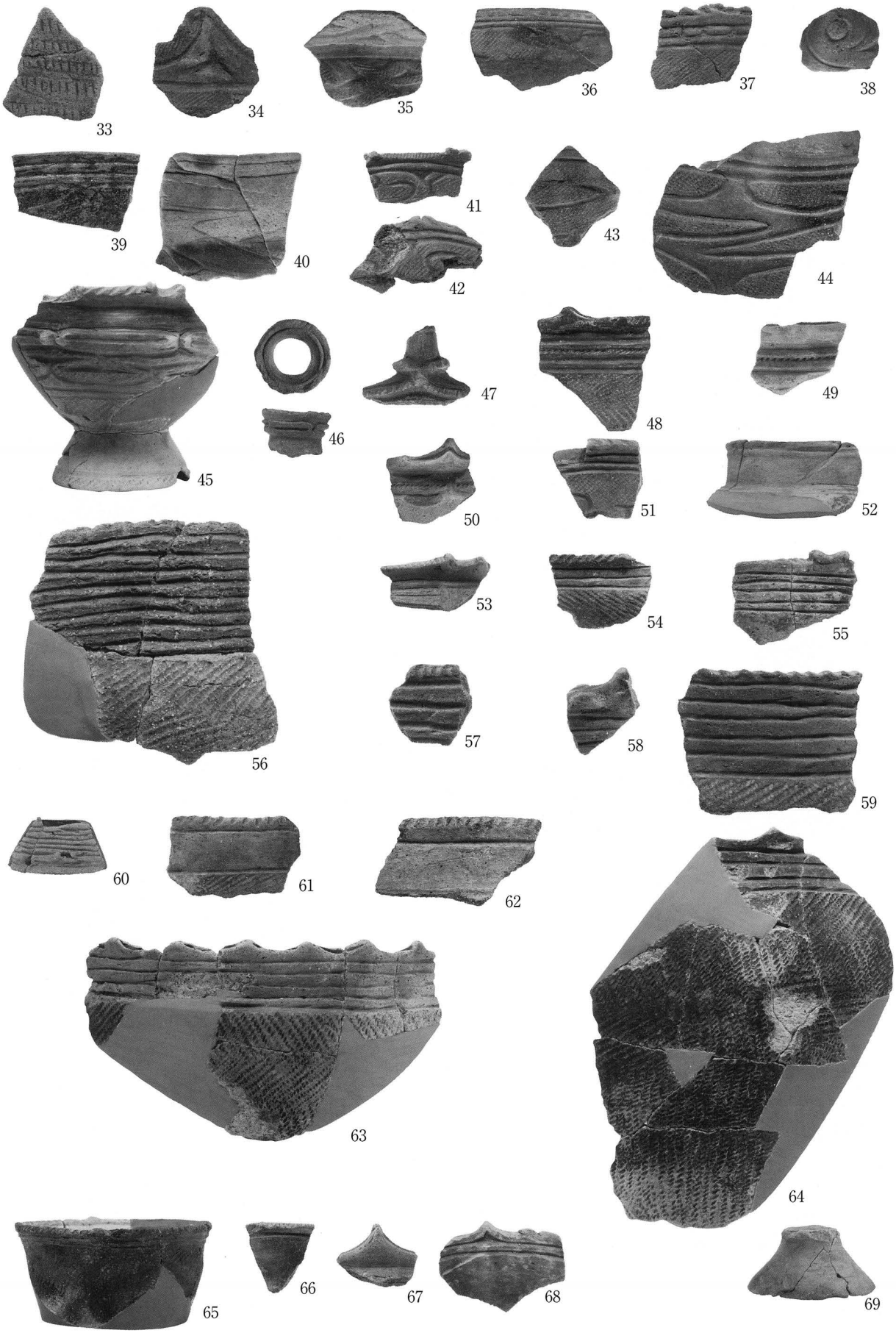
2号性格不明遺構断面

2号性格不明遺構全景

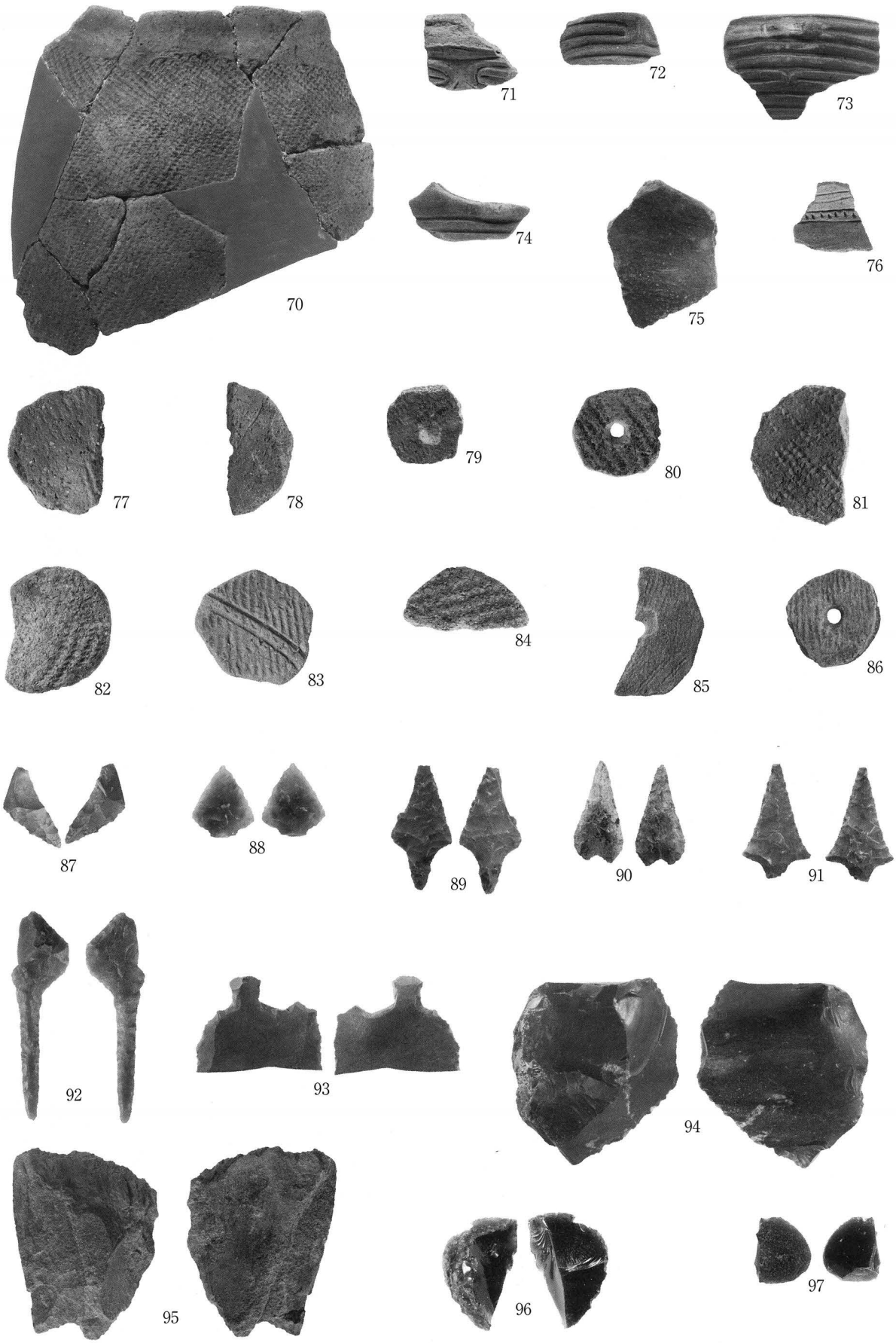
写真図版3　検出遺構（3）

1
2
4
5
3
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

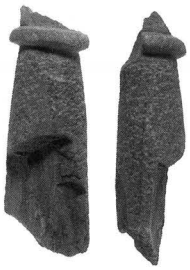
写真図版４　出土遺物（１）

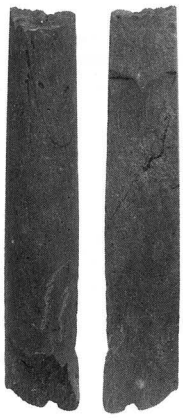

33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69

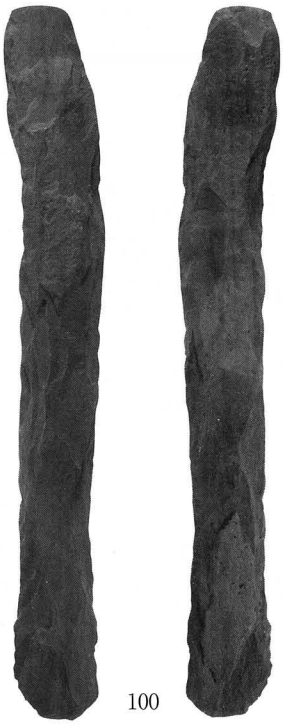
写真図版５　出土遺物（２）

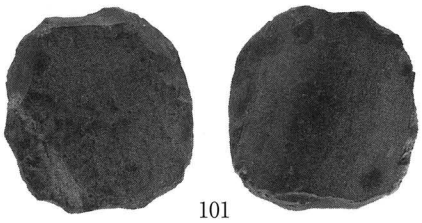

70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97

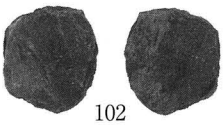
写真図版６　出土遺物（３）

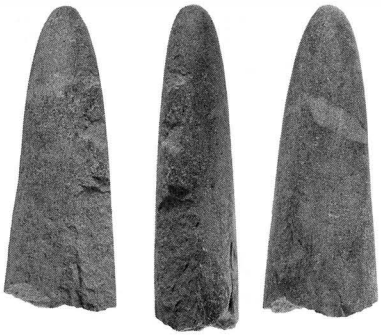

98

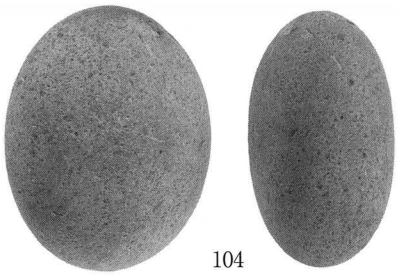

99


100

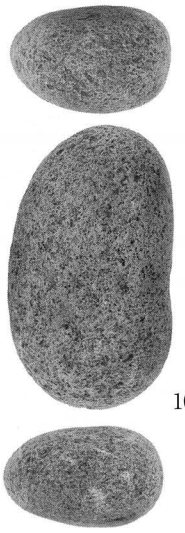

101


102


103


104

105


106

107

写真図版７　出土遺物（４）

（9）八幡（はちまん）遺跡

所在地	奥州市前沢区白山字八幡91ほか	**遺跡ｺｰﾄﾞ・略号**	ＮＥ46－2317・ＨＭ－09
委託者	県南広域振興局農林部農村整備室	**調査対象面積**	800㎡
事業名	経営体育成基盤整備事業白山地区	**調査終了面積**	800㎡
発掘調査期間	平成21年５月１日～５月29日	**調査担当者**	北田　勲・小林弘卓

1　調査に至る経過

八幡遺跡は、経営体育成基盤整備事業白山地区の施工に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

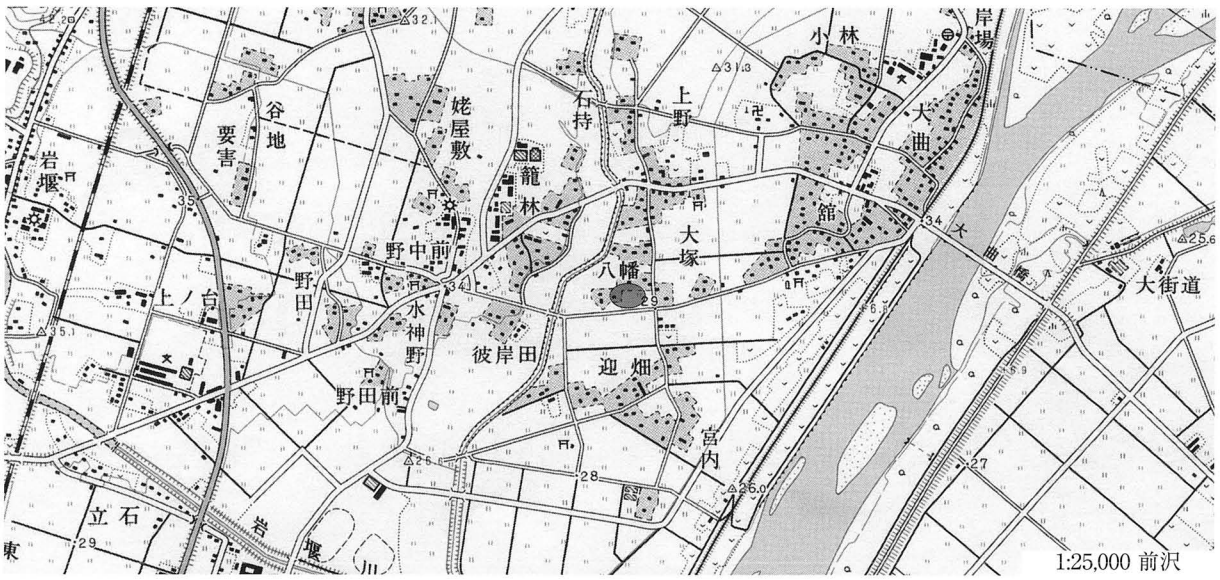
本地区は、前沢区白山地区の約270haをほ場整備するもので、大部分は昭和29年～31年の非補助土地改良事業により10a区画に整備されているが、農道幅員が２～３ｍと狭小で農作業の効率が悪く、水路は用排兼用土水路のため用水不足や排水不良をきたし維持管理に多大な労力を投じている現状であった。そのため本事業により営農規模拡大を目指した大区画ほ場とし、作業体系の受委託および農地の流動化を促進し経営規模拡大による担い手農家の育成を図ると共に、生産コスト低減のための整備を行ない近代農業化による農業経営の安定を期すため、平成12年度に採択され事業を実施している。

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農林部農村整備室から、平成20年10月27日付け県南広農整第141-6号（八幡遺跡）により岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼した。

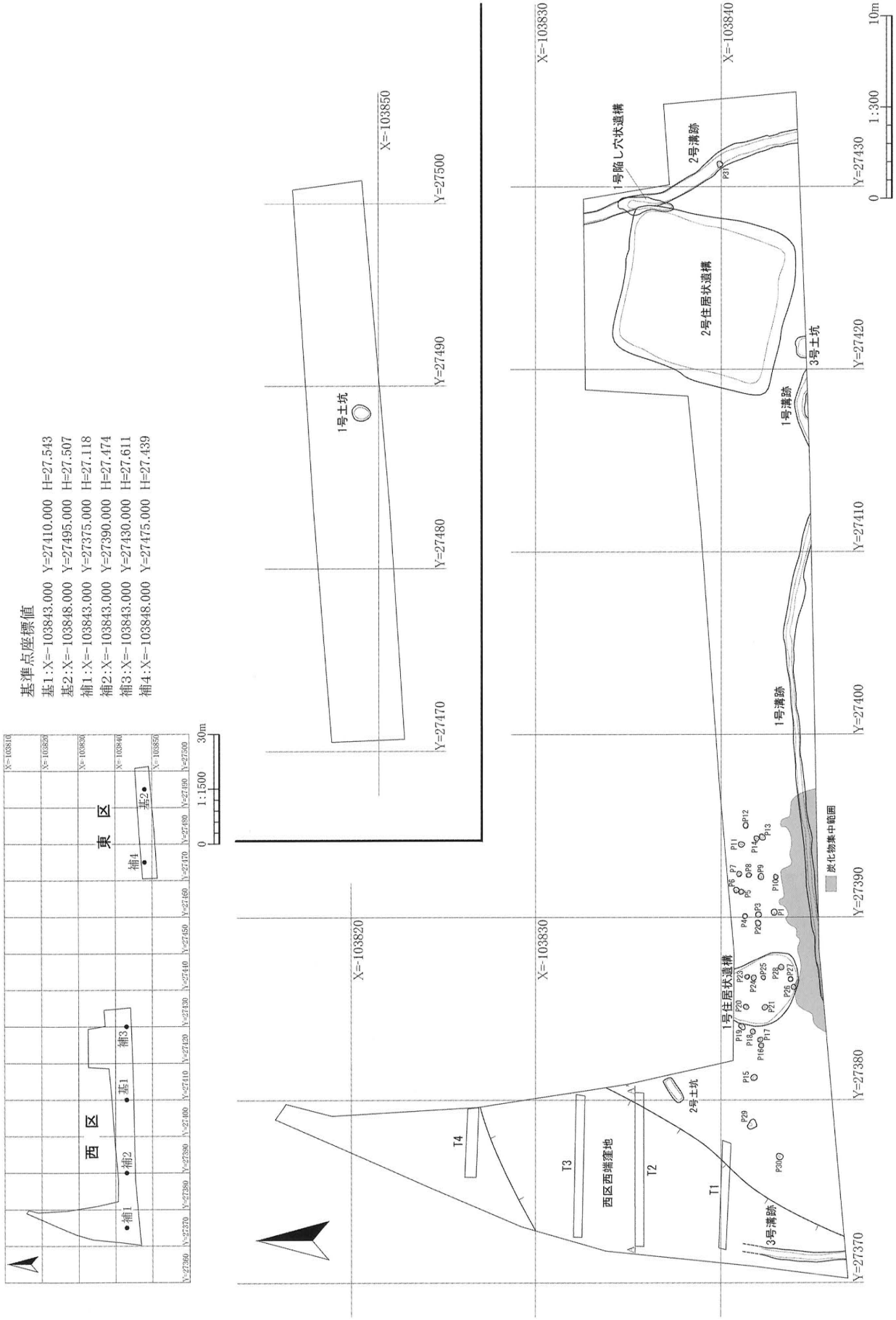
依頼を受けた県教育委員会では平成20年11月４日～６日に試掘調査を実施し、工事着手するには発掘調査が必要となる旨を平成20年12月４日付け教生第1157号（八幡遺跡）により当農村整備室へ回答した。

その結果を踏まえて当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターとの間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農林部農村整備室）



第１図　遺跡の位置


基準点座標値
基1:X=-103843.000 Y=27410.000 H=27.543
基2:X=-103848.000 Y=27495.000 H=27.507
補1:X=-103843.000 Y=27375.000 H=27.118
補2:X=-103843.000 Y=27390.000 H=27.474
補3:X=-103843.000 Y=27430.000 H=27.611
補4:X=-103848.000 Y=27475.000 H=27.439
西区
東区
補1
補2
補3
補4
基1
基2
1:1500
30m
1号土坑
2号土坑
3号土坑
1号陥し穴状遺構
2号溝跡
2号住居状遺構
1号溝跡
3号溝跡
1号住居状遺構
西区西端窪地
炭化物集中範囲
T1
T2
T3
T4
1:300
10m
X=-103820
X=-103830
X=-103840
X=-103850
Y=27500
Y=27490
Y=27480
Y=27470
Y=27430
Y=27420
Y=27410
Y=27400
Y=27390
Y=27380
Y=27370

第２図　遺構配置図

２　遺跡の位置と立地

八幡遺跡は、奥州市役所前沢支所の北東方向約2.8㎞に位置し、北上川右岸の低位段丘上にあり、遺跡西側を流れる明後沢川によって開析されている。標高は27～28m前後、現況は水田･畑地である。

３　基本層序

調査区内の基本層序はⅠ～Ⅵ層に分層される。Ⅰa層は褐灰色粘土や黒褐色土の現耕作土（表土）10～40㎝、Ⅰb層は暗褐色土と黄褐色粘土の混合する盛土20～40㎝、Ⅱ層暗褐色の旧表土10～30㎝、Ⅲ層暗褐色土10～30㎝、Ⅳ層黄褐色粘土の地山（遺構検出面）50～80㎝、Ⅴ層褐灰色砂・層厚不明、Ⅵ層岩盤・層厚不明である。

４　調査の概要

調査区は農道を挟んで２箇所あり、西区、東区の２つに区分している。現況は西区北西端及び東区が水田、西区の大半が畑地で周囲よりも高位である。水田部分の削平は著しく、造成時の影響を受けている。反対に畑地部分は全体に盛土がなされており遺存状況は良好である。

今回の調査で確認された遺構は、住居状遺構２棟、土坑３基、陥し穴状遺構１基、溝跡３条、柱穴状ピット（Ｐと略号を付した）30個である。このほか、西区西側において縄文時代の遺物が集中する窪地状の低位部分と、炭化物が集中して広がる部分を確認した。

（１）遺構

１号住居状遺構（第３図、写真図版２）

西区西側に位置する。北側が削平されているため全容は不明だが、平面形は不整な円形を呈しており、規模は3.5×(3.8)mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は15㎝が残存する。堆積土は３層に細分したが、黒褐色土が主体となっている。床面はⅣ層土となり概ね平坦で堅く締まるが、炉などの床面施設は確認されなかった。出土遺物は大半が剥片石器であり、縄文時代に属すると思われる。

２号住居状遺構（第４図、写真図版３）

西区東側に位置する。１号陥し穴状遺構・２号溝跡と重複が認められる。断面状況から１号陥し穴状遺構より新期と判断できるが、２号溝跡との新旧関係については判断が付かなかった。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は一辺約8.0～8.8mを測る。壁は床面から直角に近い角度で立ち上がり、上半部で崩落のため外傾する。壁高は最大で約75㎝が残存する。堆積土は13層に細分されるが、黄褐色を主体した壁際の崩落土と自然流入した黒褐色土に大別できる。流入時に水分が多かったためか粘土質で土色が変性している。床面はⅤ層土となり、平坦で堅く締るが、砂質であり地下水位が高いためか水分を多く含む。北西隅にピット１を確認したが、その他に床面施設は認められなかった。出土遺物は土師器や須恵器が主であるが、床面からの出土はほとんどなく大半が１～３層の流入土に含まれている。遺構形状や出土遺物から平安時代の構築と推測される。

１号土坑（第５図、写真図版４）

東区中央に位置する。平面形・規模は径0.9～1.0mの円形を呈する。断面形は鍋底形で副穴を伴っている。深さは最深部で44㎝を測る。堆積土は４層に細分される自然堆積土と思われる。出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

２号土坑（第５図、写真図版４）

西区西側に位置する。平面形・規模は約1.5×0.5mの長方形を呈する。断面形は逆台形状で、深さは最深部で36㎝を測る。堆積土は２～４層は壁崩落土、１層は流入土で自然堆積と考えられる。遺物は堆積土中より土師器片が数点出土している。平安時代に属する可能性がある。

３号土坑（第５図、写真図版４）

西区東側に位置する。調査区外に掛かるため全容は不明だが、径約1.2mの円形を呈するものと思われる。断面形は皿形で、深さは最深部で32cmを測る。いずれの堆積土にも廃棄焼土を含む黒褐色土主体で、人為堆積の可能性がある。遺物は堆積土中から土師器片が数点出土している。平安時代に属する可能性がある。

１号陥し穴状遺構（第５図、写真図版４）

西区東側に位置する。２号住居状遺構と２号溝跡と重複し、これらの精査中に検出した。断面状況から両者よりも旧期と判断される。平面形は溝形で北側は崩落の影響で変形している。規模は3.0×0.7mである。断面形はU字状となり、深さ48cmを測る。堆積土は５層に細分される自然堆積土と考えられる。出土遺物はなく時期不明であるが、形状から縄文時代に属すると考えられる。

１号溝跡（第５図、写真図版４）

西区南際に沿うように位置する。調査区外へと続くため全容は不明であるが、長さ約35m以上、幅30～55cmである。走向方位は東－西方向にあり、蛇行している。深さは約10～20cmで、底面標高は西に向かって低位となる。堆積土は暗褐色土の単層である。出土遺物は土師器・須恵器のほか、陶磁器・砥石といった近現代のものも見られる。

２号溝跡（第６図、写真図版５）

西区東側に位置する。２号住居状遺構・１号陥し穴状遺構・P31と重複し、１号陥し穴状遺構・P31よりも新期と判断したが、２号住居状遺構とについては不明である。長さ約12.7m以上、幅55～90cmである。走向方位はやや蛇行するものの、およそ北北西－南南東方向にある。深さは最深部で約25cmを測り、底面標高は北に向かって低位となる。堆積土は最大２層に分別されるが、概ね黒褐色粘質土を主体とする。遺物は堆積土中より土師器・須恵器が出土している。このうち、須恵器の大甕片が２号住居状遺構出土のものと接合した（14）。出土遺物から平安時代に属するものと思われる。

３号溝跡（第６図、写真図版５）

西区西端に位置する。北側が削平により消失され、南側が調査区外へと延びるため全容は不明だが、長さ約4.6m以上、幅40～55cmを測る。走向方位は北－南にあり、直線状に延びる。深さは最深部で約30cmを測り、底面標高は北に向かって低位となる。堆積土は３層に細分されるが、黒褐色土主体の自然堆積の様相を示す。遺物は堆積土中から土師器片が少量出土している。出土遺物より平安時代以降に属する可能性がある。

柱穴状ピット（第２図、写真図版５、第１表）

西区西側を中心に30個検出している。円形･楕円形を呈するものが大半で、径30cm前後のものが多い。深さは16～73cmと各々である。列状に並ぶ傾向のある部分も認められるが、調査範囲が狭いことや、現況における営農用具痕の可能性も否定できないため、個々についての表記載にのみ留めた。出土遺物もなく時期等詳細は不明であるが、P31のみは２号溝跡より旧期であることが確認されており、平安時代に属するものと考えられる。

西区西端窪地（第２・６図、写真図版５）

西区西端に北東から南東方向に帯状に広がる黒褐色プランを確認した。規模は長さ12m以上、幅７～10m、深さ35cm、面積114㎡である。遺物は縄文時代の土器・石器・石製品が主体で、土師器・須恵器も少量出土している。大半が堆積土上位の２層からの出土である。

炭化物集中範囲（第２図）

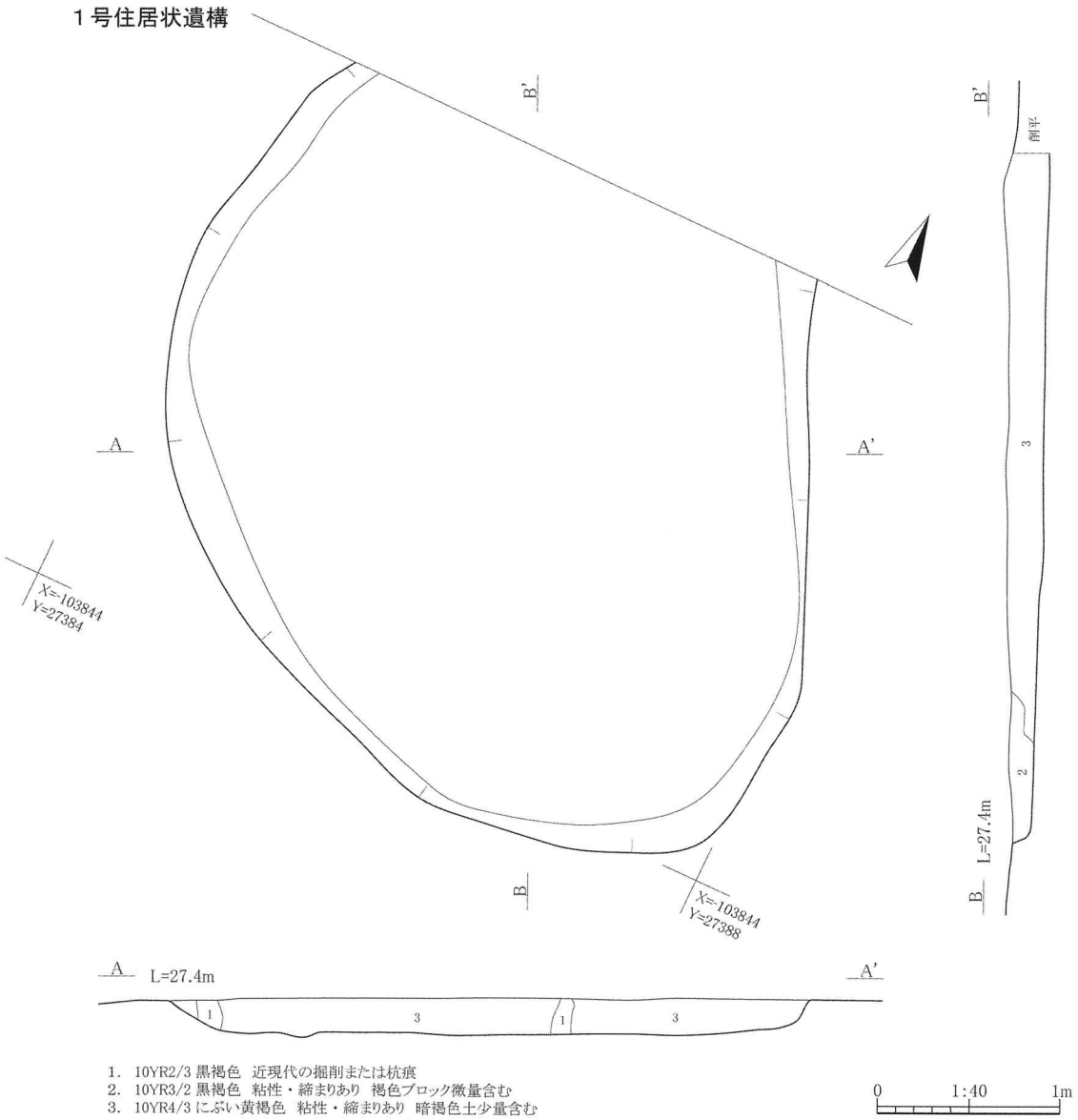
西区西側に12.2×1.0～2.1mの範囲に炭化物を多量に混合した黒褐色土が５～８cmの厚さで広がる。１号住居状遺構・１号溝跡と重複するが、いずれの堆積土上部にこれが堆積している状況であり、

新しいものと判断される。地主の方のお話しでは隣接する社が何十年か前に火災にあっているとのことから、これに起因する可能性がある。

（2）遺物

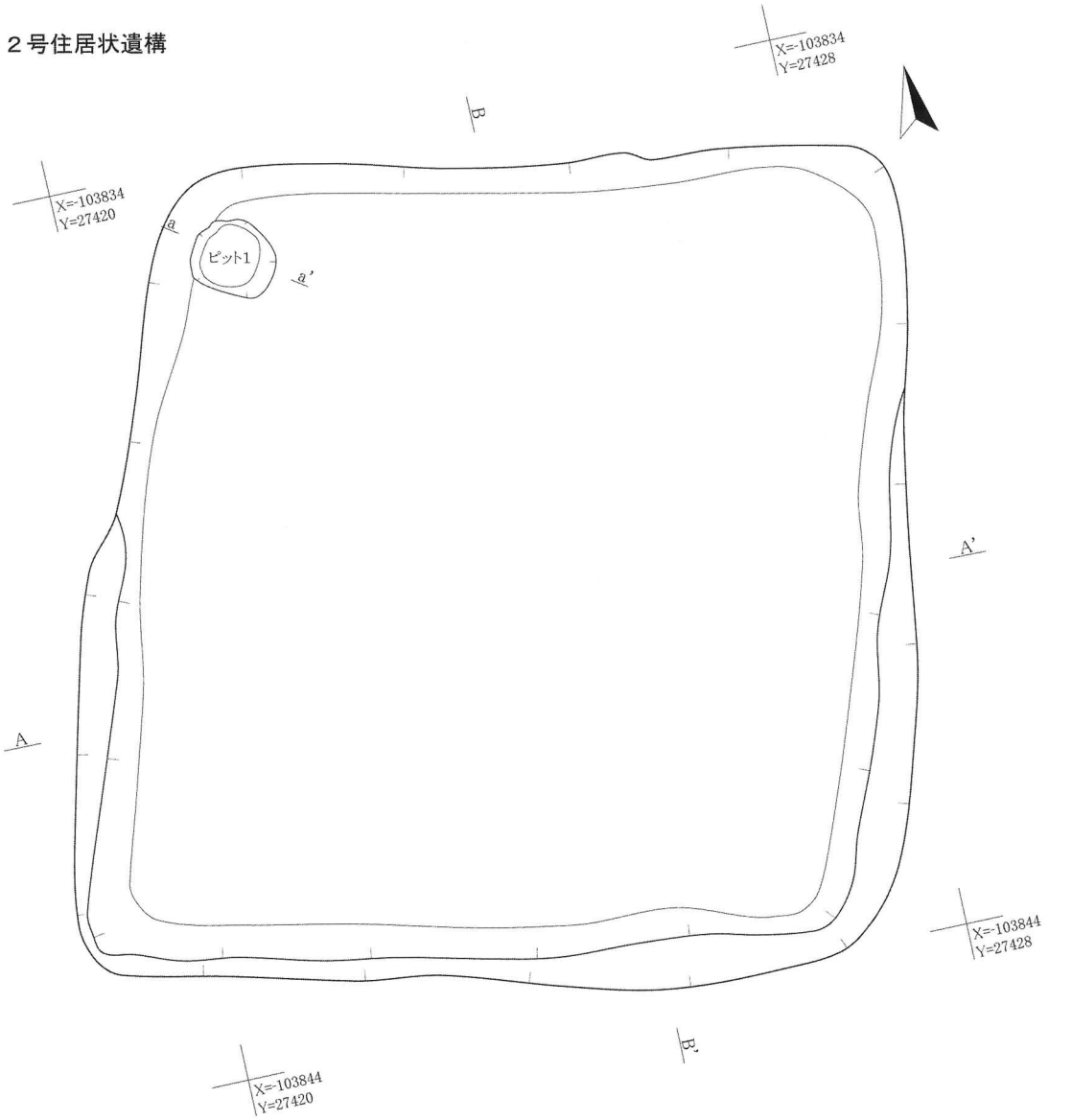
今回の調査で出土した遺物はコンテナ大１箱である。種別ごとの内訳は縄文土器コンテナ中１箱、石器114点（石鏃３点・石匙３点・削掻器７点・二次加工ある剥片４点・剥片95点・打製石斧１点・礫器１点）、有孔石製品１点、土師器２袋、須恵器１袋、近現代の砥石３点である。このうち、土師器３点（１～３）、須恵器６点（４～８・12）、縄文土器３点（９～11）、石器12点（13～24）、石製品１点（25）の計25点を掲載した。

縄文土器は破片資料が多く、器形や文様などが判然としないものばかりであるが、大半が縄文時代後期前葉に位置付けられるものと思われる。11は植物質繊維を混入しており、前期前葉の可能性が考えられる。土師器・須恵器はほぼ単一時期で平安時代中期の９世紀後半に属すると考えられる。石器は伴出した土器から大半は縄文時代後期前葉と考えられるが、１号住居状遺構は時期を決定するような土器が伴出していないため縄文時代と広く捉えておく。

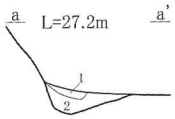


第３図　１号住居状遺構

２号住居状遺構



1. 10YR2/3 黒褐色　粘性ややあり　締まりあり　炭化物微量、下位に礫多く含む
2. 7.5Y2/1 黒色　粘性・締まりあり　グライ化土で3層の変性土（酸化鉄集積部分）
3. 7.5Y2/1 黒色　粘性極あり　締まりなし　グライ化
4. 2層と同じ
5. 10YR3/3 暗褐色　粘性あり　締まりややあり　褐色の地山ブロックを多量含む
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色　粘性なし　締まりややあり　褐色の地山ブロックを少量含む
7. 10YR3/4 暗褐色　粘性なし　締まりややあり　褐色の地山ブロックを少量含む
8. 10YR2/2 黒褐色　粘性・締まりややあり　褐色ブロック多量含む
9. 10YR4/6 褐色　砂質　粘性・締まりなし　壁面崩落土
10. 10YR5/6 黄褐色　砂質　粘性・締まりなし　壁面崩落土
11. 10YR3/1 黒褐色　粘性あり　締まりややあり　褐色ブロック多量含む
12. 10YR2/3 黒褐色　粘性あり　締まりややあり　褐色ブロック中量含む
13. 10YR4/3 にぶい黄褐色　砂質　粘性・締まりなし

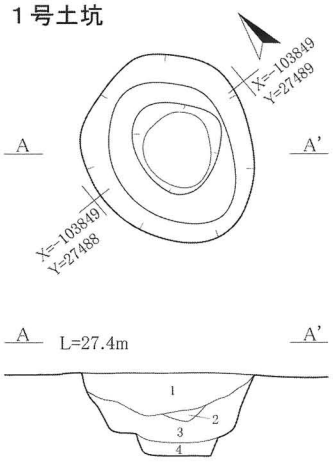


1. 10YR4/4 ～ 6 褐色　砂質
   10YR3/1 黒褐色粘土ブロック（径5cm）1%　粘性・締まりなし
2. 10YR4/6 褐色　砂質　粘性・締まりなし

0　1:80　2m

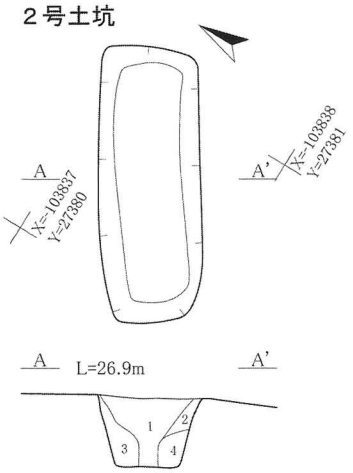
第４図　２号住居状遺構

1号土坑



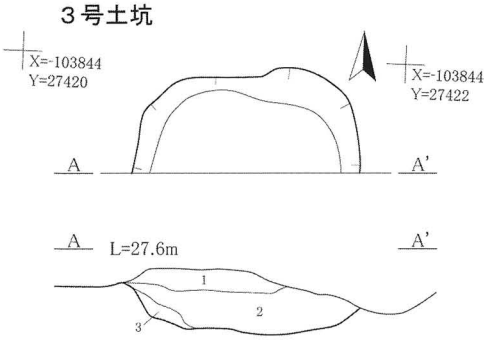
1. 10YR2/3 黒褐色　粘土質　粘性・締まりあり
2. 10YR4/4 褐色　粘土質　粘性・締まりあり
3. 10YR3/4 暗褐色　粘土質　粘性・締まりあり
4. 10YR2/3 黒褐色　粘土質　粘性・締まりあり

2号土坑



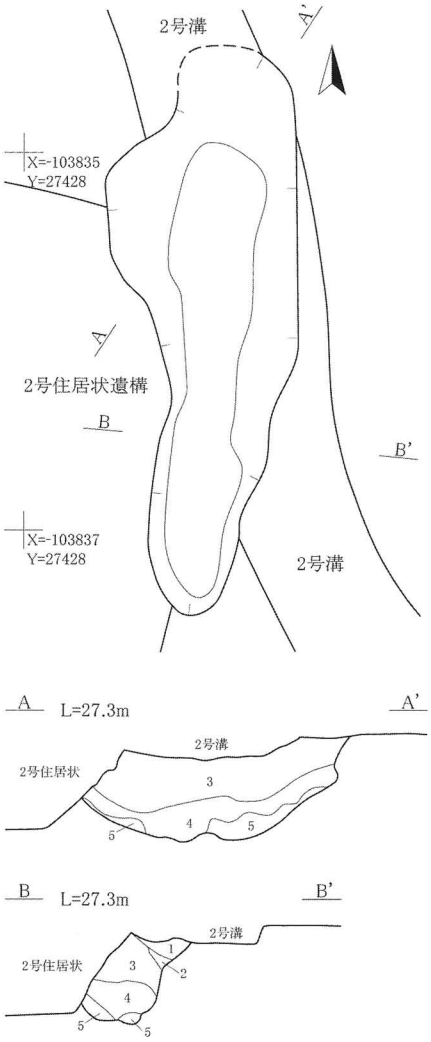
1. 10YR2/3 黒褐色　粘土質　粘性・締まりあり
2. 10YR3/3 暗褐色　粘土質　粘性・締まりあり
   灰黄褐色土少量含む
3. 10YR2/3 黒褐色　粘土質　粘性・締まりあり
   褐色砂質土を縞状に含む
4. 10YR4/4 褐色　砂質　粘性なし　締まりあり

3号土坑



1. 10YR3/2 黒褐色～3/3 暗褐色　粘性・締まりなし
   5YR4/8 赤褐色焼土ブロック（径1cm）1～2%、
   炭化物1%含む
2. 10YR3/2 黒褐色　粘土質　粘性・締まりあり
   上部に 10YR5/6 黄褐色地山ブロック（径1cm）1～2%を露状、
   全体に 5YR4/8 赤褐色焼土ブロック（径1～3cm）2～3%、
   炭化物（径1cm以下）1%含む　人為堆積か
3. 10YR2/2 黒褐色　粘土質　粘性・締まりあり
   10YR5/6 黄褐色地山ブロック（径1cm）1～2%露状に含む

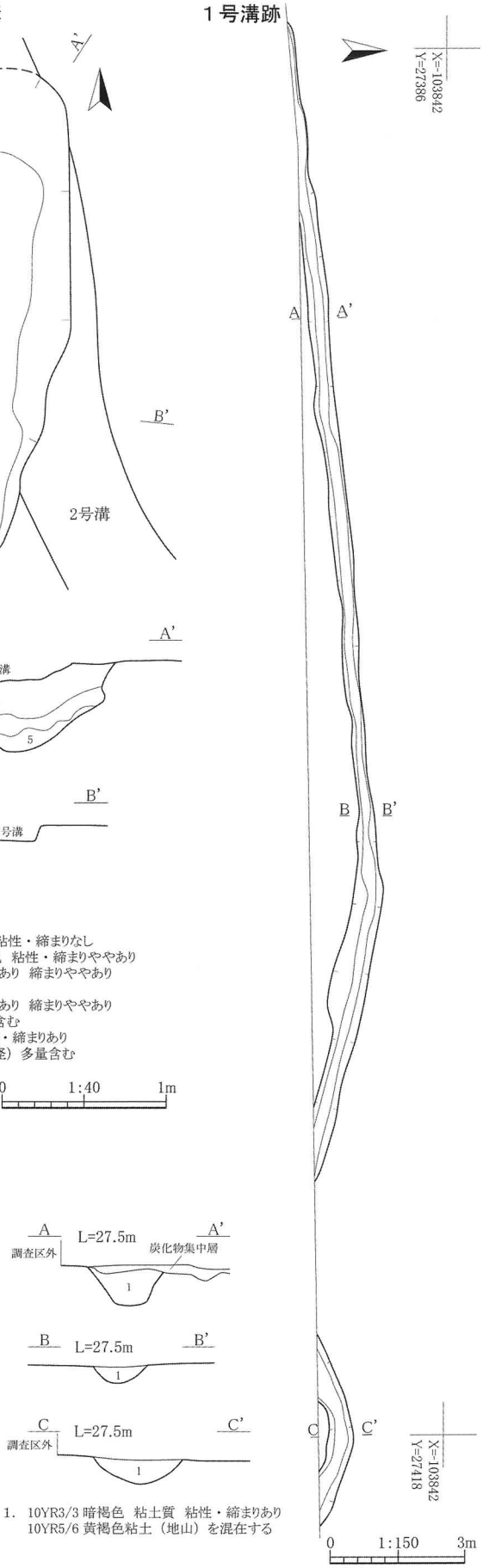
1号陥し穴状遺構



1. 10YR4/4 褐色　砂質　粘性・締まりなし
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色　粘性・締まりややあり
3. 10YR2/2 黒褐色　粘性あり　締まりややあり
   炭化物微量含む
4. 10YR2/3 黒褐色　粘性あり　締まりややあり
   黄褐色土ブロック中量含む
5. 10YR3/3 暗褐色　粘性・締まりあり
   黄褐色土ブロック（大径）多量含む

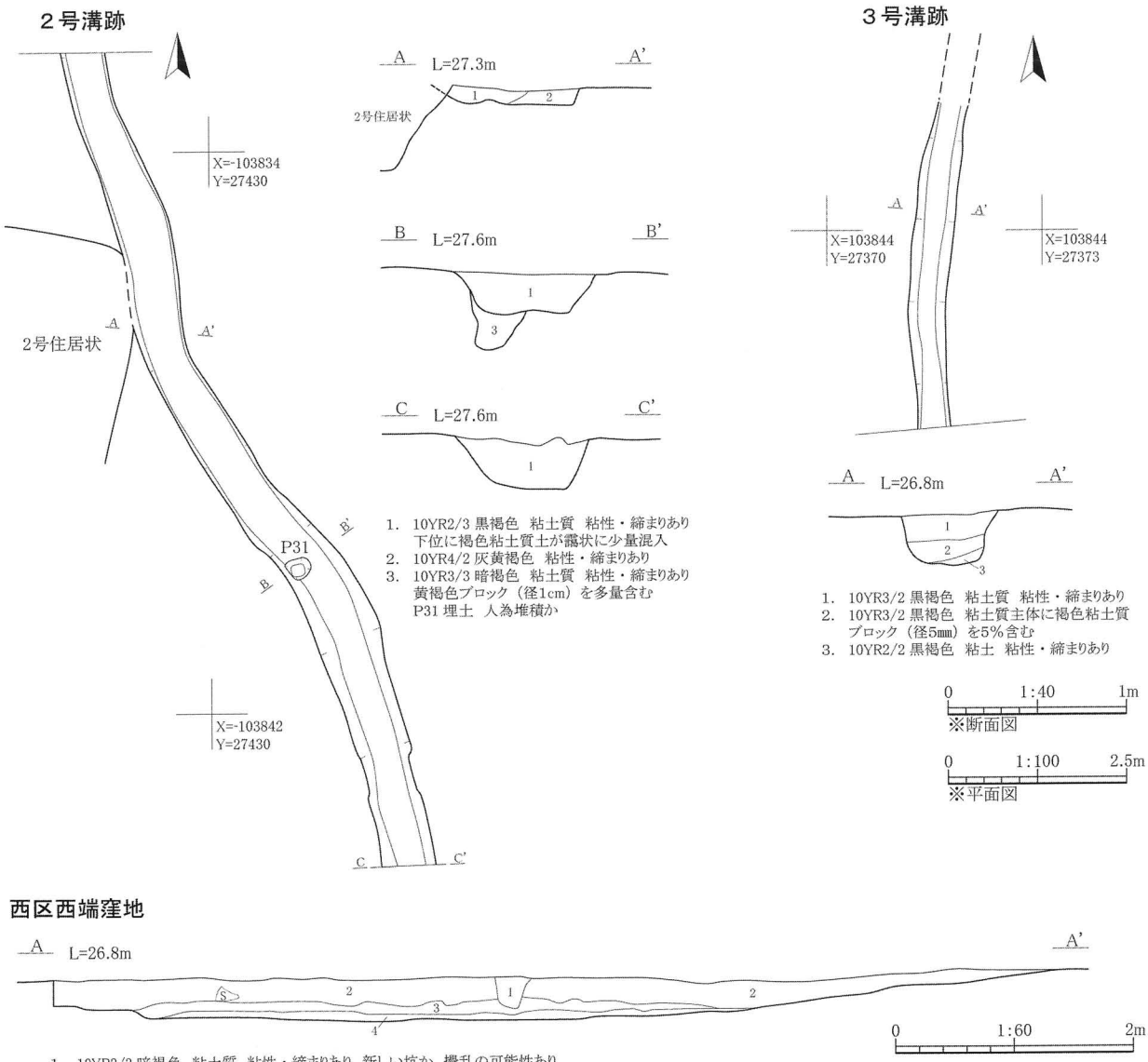
0　1:40　1m

1号溝跡



1. 10YR3/3 暗褐色　粘土質　粘性・締まりあり
   10YR5/6 黄褐色粘土（地山）を混在する

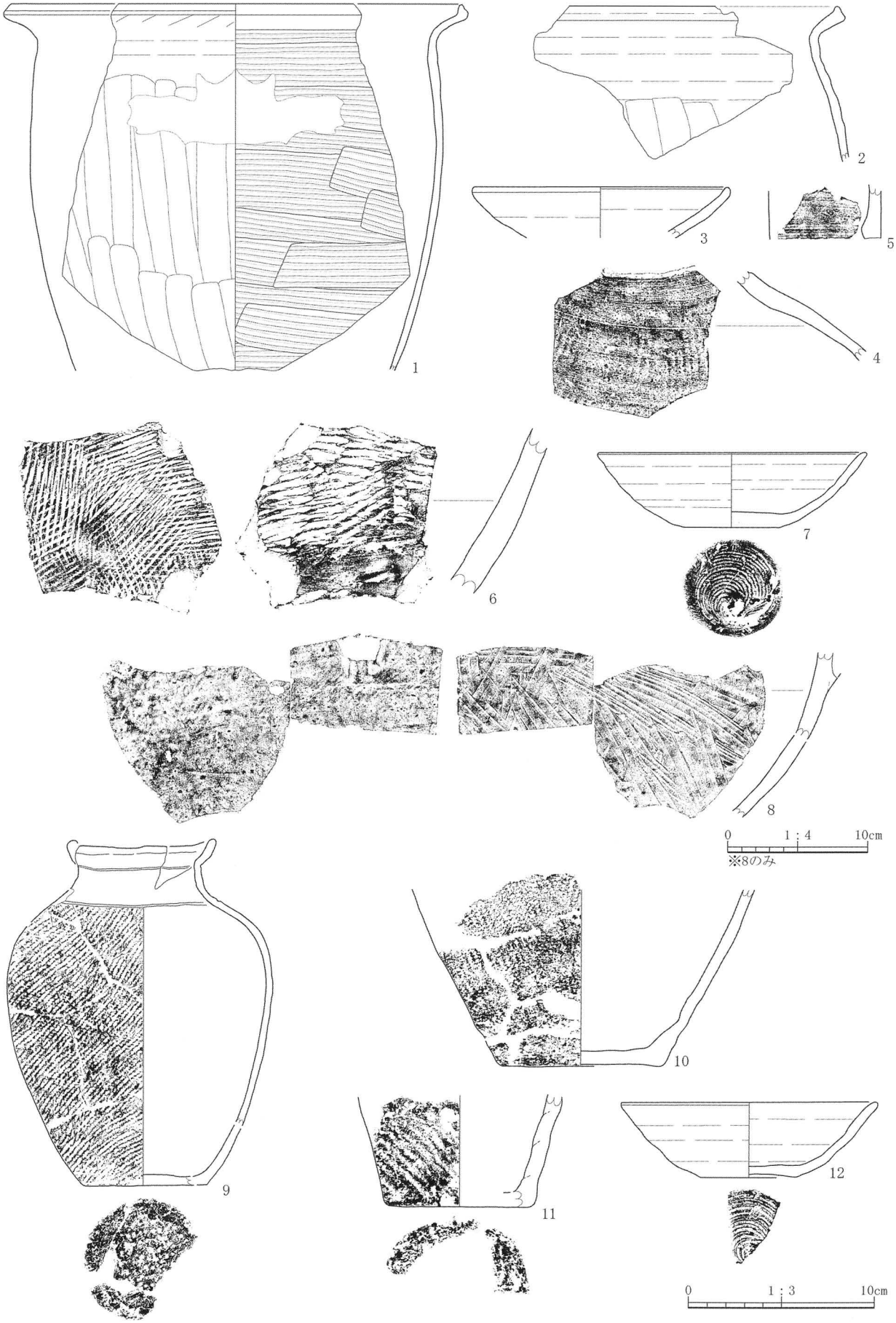
第５図　１～３号土坑、１号陥し穴状遺構、１号溝跡



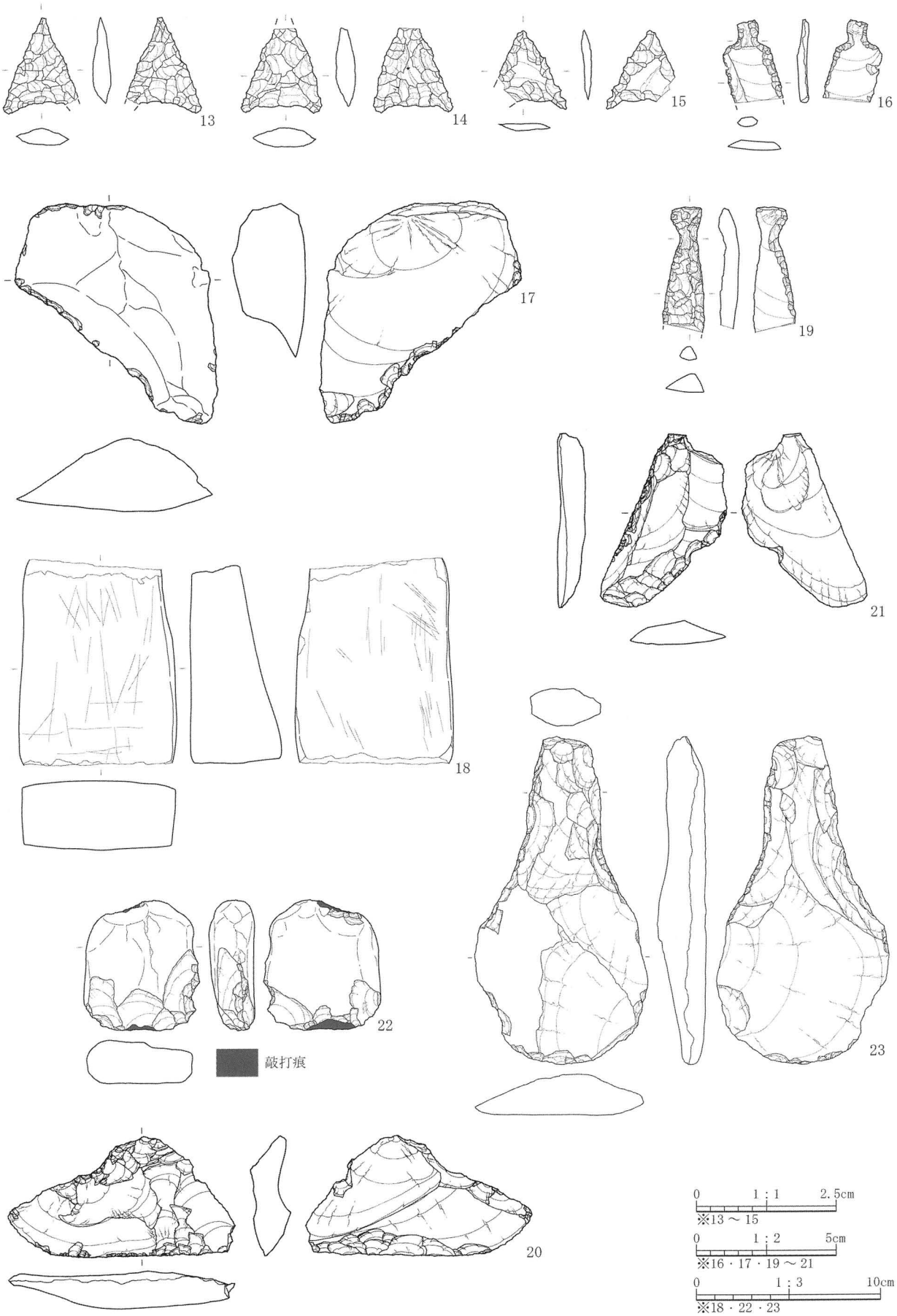
第６図　２・３号溝跡、西区西端窪地

第１表　柱穴状ピット計測一覧表

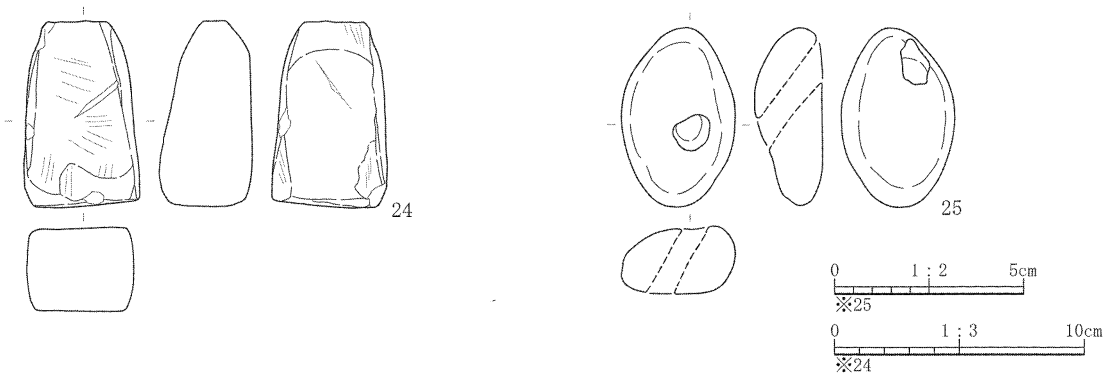
遺構名	開口部規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	遺構名	開口部規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	遺構名	開口部規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)
P1	35×31	22	26.990	P11	33×29	51	26.780	P21	32×27	31	26.750
P2	33×31	16	27.135	P12	33×27	21	27.105	P23	26×26	18	26.915
P3	33×31	33	26.950	P13	37×30	26	26.850	P24	31×27	31	26.754
P4	27×26	20	27.095	P14	29×28	35	26.790	P25	25×24	31	26.774
P5	29×27	18	27.100	P15	36×30	63	26.523	P26	29×25	29	26.876
P6	31×29	73	26.575	P16	29×27	26	26.976	P27	27×27	34	26.710
P7	29×28	32	26.960	P17	29×26	33	26.903	P28	31×30	37	26.715
P8	30×24	16	27.130	P18	29×27	34	26.905	P29	57×45	59	26.451
P9	35×31	41	26.885	P19	40×28	48	26.765	P30	38×32	59	26.378
P10	29×25	18	27.110	P20	32×25	42	26.631	P31	31×30	27	26.960



第７図　出土遺物（土器）


13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
敲打痕
0 1：1 2.5cm
※13～15
0 1：2 5cm
※16・17・19～21
0 1：3 10cm
※18・22・23

第８図　出土遺物（石器１）



第９図　出土遺物（石器２・石製品）

第２表　土器観察表

（ ）:残存値、〔 〕:推定値

No.	出土地点		層位	種類	器種	残存率(%)		計測値(cm)				外面調整	内面調整	備考
	遺構名	位置(グリッド)				口縁部	底部	口径	底径	器高	最大径			
1	2号住居状遺構	南西	3層オリーブ黒色粘土	土師器	甕	15	0	〔24.8〕	－	(20.1)	－	体:ケズリ	体:ハケメ	
2	2号住居状遺構		埋土	土師器	甕	15	0	－	－	(8.5)	－	体:ケズリ		
3	2号住居状遺構		1層褐色土	土師器	坏	20	0	〔13.8〕	－	(2.8)	－			
4	2号住居状遺構		埋土上位	須恵器	大甕	0	0	－	－	(4.9)	－	体:敲き目		
5	2号住居状遺構	北西	2層灰色土	須恵器	瓶	0	0	－	－	(3.2)	－			
6	1号溝跡	東端	埋土	須恵器	大甕	0	0	－	－	(9.0)	－	体:敲き目	体:当て具痕	
7	2号溝跡		埋土	須恵器	坏	35	100	〔14.4〕	〔5.1〕	4.1	－	底:回転糸切り		
8	2号住居状遺構	北東	2層灰色土	須恵器	大甕	0	0	－	－	(12.6)	－	体:敲き目・把手	体:ヘラナデ	
	2号溝跡		埋土											
9	遺構外	西区西端窪地	黒色土	縄文土器	深鉢	45	80	〔8.0〕	〔6.5〕	18.9	14.2	頸:沈線・無文、胴:地文、底:網代		
10	遺構外	西区西端窪地	埋土上位	縄文土器	深鉢	0	75	－	8.6	(9.7)	－	胴:地文		
11	遺構外	西区西端窪地	土器集中	縄文土器	深鉢	0	35	－	〔8.0〕	(6.0)	－	胴:地文、底:木葉痕		胎土に植物質繊維混入
12	遺構外	2号住居状南西側	現代溝	須恵器	坏	20	10	〔13.7〕	〔5.1〕	4.1	－	底:回転糸切り		

第３表　石器・石製品観察表

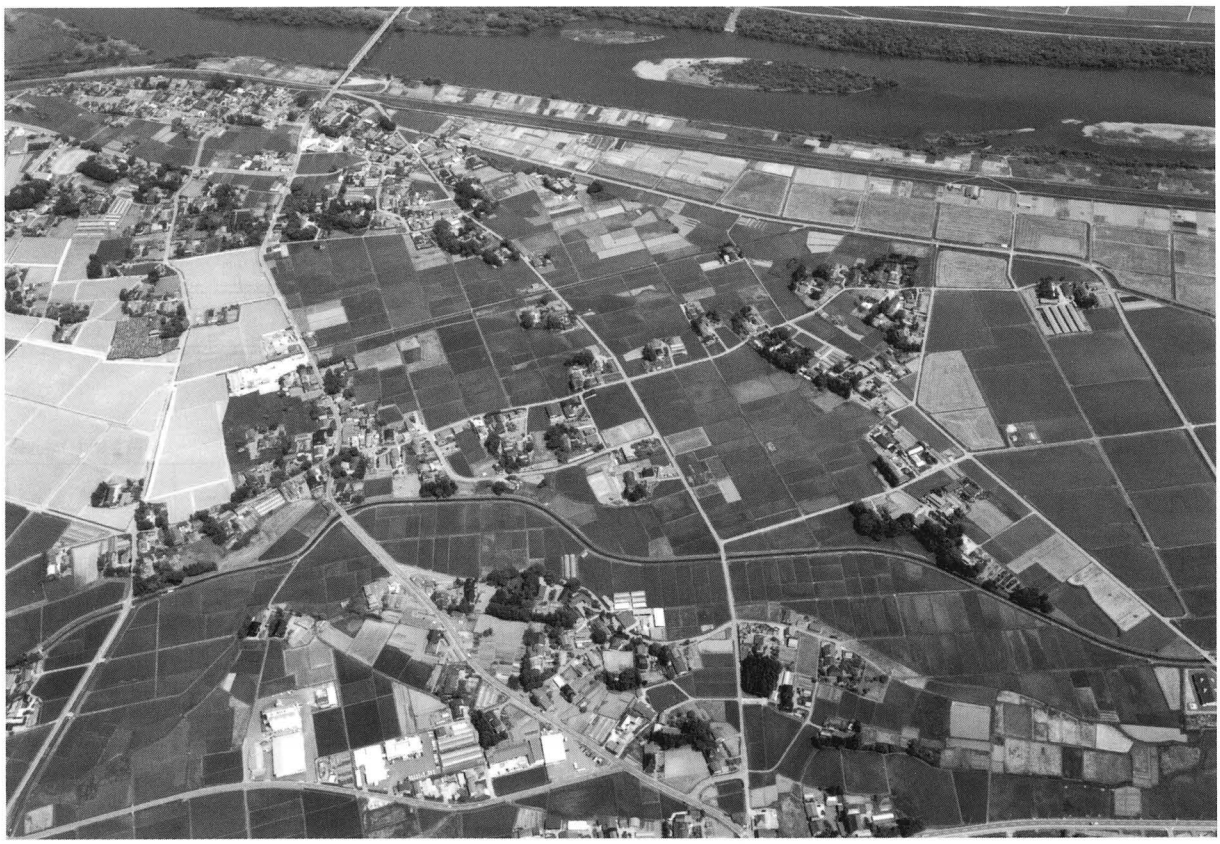
（ ）:残存値、〔 〕:推定値

No.	出土地点		層位	器種	石質		計測値				欠損	自然面	備考
	遺構名	位置(グリッド)			石材	産地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
13	1号住居状遺構	北東	埋土中～下位	石鏃	頁岩	奥羽山脈	1.7	1.3	0.3	0.4	有		凹基形
14	1号住居状遺構	北東	埋土中～下位	石鏃	頁岩	奥羽山脈	(1.5)	1.4	0.4	0.6	有		凹基形
15	1号住居状遺構	ベルト	埋土	石鏃	頁岩	奥羽山脈	1.4	(1.2)	0.2	0.2	有		凹基形
16	1号住居状遺構	北東	埋土中～下位	石匙	頁岩	奥羽山脈	(3.0)	(1.8)	0.4	1.8	有		縦型
17	2号住居状遺構	北西	2層灰色土	削掻器	頁岩	奥羽山脈	8.0	7.0	2.7	109.7		○	
18	1号溝跡		埋土	砥石	凝灰岩	奥羽山脈	(11.1)	8.4	4.6	767.3	有		近現代か
19	遺構外	西区西端窪地	黒褐色土	石匙	頁岩	奥羽山脈	(4.5)	1.5	0.7	4.0	有		縦型
20	遺構外	西区西端窪地	検出面	削掻器	頁岩	奥羽山脈	8.1	4.3	1.3	33.3			
21	遺構外	西区西端窪地		削掻器	頁岩	奥羽山脈	6.3	3.2	0.9	19.6			
22	遺構外	西区西端窪地	倒木痕埋土	礫器	頁岩	奥羽山脈	7.0	6.2	2.4	147.9		○	楔状の使用痕跡あり
23	遺構外	2号住居状南西付近		打製石斧	赤紫色凝灰岩	北上山地	17.8	9.2	2.6	344.4		○	
24	遺構外	炭化物集中		砥石	砂岩(凝灰質)	奥羽山脈	7.4	4.5	3.6	186.0			近現代か
25	遺構外	炭化物集中		有孔石製品	凝灰岩	奥羽山脈	4.8	3.0	1.8	26.2		○	斜位に直径5mmの穿孔

5　まとめ

今回の調査から縄文時代後期前葉、平安時代中期の遺構・遺物が確認され、明後沢川の河岸に立地する縄文時代・平安時代の複合遺跡であることが確認された。後世の削平が著しい部分もあり、遺構の存否については現況の造成度合に因るところが大きいが、高位面が残存する部分であれば遺構の遺存率も高いものと思われ、調査区北方及び明後沢川河畔まで遺跡が拡がる可能性も考えられる。

なお、八幡遺跡平成21年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



遺跡遠景（西から）

遺跡近景（直上から 下が北）

写真図版１　航空写真

完掘（北東から）

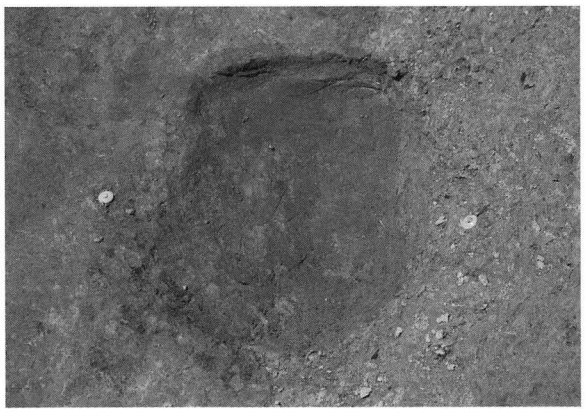
断面（東から）

断面（南から）

写真図版２　１号住居状遺構

完掘（北東から）

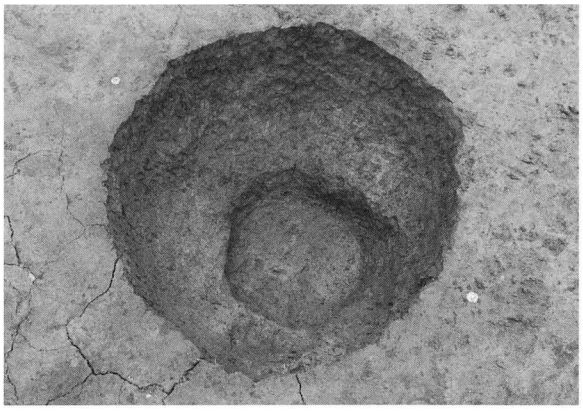
断面（南から）



床面ピット１　完掘（北から）

床面ピット１　断面（南から）

写真図版３　２号住居状遺構

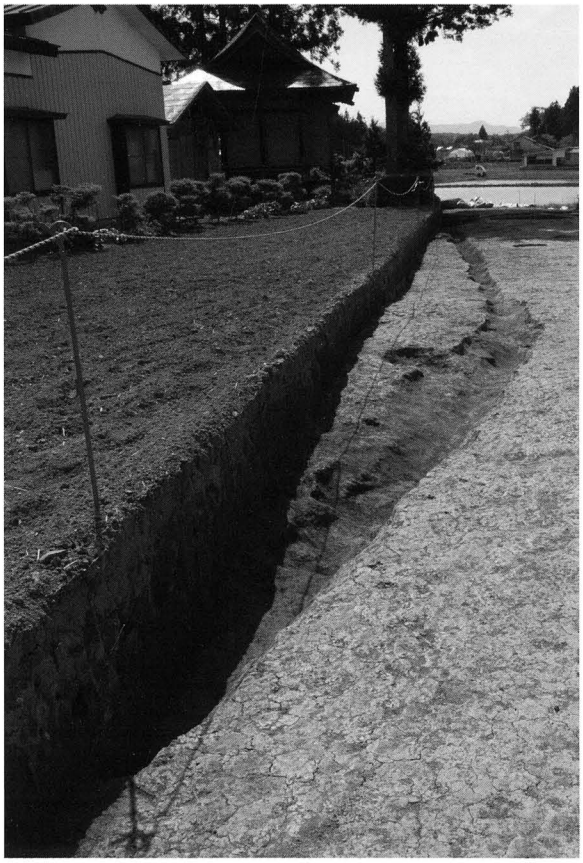


１号土坑　完掘（南から）

２号土坑　完掘（北東から）

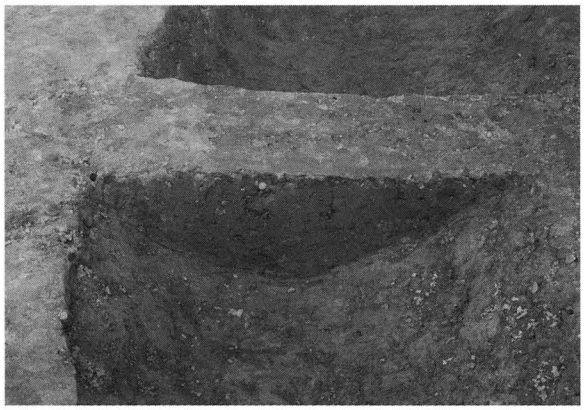
３号土坑　完掘（北から）

１号陥し穴状遺構　完掘（北から）



１号溝跡　西側完掘（東から）

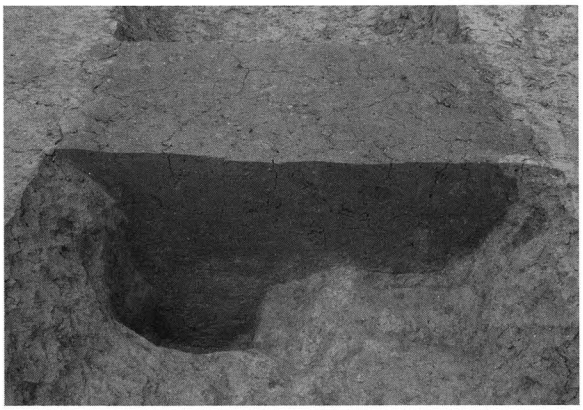
１号溝跡　東側完掘（西から）



１号溝跡　断面 C-C'（西から）

写真図版４　１～３号土坑、１号陥し穴状遺構、１号溝跡

２号溝跡　完掘（北から）



２号溝跡　断面 B-B'（南から）

２号溝跡　断面 C-C'（北から）

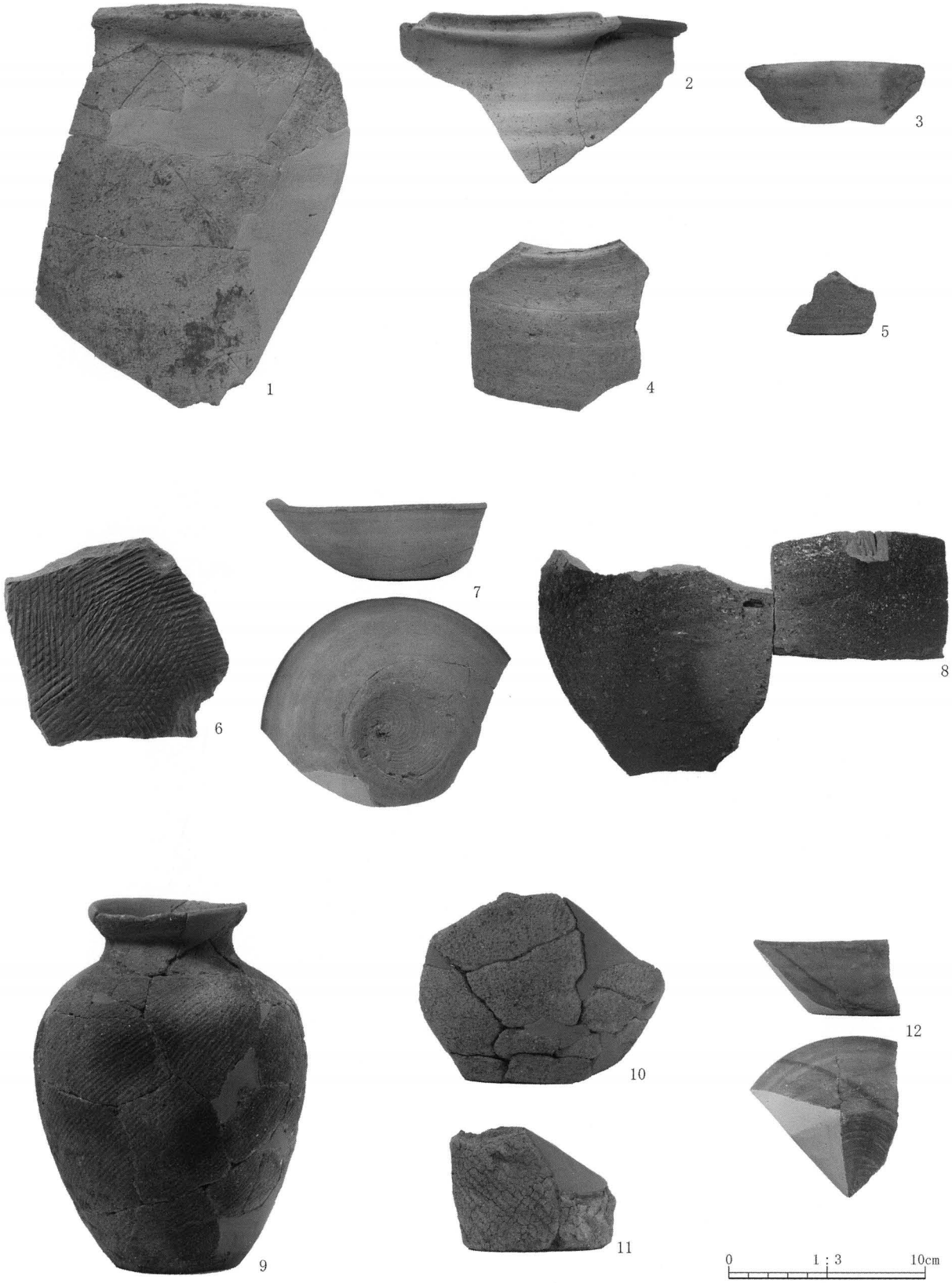
３号溝跡　完掘（北から）

３号溝跡　断面（南から）

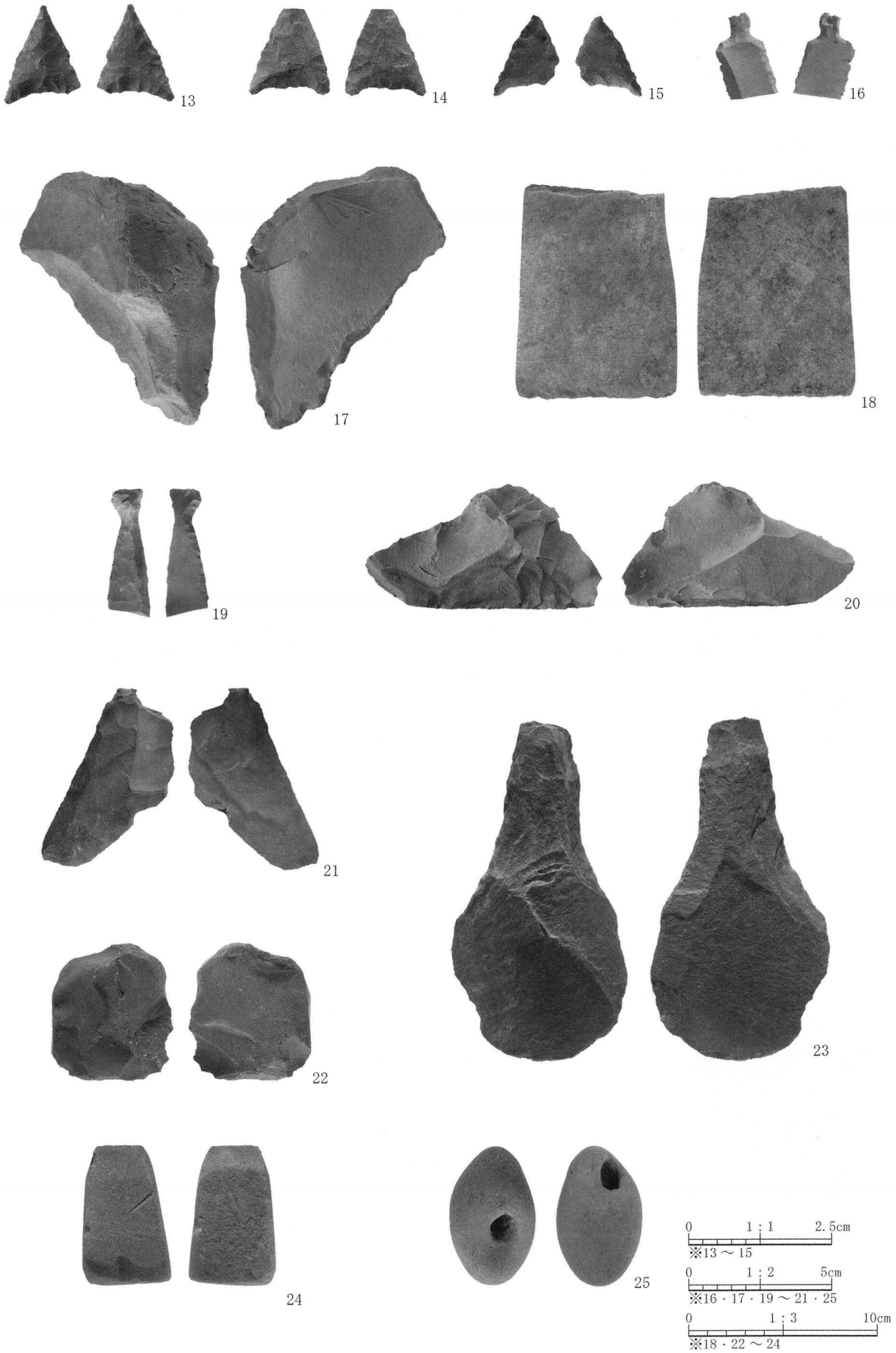
西区柱穴状ピット群　完掘（北から）

西区西端窪地（南から）

写真図版５　２・３号溝跡、柱穴状ピット群、西区西端窪地



写真図版６　出土遺物（土器）



写真図版７　出土遺物（石器・石製品）

Ⅱ　発掘調査概報

凡例

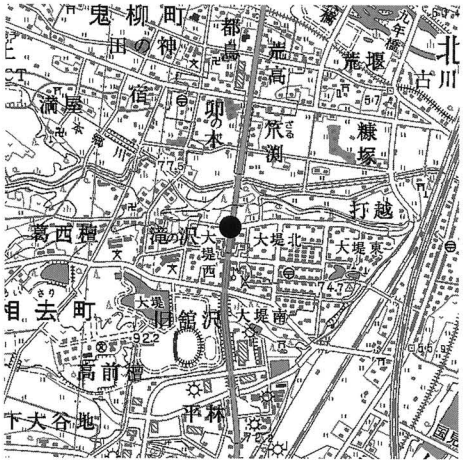
本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(10) 滝ノ沢遺跡



1：50,000　北上

所　在　地　北上市下鬼柳15地割31－３ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　一般国道４号北上拡幅
発掘調査期間　平成21年４月９日～８月26日
調査終了面積　1,252㎡
調査担当者　金子昭彦・藤原大輔
主要な時代　縄文・平安

遺跡の立地

遺跡は、北上市の南部、JR東北本線北上駅の南西約３kmにあり、和賀川によって形成された中位段丘上に立地している。段丘崖に沿って東西約1.2kmに広がり、今回の調査区は、その中央の北端段丘崖付近に相当する。標高は70～78m。これまでに10回を越える調査が行われ、縄文時代前期末～中期初頭を中心にした大規模集落跡、晩期の小規模集落跡、平安時代の集落跡であったことがわかっている。

調査の概要

調査区は、国道の西側と東側に分かれる（西、東区と仮称）（写真参照）。どちらからも縄文時代前期末～中期初頭の遺物が大量に出土し、特に西区は、遺物包含層が厚さ50cmを越える地点も多く、また住居跡の一部と考えられる焼土や柱穴状土坑が多数検出され、この時期の集落の中心であることがわかった。東区は、この遺物包含層の東限であるらしく、東端は、南北に伸びる雨裂が形成されている。ここから大量の礫石器（磨製石斧、石錘ほか）が出土しており、未成品も多い。

この雨裂は、平安時代にはほぼ埋没したらしいが、窪みの一部は後に中世の丸子館の堀として利用されていたようである。東区の検出遺構は、雨裂底に確認された、平安時代の円形土坑1基だけである。

平安時代の遺構は、この土坑の他には、西区で検出された竪穴住居跡１棟のみである。

調査で検出した遺構は、縄文時代炉跡１基、焼土29基、土坑２基、柱穴状土坑21個、整地層1箇所、平安時代竪穴住居跡（約1,100年前）１棟、土坑1基である。

出土遺物は、縄文時代前期末～中期初頭土器大コンテナ228箱、石器中コンテナ298箱、土偶10点以上、玦状耳飾り数点、石剣数点、勾玉１点、縄文時代晩期土器数点、平安時代土器（土師器・須恵器）小コンテナ2箱、鉄製品数点などである。

段丘崖に位置する調査範囲（南から）

厚い遺物包含層

(11) 芋田沢田Ⅳ遺跡（いもださわだ）

所　在　地　盛岡市玉山区芋田字沢田４－10ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　一般国道４号渋民バイパス
発掘調査期間　平成21年４月９日～12月４日
調査終了面積　1,250㎡
調査担当者　村上　拓・濱田　宏・杉沢昭太郎・北村忠昭
村田　淳・佐藤あゆみ・菅野　梢・高橋静歩
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡はＩＧＲいわて銀河鉄道好摩駅の東方約1.0㎞、北上川左岸の河岸段丘上に立地する。北側を段丘崖、南側を北上川に下る沢に区切られ、調査区付近は西側に舌状に張り出す高台となっている。標高は214m前後。調査前は山林及び牧草地で、過去一部が畑地として利用されていた。調査対象は3,630㎡で、うち今年度は1,250㎡の調査を終了。未了区域は次年度継続して調査する予定である。

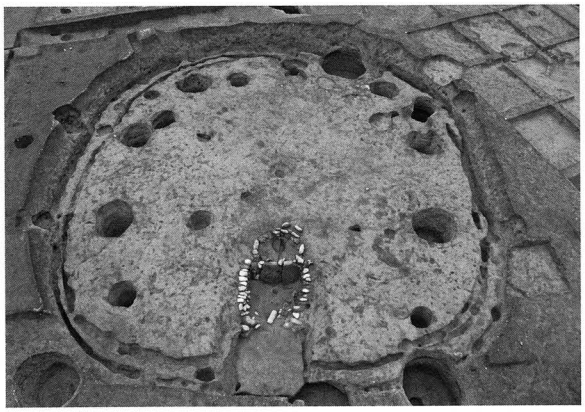
調査の概要

縄文時代早期及び中期末葉～後期前葉の竪穴住居32棟、配石遺構２基、土坑32基、土器埋設遺構８基、炉跡32基、柱穴620個、平安時代住居１棟、近世の溝状遺構３条を検出、縄文土器（早期・中期末葉～後期前葉が主体）50箱、石器10箱、平安時代の土師器・須恵器数片などが出土した。

縄文時代早期の住居は調査区南部に集中して検出されたが、調査未了の北半部に分布が広がる可能性が高い。楕円形で底面中央にピット状に掘り込まれた炉をもつものと、不整形で炉を持たないものがある。土器には貝殻文のほか押型文・沈線文・表裏縄文等が含まれるなど時期幅を持っている。

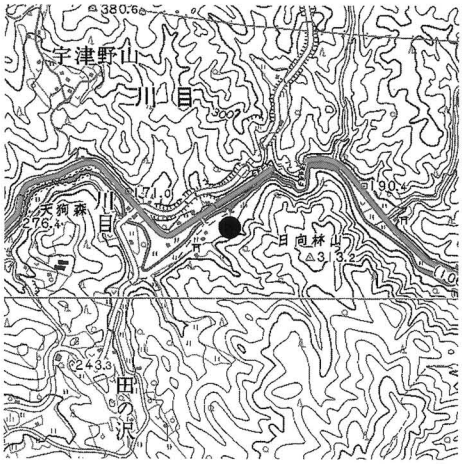
中期末葉の住居は調査区西縁部に並列して分布する。このうち南西端部では他より図抜けて規模の大きい住居が検出された。直径約11mの円形（角の丸い多角形）で、柱穴は直径、深さともに１m前後、西側の壁に接して全長3.3mの複式炉をもつ。柱穴・周溝の重複状況から改築・拡張を経ていることがわかった。床面直上には炭化材が多く出土。廃絶段階に焼失・倒壊したものとみられる。

このほか調査区中央からは、後期初頭～前葉のものとみられる環状の配石遺構が検出された。直径約９mの円環をなす配石の南縁に、方型基調の張り出し部を持ち、いわゆる柄鏡形住居に類似する。次年度、下部構造を追加調査の予定。近接して長方形の配石に囲まれた６本柱遺構も検出されている。


大形竪穴住居（縄文時代中期末葉）

配石遺構（縄文時代後期初頭～前葉）

(12) 川目（かわめ）A遺跡　第５次補足調査



所　在　地　盛岡市川目第５地割49－２ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　一般国道106号都南川目道路
発掘調査期間　平成21年４月10日～10月15日
調査終了面積　3,212㎡
調査担当者　高木　晃・須原　拓・八重畑ちか子
主要な時代　縄文

遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線盛岡駅の南東約7.5㎞に位置し、北上川の支流である簗川左岸の河岸段丘上に立地する。標高は177m前後で、遺跡の南東側は小起伏山地の末端にあたる。今回の第５次調査は平成18年度より開始され、過去３年間の調査の未了区域436㎡に加え、新規に2,776㎡の追加調査区について実施した。このうち825㎡は南側の山地急斜面にあたり確認用のトレンチ調査で終了とした。なお平坦面の東端区域には縄文時代の包含層下位に十和田中掫火山灰の二次堆積層が広く分布する。

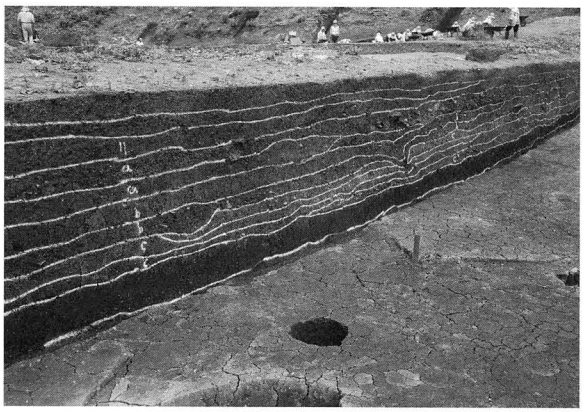
調査の概要

今年度新たに検出した遺構は縄文時代のものとして竪穴状遺構３基、配石遺構11基、土坑36基、土器埋設遺構５基、焼土遺構８基、中世～近世のものとして土坑墓３基である。他に縄文時代に形成された風倒木痕を11箇所確認した。なお、平成16年度から４年間の合計遺構数は竪穴住居跡２棟、竪穴状遺構３基、配石遺構55基、土坑68基、土器埋設遺構16基、焼土遺構29基、炉跡１基、中世～近世の土坑墓６基、縄文時代の風倒木痕33箇所である。今年度調査区の平坦面には縄文時代後期主体の遺物包含層が広がるが、過年度までの調査区に比較し層厚は薄くなり平均0.5m程度となる。

遺物は土器が大コンテナ140箱、剥片石器類が約2200点、礫石器類が約4200点、土偶約70点、その他各種土製品、石製品、アスファルト塊、焼骨細片、炭化種実類、中世～近世の銭貨、鉄製品等がある。４年間の遺物総量は縄文土器732箱（10t強）、石器約60000点、土偶約700点、各種土製品・石製品約3000点ほかで縄文時代後期初頭～中葉の遺物が主体である。

全体として見れば、簗川と山地末端に挟まれた平坦面に形成された縄文時代後期の遺物包含層、配石遺構群からなる遺跡で、今回の第５次調査は南側半分を発掘したことになる。

埋設された注口土器


遺物包含層断面

(13) 向(むかい)Ⅲ遺跡

1：50,000　人首

所　在　地　遠野市綾織町下綾織第31地割20－１ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
発掘調査期間　平成21年７月13日～８月31日、
　　９月18日～10月31日
調査終了面積　8,750㎡
調査担当者　晴山雅光・福島正和・北村忠昭
主要な時代　縄文・近世

遺跡の立地

向Ⅲ遺跡は、JR釜石線岩手二日町駅の南約1.5㎞に位置し、東から西へと流れる猿ヶ石川南岸の河岸段丘に立地する。調査前の状況は、南から北の傾斜方向に流れる水路を挟み、東西に２ｍ幅の市道が通る水田地帯であった。今回調査区の東側には、本遺跡の同事業に関わる未調査部分を残している。

調査の概要

今回の調査は、９月１日～９月17日（落合２区Ⅰ遺跡調査）の期間、休止を挟んで断続的に行われた。検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構15基、時期不明の焼土遺構４基、土坑25基、柱穴８個、溝１条である。また、掘立柱建物２棟（２×１間）が確認されている。出土した遺物は、縄文土器が小コンテナ１箱、剥片石器が64点、礫石器４点、陶磁器片が４点、寛永通宝１点である。

焼土遺構

フラスコ状土坑

掘立柱建物

陥し穴状遺構

(14) 新田（しんでん）Ⅱ遺跡

1：50,000　人首

所　在　地　遠野市綾織町下綾織第５地割49－２ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事　業　名　東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
発掘調査期間　平成21年４月10日～８月31日
調査終了面積　2,800㎡
調査担当者　晴山雅光・福島正和・丸山浩治・北田　勲
主要な時代　縄文・平安

遺跡の立地

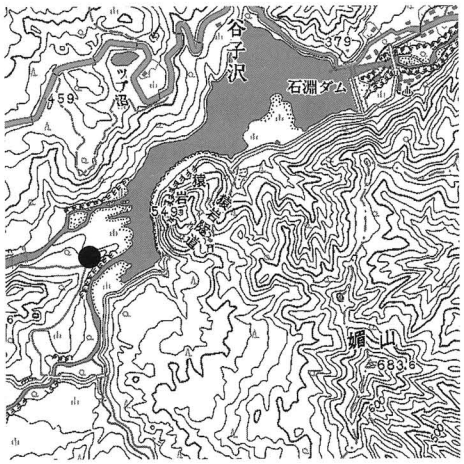
新田Ⅱ遺跡は、JR釜石線岩手二日町駅の南東約1.5kmに位置し、猿ヶ石川南岸の河岸段丘上に立地する。調査区は国指定史跡綾織新田遺跡の北東に近接し、綾織新田遺跡よりも低い場所である。調査区の標高は約260mであり、調査前の現況は北半が草地、南半が水田、北東端部が山林として利用されていた。

調査の概要

今回の調査では、縄文時代中期の竪穴住居26棟、掘立柱建物４棟、柱穴状土坑約70個、墓壙と考えられる土坑21基等を検出した。また、調査区南側では平安時代の土師器を伴う土坑６基を検出した。遺物は縄文土器が大コンテナ16箱、縄文時代の石器・土製品が合計中コンテナ８箱、土師器・須恵器が中コンテナ１箱出土した。遺跡は縄文時代中期の集落の中心域と考えられ、弧状に竪穴住居群が配置されている。また、この弧状に連なる竪穴住居群の内区では、掘立柱建物や墓壙群が検出されている。墓壙群も竪穴住居同様におおむね弧状に配置されており、当該期の集落形態を読み解く上で貴重な調査成果である。

航空写真（上が北）

(15) 下嵐江（おろせ）Ⅰ・Ⅱ遺跡



1：50,000　焼石岳

所　在　地　奥州市胆沢区若柳字東下嵐江地内
委　託　者　国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
事　業　名　胆沢ダム建設事業
発掘調査期間　平成21年４月10日～10月30日
調査終了面積　5,690㎡
調査担当者　村木　敬・濱田　宏・藤田　祐
主要な時代　旧石器時代・近世

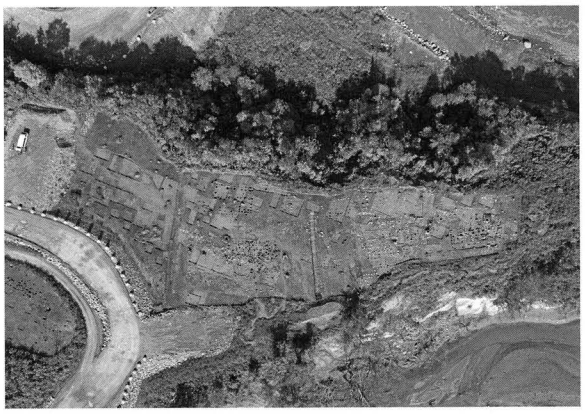
遺跡の立地

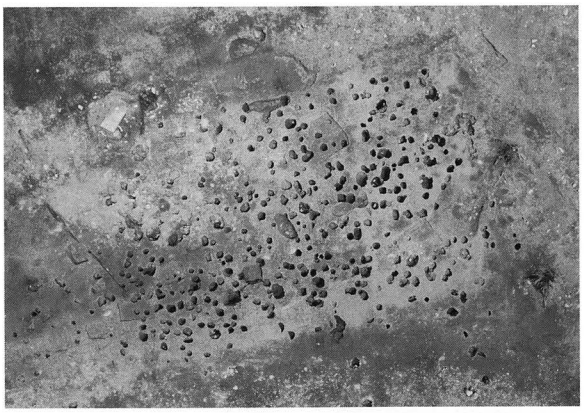
遺跡は石淵ダムの南西約２㎞、胆沢川と前川の合流地点に位置し、北東に細長く突き出た舌状地形の緩斜面上、標高345m前後の河岸段丘に立地する。段丘の内陸部側が下嵐江Ⅰ遺跡、先端部側が下嵐江Ⅱ遺跡と両遺跡は隣接している。

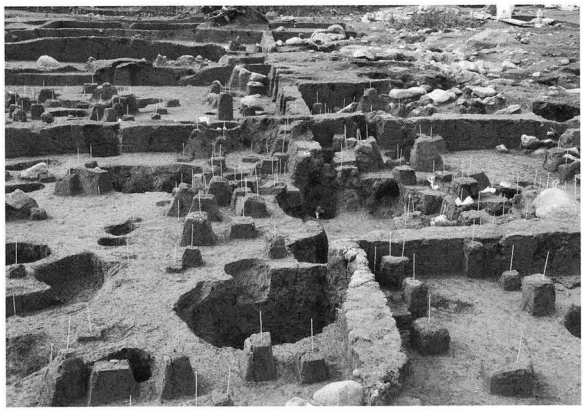
調査の概要

調査は昨年度より継続して行われており、今年度は主に下嵐江Ⅱ遺跡を調査している。旧石器時代と近世の遺構や遺物を検出したが、それらは段丘の尾根部を中心にほぼ全域に及ぶ。

今回の調査では後期旧石器時代の石器集中区10箇所、近世の掘立柱建物跡20棟、土抗22基、溝跡３条、柱穴745個を検出した。出土遺物は旧石器7,859点、縄文土器20点、近世陶磁器大コンテナ4.5箱、銭貨55枚、鉄製品40点などである。

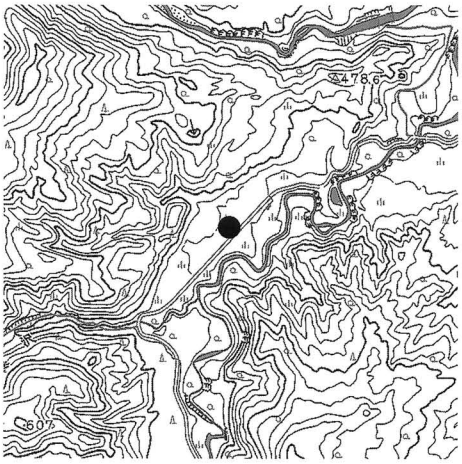

調査区全景


掘立柱建物跡


石器集中区

石器出土状況

(16) 大平野（おおだいらの）Ⅱ遺跡



1：50,000　焼石岳

所　在　地　奥州市胆沢区若柳字大平野１－１ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
事　業　名　胆沢ダム建設事業
発掘調査期間　平成21年６月１日～６月30日
調査終了面積　600㎡
調査担当者　濱田　宏・藤田　祐
主要な時代　縄文

遺跡の立地

遺跡は、奥州市胆沢総合支所の南南西約19㎞、石淵ダムの南西４㎞付近にあって、前川によって形成された河岸段丘上に立地する。調査区は南東向きの緩斜面となっており、その標高は358m～371mほどである。遺跡周辺は、かつてはレジャー施設などに利用された土地であったが、現在ではほぼ全域が原野化し、広大な荒地となっている。

調査の概要

今年度は、昨年６月中旬に発生した「岩手・宮城内陸地震」の影響もあって未了となっていた600㎡を対象に実施した。

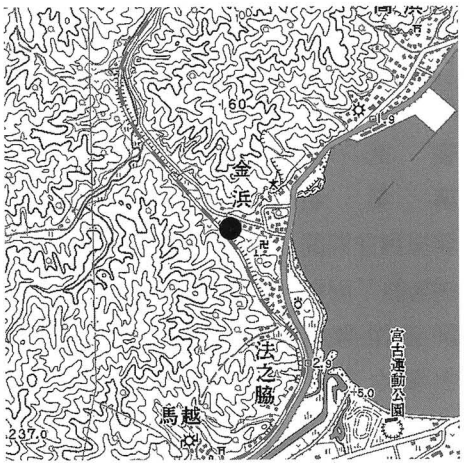
調査では、縄文時代中期から後期に属すると思われる土坑５基、時期不明の柱穴28個、集石１箇所が確認され、その精査とともに沢の氾濫により形成された遺物包含層５箇所の掘削を行った。遺物は、縄文時代中期後葉から後期前葉を主体として、前期前葉、晩期後葉などの土器が大コンテナ1.5箱、石器類は中コンテナ１箱出土した。

今回の調査によって、遺跡を二分するように流れる小寒沢右岸の縄文集落の様相がさらに明らかとなった。ここには、縄文時代中期後葉から後期前葉の竪穴住居跡５棟のほか、土坑は30基あまりが検出され、特にもその中に礫が環状に配される住居跡や墓壙に転用された土坑が認められていることは、何か祭祀的な様相も感じとられる。一方、左岸にはこれまで右岸では見つかっていない後期後葉以降の遺構・遺物が存在していることから、小寒沢両岸を主体とした時期別の占地についても本報告に向け検討を深めたいと思う。

小寒沢氾濫部の様子

重複する土坑

(17) 金浜（かねはま）Ⅰ遺跡



所　在　地　宮古市大字金浜第２地割字古舘16ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
発掘調査期間　平成21年４月14日～５月１日
調査終了面積　101㎡
調査担当者　村田　淳
主要な時代　縄文・平安

遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線津軽石駅から約２㎞北方、宮古湾の最奥部に位置している。西側の丘陵から派生する尾根とそれに付随する谷部（沢跡）からなり、尾根を境界として北側が金浜Ⅰ遺跡、南側が金浜Ⅱ遺跡である。平成20年度にも当センターで発掘調査を実施しており、今回は前年度未了部分の調査である。今年度の調査区は遺跡範囲の西側、高圧電線用鉄塔が建てられていた部分及びその周辺であり、谷状地形の中央付近に位置する。検出面標高は20m前後である。

調査の概要

前年度の試掘により竪穴住居の存在を確認していたため、今年度の調査はこの住居跡の精査を中心に行った。竪穴住居は一辺約４ｍの方形で、石組のカマドを有する平安時代に属するものである。住居内からは比較的多量の遺物が出土しているが、特にカマド周辺から製塩土器や土製支脚の破片がまとまって出土していることが特徴である。隣接する金浜Ⅱ遺跡でも竪穴住居内から土製支脚の破片が出土しており、これらの事例は本遺跡内及びその周辺で平安時代に土器製塩が行われていたことを示す資料といえる。

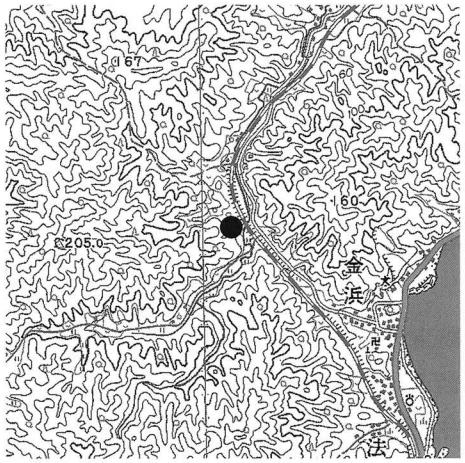
この他に検出した遺構としては、縄文時代のフラスコピット１基、古代の焼土１基、縄文～古代の柱穴16個がある。遺物はほとんどが竪穴住居からの出土で、土師器・製塩土器・縄文土器が小コンテナ１箱、土製支脚・羽口小コンテナ１箱、その他礫石器、鉄滓等が少量出土している。

今年度調査区の北側で過去に宮古市教育委員会が実施した発掘調査では、古代の竪穴住居を中心とした集落の存在が確認されている。検出した竪穴住居がその集落の南端にあたる沢跡の縁に位置していること、これより南側では尾根の反対側斜面に位置する金浜Ⅱ遺跡まで古代の遺構が存在しないことから、今回の調査では本遺跡における古代集落の南限を明らかにすることができたと思われる。

平安時代の竪穴住居

土製支脚出土状況

(18) 八木沢野来遺跡（やぎさわのうらい）　第３次調査



1：50,000　宮古

所　在　地　宮古市大字八木沢第８地割字駒込121－２ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
発掘調査期間　平成21年４月８日～６月30日
調査対象面積　1,770㎡
調査担当者　丸山直美・村田　淳・佐々木智久
主要な時代　縄文

遺跡の立地

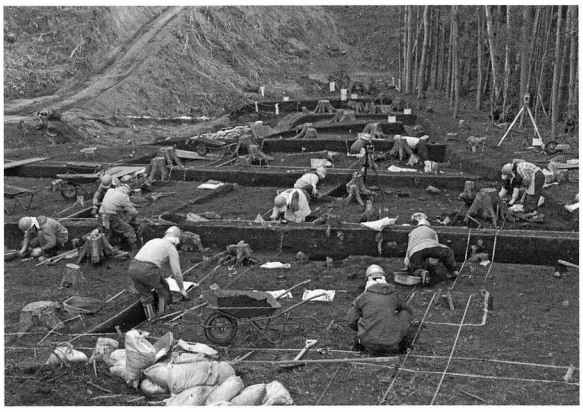
本遺跡はJR山田線磯鶏駅の南西約3.9㎞に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川の西岸に形成された小起伏山地の先端部に立地する。標高は43～46ｍを測る。

調査の概要

調査は平成20年度からの継続である。検出された遺構は、縄文時代前期の竪穴住居２棟、焼土遺構24基、土坑７基、埋設土器１基、集石遺構１箇所、柱穴状小土坑39個、遺物包含層437㎡、古代以降の可能性のある鍛冶炉１基である。遺物は縄文時代前期の土器を主体として、石器、陶磁器、鉄製品、鉄滓などが総量で大コンテナ35箱分出土した。調査の結果、調査区東半部を中心として縄文時代前期を主体とする集落跡、および遺物包含層が形成されていることが判明した。

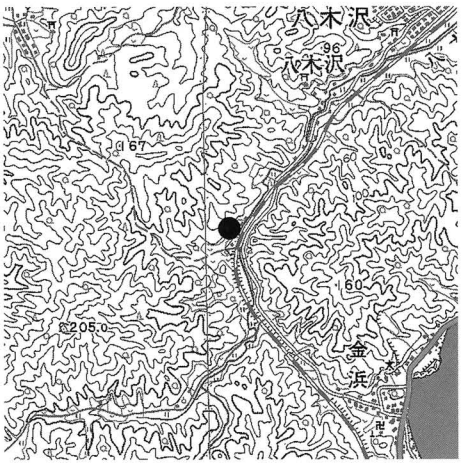
調査区全景（北から）

縄文時代の竪穴住居(南東から)


遺物包含層掘削風景（南から）

出土した縄文土器

(19) 八木沢駒込Ⅰ遺跡



1：50,000　宮古

所　在　地　宮古市大字八木沢第８地割駒込38－１ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
発掘調査期間　平成21年４月８日～６月30日、
　　８月３日～８月12日
調査終了面積　2,535㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・菅野　梢
主要な時代　縄文・中世・近世

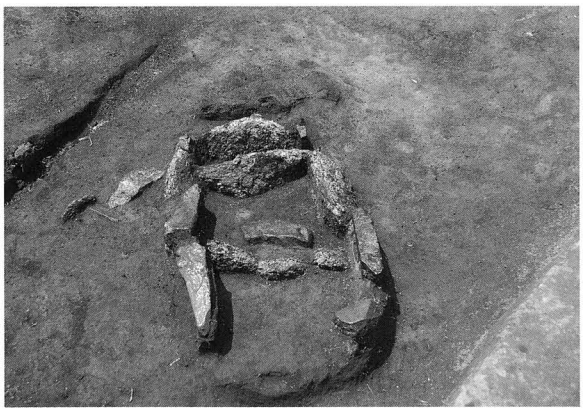
遺跡の立地

本遺跡はJR山田線磯鶏駅の南西約3.6kmに位置し、宮古湾に向かい北流する八木沢川の西岸に立地している。調査地点は遺跡の南端部にあたる山地の斜面部と、そこから広がる緩斜面～平坦面からなる。標高は20～50mを測る。

調査の概要

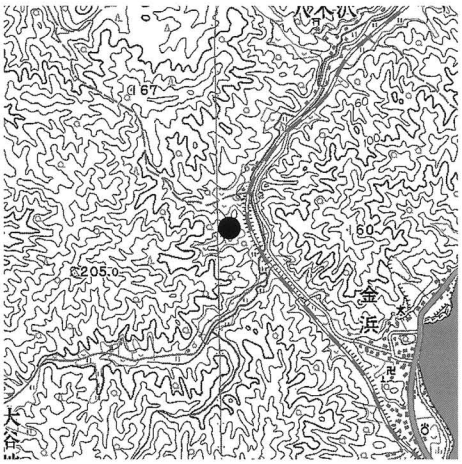
検出された遺構は、縄文時代の住居跡２棟・焼土23基・陥し穴状遺構６基・集石１基、古代の炭窯跡１基、中世の竪穴建物跡２棟、近世の掘立柱建物跡４棟・溝跡２条・墓壙６基、時期不明土坑22基である。遺物は縄文土器が中コンテナ６箱、石器類が中コンテナ１箱、陶磁器・金属製品などが小コンテナ１箱出土している。

今年度調査区である遺跡南端部の斜面部並びに緩斜面～平坦面は、前年度の調査区並びに隣接する八木沢駒込Ⅱ遺跡とは小規模な沢によって隔てられており、この部分だけで独立した遺跡範囲として捉えることができる。上記した遺構・遺物が得られたことにより、縄文時代中期後半には小規模な集落であったことが明らかになった。縄文時代早期・前期・弥生時代の遺物も出土していることから、この時期も集落として利用されていたようである。陥し穴状遺構も点在しており、集落が営まれていなかった時期には狩猟場となっていたことが分かった。古代には斜面部に炭焼窯が築かれていた。中世後半にも竪穴建物跡を有する小規模な集落があり、これが近世の建物跡へ時期的に連続する可能性がある。建物跡には３段階の変遷があるほか、屋敷墓も６基検出している。


縄文時代中期住居の炉跡

中世後半の竪穴建物跡

(20) 八木沢駒込Ⅱ遺跡（やぎさわこまごめ）



1：50,000　宮古

所　在　地　宮古市大字八木沢第８地割字駒込75－１ほか
委　託　者　国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事　業　名　三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
発掘調査期間　平成20年５月25日～７月３日
調査終了面積　3,600㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・菅野　梢
主要な時代　縄文・古代

遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南西約3.8kmに位置しており、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地する。今回の調査区は遺跡中央部から西部にあたり、地形は尾根部と沢部、沢を下った所にある平坦部からなる。標高は33～65mで現況は山林であった。

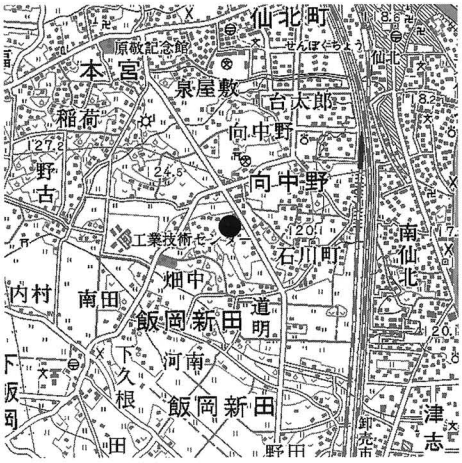
調査の概要

今回の調査では、遺跡の中央から東側を調査したことになる。遺跡内では最も標高の高い尾根の頂部を調査し、そこから土坑を１基検出した。遺物は出土しなかったが、昨年度に出土した古代の和鏡や飾金具との関係が考えられる。東側の平坦面には遺構はなく、八木沢川の旧河道であったようである。遺跡北部は一昨年の調査により小規模な縄文時代中期の集落、狩猟の場として利用されていたことが判明しているが、縄文時代の遺構は今年度調査区までは広がらなかった。

出土遺物は縄文土器・石器類が小コンテナ0.5箱である。

遺跡遠景

(21) 細谷地遺跡（ほそやち）　第24次調査



1：50,000　盛岡

所　在　地　盛岡市向中野字野原27－３ほか
委　託　者　盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年５月18日～６月19日
調査終了面積　1,224㎡
調査担当者　羽柴直人・本多準一郎・田中美穂
主要な時代　古代

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3㎞に位置し、雫石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の南西隅部分に相当し、北側調査区と南側調査区の２地点に分かれる。両調査区は約25m離れており、両地点ともに標高は約122m、調査前は宅地として使用されていた。

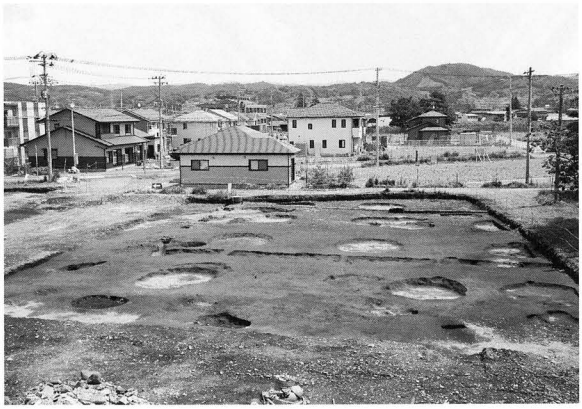
調査の概要

北側調査区では平安時代前半の竪穴住居跡１棟、平安時代前半には埋没が完了していた沢跡１条が検出された。竪穴住居跡は一辺約2.3mの小規模な建物で、カマドは北壁に設置されている。住居に伴う遺物はロクロ不使用の土師器長胴甕、須恵器坏などがカマド周辺から出土している。沢跡は第14次調査で検出された沢跡に連続するものである。出土遺物、遺構の切り合いはなかったが、第14次調査等の知見から８世紀以前には埋没したものと判断されている。

南側調査区では果樹の植栽痕と推測される穴が等間隔で連続して検出されたが、出土遺物から20世紀中葉以降の所産と判断された。このように本調査次の遺構密度は非常に小さいことが明らかになった。これまでの遺跡全体の遺構配置の状況から、本調査区は平安時代の集落の南端部に相当すると予測されていたが、その予想に合致する調査結果であった。

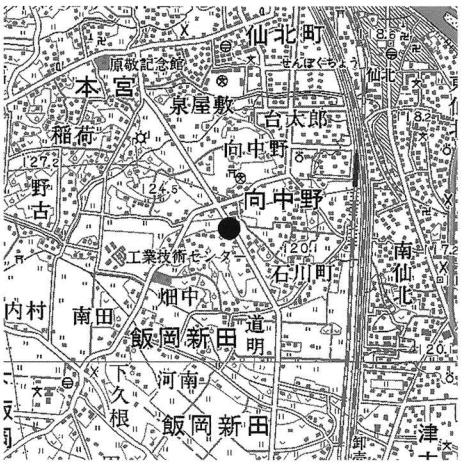
竪穴住居跡（ＲＡ180）

北側調査区全景



南側調査区全景

(22) 細谷地遺跡（ほそやち）　第25次調査



1：50,000　盛岡

所　在　地　盛岡市向中野字野原９－５ほか
委　託　者　独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年６月15日～９月11日
調査終了面積　946㎡
調査担当者　羽柴直人・田中美穂
主要な時代　古代

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3㎞に位置し、雫石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の中央やや北寄りに相当する。標高は約122m、調査前は道路と自動車整備工場敷地として使用されていた。

調査の概要

検出遺構は平安時代前半の竪穴住居跡７棟（内１棟は20次調査で一部調査）、土坑２基、中世以降の掘立柱建物跡１棟、馬の埋葬墓１基が検出された。また、今次調査範囲内において、細谷地遺跡の北東部に接する向中野館遺跡を囲む堀跡の一部が検出されたが、この堀については、便宜的に向中野館遺跡に含まれるものとして扱い、ここでは検出遺構にカウントしないこととする。出土遺物は土師器、須恵器類が大コンテナ５箱、近世陶磁器類が大コンテナ１箱出土している。この他に埋葬されていた馬骨が一頭分出土している。骨の残存状況は不良である。

竪穴住居跡はいずれも出土遺物から９世紀以降に属するものである。道路敷や水道管、排水溝等で著しく攪乱を受けている住居が多く、カマド位置が不明のものもある。カマド位置が明らかなものは、北壁が１棟、西壁が２棟、東壁が１棟である。調査区最南端で検出された竪穴住居跡ＲＡ181は１辺8.1ｍの大規模な建物である。掘立柱建物跡ＲＢ025は竪穴住居ＲＡ185と重複しており、ＲＢ025が新しい。３間×５間で西側に庇が付く。形態等から中世以降の建物と判断されるが、確実に共伴する陶磁器がなく詳細な時期は不明である。馬の埋葬墓は時期不詳であるが、近世以降の所産と推測される。また、近世陶磁器が調査区北西隅の攪乱部分からまとまって出土した。この攪乱は用水路改良のヒューム管設置の際のもので、近世陶磁器は近世の用水路に起因する出土状況と推測される。

竪穴住居跡（ＲＡ181）

掘立柱建物跡（ＲＢ025）

(23) 向中野館遺跡（むかいなかのだて）　第12次調査

1:50,000　盛岡

所　在　地　盛岡市飯岡新田２地割133－２ほか
委　託　者　盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年６月16日～９月11日
調査終了面積　633㎡
調査担当者　羽柴直人・田中美穂
主要な時代　古代・中世

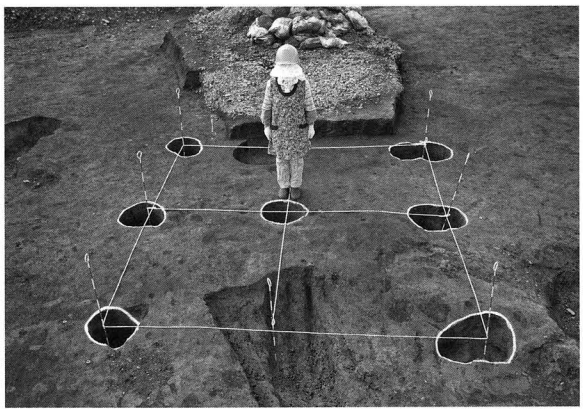
遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.2㎞に位置し、雫石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の南西隅部分に相当する。標高は約122m、調査前は道路、神社境内として使用されていた。

調査の概要

古代の遺構は竪穴住居跡７棟、掘立柱建物跡１棟、土坑２基が検出された。中世以降と推測される遺構は堀１条、掘立柱建物跡２棟、溝３条が検出された。また、近代以降と推測される豚の頭骨を埋納した土坑が１基検出されている。出土遺物は土師器、須恵器が大コンテナ５箱、近世陶磁器中コンテナ１箱、永楽通寶（模鋳銭）４枚が重なって出土した。古代の竪穴住居のうち２棟が８世紀以前、５棟は９世紀以降に属するものである。古代の掘立柱建物（ＲＢ016）は２×２間の総柱建物である。形態から古代の建物と判断した。堀跡は第10次調査等で検出された堀に連続する同一のもの（ＲＧ012）で、向中野館を囲む大規模な堀である。今次の調査範囲では堀の南辺が検出され、これにより向中野館の南北の内法幅が約50mであることが明らかになった。また、従前の調査では堀の西辺と北辺の内側に土塁の存在が確認されていたが、今次検出の南辺では土塁の痕跡は確認できなかった。調査範囲は道路範囲であり、その工事の際に完全に土塁が破壊された可能性も高い。中世以降と推測される２棟の掘立柱建物は堀内部に位置し、向中野館に伴う建物の可能性が考えられる。また、永楽通寶の模鋳銭は向中野館の年代を示す資料であるが、この他に中世に属する陶磁器類は１点も出土していない。このような中世遺物の寡少さが、向中野館の存続年代推定を困難にしている。

竪穴住居跡（ＲＡ037）


掘立柱建物跡（ＲＢ016）

(24) 向中野館遺跡（むかいなかのだて）　第13次調査

所　在　地　盛岡市飯岡新田2地割133－２ほか
委　託　者　独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年６月16日～９月11日
調査終了面積　615㎡
調査担当者　羽柴直人・田中美穂
主要な時代　古代・中世

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.2㎞に位置し、雫石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の南西端部に相当する。標高は約122m、調査前は道路として使用されていた。

調査の概要

検出遺構は古代の竪穴住居跡３棟、時期不明の土坑１基、中世以降の堀１条、近世以降の溝１条、古代には埋没が完了していた低地１箇所が検出された。出土遺物は土師器、須恵器が中コンテナ１箱、近世陶磁器類が小コンテナ１箱出土した。

古代の竪穴住居は３棟いずれも９世紀以降のもので、カマド方位は２棟が西側、１棟が不明である。堀は向中野館を囲む大規模なもので、第10次調査や、今年度調査がおこなわれた第12次調査で検出された堀（ＲＧ012）と同一のものである。本調査次では南西隅のコーナー部分が検出された。向中野館の堀の南辺は近代に到るまで農業用水路として、堀のラインを踏襲して使用しており、今次調査区と東側に連続する12次調査区の堀埋土からは近世陶磁器や近代以降の廃棄物が多数出土している。堀の南西コーナー部分の西側に溝ＲＧ019が連結する形で位置しており、西側から延びる用水路と堀跡踏襲の用水路部分を連結する溝と判断される。低地は隣接する12次調査区で終息しており、沢ではなく低地とした。低地の堆積土最上部に十和田ａ降下火山灰が散布しており、平安時代前半にはすでに埋没していたと理解される状況であった。古代の竪穴住居ＲＡ042は低地の堆積土を掘り込んで構築しており、埋没時期を知る手がかりになる。低地堆積土からの出土遺物はなかった。

堀跡（ＲＧ012）

竪穴住居跡（ＲＡ019）

(25) 矢盛（やもり）遺跡　第23次調査

所　在　地　盛岡市向中野字野原49－３ほか
委　託　者　盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年７月１日～７月30日、
10月16日～11月26日
調査終了面積　5,720㎡
調査担当者　高木　晃・須原　拓・北田　勲・小林弘卓
主要な時代　縄文・近世

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約３㎞、仙北町駅から南西に約1.6㎞に位置し、雫石川によって形成された沖積段丘上に位置する。標高は123m～124mで、隣接する第18次調査区（平成20年度）よりも約１m高い。

調査の概要

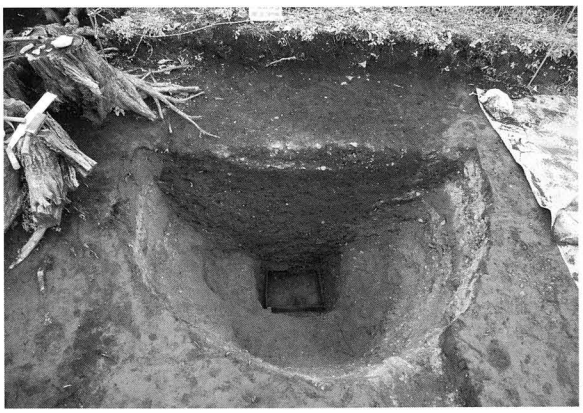
検出遺構は、縄文時代に帰属すると思われる陥し穴４基、近世に帰属する掘立柱建物跡15棟、土坑34基、墓坑16基、井戸５基、溝９条、柱穴状土坑375基である。

縄文時代の陥し穴は調査区北端と、飛地の南側調査区からみつかった。遺物を伴わず、具体的な時期は不明であるが、遺構の形態から縄文時代のものと判断した。陥し穴は過去の調査でもみつかっており、それらに続く一連の遺構と思われる。

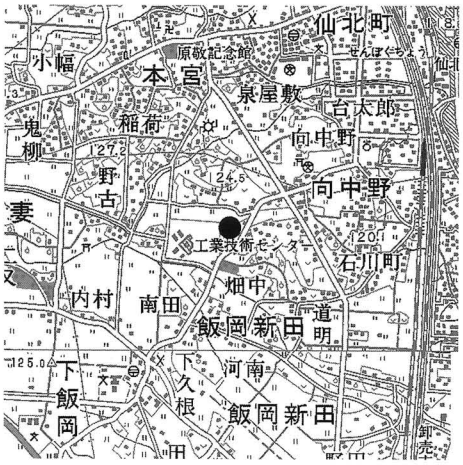
近世の遺構は調査区北側に集中する。特に調査区北東側では５時期にわたると推定される掘立柱建物跡群が重複しながら分布する。また墓坑や井戸は掘立柱建物跡を避けた場所に位置し、掘立柱建物跡群と墓、井戸は一連の遺構群と想定する。近世墓は重複しており、形態が定かでないものも見受けられたが、人骨、副葬品はほぼ良好な状態で出土した。

出土遺物は掘立柱建物跡の柱穴内から陶磁器片数点と銭貨（古寛永）が、また近世墓坑の副葬品として陶磁器類11点、鏡（柄鏡・ガラス製）７面、銭貨（古・新寛永、洪武通宝）48枚、袋状製品（布か皮製）５点、簪１点、釘２点、煙管吸い口１点、他に井戸の底から木枠が出土した。遺構・遺物の時期は、出土した陶磁器片から17世紀後半～18世紀中頃に比定されるものと思われる。

掘立柱建物跡群


井戸

(26) 矢盛（やもり）遺跡　第24次調査



1:50,000　盛岡

所　在　地　盛岡市向中野字野原49－３ほか
委　託　者　独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年７月１日～７月30日、
10月16日～11月26日
調査終了面積　425㎡
調査担当者　高木　晃・須原　拓・北田　勲・小林弘卓
主要な時代　近世

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約３㎞、仙北町駅から南西に約1.6㎞に位置し、雫石川によって形成された沖積段丘上に位置する。標高は123m～124mで、隣接する第18次調査区（平成20年度）よりも約１m高い。

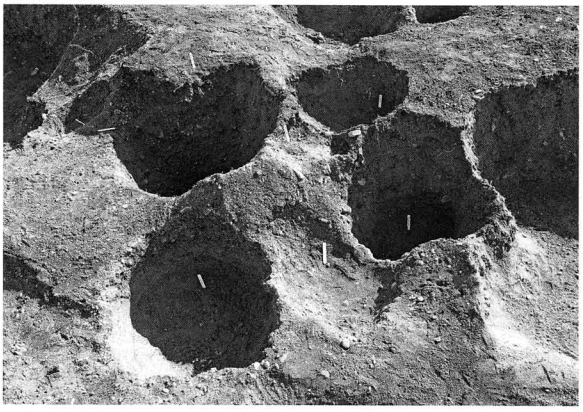
調査の概要

検出遺構は、近世に帰属する掘立柱建物跡６棟、土坑５基、墓坑８基、溝３条、焼土遺構２基、柱穴状土坑43基である。隣接する第23次調査区と同様の性格の遺構群であり、両方の調査区をまたいでいる遺構も多い。掘立柱建物跡群は重複関係と各建物の長軸方向のあり方から、５時期の変遷がたどれるものと思われる。また掘立柱建物跡群の北側に位置する近世墓は重複が激しいものの、人骨と副葬品の残存状態は、ほぼ良好であった。

出土遺物は主に近世墓からの副葬品であり、銭貨33枚、陶磁器８点、鏡（柄鏡、ガラス製）４面、簪１点、袋状製品（布か皮製）３点がみつかっている。遺物の時期は出土した陶磁器から17世紀後半～18世紀中頃に比定される。遺構もその頃に帰属するものと思われる。

調査区全景

掘立柱建物跡


近世墓

(27) 台太郎遺跡　第66次調査

1:50,000　盛岡

所　在　地　盛岡市向中野字向中野40－25ほか
委　託　者　盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年６月１日～11月27日
調査終了面積　11,911㎡
調査担当者　羽柴直人・本多準一郎・中村絵美・田中美穂
主要な時代　古代・中世～近世

遺跡の立地

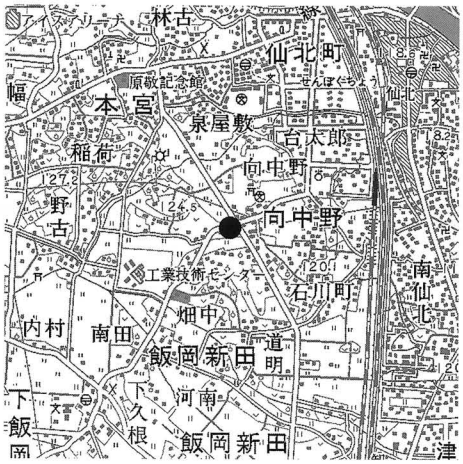
台太郎遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約900mに位置する。雫石川によって形成された河岸段丘上に立地し、標高は120m程度である。台太郎遺跡は昭和60年から調査が開始され、今回はその66次目にあたり、調査区は遺跡範囲の南西部に位置している。

調査の概要

検出された遺構は、奈良時代以前の竪穴住居跡５棟、中世から近世の掘立柱建物跡72棟・竪穴建物３棟・カマド状遺構７棟・柱穴約2300個、古代以降の土坑84基（うち墓壙２基）・溝跡51条である。竪穴住居跡はお互いある程度距離を持って点在するが、掘立柱建物跡は調査区内でも比較的標高の高い場所に複数軒重複して建てられており、その集中箇所は３つに分かれている。遺物は中コンテナで５箱、大半が奈良時代以前の土器で、これ以外に中世～近世の陶磁器・銭貨、時期不明の刀子などが出土している。

調査区全景

(28) 飯岡才川遺跡（いいおかさいかわ）　第16次調査



所　在　地　盛岡市飯岡新田２地割39－３ほか
委　託　者　盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事　業　名　盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間　平成21年９月１日～12月４日
調査終了面積　5,921㎡
調査担当者　金子昭彦・藤原大輔
主要な時代　縄文・平安

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約２㎞にあり、雫石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。遺跡の南を画する才川は、縄文時代には幅数十ｍもあったようで、西から東に向かって流れ、遺跡は、才川に沿って東西方向に600ｍ以上延びる。推定面積は約62,000㎡で、既に推定範囲の2/3以上を調査している。標高は120～124ｍである。

調査の概要

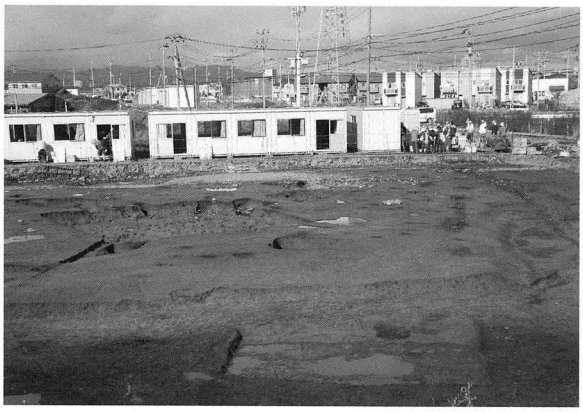
今回の調査区は、二か所に分かれるが、ともに遺跡の南端に位置する。南限東端に相当する東側調査区（1,369㎡）は、予想通り平安時代（約1,100年前）の村の中心の一つで、南限中央付近に位置する西側調査区（4,552㎡）は、その村の西のはずれであることがわかった。また、遺跡の南限である才川に沿って、縄文時代の陥し穴状遺構（溝状）が40基以上掘られており、今回も検出された。

東側調査区では、縄文時代陥し穴状遺構４基、平安時代竪穴住居跡９棟（周囲の調査区からの続き２棟含む）、掘立柱建物跡２棟（周囲の調査区からの続き１棟含む）、住居状遺構２基、土坑19基、溝跡１条（周囲の調査区からの続き）が検出された。特筆されるのは、一辺７ｍを越える大形住居跡、柱間２間×２間の総柱掘立柱建物跡、土師器焼成坑と推測される土坑２基などで、大形竪穴住居跡を区画するかのような大溝跡（幅約１ｍ、最深）が注目される（写真参照）。

西側調査区では、縄文時代陥し穴状遺構６基、平安時代掘立柱建物跡１棟、溝跡１条検出された。

出土遺物は、東側調査区では、平安時代土器大コンテナ３箱、フイゴ羽口１点、石器（砥石）約30点、鉄製品４点、鉄滓１点、西側調査区では、平安時代土器小片１点のみである。

７ｍを越える大形住居跡


大形住居を区画する？大溝跡

(29) 佐原（さばら）Ⅱ遺跡

1:50,000　宮古

所　在　地　宮古市佐原三丁目10番１ほか
委　託　者　宮古市
事　業　名　北部環状線道路改良事業
発掘調査期間　平成21年７月６日～10月９日
調査終了面積　1,300㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・菅野　梢
主要な時代　縄文・弥生

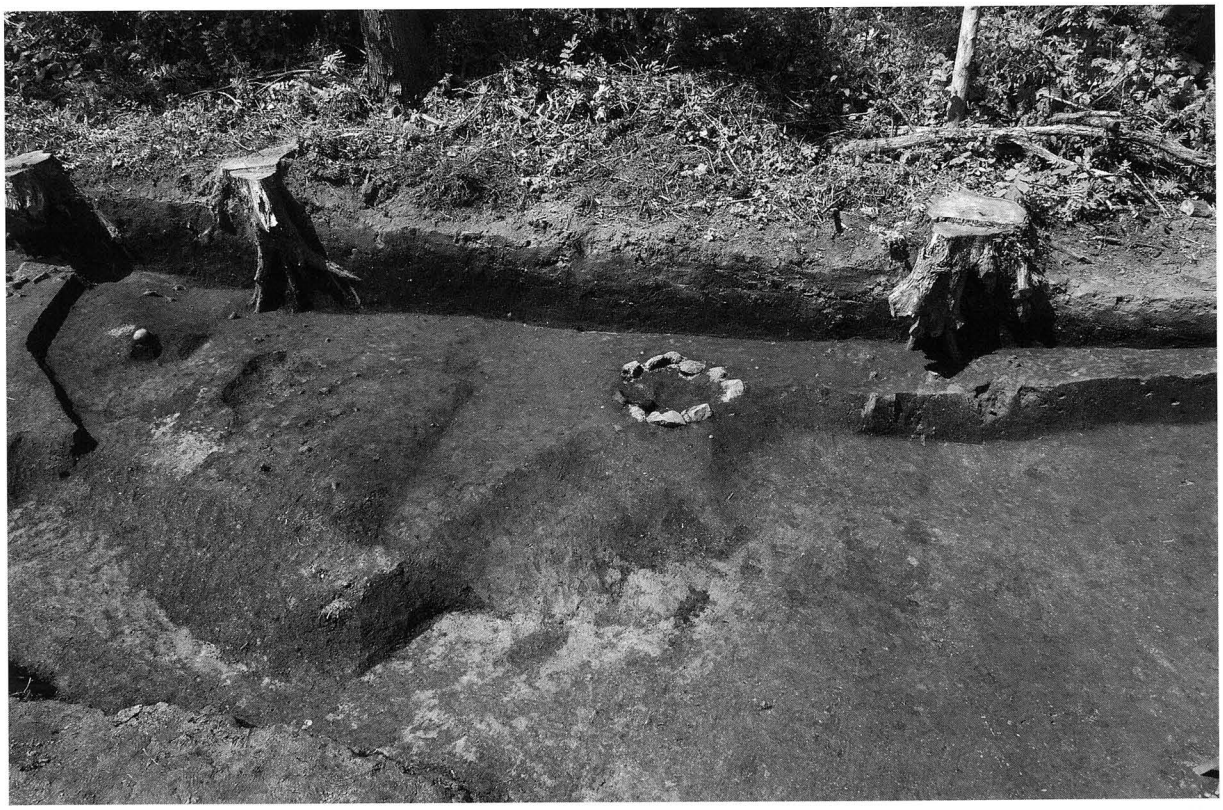
遺跡の立地

本遺跡はJR山田線宮古駅の北北東約２㎞に位置している。西から東に延びる二つの尾根に挟まれた傾斜地と平坦面からなり、調査前の現況は杉林と雑種地であった。遺跡の標高100～110mを測る。

調査の概要

調査区は三つに分かれている。北側調査区からは上幅約９ｍの沢跡が見つかり鉄滓・羽口などが出土しており、周辺に鉄生産（鍛冶施設）遺構が想定される。西側調査区は尾根先端部にあたり、弥生時代の竪穴住居跡が１棟検出された。この時期の小規模な集落が西側にも広がっている可能性が高い。縄文時代の落とし穴も１基検出されている。南側調査区は最も標高が高く堆積土の状態も良好であったものの、遺物は少なく焼土を６基検出したのみであった。

出土遺物は縄文土器が中コンテナ１箱、弥生土器が中コンテナ１箱、石器類が小コンテナ１箱、鉄滓・羽口が中コンテナ２箱、陶磁器類が小コンテナ１箱である。


弥生時代の住居跡

(30) 小屋野（こやの）遺跡

1:50,000　盛岡・日詰

所　在　地　盛岡市川目第５地割122－82ほか
委　託　者　盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所
事　業　名　簗川ダム建設事業
発掘調査期間　平成21年８月３日～11月13日
調査終了面積　2,780㎡
調査担当者　丸山浩治・鳥居達人・北村忠昭・小林弘卓
主要な時代　縄文

遺跡の立地

本遺跡は、JR盛岡駅の南東約9.2kmに位置し、簗川左岸の河岸段丘上及び南西丘陵からのびる小規模な扇状地に立地する。標高は190～215mである。崖錐性堆積層が幾重にも重なり、地点により内容や層厚が異なるため土層堆積様相は極めて複雑である。現況は山林である。なお、今年度調査予定面積は5,700㎡であったが、北東部2,920㎡が未了となり、次年度以降の調査となった。さらにその北東側の周知遺跡範囲およびその隣接地について新たに試掘調査が実施され、縄文時代の遺構・遺物が確認されている。

調査の概要

遺構・遺物は、調査区北東側の低位部緩斜面上で検出された。検出面は、縄文時代中期後半から平安時代以降までの５面が存在する。検出遺構は、縄文時代の竪穴住居１棟（晩期）、土器埋設遺構１基（後期）、土坑１基、柱穴状土坑４個、縄文時代晩期～弥生時代の土坑５基、焼土遺構14基、炭化物集中４箇所、中世のカマド状遺構２基、時期不明の土坑１基、畑跡１箇所、溝５条、柱穴状土坑３個である。このほか、未精査であるが、縄文時代中期後半の焼土遺構２基、後期の竪穴住居２棟、竪穴住居状遺構１棟を検出している。これらについては、次年度以降の精査となる。

出土遺物は縄文期のものが主体で、土器（中～晩期）大コンテナ6.5箱、石器大コンテナ４箱、土偶１点、円盤状土製品１点、石棒類２点、炭化種実（オニグルミ等）が出土している。このほかには、弥生土器大コンテナ0.5箱、銭貨１点（元豊通寶）、近世～近代の鉄製品２点（蹄鉄・釘各１点）、陶磁器６片がある。

縄文時代晩期の竪穴住居

縄文時代晩期～弥生時代の土坑

(31) 鵜ノ木南台地遺跡

1:50,000　水沢

所　在　地　奥州市水沢区黒石町字鵜ノ木50－３ほか
委　託　者　県南広域振興局土木部
事　業　名　緊急地方道路整備事業
発掘調査期間　平成21年８月３日～10月30日
調査終了面積　1,736㎡
調査担当者　北田　勲・小林弘卓
主要な時代　縄文・平安

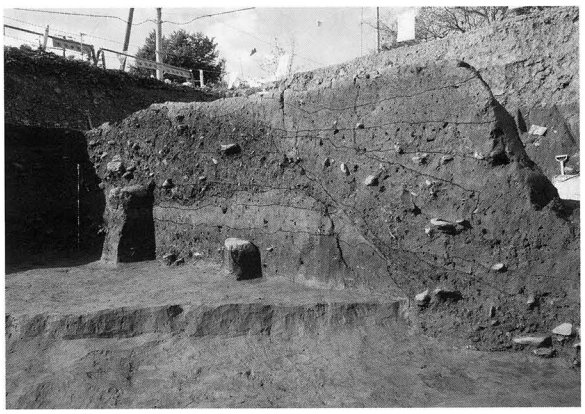
遺跡の立地

鵜ノ木南台地遺跡はJR東北本線水沢駅の南東約４㎞に位置し、大田代川左岸の河岸段丘上に立地している。現況は宅地で、標高は34m前後。

調査の概要

検出した遺構は、縄文時代後期～晩期の遺物包含層（捨て場）590㎡、竪穴住居跡１棟、土坑５基、配石遺構２基、焼土遺構13基、土器埋設遺構９基、柱穴状土坑21個、平安時代の竪穴住居跡２棟、平安時代以降の堀跡１条である。

縄文時代の遺物包含層（捨て場）は、Ⅲａ層・礫混黒色土（層厚20㎝）縄文時代晩期中～後葉、Ⅲｂ層・礫混黒褐色土（層厚60～90㎝）後期中～後葉、Ⅲｃ層・褐色土（層厚10～20㎝）後期前葉、Ⅲｄ層・礫混黒褐色粘土（層厚30～50㎝）後期初頭から構成され、多量の遺物が層位的に出土した。

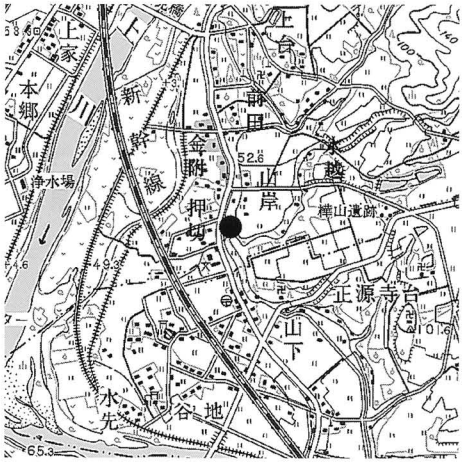

遺物包含層断面

北区旧沢跡断面

土器埋設遺構

遺物出土状況

(32) 境（さかい）遺跡



1:50,000　北上

所　在　地　北上市稲瀬町地蔵堂190ほか
委　託　者　県南広域振興局北上総合支局土木部
事　業　名　緊急地方道整備事業下門岡工区
発掘調査期間　平成21年４月８日～７月14日
調査終了面積　1,240㎡
調査担当者　鳥居達人・北村忠昭・菅　常久・小林弘卓
主要な時代　縄文・弥生・中世

遺跡の立地

境遺跡は、北上川の東岸に所在し、JR東北本線北上駅から南に約4.5km、奥州市江刺区稲瀬と隣り合う北上市稲瀬町地蔵堂に位置する。現況は水田及び更地となっている。

遺跡周辺の地形は谷底平野及び氾濫平野を主とし、その中に自然堤防が点々と形成されている。遺跡は、その自然堤防上に立地し、平成18年度から開始された３年間の調査において、縄文時代晩期末葉から弥生時代前葉にかけての竪穴住居跡、弥生時代中後期の土坑、平安時代の竪穴住居跡、古代から中世にかけての配石遺構や堀跡・溝跡、中世の土葬墓などが検出されている

調査の概要

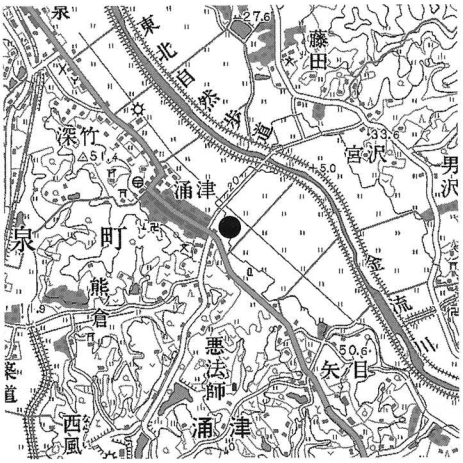
今回調査の検出遺構は、竪穴住居跡１棟、竪穴住居状遺構２基、土坑50基、焼土遺構２基、溝跡12条、柱穴状土坑314個、炭化物集中区２ヶ所である。縄文時代から弥生時代にかけての遺構には、竪穴住居跡と土坑がある。古代から中世には、竪穴住居状遺構２基、火葬跡と思われる２基の焼成土坑と墓壙と思われる土坑群、溝跡や柱穴状土坑群があり、当期に置いて集落があった可能性を示す。

遺物は、縄文～弥生土器が大コンテナで５箱出土している。縄文土器は、大半が縄文時代中期末葉の土器で、他には少量であるが後期前葉、晩期中後葉のもの、弥生土器がある。古代・中世土器では土師器３点、須恵器15点、かわらけ1点、陶磁器は８点の出土である。陶磁器には、中国産の青白磁や渥美産の陶器などがある。石器は中コンテナ３箱で、黒曜石製の石鏃や頁岩製のスクレーパーなどがあるが、磨石状の不明な礫が多い。その他では鉄製品が32点、鉄滓は1535ｇ、羽口と思われる破片が15点、古銭１点が出土している。

中世の土坑群

縄文土器出土状況

(33) 五輪堂（ごりんどう）遺跡



所　在　地　一関市花泉町字五輪堂14－１ほか
委　託　者　県南広域振興局一関総合支局土木部
事　業　名　一般国道342号花泉バイパス建設事業
発掘調査期間　平成21年７月１日～10月９日
調査終了面積　4,680㎡
調査担当者　村田　淳・高橋静歩・佐々木智久
主要な時代　縄文・古代・中世・近世

遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線花泉駅から南東へ約2.5km、金流川右岸の河岸段丘上に位置する。今回は、遺跡範囲の西端及び一部その外側に続く範囲の調査を行った。調査前は休耕田であったが、昭和30年代以降に行われた圃場整備により調査区全域が大幅に削平されていた。検出面の標高は17.5～21.0mである。

調査の概要

検出した遺構は、土坑10基、堀１条、溝49条、柱穴66個である。出土遺物及び遺構の重複関係から、土坑２基と溝16条が古代、土坑１基と堀１条が中世に属すると考えられ、その他は近世もしくは時期不明のものである。遺物は、土師器・須恵器小コンテナ2.5箱、かわらけ３点、常滑産陶器甕片１点、伊豆沼産の可能性がある陶器片口鉢片１点、近世陶磁器小コンテナ１箱、石鏃４点、石臼１点、鉄鏃１点、木製品（下駄・杭など）大コンテナ２箱分などが出土している。

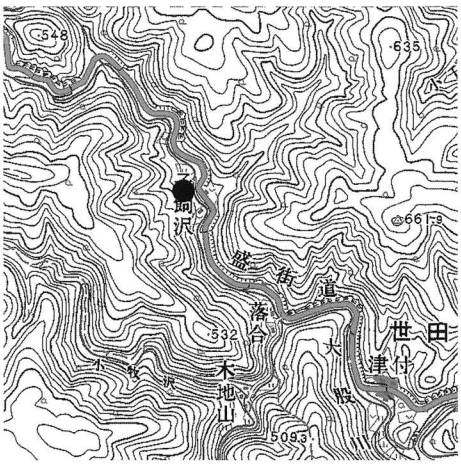
中世の堀は、北西－南東方向に走る長大なもので調査区内では約47m検出しているが、北西側・南東側ともさらに延びるものと考えられる。遺存状況の良かった地点の観察によると、断面形は箱形で、本来の上面幅は2.5m以上あったと考えられる。また、堆積土の状況から本遺構が一定期間滞水していたこと、近世に一度掘り返しが行われていることも確認した。この他、調査区南側では東西方向に平行して掘削されている古代の溝、調査区中央では常滑産陶器片が出土した中世の土坑などを検出している。

本遺跡の位置する涌津五輪堂地内は、過去に地名の由来にもなった国の重要指定文化財である鉄製五輪塔地輪が出土したと伝えられる場所である。今回の調査でもこの直接的関連は不明ながら中世に属する遺構（堀跡）や遺物（国産陶器）が検出されており、鉄五輪塔が造立された時期に近接する時期の資料を追加できたことが成果といえる。

中世の堀跡

古代の溝跡

(34) 子飼沢（こがいさわ）Ⅰ遺跡



1:50,000　陸中大原

所　在　地　気仙郡住田町世田米字子飼沢２ほか
委　託　者　大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所
事　業　名　津付ダム建設事業
発掘調査期間　平成21年６月１日～９月30日
調査終了面積　7,500㎡
調査担当者　星　雅之・佐藤里恵・高橋静歩
主要な時代　縄文・古代・近世

遺跡の立地

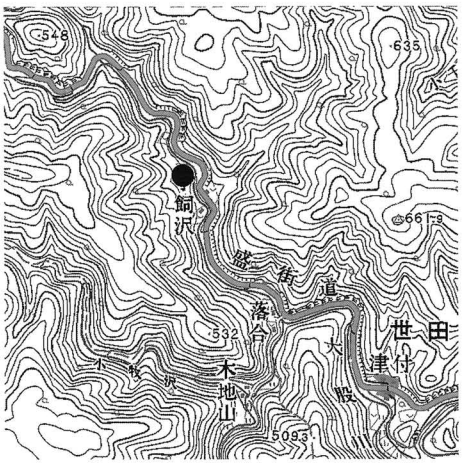
本遺跡は、住田町役場の西約15km、種山高原の東約５kmに位置し、大股川右岸の河岸段丘上に立地する。平成20年度・21年度の２カ年に亘り調査が行われた子飼沢Ⅱ遺跡の南側にあり、沢を挟んで近接する。標高336～362mで、現況は山林であった。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の土坑５基、古代の土坑１基、近世の鍛冶炉１基・焼土遺構４基、炭窯３基・土坑１基である。遺物は、縄文土器大コンテナ1.5箱、須恵器片１点、石器類大コンテナ１箱、鉄滓大コンテナ１箱が出土した。土器の主体は、縄文時代後期初頭で門前式に相当する。

遺跡全景（上が西）

(35) 子飼沢（こがいさわ）Ⅱ遺跡



1:50,000　陸中大原

所　在　地　気仙郡住田町世田米字子飼沢１－３ほか
委　託　者　大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所
事　業　名　津付ダム建設事業
発掘調査期間　平成21年４月９日～８月31日
調査終了面積　2,200㎡
調査担当者　星　雅之・佐藤里恵・高橋静歩
主要な時代　縄文・近世

遺跡の立地

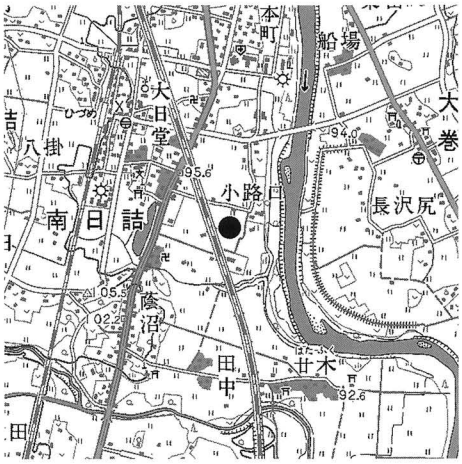
本遺跡は、住田町役場の西約15㎞、種山高原の東約５㎞に位置し、大股川右岸の河岸段丘に立地する。今回の調査は、平成20年度からの継続調査で、未了であった2,200㎡を対象に実施した。本遺跡の南側にある子飼沢Ⅰ遺跡とは沢を挟んで近接する関係にある。標高337～370mで現況は休耕田であった。

調査の概要

今年度の検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡６棟・土坑19基・粘土採掘坑１箇所、近世の製鉄炉とその上屋建物（掘立柱建物跡）・鍛冶工房跡１棟（鍛冶炉・カマド状遺構・土坑など）・溝跡１条・焼土遺構１基・土坑２基・粘土採掘坑４ヵ所・性格不明遺構１基・排滓場１ヵ所である。遺物は、縄文土器大コンテナ3.5箱、石器類大コンテナ３箱、鉄製品中コンテナ２箱、鉄滓・炉壁・羽口など大コンテナ約500箱が出土した。

製鉄炉跡（西から）

(36) 南日詰小路口Ⅰ遺跡



所　在　地　紫波郡紫波町南日詰字小路口26－２ほか
委　託　者　盛岡地方振興局農政部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤整備事業
発掘調査期間　平成21年４月８日～11月17日
調査終了面積　5,825㎡
調査担当者　阿部勝則・川又　晋・中村絵美・八重畑ちか子
主要な時代　縄文・古代・近世

遺跡の立地

南日詰小路口Ⅰ遺跡は、JR東北本線日詰駅の南東約１㎞、北上川西岸の河岸段丘に立地する。調査前の現況は、水田・宅地で、標高92～93mである。遺跡の北西側には、12世紀の樋爪（比爪）氏の居館と推定される比爪館跡が位置している。東北新幹線を挟んで西側に同Ⅱ遺跡が位置する。

調査の概要

検出遺構は、平安時代の溝跡40条、道路状遺構１箇所、井戸跡６基、土坑35基、近世の溝跡５条、土坑５基などである。部分的な調査ながら、溝跡には区画を意識した溝跡や、幅８ｍの大溝跡も確認されている。主な出土遺物は、12世紀のかわらけ大コンテナ20箱、陶磁器大コンテナ３箱、木製品大コンテナ３箱である。比爪館周辺に位置する遺跡として、樋爪氏に密接に関連する遺跡であると考えられる。

大溝跡（北から）

柱根出土状況

区画溝と道路状遺構（南から）

遺物出土状況

(37) 南日詰小路口Ⅱ遺跡

所　在　地　紫波郡紫波町南日詰字小路口54－１ほか
委　託　者　盛岡地方振興局農政部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤整備事業南日詰地区
発掘調査期間　平成21年４月８日～11月17日
調査終了面積　6,461㎡
調査担当者　阿部勝則・川又　晋・中村絵美・八重畑ちか子
主要な時代　縄文・古代・近世

遺跡の立地

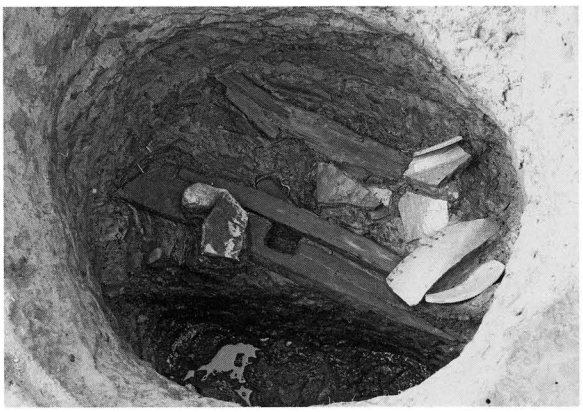
南日詰小路口Ⅱ遺跡は、JR東北本線日詰駅の南東約１㎞、北上川西岸の河岸段丘に立地する。調査前の現況は、水田・宅地などで、標高は92～93mである。遺跡の北西側には、12世紀の樋爪（比爪）氏の居館と推定される比爪館跡が位置している。東北新幹線を挟んで東側に同Ⅰ遺跡が位置する。

調査の概要

検出遺構は、平安時代の竪穴住居跡３棟、掘立柱建物跡３棟、溝跡23条、井戸跡７基、土坑13基、近世の溝跡４条、掘立柱建物跡３棟、土坑８基などである。平安時代の溝跡や掘立柱建物跡、井戸跡は、出土遺物から12世紀と推定される。主な出土遺物は、土師器・須恵器大コンテナ２箱、12世紀のかわらけ大コンテナ２箱、陶磁器大コンテナ２箱、木製品大コンテナ７箱、近世の陶磁器大コンテナ３箱である。比爪館周辺に位置する遺跡として、樋爪氏に密接に関連する遺跡であると考えられる。

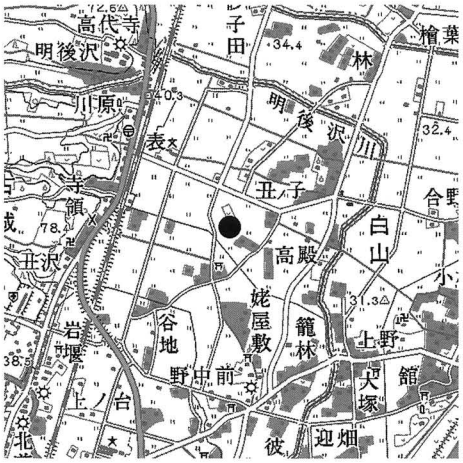
古代の竪穴住居跡（西から）

12世紀の区画溝と掘立柱建物跡（南から）


部材と陶磁器が出土した井戸跡

近世の屋敷地跡（北から）

(38) 水尻（みずしり）遺跡



所　在　地　奥州市前沢区古城字水尻135ほか
委　託　者　県南広域振興局農林部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤事業古城２期地区
発掘調査期間　平成21年10月１日～11月27日
調査終了面積　1,496㎡
調査担当者　米田　寛・高橋静歩
主要な時代　旧石器・縄文・古代

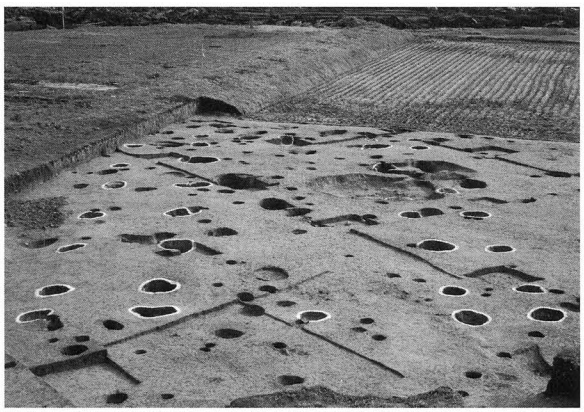
遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅より南へ約２㎞、北上川西岸の水沢高位段丘面上に形成された微高地に立地する。標高は35～40mで調査前の現況は水田、畑地である。

調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、石器集中部６箇所、掘立柱建物４棟、竪穴住居状遺構１基、土坑７基、柱穴列４条、柱穴状土坑218個、周溝１条、溝10条、不明遺構４基である。遺物は旧石器305点、縄文土器47点、土師器・須恵器片大コンテナ1.5箱、緑釉陶器１点、土錘７点、石鏃・石錐・剥片などの剥片石器４号１袋、敲石などの礫石器数点が出土した。

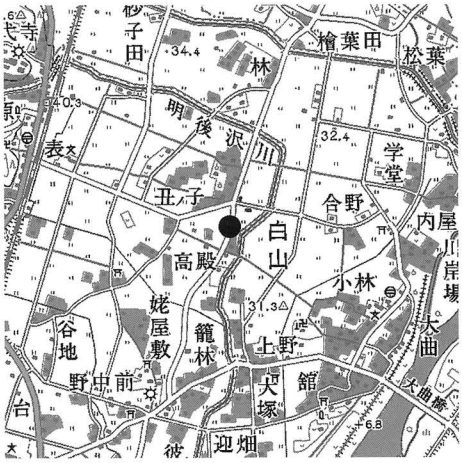
周溝（南から）


掘立柱建物（西から）

土坑内遺物出土状況（南から）

旧石器出土状況（南から）

(39) 古城方八丁遺跡（こじょうほうはっちょう）



所　在　地　奥州市前沢区古城字宿ノ前140－１ほか
委　託　者　県南広域振興局農林部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤整備事業古城２期地区
発掘調査期間　平成21年10月１日～11月27日
調査終了面積　1,285㎡
調査担当者　村田　淳・星　雅之・佐藤里恵
主要な時代　縄文・古代・中世・近世

遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅から南東へ約2.2km、北上川西岸低位段丘の微高地上に位置する。調査前は畑地・水田として利用されており、過去の圃場整備により調査区全域が大幅に削平されていた。検出面の標高は31～32mである。

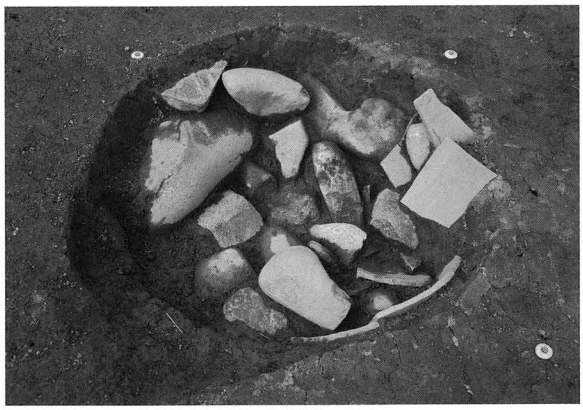
調査の概要

調査区は道路・水田を挟んで４つに分かれており、それぞれの調査区で遺構・遺物を検出した。検出した遺構は、縄文時代の陥し穴２基・土坑２基、古代の竪穴住居３棟・土坑25基・溝８条・焼土２基、平安時代末の陶器埋設遺構１基、中世の井戸３基、近世の堀２条・溝１条、近世及び時期不明の掘立柱建物５棟、時期不明の土坑17基、柱穴399個などである。遺物は、土師器・須恵器中コンテナ４箱、縄文・弥生土器十数片、渥美産陶器大甕中コンテナ１箱、常滑産陶器片２点、剥片石器（石鏃２・石匙１・剥片数点）、砥石２点、礫石器中コンテナ４箱、石帯（丸鞆）１点、鉄製品（鏃２・馬具１）、鉄滓少量、寛永通宝１点、木製品（杭？）４点などがある。

本遺跡では古代に属する遺構・遺物が最も多い。竪穴住居のうち１棟は、燃焼部が住居外側へ張り出す形態のカマドを有するもので、岩手県内でも検出例の少ないタイプである。土坑は焼土や土器を意図的に廃棄したと考えられるものが多く、そのうちの１基からは石帯（丸鞆）が出土している。

陶器埋設遺構は渥美産の大甕を埋設したもので、後世の撹乱により大部分は失われていたが、陶器の上面に積まれていたと思われる礫が遺構内に多量に落ち込んでいたことから本来的には礫を使用した塚状の遺構であった可能性がある。この他、常滑産陶器が出土した中世の井戸、近世の環濠屋敷に関わる可能性がある堀など、多岐にわたる時代の遺構・遺物が検出されている。

竪穴住居のカマド


陶器埋設遺構

(40) 四反田（したんだ）Ⅰ遺跡

所　在　地　奥州市前沢区古城字四反田154－１ほか
委　託　者　県南広域振興局農林部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤整備事業古城２期地区
発掘調査期間　平成21年10月１日～11月16日
調査終了面積　471㎡
調査担当者　丸山直美・佐々木智久
主要な時代　平安・近世以降

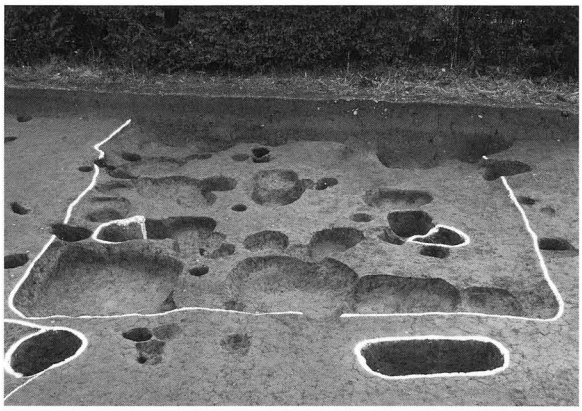
遺跡の立地

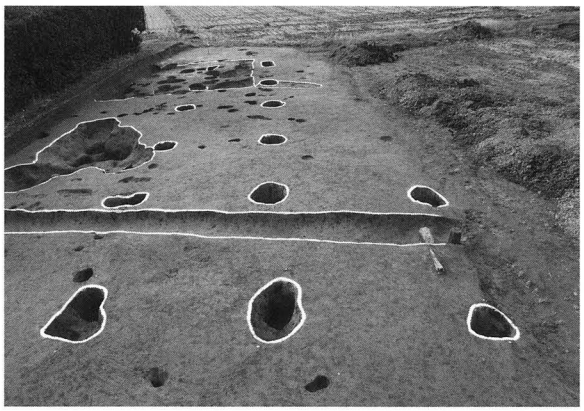
本遺跡はJR東北本線陸中折居駅の南東約2.1kmに位置し、北上川西岸に形成された低位段丘の微高地上に立地する。標高は31m前後で、調査前の現況は畑地および水田である。

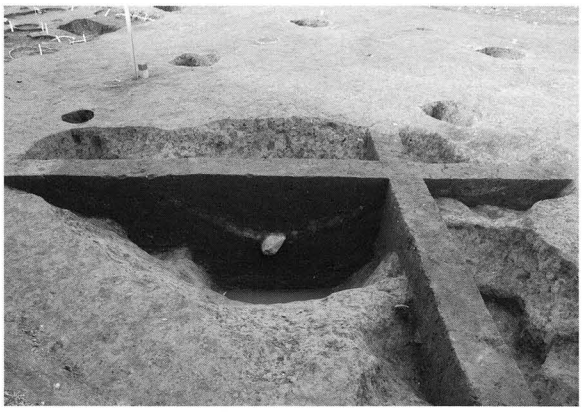
調査の概要

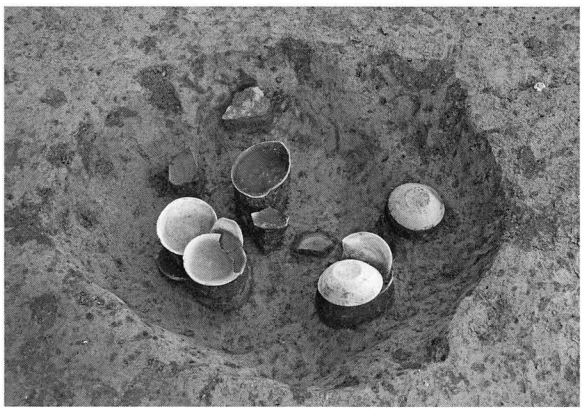
検出された遺構は、平安時代の竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟、土坑14基、時期不明（一部は平安時代に属する可能性有り）の溝跡６条、小柱穴36個、近世以降の性格不明土坑１基、畑跡１箇所である。

遺物は土師器を主体として、須恵器、土製品（土錘１）、炭化種子などが合わせて中コンテナ４箱分出土している。調査の結果、本遺跡が平安時代の集落跡であることが判明した。また、近世末以降には畑が作られるなど、周囲より微かに高い地形を生かした土地利用が断続的になされていたことが判明した。

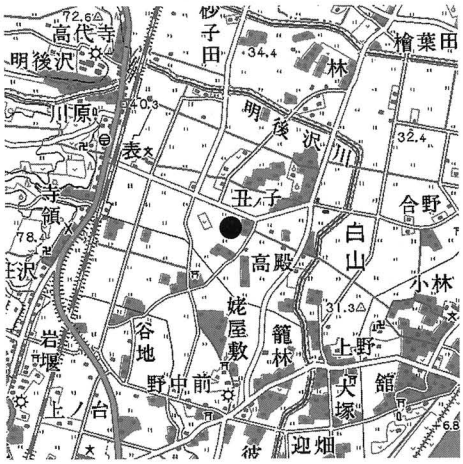

平安時代の竪穴住居（北から）


平安時代の掘立柱建物（東から）


土坑内火山灰堆積状況（南東から）


土坑内遺物出土状況（東から）

(41) 四反田（したんだ）Ⅱ遺跡



1:50,000　水沢

所在地	奥州市前沢区古城字四反田６
委託者	県南広域振興局農林部農村整備室
事業名	経営体育成基盤整備事業古城２期地区
発掘調査期間	平成21年10月１日～11月16日
調査終了面積	60㎡
調査担当者	丸山直美・佐々木智久
主要な時代	平安・近世以降

遺跡の立地

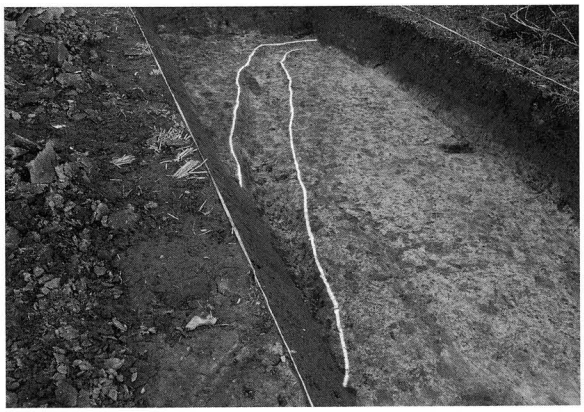
本遺跡はJR東北本線陸中折居駅の南東約２㎞に位置し、北上川西岸に形成された低位段丘上の微高地に立地する。標高は約32mで、調査前の現況は水田である。

調査の概要

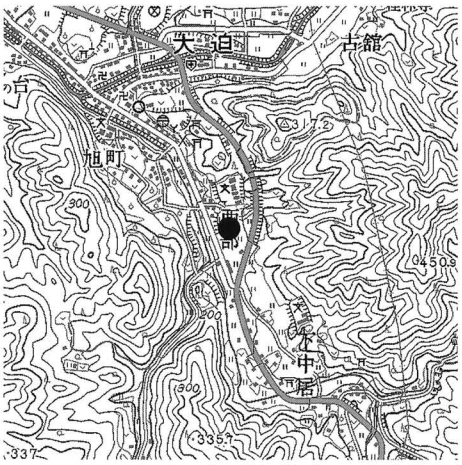
検出された遺構は、近世の土坑１基、時期不明の土坑２基、溝跡５条、小柱穴５個である。遺物としては木製品を中心に小コンテナ１箱分が出土している。内訳は土師器（甕片）、須恵器（甕壺類片）、陶磁器（皿・鉢片）が各数点と、木製品（下駄２点・加工痕のある木片３点）である。

調査区全景（南から）

土坑（西から）


溝跡（南西から）

(42) 西部遺跡（せいぶ）



1:50,000　大迫

所　在　地　花巻市大迫町外川目第27地割144ほか
委　託　者　県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤整備事業中居地区
発掘調査期間　平成21年９月１日～11月19日
調査終了面積　1,450㎡
調査担当者　杉沢昭太郎・菅野　梢
主要な時代　縄文

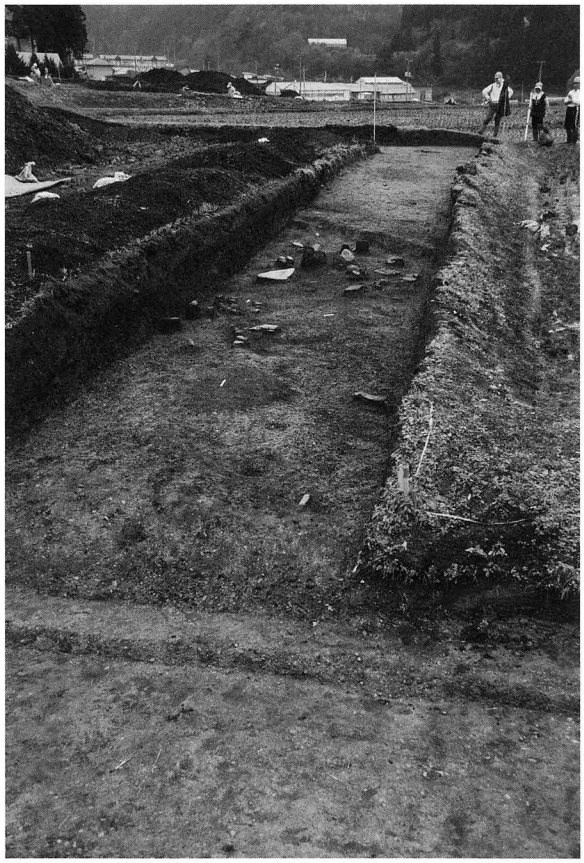
遺跡の立地

本遺跡は稗貫川の支流である中居川を1.5km程遡った東岸の中位段丘に立地している。現況はその多くが水田となっており、段丘面の北半部（約16,000㎡）が遺跡の範囲とみられている。

調査の概要

遺跡の西～南西側と中央部の一部を調査し、縄文時代前期の住居跡６棟、縄文時代の土坑６基、焼土・炉跡21基、集石１基、中世の掘立柱建物跡２棟、近世以降の溝跡１条、時期不明の土坑３基、時期不明の採掘坑約20箇所が検出された。縄文時代の住居跡では上幅３ｍの円形を呈する小形の住居や、長軸方向で20ｍに達するであろう大形住居の一端を検出している。また、３棟の住居跡が重複して検出された地点もある。住居跡は遺跡中央から北側に展開する傾向が窺える。

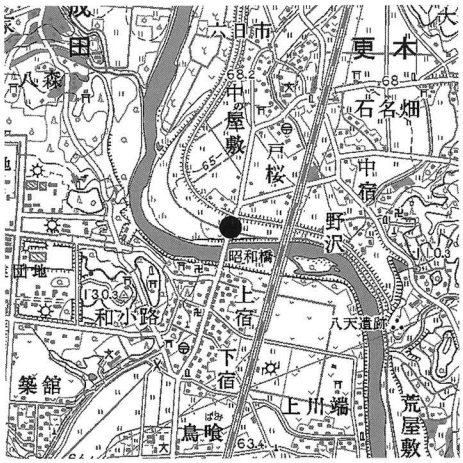
遺物は縄文土器が中コンテナ８箱、石器類が中コンテナ２箱、銭貨２点、石製品３点ほかが出土した。


大形住居跡の一部

大形住居跡出土土器

小形住居跡

(43) 舟渡（ふなと）Ⅰ・Ⅱ遺跡



1:50,000　花巻・北上

所　在　地　北上市更木６地割36－１ほか
委　託　者　県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤整備事業更木新田地区
発掘調査期間　平成21年５月11日～11月13日
調査終了面積　11,847㎡
調査担当者　菅　常久・溜　浩二郎・山田めぐみ
主要な時代　弥生・古代・近世

遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線村崎野駅の北東方向約6.0km、北上市の北東部に位置し、北上川左岸に形成された自然堤防上に立地している。北方向から東方向へ屈曲するかのように、北上川が遺跡の南側を流れている。遺跡の標高は64～66mを測り、現況は主に水田、畑地である。当該事業に係る記録保存目的の発掘調査は、平成18年度から実施され今年度で終了する。

調査の概要

今回の調査面積は、本発掘調査区5,331㎡、確認調査区6,516㎡の計11,847㎡が対象である。検出された遺構は、竪穴住居跡５棟（古代）、焼成遺構1基（古代）、焼土１基（時期不明）、土坑23基（弥生３、時期不明20）、溝跡31条（弥生１、時期不明30）、柱穴状土坑65個（近世以降）、墓壙16基（近世）である。出土遺物は、弥生土器、古代の土師器を主体として、縄文・弥生土器（大コンテナ3.5箱）、土師器・須恵器（大コンテナ3.5箱）、石器（小コンテナ１箱）、近世陶磁器14点、金属遺物（鎌１点、銅銭22点、鉄銭10点以上、煙管５点、板状鉄製品１点、その他１点）である。

古代の集落の所在を物語る竪穴住居跡は５棟しか検出されなかったが、遺物の出土状況等から、調査区外にも所在しているものと思われる。また、隣接する野沢Ⅱ遺跡と類似するような遺物も出土している。

調査区（県道より東側：上が北）

調査区（県道より西側：上が北）

古代の竪穴住居跡（土器出土状況）

(44) 野沢（のざわ）Ⅱ遺跡

1:50,000　花巻・北上

所　在　地　北上市更木19地割143－１ほか
委　託　者　県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
事　業　名　経営体育成基盤整備事業更木新田地区
発掘調査期間　平成21年４月10日～８月５日
調査終了面積　4,500㎡
調査担当者　菅　常久・溜　浩二郎・山田めぐみ
主要な時代　縄文・弥生・古代・近世

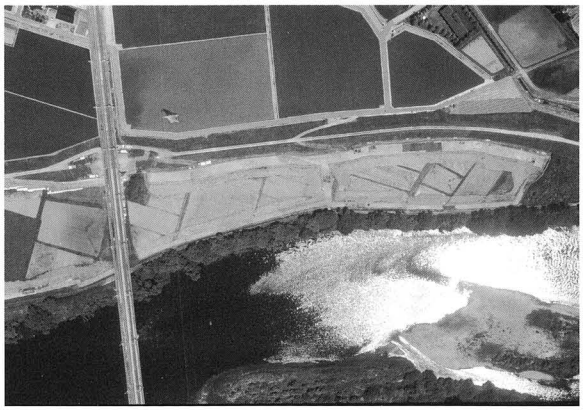
遺跡の立地

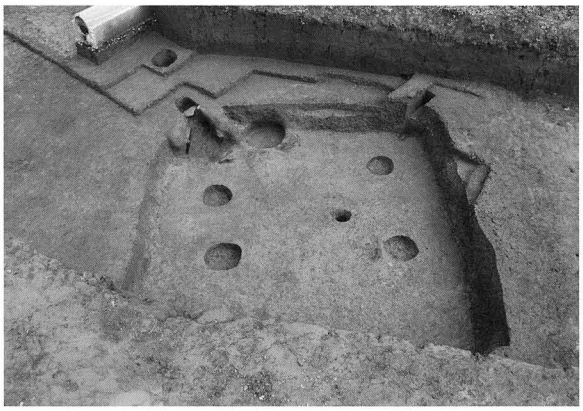
遺跡は北上市役所の北東約6.5㎞に位置し、北上川左岸の沖積段丘の微高地に立地する。遺跡の標高は63～64m前後で、調査前の現況は水田・畑地である。当遺跡の調査は昨年も実施されているが、今回の調査はその南側に隣接した箇所である。全体面積のうち2,290㎡は検出のみの確認調査区である。

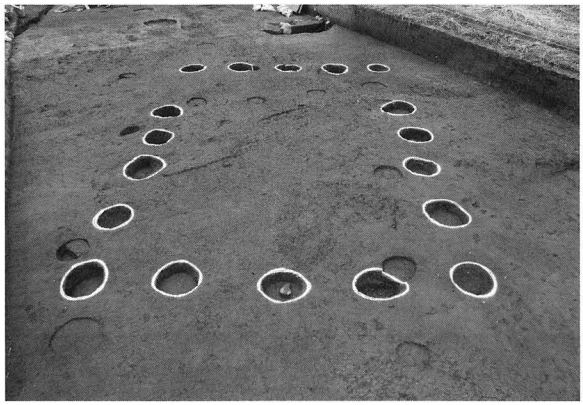
調査の概要

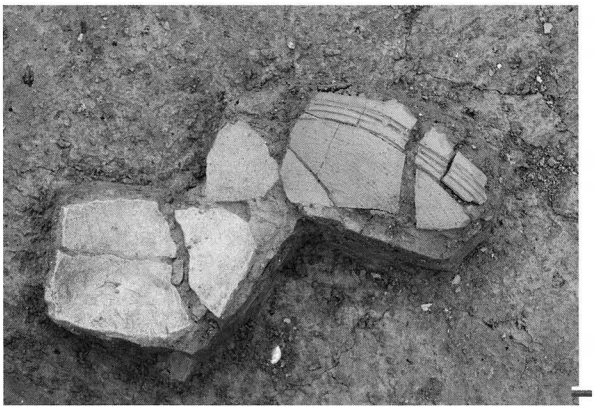
今回の調査で見つかった遺構は、竪穴住居跡５棟（弥生１・古代４）、土坑３基（弥生１・近世２）、井戸跡１基（近世）、掘立柱建物跡１棟（近世）、柱穴状土坑137個（近世以降）、溝跡９条（古代１、近世８）、性格不明遺構１基（近世）である。

遺物は土器が大コンテナ３箱、石器が小コンテナで１箱、石製品１点、陶磁器19点である。土器は縄文・弥生土器が遺構外、土師器・須恵器は竪穴住居跡およびその周辺から出土している。


遺跡全景（上が北）


竪穴住居跡


掘立柱建物跡


弥生土器出土状況

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅういちねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成21年度発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第571集
編著者名	
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL (019) 638－9001
発行年月日	西暦　2010年3月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
武道Ⅴ遺跡	岩手県盛岡市玉山区字武道58-15ほか	03201	KE57-1125	39度51分21秒	141度10分32秒	2009.04.09～2009.05.15	3,741㎡	国道4号渋民バイパス建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武道Ⅴ遺跡	狩り場	縄文時代	陥し穴状遺構6基	縄文土器	土器は遺構外から出土
		不明	焼土遺構1基		

要約：縄文時代の陥し穴状遺構が6基検出され、縄文時代の狩り場であることが明らかになった。遺物は縄文時代晩期の土器が1片のみの出土である。この土器片の存在から、調査区周辺に集落の存在が予想される。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
落合2区Ⅰ遺跡	岩手県花巻市東和町落合2区57地内	03205	ME38-0293	39度22分02秒	141度13分53秒	2009.09.01～2009.09.17	1,515㎡	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
落合2区Ⅰ遺跡	集落・生産遺跡	縄文時代	土坑5基	縄文土器・石器	近世と考えられる石切場
		近世	石切場	陶磁器	

要約：縄文時代晩期の土器片を含む土坑を検出した。また、調査区内には多量の花崗岩転石が認められ、これらの中に矢穴を残すものが存在する。このことから、ここで石切り作業がおこなわれたと考えられる。調査所見から時期を特定することは困難であるが、花巻城の石垣の石材がこの周辺からもたらされたという史料もあり、近世初頭の石切場であった可能性が考えられる。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
立花館遺跡	岩手県北上市立花第5地割108-4ほか	03206	ME66-1263	39度17分05秒	141度08分07秒	2009.09.01～2009.09.30	1,250㎡	北上川中流部治水対策事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立花館遺跡	集落跡	縄文～弥生	土坑1基	縄文土器・弥生土器・石器・土偶	
		古代	畝間状遺構1箇所	土師器・須恵器	

要約：弥生時代の土器・石器が出土した。時代の特定できる遺構は弥生時代前期の土坑1基のみである。今回の調査区に隣接する東側に、縄文時代～古代の集落の中心が存在する可能性が高い。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
平根原Ⅰ遺跡	岩手県奥州市胆沢区若柳字平根原5-1	03215	NE31-1090	39度05分34秒	140度52分31秒	2009.09.01～2009.09.30	12,000㎡	胆沢ダム建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平根原Ⅰ遺跡	散布地	縄文時代	なし	なし	

要約：今回の調査区域では遺構・遺物は確認されず。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
矢盛遺跡 第25次調査	岩手県盛岡市飯岡 新田4地割47-1ほか	03201	LE26-0139	39度 40分 27秒	141度 08分 05秒	2009.09.15 ～ 2009.09.17	1,234㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢盛遺跡 第25次調査	集落跡	平安時代 中近世	なし	なし	

要約：矢盛遺跡は、縄文時代の狩猟・採集の場、平安時代の集落跡、中近世の居館・集落跡である。今回の調査箇所は、遺跡推定範囲の南東端に当たる。トレンチを入れたが、表土直下に地山砂層が検出され、遺構・遺物の出土はなく、今回の調査箇所は、既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
矢盛遺跡 第26次調査	岩手県盛岡市飯岡 新田4地割49-1ほか	03201	LE26-0139	39度 40分 27秒	141度 08分 05秒	2009.09.15 ～ 2009.09.17	334㎡	盛岡南新都市土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢盛遺跡 第26次調査	集落跡	平安時代 中近世	なし	なし	

要約：矢盛遺跡は、縄文時代の狩猟・採集の場、平安時代の集落跡、中近世の居館・集落跡である。今回の調査箇所は、遺跡推定範囲の南東端に当たる。トレンチを入れたが、表土直下に地山砂層が検出され、遺構・遺物の出土はなく、今回の調査箇所は、既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
大宮北遺跡 第15次調査	岩手県盛岡市本宮 字小幅3－3	03201	LE16-2036	39度 41分 08秒	141度 07分 04秒	2009.06.01 ～ 2009.06.30	2,000㎡	主要地方道盛岡和賀線飯岡地区道路整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宮北遺跡 第15次調査	集落跡	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡１棟 溝跡１条	土師器 土師器・須恵器	

要約：今回の調査において、７世紀後半の竪穴住居跡１棟と10世紀代の溝跡１条が確認された。古墳時代終末期には集落が営まれ、平安時代後半には区画溝によって囲まれた建物群が存在したことが明らかとなった。遺跡北側は旧河道に落ち込む地形であることも確認された。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
高屋敷Ⅱ遺跡	岩手県気仙郡住田町世田米字高屋敷36-1ほか	03441	NF13-1389	39度 08分 48秒	141度 28分 41秒	2009.07.01 ～ 2009.08.24	1,190㎡	一般国道397号線高屋敷地区道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高屋敷Ⅱ遺跡	集落	縄文時代 時期不明	竪穴住居跡１棟 土坑４基、焼土遺構１基 性格不明遺構２基 土坑１基、焼土遺構１基	縄文土器（早期･後期･晩器） 弥生土器（前期） 石器、土製円盤	

要約：縄文時代晩期の遺構・遺物が出土した。今回の調査は、遺跡範囲の北部を対象とし、結果、集落の先端部の様相を明らかにした。縄文集落の主体は、調査区南側に広がる宅地や畑地範囲に存在する可能性が高い

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
八幡遺跡	岩手県奥州市前沢区白山字八幡91ほか	03215	NE46-2317	39度 03分 51秒	141度 09分 00秒	2009.05.01 ～ 2009.05.29	740㎡	経営体育成基盤整備事業白山地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡遺跡	散布地	縄文時代 平安時代 近現代 時期不明	住居状遺構１棟 陥し穴状遺構１基 住居状遺構１棟 土坑２基、溝跡２条 柱穴状ピット１個 溝跡１条 土坑１基 柱穴状ピット29個	縄文土器・石器・石製品 土師器・須恵器 砥石	

要約：今回の調査から縄文時代後期前葉、平安時代中期の遺構・遺物が出土し、明後沢川の河岸に立地する縄文時代・平安時代の複合遺跡であることが確認された。遺跡の範囲は調査区北側及び明後沢川河畔まで拡がると考えられる。

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第571集

平成21年度発掘調査報告書

印　刷　　平成22年３月15日
発　行　　平成22年３月18日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019) 638－9001
ＦＡＸ　(019) 638－8563

発　行　(財)岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電　話　(019) 654－2235
ＦＡＸ　(019) 625－3595

印　刷　有限会社　内海印刷 盛岡営業所
〒020－0875　岩手県盛岡市清水町８－８－108
電　話　(019) 622－0288

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2010